

N A B U N K E N

2 0 0 9

ISSN 1347-1589
July,2009

奈良
文化財
研究所



独立行政法人 国立文化財機構
奈良文化財研究所



西トップ寺院の現状

西トップ寺院は2008年度5月に正面の破風石材が一部落下した。アプサラと善後策を協議の結果、足場を構築し不安定な中央塔を支えることになり、2008年12月に足場の架設を行った。足場をかけることによって中央棟西側の不安定な石材を支えることができ、かつ上部の石組の調査が可能となった。2009年2月には保存科学班が高所作業車を用いた調査を行った。

本文18頁参照（撮影：石村 智）



平城宮跡第一次大極殿正殿扁額

第一次大極殿正殿の扁額復原にあたっては、大極殿の格に相応しい扁額の形式を、遺例の網羅的収集により新たに考証した。その結果、扁額とは、文字の記された額面板を額縁により固めた上で、建物に固定する一つの構造体とみなすことができ、その形状は建物の構造形式と対応関係を持つことが明らかとなつた。額字は、「長屋王願経」より集字した「大極殿」の三字を鎬付き葉研彫で刻んでいる。

本文4頁参照（撮影：杉本和樹）

図版 2



京都府近代和風建築総合調査（旧竹内栖鳳邸霞中庵）

京都府に残る明治から昭和初期に建てられた和風建築は、近世以来の造形・技術を正統に受け継ぎつつそれを究極的に洗練させたものと、あるいは近世的技術を元に古代・中世の比例と細部を復古的に用いるものとで代表される。霞中庵は、部分は正統的ながら、意図的な軸線の振れを巧みに空間に昇華した、施主竹内栖鳳の創造力が飛翔した優れた造形を持つ。

本文8頁参照（撮影：杉本和樹）



四万十川流域の景観調査

四万十川の中下流は、流域で生産される林産物を河口の下田港まで一気に運びだす川のハイウェイだった。戦後、陸上交通の著しい発達にともない水運は衰退、森林軌道は車道へ、渡し舟や木橋はトラックが通れる沈下橋へと姿を変えた。四万十川と黒尊川との合流点に位置する口屋内地区では、生業の在り方を変えた沈下橋を利用して、林業が継続して行われている。

本文14頁参照（撮影：恵谷浩子）



藤原宮朝堂院の調査（飛鳥藤原第 153 次調査）

朝堂院中央広場の朝庭は、全面に礫を敷き詰めて整地してあった。下層遺構の調査に先だち、礫敷を一部除去した状況。東西に並ぶ幢竿支柱や北側の柱穴群、および東西、南北に走る石詰暗渠がよく見える。南から。

本文 50 頁参照（撮影：井上直夫）



幢竿支柱 SX10771 東西断面

1 個の横長の柱掘方に柱を 2 本東西に立て並べ、抜き取っている。抜取穴にやや大ぶりの石を捨て込んでいる状況がよくわかる。このような形式の幢竿支柱は初めての検出であり、新羅との関係が注目される。南から。

本文 50 頁参照（撮影：井上直夫）



運河 SD1901A と斜行溝 SD10801A・B

朝庭の下層には、藤原宮を造営した際に資材を運んだ運河が南北に貫流する。藤原宮期の遺構の少ない部分で、整地土を掘り下げて運河を調査した。運河からは、斜行溝 SD10801A・B が東北方に分流するという新たな事実が判明した。上方は大極殿、その遠方は耳成山。南から。

本文 50 頁参照（撮影：井上直夫）

図版 4



高松塚古墳の調査（飛鳥藤原第 154 次調査）

石室解体に引き続き、墳丘の仮整備に伴う調査を実施した。石室の東西に 2 条の石詰暗渠を検出するとともに、旧地形や古墳の築造工程に関する重要な所見を得ることができた。今後は機械室を撤去し、補足調査を経て、築造当時の古墳の姿がよみがえることとなる。南西から。

本文 94 頁参照（撮影：井上直夫）



甘櫻丘東麓遺跡の調査（飛鳥藤原第 151 次調査）

7 世紀前半の石垣の西側、谷地形の奥部を調査し、ここにも同時期の遺構が展開することが明らかとなった。その後、7 世紀を通じて活発な土地利用がなされていることも確認でき、遺跡の全容解明に向けて重要な成果が上がった。西から。

本文 68 頁参照（撮影：井上直夫）



石神遺跡の調査（飛鳥藤原第 156 次調査）

昨年度に引き続き、遺跡東限の様相を解明するための調査を実施した。昨年度の成果とほぼ同じ位置で A 期の東限の堀を検出し、遺跡の範囲を確定することができた。東側には通路状の施設があり、堀には門が開くと考えられる。また、7世紀から8世紀初めにかけての8時期にわたる継続的な土地利用が判明するなど、石神遺跡の内容と性格を解明する上で多くの成果が上がった。北から。

本文 76 頁参照（撮影：井上直夫）



雨落溝 SD4345

凸字形に曲がる溝で、周囲に小礫や瓦が密にみとめられ、瓦葺礎石建物の雨落溝と推定される。7世紀前半のもので、饗宴施設として整備される以前の状況を示す、重要な知見となった。北から。

本文 76 頁参照（撮影：井上直夫）

図版 6



第一次大極殿院南面築地回廊の調査（平城第 431 次調査）

南面築地回廊における最後の調査。基壇（中央）の上には礎石の根石が残存していたが、南半部は水田造成時に削平を受けていた。
基壇の北側（写真左側）が大極殿院広場で、南側（右側）が朝堂院の広場。西から。本文 112 頁参照（撮影：牛嶋 茂）



第一次大極殿院西面築地回廊の調査（平城第 438 次調査）

奈良時代前半の西面区画施設のほか、奈良時代後半の築地回廊の礎石据付穴や、平安時代初期の石組暗渠などを確認した。また、
区画内部の礫敷舗装の変遷が明らかになった。東から。本文 112 頁参照（撮影：中村一郎）



第一次大極殿院西面回廊の調査

(平城第 432・436・437 次調査)

これまで未調査の西面築地回廊南半部分をつづけて発掘調査した。大極院創建当初の回廊基壇や雨落溝のほか、改修後の掘立柱塀や内庭部礫敷きなどを検出した。奥が第 432 次調査区、中央が第 436 次調査区、手前は第 437 次調査区。北から。

本文 112 頁参照 (撮影: 牛嶋 茂)



第 432 次調査出土の磚仏 (約 2 : 3)
西面築地回廊の基壇を覆う赤褐色混礫層から出土。十二尊連坐磚仏の一部で、山田寺出土のものと同原型品とみられる。平城宮内では初の出土例である。像高は 34mm。

本文 112 頁参照 (撮影: 中村一郎)



掘立柱塀 SA13404 の柱根

(平城第 432・436 次調査出土)

第一次大極殿院西面回廊解体後の掘立柱塀 SA13404 の柱穴より出土した。柱の直径は最も太いもので約 48cm である。柱運搬用の棧穴や加工痕跡が残る。

本文 112 頁参照 (撮影: 中村一郎)

図版 8



東方官衙地区の調査（平城第 429・440 次調査）

2007 年度と 2008 年度に調査を実施した。調査区南部で検出した土坑 SK19189 からは木簡や削屑のほか、木製品や木屑などが多く出土した。土坑の埋土をすべて取り上げ、現在も水洗中である。これらの廃棄物はこの地区的性格を明らかにする上で重要な資料となる。写真上は土坑内の木屑の堆積状況（北西から）・写真下は土坑全景（北東から）
本文 128 頁参照（撮影：中村一郎）



土坑 SK19189 出土の木簡

770 年前後の衛府に関わる木簡群。「東宮」「西宮」など中枢施設名がみえる一方、「四切」という極めて日常的な表現の付札もあり、内容はヴァラエティーに富む。地下水に守られ、遺存状況は極めて良好。削屑の量は庞大で、今後の整理・解読への期待が大きい。

本文 128 頁参照（撮影：中村一郎）

奈良文化財研究所紀要

2009

独立行政法人 国立文化財機構

奈良文化財研究所

奈良文化財研究所紀要

2009

目 次

I 研究報告	1
デジタル写真測量による遺構の記録	3
平城宮跡第一次大極殿復原－扁額に関する研究－	4
平城宮跡大極殿復原－四神彩色の配置に関する研究－	6
近代京都における建築の継承と復古－京都府近代和風建築総合調査から－	8
茨木城出土築欄間について	10
擬石・擬木を用いた近代和風庭園－琴ノ浦温山荘園の庭園調査から－	12
文化的景観の輪郭と多様性	14
興福寺の論議草奥書にみえる歴史－戦国時代南都の飢饉・一揆・武将－	16
カンボディア・西トップ寺院の調査－第9次－	18
西トップ寺院の建築調査－2008年度の成果－	20
漢魏洛陽城・北魏宮城2号門の発掘調査	22
慶州・チョクセン遺跡の発掘調査－日韓発掘調査交流2008－	24
西安碑林博物館所蔵の石造物	26
平城宮土器大別の検討（2）－前半期SD3035出土土器を中心に－	28
中国細石刃石器群の初步的分析	30
大官大寺の縄文土器（1）	32
平城宮東南隅第32次・32次補足調査出土冶金関連遺物の再検討	36
平城宮跡東院地区から出土した縉銭	38
黒漆塗工具及び刀子の事前調査	40
長徳寺木造薬師如来坐像の年輪年代調査	42
遺構露出展示の今日的課題	44
平成20年度秋期特別展「まぼろしの唐代精華－黄冶唐三彩窯の考古新発見－」始末期	46

II 飛鳥・藤原宮跡等の調査概要	47
1 藤原宮の調査	49
朝堂院の調査	第 153 次 50
朝堂院東地区・南面大垣の調査	第 152 - 7 次 62
内裏西官衙地区の調査	第 152 - 6 次 66
2 飛鳥地域等の調査	67
甘櫻丘東麓遺跡の調査	第 151・157 次 68
石神遺跡の調査	第 156 次 76
雷ギヲ山城の調査	第 152 - 4 次 86
飛鳥寺の調査	第 152 - 2・3 次 88
飛鳥寺南方の調査	第 152 - 5 次 90
高松塚古墳の調査	第 154 次 94
檜隈寺周辺の調査	第 155 次 99
III 平城宮跡等の調査概要	109
1 平城宮の調査	111
第一次大極殿院回廊の調査	第 431・432・436・437・438 次 112
東方官衙地区の調査	第 429・440 次 128
2 平城京と寺院の調査	141
法華寺旧境内の調査	第 430・435・442 次 142
興福寺旧境内の調査	第 439・450 次 148
喜光寺の調査	第 433 次 152
平城宮北方遺跡の調査	第 445・447 次 155
東院南方遺跡の調査	第 434 次 156
右京三条一坊八坪の調査	第 448 次 160
英文目次	162

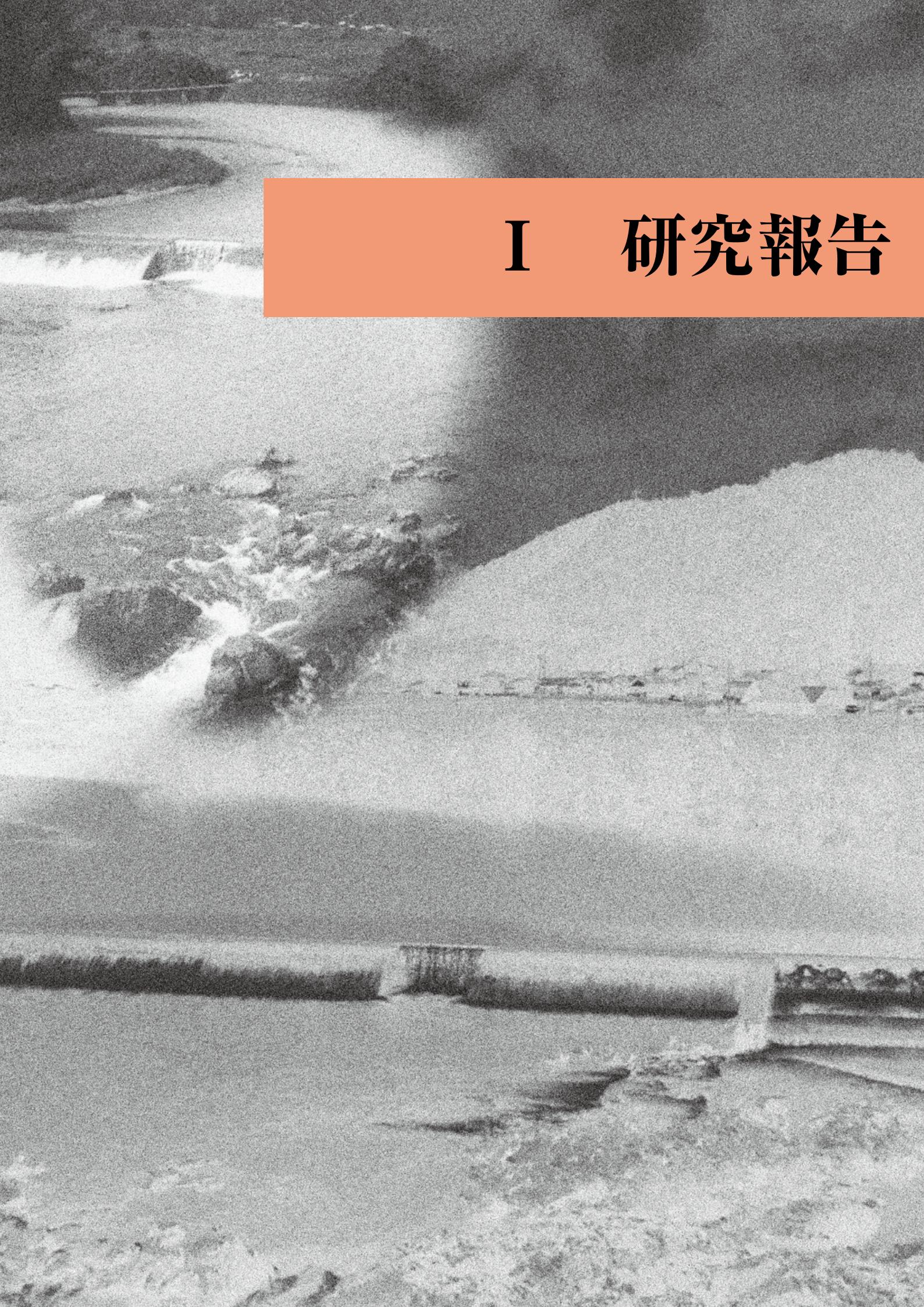
例　言

- 1 本書は、独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所が2008年度におこなった調査研究の報告である。
- 2 本書は、I研究報告、II飛鳥・藤原宮跡等の調査概要、III平城宮跡等の調査概要の3部構成である。II・IIIは都城発掘調査部がおこなった発掘調査の報告であり、Iにはそれを除く各種の調査研究報告を収録した。調査次数は、IIが飛鳥藤原の次数、IIIが平城の次数を示す。2009年1月以降に開始した発掘調査については、本書では概略にとどめ、より詳しい報告は『紀要2010』に掲載する予定である。
- 3 執筆者名は、各節または各項の末尾に明記した。発掘調査の報告は、原則的に調査担当者が執筆にあたり、遺物については各研究室・整理室の協力を得た。
- 4 当研究所の過去の刊行物については、以下のように略称を用いている。

『奈良文化財研究所紀要2001』	→『紀要2001』
『奈良国立文化財研究所年報2000-I』	→『年報2000-I』
『飛鳥・藤原宮発掘調査報告IV』	→『藤原報告IV』
『平城宮発掘調査報告IX』	→『平城報告IX』
『飛鳥・藤原宮発掘調査概報26』	→『藤原概報26』
『1995年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』	→『1995平城概報』
『飛鳥・藤原宮発掘調査出土木簡概報14』	→『藤原本木簡概報14』
『平城宮発掘調査出土木簡概報35』	→『平城木簡概報35』
- 5 本書で用いた座標値は、すべて世界測地系による平面直角座標系第VI系の数値である。2002年4月の改正測量法施行以前の日本測地系の座標値を世界測地系に変換するためには、飛鳥藤原地域ではX座標に+346.5m、Y座標に-261.6m、平城地域ではX座標に+346.4m、Y座標に-261.3mをそれぞれ加えればよい（ともにマイナスの数値のため、Xの絶対値は減少し、Yの絶対値は増加する）。詳細については『紀要2005』22・23頁を参照されたい。
- 6 発掘遺構は、遺構の種別を示す以下の記号と、一連の番号の組み合わせにより表記する。

SA（塀・柵）、SB（建物）、SC（回廊）、SD（溝）、SE（井戸）、SF（道路）、SG（池）、SH（広場）
SK（土坑）、SS（足場）、SY（窯）、SX（その他）
- 7 藤原宮内の地区区分については、『藤原概報26』（1996、3頁）を参照されたい。
- 8 藤原京の京域は、岸俊男の12条×8坊説（1坊=4町=約265m四方）をこえて広がることが判明している。本書では、10条×10坊（1坊=16町=約530m四方）の京域を模式的に示した。ただし、混乱を避けるため、条坊呼称はこれまでどおり、便宜的に岸説とその延長呼称を用いている。

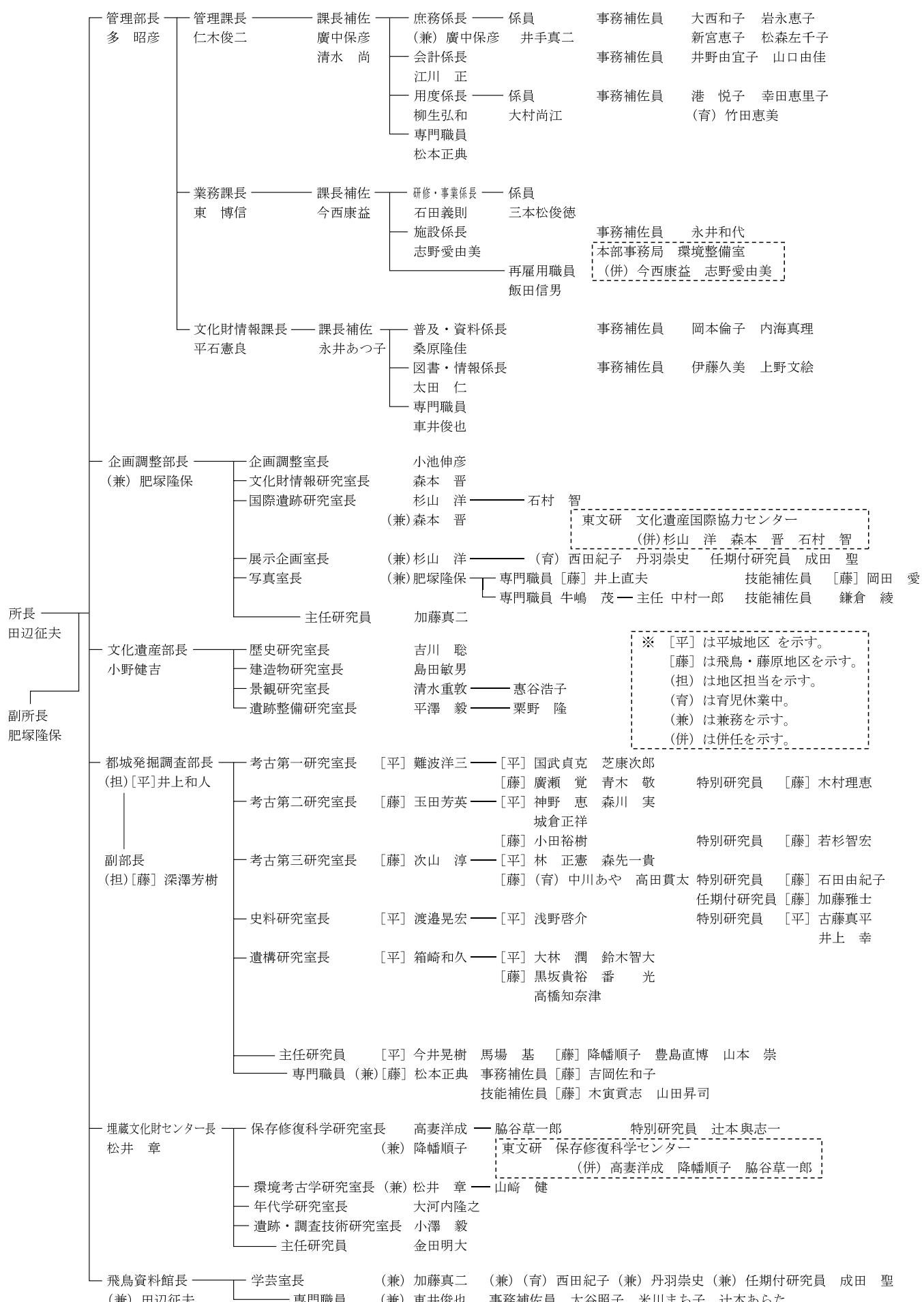
- 9 7世紀および藤原宮期の土器の時期区分は、飛鳥 I～V とあらわす。詳細については、『藤原報告 II』(1978、92～100頁) を参照されたい。
- 10 平城宮跡出土軒瓦・土器の編年は、以下のようにあらわす（括弧内は西暦による略年式）。
- 軒瓦：第I期（708～721）、第II期（721～745）、第III期（745～757）、第IV期（757～770）、第V期（770～784）
- 土器：平城宮土器I（710）、II（720）、III（740）、IV（760）、V（780）、VI（800）、VII（825）
- 11 本書の編集は、I高妻洋成、II玉田芳英、III今井晃樹が分担しておこなった。巻頭図版および中扉のデザインは中村一郎が担当した。また、英文目次については、ウォルター・エドワーズ天理大学教授の校閲を受けた。



I 研究報告

機 構 図 (独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所)

2009.4.1 現在



デジタル写真測量による 遺構の記録

はじめに デジタル写真測量による遺構の記録は、石神遺跡第18次発掘調査（飛鳥藤原第140次調査、『紀要2007』）でもおこなわれ、礫敷や瓦溜りなど、記録が必要ではあるが、多くの時間や労力を割かなくてはならなかつた対象において有効であることが報告されている。

飛鳥藤原第153次調査で検出した礫敷広場SH10800について、デジタル写真測量による記録をおこなった。本稿では広範囲の対象をどのように記録したかについて、手順とその問題点に絞って報告する。

デジタル写真測量の概要 使用したソフトは「トプコン3D画像計測ステーション：PI-3000」である。左右の2箇所から撮影した画像によりステレオ画像を構成し、3次元計測をおこなう。隣り合う画像とは60%重複する必要がある。重複部分に6点以上の標定点を配置し、この6点の標定点のうち4点以上は3次元座標が既知であればよい。今回の撮影では画角や精度の向上を考慮して、隣り合う画像との重複は2/3とし、重複部分に9点の標定点を配し、すべての点の3次元座標を計測した。また、カメラを徐々に移動しながら全体をカバーするように撮影することにより、1台のカメラを用いて広範囲の計測をおこなうことができる。得られる成果はオルソ画像、3Dモデルデータ、等高線、断面図である。

使用機材と作業手順 作業は標定点の設置、遺構の撮影、標定点の計測、ソフト上での画像計測の順でおこなう。カメラはボディがNikonD100、レンズが

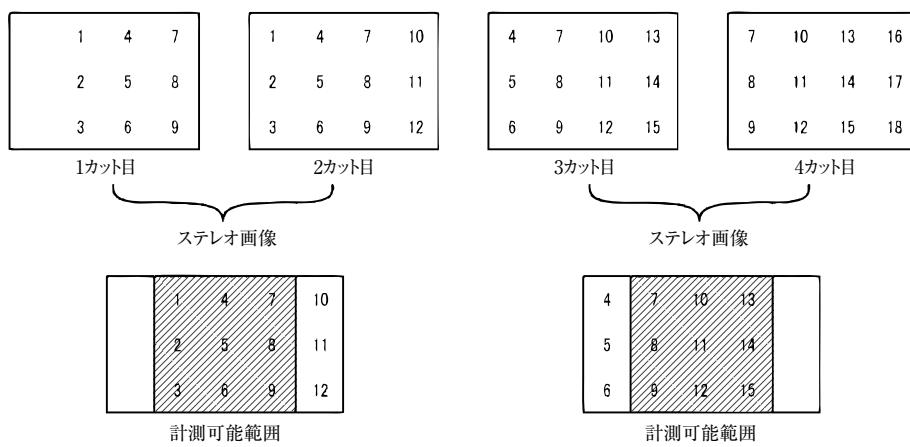


図1 連続ステレオ撮影概念図

Nikon AFNIKKOR20mmを使用した。レンズは事前にカメラキャリブレーションが必要である。

標定点にはターゲットマークとして径16mmの円形白色シールを使用した。ターゲットマークは画像上で明確に特定できる点で代用できるが、使用により精度の向上とソフト上での作業の省力化につながる。円形シールは、白色だと周囲が淡色の場合ソフト上で検出できないことが稀にあり、白色以外（黄色、赤色）では検出できないことが多かった。

撮影は調査区を東西18m×南北12mの8地区に分割しておこなった。櫓を2段使用し、対象との距離は約4.5m、1カットの画角は約4.5m×4mであった。さらに南北3～4列に分け、1列を10～13カットで東から西へ連続して撮影した。撮影後、トータルステーションで標定点の3次元座標を計測し、ソフト上で画像の計測をおこなった。

成果と問題点 広大な礫敷きの記録において、デジタル写真測量の導入により記録作業の効率化をはかることができた。具体的には、調査区の約8分の1(18m×12m)30カットの撮影に1日、ソフト上の計測に1日を必要とした。厳密である必要はないが、対象と平行に撮影するほうが望ましく、起伏が激しい遺構の立体的把握には不向きであることが判明した。

記録の精度と効率との兼ね合いは今後の重要な課題である。今回作成した画像上では瓦と礫の区別が難しかった。撮影距離を縮めれば画像は鮮明になるが、ターゲットの数と撮影回数が増加する。成果の保存・活用方法と併せて検討を重ねる必要があるだろう。 (番 光)



図2 撮影風景

平城宮跡第一次大極殿復原

—扁額に関する研究—

1 はじめに

当研究所が実施している平城宮跡大極殿の復原研究の一環として、扁額に関する研究を近年継続している。このうち、意匠に関する成果は『紀要2008』で発表した¹⁾。本稿は、扁額形状と建築構造形式との関係を追求した成果と、この成果に基づき考案した大極殿復原扁額について記すものである。なお、扁額事例は『紀要2008』7頁掲載の表を参照されたい。

2 扁額と建築の関係

着目点 扁額と建築との関係を考察するにあたり、以下の3点に着目した。

- ・額縁が平面状なのか、立体状なのか。
- ・上辺額縁の肩状突出部と左右額縁の脚状突出部の有無、並びにその役割。
- ・建物への設置方法（掛け方、支持方法など）

扁額形状の分類 扁額の形状は、平面状と立体状の二つに分類できる。さらに、平面状のものについては額縁の有無、立体状のものについては、肩状突出部・脚状突出部の有無によって分類できる。各分類の模式図を図3に示す。

平面状扁額…額縁と額面がほぼ同一平面のもの。

①額縁無し…板状によるもので、額面板と額縁が一体となっている。外郭は複雑な縁形を持ち、中央に止釘のものと思われる大きな釘穴が残る。奈良時代以前に見られる。（事例：法隆寺など）

②額縁有り…額面板周囲に額縁が付いたもの。平安から鎌倉時代に多く見られる。小規模のものが比較的多い。（事例：海住山寺など）

立体状扁額…額縫が額面に対し角度がついているもの。

③肩・脚有り…肩状突出部・脚状突出部双方があるもの。平安時代後期より現れ、各時代に見られる。大規模な扁額に多い。（事例：淨土寺など）

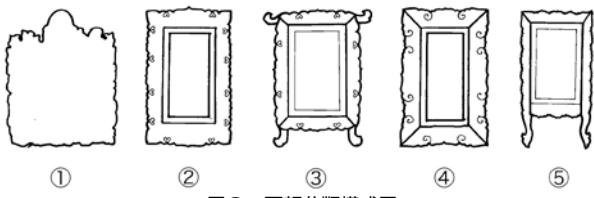


図3 扁額分類模式図

④肩・脚無し…突出部がないもの。鎌倉時代後期以降現れ、南北朝時代以降多く見られる。（事例：智恩寺など）
⑤脚のみ有り…脚状突出部のみあるもの。額縁の下辺のみが平面状で残り三辺が立体状になっているものと、額縁が四辺とも立体状になっているものがある。平安時代以降各時代に見られる。（事例：教王護国寺、籠神社など）また、昨年度の紀要で示したように、東大寺西大門扁額の額縁は当初の奈良時代のものを踏襲している可能性がある。したがって、③肩・脚有りの形式は奈良時代より存在していた可能性がある。

扁額と建物構造形式 建物への掛け方はおおよそ次の二つに分類できる。

垂直掛け…垂直に近い角度で掲げるもの。建物の軸部などに直接釘止めするか、取付金具等で設置される（図4左）。

斜め掛け…建物に対して斜めに掲げるもの。取付金具等で設置される（図4右）。

垂直掛けの方法は、八脚門や小規模仏堂などの単層の建物や、組物の手先が出ない構造形式の建物に用いられたと考えられる。掲げる際に額面にかかる力も垂直方向のみで、額面を補強する必要はなく、①、②の平面状の扁額が使用されていたと考えられる。

斜め掛けの方法は、二重門、楼門などの重層の建物や、三手先組物など手先の出る組物形式の建物に用いられたと考えられる。境内のメインの建物に使用されていたことになろう。斜めに掛けると額面に曲げ応力がかかるため、額面を補強する必要から、額縫を起こした立体状の扁額が構造的に有利となる。

大規模な建物の場合は、上部・下部で扁額を支持する装置ないしは方法が必要となる。③形式の肩、脚の存在は、扁額支持の観点からみると、有利なものと言

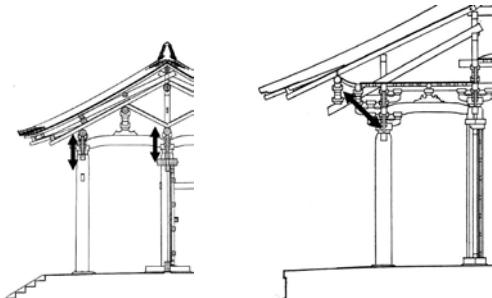


図4 扁額の掛け方想定図（建物は奈良時代のものを任意で選択）
(左：法隆寺東大門断面図、奈良県教育委員会「国寶建造物東大門修理工事報告」、1935、右：唐招提寺金堂復原断面図、浅野清「奈良時代建築の研究」、1969)

える。現存扁額でも、大規模なものには肩、脚がつく傾向がある。肩、脚の役割は以下のように考えられる。肩…丸桁等を支持対象として吊り下げる場合の、上部支持の拠り所となる部分。脚…長押や頭貫等の軸部に接することにより、下部を支持するためのもの。

③形式のうち小規模な扁額は、肩・脚がなくても建物へ容易に設置できることから、肩・脚のない④の形式が現れたと考えられる。一方、肩がない⑤の形式は上部に支持するものがなく、例えは鳥居等が考えられる。

以上のように、扁額の形状を、建物への設置方法を加味して考察すると、建物の構造形式と対応することが指摘でき、扁額の形状から建物形式を推察できることが分かった。換言すると、この理論を応用し、建物形式から扁額の形状を推察することも可能となる。

3 復原大極殿扁額設計の基本方針

以上の点をふまえ、大極殿の扁額について考察する。大極殿は平城宮における中心建物で、二重で大規模、且つ三手先組物を持つ。建物形式から見ると、立体状、肩・脚付きの扁額を斜めに掲げる方式が妥当と言える。

大極殿上層の各部材の納まりから、扁額上端を尾垂木下端位置に押さえ、同所を吊金具で支持する方法が妥当と考えた。次に扁額全体幅は脚部の設置対象部材をどこにするかにより設定される。これを連子窓両脇の方立とすることが妥当と考えた。以上のように設定すると、立体状、肩・脚付きの扁額の持つ構造的意味が生きてくる(図5に大極殿扁額の納まりを示す)。

肩脚端部意匠 肩・脚の端部意匠を決定するにあたり、古代の事例として、山田寺出土部材に扁額の脚の先と見られる部材がある(図6)。同部材は南門の西側付近から出土したことから、扁額の周縁部と見られている。この部材が扁額の部材であるのかどうかをまず検証する。脚付き

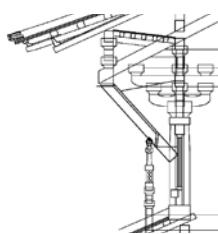


図5 大極殿扁額の納まり

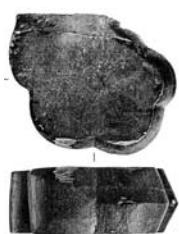


図6 山田寺扁額端材
(奈文研『山田寺発掘調査報告 図版編』)

の現存扁額を見てみると、浄土寺や籠神社など、脚先端部が欠失しているものが多い。斜めに扁額を掛けた場合、脚先端部に木の繊維方向と平行な向きに剪断応力が生じる。割損事例の要因はこのことにより生じたものと考えられ、山田寺出土部材もやはり同じ割損状況である。また、籠神社や東大寺西大門、その他脚付き扁額の肩や脚の先端形状はいずれも雲形に象っており、山田寺出土部材の形も同様である。以上の点からこれは扁額の脚先端部と同定することは妥当と言える。大極殿の復原扁額は、肩、脚の先端部の形状にこの山田寺出土部材を採用することとした。

彩色 扁額事例を見ると、法隆寺など最初期のものに彩色等の塗装痕跡が認められる。今回は彩色が現存するうち最も古い教王護国寺の彩色に倣う方針とした。額縁は蓮弁形縫綉彩色、額面は白色地に墨で枠をまわし、その内側に朱線をまわす。脚・肩及び額縁背面側は山田寺出土部材に倣い黒漆塗とした。

文字 額字について検討した結果、文字は「大極殿」、字形は第一次大極殿建設に近い時期に書されたものが妥当であるとし、詩序(慶雲4年(707))と長屋王願経(和銅5(712))から集字して研究所内で検討を重ねた。その結果、奈良時代の扁額として楷書が相応しいこと、奥書の文中のごく近接した箇所から「大」「極」「殿」の三文字を集められることなどから、「長屋王願経」を採用することとし、中でも字形の整った滋賀県常明寺所蔵の巻30の奥書から集字する方針をとった。

文字は陰刻されている事例が大部分で、奈良時代の唐招提寺、東大寺西大門、平安時代の海龍王寺の3点の扁額は、中央に鎬の付く葉研彫による陰刻で共通し、図7のような断面を持つ。大極殿の復原扁額においても、この鎬付き葉研彫を採用することにした。

以上の基本方針により考案した大極殿扁額の復原案を図8に示す。(速水侑子／奈良県・窪寺茂・清水重敦・渡辺晃宏)

注

- 1) 山下秀樹／奈良県 他「扁額の意匠と構造－平城宮第一次大極殿正殿扁額の復原考察－」『紀要2008』 p3～7



図7 鎬付き葉研彫断面図



図8 大極殿扁額復原案

平城宮跡大極殿復原

—四神彩色の配置に関する研究—

1 はじめに

平城宮跡の第一次大極殿復原を検討する中で、大極殿を莊嚴していたであろう彩色がどのように計画されていたのかを考えることは、飾金具による莊嚴などの問題とともに、意匠研究上の重要課題のひとつである。当研究所では、大極殿復原を前提とした彩色莊嚴に関する研究を、金具の研究とともに平成14年度から具体化させ、彩色研究では、文様などの意匠に関する課題と、技術的な側面、すなわち使用する材料、技法に関する課題に大別して研究を進めてきた¹⁾。

その結果、当時の彩色顔料については、既往研究の成果²⁾を援用することにより、使用顔料の特定がほぼ可能となった。一方、画題および彩色施工の範囲に関しては、同時代の寺院金堂建築ほかの事例に準じ、身舎の天井格間板に蓮華文、同じく支輪板に宝相華文を描き³⁾、さらなる莊嚴を図るため、身舎内部の壁面に四神と十二支等の図像を描くことが妥当であろうと判断された。

本稿は、この彩色復原の基本方針に沿って実施した詳細設計作業中に持ち上がった問題、すなわち、身舎壁面に対して四神と十二支図像をどのように配置したらよいかといったことのうち、四神配置の問題について検討した研究内容を示すものである。

2 問題の所在と研究の方向性

周知のとおり、四神は四方の方角をつかさどる神で、東に青龍、西に白虎、南に朱雀、北に玄武と、各方角に該当させた四神像が配置される。この四神像を大極殿に描くとなると、ふさわしい施工対象箇所として、内部の大壁か小壁のいずれかが考えられる⁴⁾。しかし、大極殿庇柱筋の正面柱間はすべて開放で、大壁（頭貫下方壁）に四方神を描くことはできない。一方、より四神像を配置するのにふさわしいと考えられる身舎内部では、周囲柱筋の頭貫下方が四周とも開放である。したがって、殿内莊嚴を図るために四神像を描くことができる箇所は身舎小壁に限定される。

ところが、身舎内部小壁は各柱間に中東が立つ（図9参照）。この状況下にある身舎小壁に四神像を中央に描

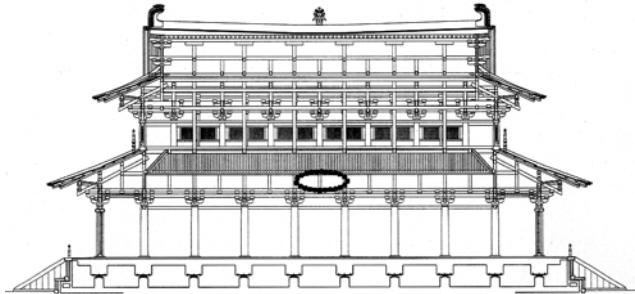


図9 復原大極殿桁行断面図

文化財建造物保存技術協会作成の図面に一部手を加えた

くとなると、①中東に描く方法、②小壁2面と中東を対象にして描く方法、③中東を介した小壁2面を対象として描く方法の3通りが考えられる。

①については、中東規模からして極めて小規模の四神像にならざるを得なくなる。②については、柱や中東を含め、2面の壁にひとつの主題の絵を描く手法は時代が下がる。これが普及するのは狩野派画壇が建築界に登場してからのことと考えられる。このような観点から、大極殿においては③の方法を採ることが妥当と考えられた。

ところが、高松塚古墳、キトラ古墳の四神配置から自明のように、四神像は壁面中央に配置されるのが一般的である。そこで③の方法を選択した場合、四神像をどのように描くのが妥当であるかの検討を、中国、韓国、北朝鮮の古代墳墓、石窟ならびに美術品等にある事例を通しておこなおうとした。結論からいうと、高句麗古墳壁画の四神配置はある法則によっていることが認められ、これを建築的に解釈することにより、大極殿における四神壁画の配置問題の解決法を見出した。

3 高句麗古墳壁画における四神配置と法則

事例1 双楹塚 平安南道南浦市龍岡邑に所在する築造年代、5世紀末とされる装飾古墳で、1913年に関野貞によって発見されている。この古墳は羨道、羨室、前室、主室から構成され、主室と前室との間に八角石柱が2本立つ。主室は正方形平面で、南面には入口が設けられ通路を介して前室と繋がる。主室、前室、羨道、八角石柱に描かれている壁画は、主室、前室とも側壁に赤色顔料で柱、組物、桁を、桁上中央に人字形組物を描いている。このことからわかるように、この古墳は壁画により建築空間を模している点に特徴を持つ。

四神は主室の北壁西寄りに玄武と南壁入口上部に朱雀を配し、前室東壁の青龍、同西壁の白虎とを合わせて四神すべてが揃う形となる。このうち注目できるのは、主室南面に描かれた朱雀の位置で、彩色で描いた桁上中央の人字形組物の両脇に一対の朱雀を向かい合わせに描いている。このように人字形組物の両側に鳥像を配置する

事例は、雲岡石窟第12窟の前室西壁、慈恩寺大雁塔門楣石線刻仏殿図（唐・長安4年（704））などがある。

事例2 湖南里四神塚 平壌市三石区域聖文里に所在する築造年代、5世紀末から6世紀初とされる装飾古墳で、羨道と主室からなる。四神はやや長方形の平面の主室側壁に描かれている。このうち側壁中央に入口を設けた南壁は、その他三方が各像を中央に1像配置しているのに対し、入口両脇の壁面に一对の朱雀を向かい合わせに配置している。

事例3 江西大墓 平安南道南浦市江西区域三墓里に所在する築造年代、6世紀末から7世紀初とされる装飾古墳で、羨道と主室からなる。方形平面の主室は入口が設けられ、羨道と繋がる。彩色は側壁に四神を、天井廻りに忍冬唐草文を含む植物文や神鳥文、神仙文などを、最上段の天井面には蟠龍などを描いている。四神像は湖南里四神塚同様、入口を有する南壁はその両脇壁面に一对の朱雀を向かい合わせに配置している。なお、江西中墓も大墓同様、入口を有する南壁はその両脇に朱雀を配し、他の3面は、壁面中央に各図像1像を配置している。

上記の事例から、描写対象面の中央に仲介物のある場合の四神像配置の対処法は、二つの方法があることがわかる。一つは、入口両脇の袖壁に当たる壁面に朱雀をそれぞれ配置する方法で、湖南里四神塚、河西大墓、河西中墓がそうである。もう一つの方法は、双楹塚に見られるように、入口開口部上方の壁部分に朱雀を配置する方法である。

このように、高句麗古墳壁画における四神の配置方法は、一壁面中に入口等の仲介物がない場合は各四神1像をその中央に配する方法をとり、壁面中に仲介物がある場合は仲介物の両側に四神像を一对として描く方法、および双楹塚方式の計三つの方法があることが分かった。

なお、双楹塚の主室北面は中央に墓主夫妻室内生活図画大きく描かれているため、玄武はその西側余白面に配されている。上記した四神配置の法則に従えば、同北壁の東寄りに玄武がもう1像描かれてもよいと思われるが、同所の当初壁上塗は過半が剥落しており、この確認ができない。1913年に閔野により発見されたこの古墳は、その翌年に壁画の模写が行われている。この模写の同所もすでに壁画が失われた状態となっている。

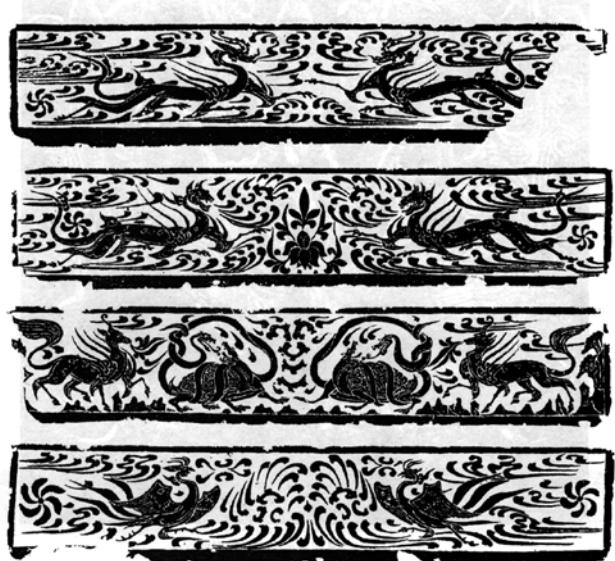


図10 北魏侯剛墓誌彫刻四神像

4 おわりに

大極殿復原工事では、四神を建物中央に配置させるために、中束を壁面内に塗り込めることも検討されたことがあった。これは四神壁画の取り扱いだけからみた苦肉の策であり、各面中央部の中束のみ、部材断面を減ずることは蓋然性がない。研究当初は問題の打開策を見出せず困惑したものの、高句麗古墳壁画に見られる四神配置の法則に従って、いずれの四神も中束を介した2面の壁面に一对の図案として描けば、課題であった問題は解決されることになり、この方針を探ることにした。

なお、各四神を一对として図案された事例の一つに、北魏侯剛墓誌彫刻に見られる四神像がある（図10）。

（窪寺 茂）

参考文献

- ①『高句麗壁画古墳』共同通信社、2005。
- ②『閔野貞アジア踏査』東京大学総合研究博物館、2005。
- ③金基雄『朝鮮半島の壁画古墳』六興出版、1980。
- ④雲岡石窟文物保管所編『中国石窟 雲岡石窟 第2巻』平凡社、1990。
- ⑤京都大学人文科学研究所研究報告『雲岡石窟 第9巻』1953。
- ⑥『世界美術大全集 東洋編 第4巻』小学館、1997。
- ⑦傅熹年主編『中国古代建築史 第二卷 兩晋、南北朝、隋唐、五代建築』中国建築工業出版社、2001。

注

- 1)『平城宮第一次大極殿復原研究 彩色・金具研究会記録 2005』奈良文化財研究所、2006。
- 2)古代の彩色顔料の研究は、昭和10年代に始まった法隆寺壁画保存の研究や、古代建築彩色等の研究を通じた主に保存科学分野の研究者による成果がある。
- 3)法隆寺金堂、薬師寺東塔などを見れば明らかのように、飛鳥・奈良時代の建築における天井廻りの彩色は、原則として蓮華文、宝相華文などが描かれている。
- 4)外部に文様等の彩色を施していることを確認できる奈良時代における現存建物は唐招提寺金堂のみである。

図版出展

参考文献⑦、264頁、図2-10-33を転載した。

近代京都における建築の 継承と復古

—京都府近代和風建築総合調査から—

文化遺産部建造物研究室では、平成19・20年度の2カ年にわたり、京都府内に残る近代和風建築の調査を、京都府からの受託調査事業として実施した。受託内容は、京都近郊4大学による府全域の一次悉皆調査を経て200件強に絞り込まれた重要物件を対象とする、二次詳細調査である。京都における近代和風建築は、質・量ともに東京と双璧をなす充実ぶりをみせており、特に伝統に軸足を置いた和風建築の継承と創造という点においては、全国的視野からみても突出している。本稿では、調査を実施するなかで明らかとなってきた、近代京都における和風建築を、主にその背景との関係から概観しておきたい。

「近代和風建築」ということば

「近代和風建築」ということばが指し示す像は、地域や立場によって区々である。よく取り上げられる近代和風建築の事例といえば、派手な折衷や部分の肥大したアクリの強い造形、あるいは建築家による和風表現といった、造形的に目を引くものが主であるが、京都に残る近代和風建築は少し毛色が異なっている。

「近代和風建築」ということばのうち、「和風」の語は、「洋風」と対になるものであるから、それだけで洋風が意識化された時代、すなわち近代を含み込んでいる。その語にさらに「近代」の語を付加した「近代和風」という語は、同語反復であり、意味が過剰である。近代和風建築の代表例として先に挙げた類のものが注目されてきたことは、こうした用語設定を素直に反映している。

本調査で明らかとなった京都に残る近代和風建築の数々は、こうした見方に対する強力なアンチテーゼとなる。その多くが施主と大工の協同による建築であり、建築家が関与した建造物は必ずしも主役ではない。その造形と技術は近世以来の伝統を正統に「継承」した、いくぶん地味なものであり、華々しい造形に彩られているわけでもない。けれども、近世とはどこか異なる造形や、その完成度、洗練具合は、確実にその空間を体験する者の心を打つ。他方、建築家の設計による和風建築は、京都では近世より前の時代への「復古」の意識が強く見られるもので、近世までの造形を刷新する新たな表現を見せた。とはいえそれらも、近世以来の大工の技術的伝統、

あるいは現存する歴史的建造物との深い対話の上に、造形が試みられている。京都の近代和風建築は、これら「継承」と「復古」の2つの概念を揺れ動きながら形をなしたものであった。

大工による「継承」の中の個性

京都府の近代和風建築では、大工の設計施工による建築の比重が特に高いことが、本調査において再確認された。大工の設計施工による建造物は、近世の造形・技術の「継承」を前提とする。そうした造形・技術は、いわば読み人知らずのデザインとして、時代性、地域性において一般化されて読まれる傾向にあった。しかし、建築が規制や規範に強く縛られていた近世以前とは異なり、施主の趣味がより直截に建築に込められるようになった近代の和風建築においては、大工の個性がその造形に現れやすくなったことが、京都においては明確に認められる。

本調査では、大工の個性を、次のような点に見いだし、個々の建造物を評価した。まず、ゆるぎない比例と近世初頭の洗練された意匠のうつしによる、上質な空間の形成である。ここには、茶室を専門とする数寄屋大工の造形感覚が、施主となる近代数寄者の美意識と混じり合い、邸宅から町家へと徐々に浸透していく過程がみられた。そして、見え隠れにおける構造技術的創意による表現の自律が挙げられる。例えば、対龍山荘（京都市左京区、明治38年）や角屋松の間（京都市下京区、大正15年、図11）では、驚くほど深い軒が差し出されながら、軒桁が支持柱なく宙を浮いている。側柱を徹底して抜きながら、軽やかな外観を保つため、見え隠れに技術的創意が重ねられる。これは、南禅寺旧境内に代表される別荘地開発等により、建築を庭と一体として造形する感覚が磨かれ、特に室内と庭との連続を求める意識がもたらした結果であった。また、大正から昭和にかけては、建築家との共同を経て、復古様式や洋風技術・意匠を大工が吸収し、血肉化していく過程も認められた。これは宗教建築に顕著であるが、住宅においても大工と建築家の技術と美意識が交差していく様が見て取れる。

建築家による「復古」を支えるもの

近代になって新たに成立する職能である建築家によって設計された建築においても、京都では和風建築が優勢であり、明治28年竣工の平安神宮（木子清敬、伊東忠太設計）を筆頭に、その表現は全国における建築家による和

風建築の先陣を切り、かつ積極的に牽引する役割を担った。和風表現は、主に宗教建築、公共建築において先行し、遅れて住宅建築でもみられるようになっていく。

その造形的特徴は、古建築の形式を引用、模倣、折衷し、新たな造形へと昇華させる復古様式に代表される。復古様式は、明治30年より開始された古社寺保存法による古社寺修理によって、体系化されていく。京都府は奈良県とともに、その起点をなし、古社寺修理の監督技師を務めた建築家により、古代、中世、あるいは桃山期の意匠を再現する復古様式の建築が生み出されていった。

復古を超えて、新しい意匠の創造に踏み込んだのが、京都府技師亀岡末吉である。「亀岡式」と称されるようになるその作風は、建築の概形は古建築から引用しつつ、欄間等を埋める彫刻に、伝統意匠を西洋図案により抽象化、変形したもので置き換えるものであった（図12）。その作風は、古社寺修理技術者や内務省を経て、全国に流布していく。

建築家による和風表現は、西洋由来の歴史主義建築觀に基づき、古建築を様式化するもので、いわば和の皮を借りた洋である。しかしながら、構造に目を向けると、トラスという新構造を小屋組に大胆に挿入してはいるものの、全体としては建登せ柱を有効に利用した近世式であり、その保証があつてはじめて、復古意匠が十全に展開し得たのだった。その意味で、復古様式も近世に完成された造形・技術の延長上に成り立つものであった。

和風建築からみた近代京都

京都の近代和風建築には、建築類型の差異を越えて、ある種の共通感覚が認められる。その共通性を生んだ近代京都の社会的背景としてまず挙げられるのが、茶の文化（煎茶、抹茶）の隆盛と、それに関連する装飾文化の開花である。京都における別荘の隆盛をはじめとする住宅建築の意匠的洗練は、茶道の中心地としての伝統と技術、美意識の集約が預かるところ大であった。また、復古への希求も、その対象となる時代をよく見てみると、平安、室町、桃山時代を中心となっていることに気付かれる。これらを一言で言い換えるならば、明治維新後、相対的地盤沈下をおこした都市京都の再浮上を意識したものといえよう。

こうした目で近代京都の和風建築を見直してみると、伝統を素直に継承しているかに見える造形であっても、

リヴァイヴァルとまではいかないけれども、部分的ながら意識的な復古と再解釈を含んだ造形がそこかしこにみつかるのである。近代和風建築は、この「継承」と「復古」の狭間にあるような試みの中に、その本質を有するものであるとの見方が、ここから引き出されよう。

京都の近代和風建築は、同時代の洋風建築や近代主義建築、あるいは派手な折衷による和風建築に比すれば、保守的な造形をまとう。しかし、そこには伝統的な技術・造形を正統に継承しながら、気付きにくいけれども要所を押さえた復古的意匠を挟み込み、近代に相応しい和風建築が確かに生み出されている。それは、伝統的な技術と造形が、近代という時代においても刷新と展開を生むものであり、汲めども尽きぬ創造の源泉であり続けることを、今日の我々の眼前に突きつけてくるのである。

（清水重敦）



図11 宙を浮く軒桁（角屋松の間、京都市、大正15年）



図12 亀岡末吉による復古様式（仁和寺宸殿、京都市、大正3年）

茨木城出土篠欄間について

はじめに 平成18年5月、大阪府茨木市中心部に所在する茨木遺跡において、織豊期から江戸初期に埋め立てられたと見られる流路から、建具などの建築部材が複数出土した¹⁾。本研究所では、科学研修費補助金（基盤研究A）「遺跡出土の建築部材に関する総合的研究」を進めており、茨木市教育委員会の協力に恵まれ、出土建築部材調査の機会が得られた。そこで、本稿では出土した建築部材のうち、篠欄間について復元をおこない、室町後期から江戸前期の現存建物に用いられている篠欄間と比較した結果を報告する。

篠欄間の概要 篠欄間2点は、図13のように復元できる。一つは幅2196mm×高さ607mmで、欄間框が出土していない。框の幅と柱の太さを考慮すると、柱間約8尺に納まると推定される。組子は、横子が上下段に2本、

中段に3本で構成される。堅子は12mm毎に配され、181本あったものと推定される。組子は雇い釘（木製か竹製）で留められ、堅子は一本置きに留められる。2間半の室境に2枚用いたものであろう。

もう一つは、欄間框が残存し、幅1405mm×高さ382mmで、柱太さを考慮すると、柱間約5尺に納まると推定される。組子は、横子が上下段に2本、中段に3本で構成される。堅子は15mm毎に配され、87本あったものと推定される。雇い釘は、欄間が比較的小さいためか、前述の篠欄間より横子の留め方が疎らである。欄間框は几帳面取りされ、留形三枚接ぎ雇い釘で組み立てられる。欄間の大きさと組子の細さから見て、付書院などに用いた可能性がある。

篠欄間の比較と位置付け 篠欄間は、建築様式で言えば書院造り建物の上段の間などに主に用いられる。表1は書院造りの建物について、欄間に注目して比較したものである²⁾。また、堅子配置の細かさを示す指標として、

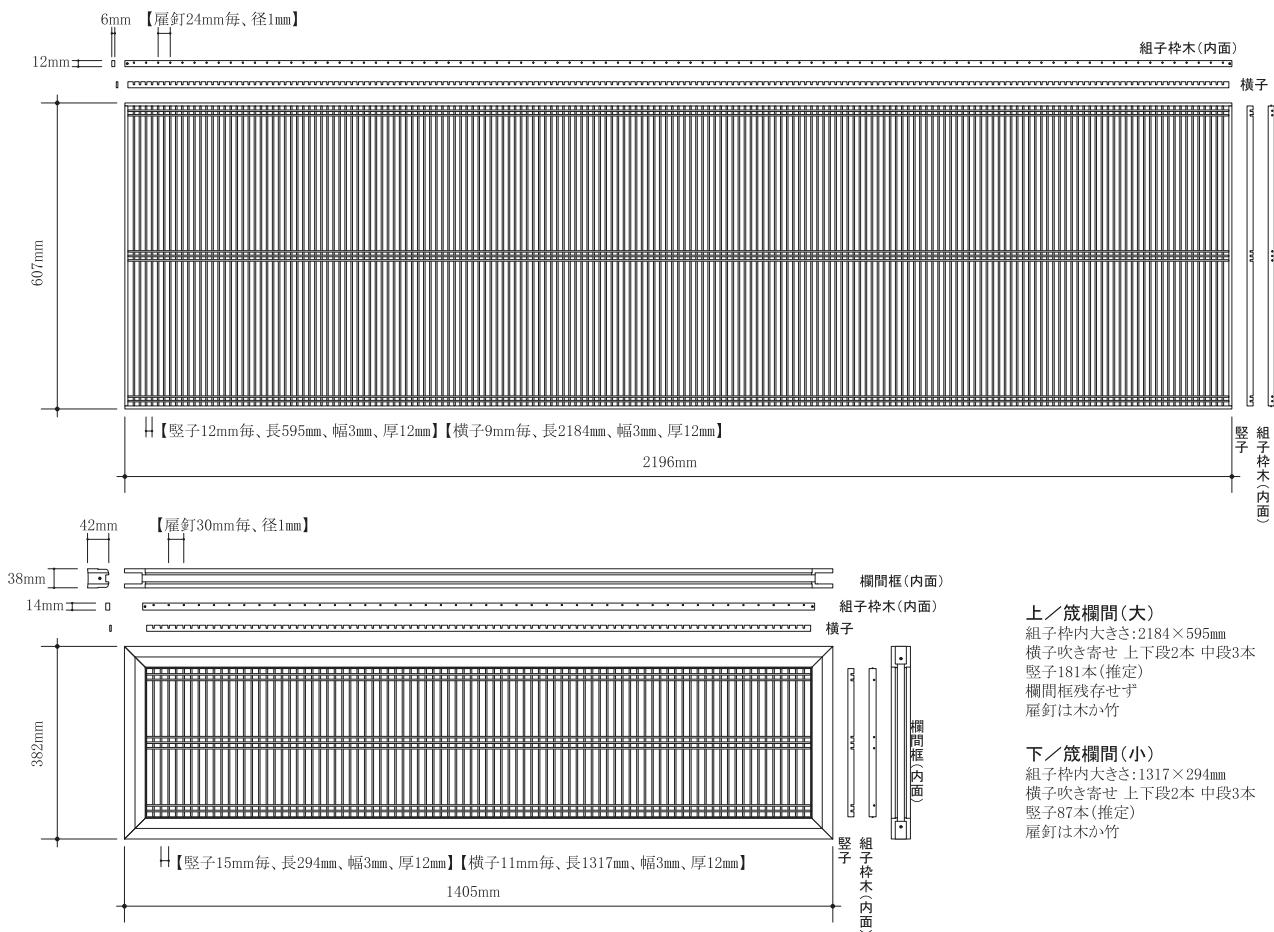


図13 茨木遺跡出土篠欄間 1:15

篠欄間が納まる柱間寸法を、豎子本数で割った数値を入れた。この表を概観すると、室町時代の初期書院造りにおいては竹の節欄間が用いられることが多く、篠欄間を用いる場合でも、高さが低く、豎子配置が疎らな傾向がある。次に織豊期から元和（1615～24）頃の欄間は篠欄間を用いることが多く、高さも高く、豎子も細かく配置される。次の寛永（1624～44）頃は、さらに欄間の高さが増し、横子の本数が増え、篠欄間の最盛期を示す。この時期以後は、彫刻欄間や変わり組子欄間を用い始め、篠欄間は書院造りにおける最上級欄間の地位を失う。

茨木遺跡出土篠欄間（大：幅8尺の例）と類似する篠欄間を持つ建物を挙げると、欄間の大きさの点からは正傳寺本堂（京都・重文）、幅と横子の本数から勧学院客殿（滋賀・国宝）に類似する。また、豎子の配置では、類例中最も細かい圓満院宸殿（滋賀・重文）が比肩するものの、茨木遺跡出土篠欄間よりも細かい配置例は見あたらず、最も豎子が細かく配置される事例となった。

まとめ 以上の結果、茨木遺跡出土篠欄間は、比較した建造物に並ぶ格式をもった建物に用いられていたと考えられる。茨木遺跡には、一国一城令で元和年間に廃城された茨木城推定地が位置する。篠欄間が出土した流路は、幅や深さ、周辺の地名や地割りから見て茨木城東堀と考えられている。出土篠欄間は、特徴が類似する正傳寺方丈（桃山時代）・勧学院客殿（慶長5年）・圓満院宸殿（元和5年）の年代から見ても、茨木城の御殿や周辺の寺院建築に用いられていたと見ることが可能である。出土篠欄間は、市街地に覆われて謎の多い茨木城の実態を解明する、貴重な出土建築部材と評価できる。

（黒坂貴裕）

注

- 1) 茨木市教育委員会『平成18年度発掘調査概報』2007。
- 2) 修理工事報告書においても欄間の記述は少ないため、当初材・後補材の区別はおこなっていない。また、欄間の大きさ、組子の本数は各報告書や書籍写真からの推定値である。建築年代は、文化庁『国宝・重要文化財大全』毎日新聞社、2000より。

表1 篠欄間の類例比較

建物名	建築年代 ²⁾	欄間種別 (横子上段～下段の各本数)	部屋の幅と 篠欄間枚数	柱間／ 篠欄間1枚	欄間高さ (框込み)	豎子	柱間(mm) ÷ 豊子数
茨木遺跡出土(大)	/	/ 篠欄間(2・3・2)	(2.5間／2枚)	(8尺1寸前後)	60.7cm(框無)	181本	13.6
龍吟庵方丈	嘉慶元頃	(1387頃) 篠欄間(2・3・2)	3間／3枚	6尺8寸	60cm前後	53本	38.8
妙喜庵書院	室町後期	- 竹の節欄間	-	-	-	-	-
靈雲院書院	室町後期	- 竹の節欄間	-	-	-	-	-
聚光院本堂	永禄年間	(1566頃) 篠欄間(1・3・1)	3間／2枚	9尺8寸	63cm前後	61本	48.7
金地院方丈	桃山時代	- 篠欄間(1・3・1)	3間／2枚	(9尺7寸5分)	80cm前後	117本	(25.2)
本願寺飛雲閣	桃山時代	- 菱形組子欄間	-	-	-	-	-
正傳寺本堂	桃山時代	- 篠欄間(1・3・1)	2.5間／2枚	8尺1寸3分	70cm前後	99本	24.8
西教寺客殿	慶長2年	(1597) 篠欄間(1・3・1)	3間／3枚	(6尺5寸)	100cm前後	77本	(25.5)
三宝院表書院	慶長3年	(1598) 篠欄間(1・2・1)	3間／2枚	9尺7寸5分	70cm前後	119本	24.8
三宝院宸殿	慶長3年	(1598) 篠欄間(1・3・1)	2.5間／2枚	8尺1寸1分	60cm前後	107本	22.9
勸学院客殿	慶長5年	(1600) 篠欄間(2・3・2)	2.5間／2枚	8尺1寸3分	90cm前後	121本	20.3
光淨院客殿	慶長6年	(1601) 篠欄間(2・3・2)	3間／2枚	9尺7寸8分	95cm前後	151本	19.6
觀智院客殿	慶長10年	(1605) 竹の節欄間	-	-	-	-	-
瑞巖寺本堂	慶長14年	(1609) 篠欄間(1・3・1)	3間／2枚	(7尺)	100cm前後	177本	(17.9)
(名古屋城表書院)	慶長14年	(1609) 篠欄間(2・1・3・1・2)	3間／2枚	不明	不明	102本	不明
圓満院宸殿	元和5年	(1619) 篠欄間(2・3・2)	3間／2枚	9尺7寸5分	95cm前後	191本	15.4
妙法院大書院	元和5年	(1619) 篠欄間(2・3・2)	3間／2枚	9尺7寸5分	100cm前後	114本	25.9
二条城二の丸御殿	慶長・寛永	- 篠欄間(2・2・3・2・2)、彫刻	3.5間／2枚	11尺3寸7分	136cm前後	124本	27.7
大通寺広間	江戸前期	- 篠欄間(1・3・1)	3間／3枚	6尺5寸	80cm前後	64本	30.7
大通寺蘭亭	江戸前期	- 篠欄間(1・3・1)、上下透彫	2.5間／2枚	8尺1寸0分	68cm前後	133本	18.4
聖衆來迎寺客殿	寛永16年	(1639) 篠欄間(1・2・3・2・1)	3間／2枚	9尺7寸5分	110cm前後	117本	25.2
知恩院大方丈	寛永18年	(1641) 篠欄間(2・3・3・2)	4.5間／3枚	(9尺7寸5分)	136cm前後	115本	(25.6)
知恩院小方丈	寛永18年	(1641) 篠欄間(2・3・3・2)	3.5間／2枚	(11尺3寸7分)	133cm前後	169本	(20.3)
小笠原家住宅	寛永年間	- 篠欄間(2・2・3・2・2)	2間／2枚	6尺3寸1分	110cm前後	不明	不明
曼殊院小書院	明暦2年	(1656) 模様組子欄間	-	-	-	-	-
本願寺黒書院	明暦3年	(1657) 模様組子欄間	-	-	-	-	-

擬石・擬木を用いた 近代和風庭園

—琴ノ浦温山莊園の庭園調査から—

はじめに 景観研究室では、平成20年度に和歌山県海南市に所在する琴ノ浦温山莊園の庭園調査を受託し、庭園造営の歴史と構成・意匠に関する調査をすすめてきた。

調査成果は『琴ノ浦温山莊園 庭園調査報告書』としてとりまとめたが、本稿ではその概要を報告する。

庭園の概要と築造年代 琴ノ浦温山莊園は、製革業で財をなした新田長次郎（1857～1936）によって造営された近代の別荘庭園である。長次郎は大正元年（1912）に当地を訪れ、三方が海に囲まれその一端に山（矢ノ島）を配した風致を気に入り、別荘敷地として購入した。これ以降、順次敷地を拡張して主屋、茶室等の建造物を建設しつつ、庭園についても継続的な築造をすすめた。

別荘敷地内のはば中央に位置する主屋は、新田家の建築顧問・木子七郎によって設計され、大正4年（1915）に竣工した。当時の別荘建築に典型的にみられる、複数棟を雁行型に接続した書院造の建築とする。茶室「鏡花庵」は武者小路千家の家元名代をつとめた木津宗詮の設計によって大正9年（1920）に竣工し、幾何学的な意匠を軸とした自由な造形を基調とする。

このように、建築的にも特徴のある別荘施設群をそなえた本庭園は、黒江湾に面した海岸立地の庭とし、主屋の東と西に池泉庭を設ける。別荘の造営記録から、西池泉庭（図14）が大正4年（1915）頃、東池泉庭（図15）が大正9年（1920）頃に基本姿景が整えられたと推察され、その後昭和初期に完成に至ったと考えられる。池泉取水は海水を利用し、潮の干満によって池面水位を変動させる潮入りの庭とする点に特徴が認められる。



図14 西池泉庭の中島と石橋 南東から

庭園構成と意匠 主屋周辺部は、飛石を縦横に打って縁先手水を随所に配った書院庭とし、主屋の建築意匠ともよく調和したものとなっている。園路動線の交点に打たれた踏分石や各所に配された景石には、特に大振りの石を用いており、本庭園が大正期の大石趣味を色濃く反映していることを示す。

主屋東池泉庭は、書院庭のように細部に凝った意匠とは一転し、大池を穿って池内には中島を浮かべた開放的なもので、さらに護岸は大石で豪快に土留めした雄大な空間を呈したものである。特に中島を護岸する紀州青石（緑色片岩）による崩れ石積みは、すこぶる迫力のある造作である。また、この主屋東池泉庭の南面築山には、ウバメガシを主体とした大刈込を屏風のごとく立ち上げて築山上部にはクロマツを疎林状に配植し、海岸風致の象徴景を顕現させている。

主屋西池泉庭は汀線の東と西でその護岸意匠を一転させる。東岸は紀州青石をふんだんに用いて色彩的にきわめて派手な造作とするが、西岸は自然岩盤をそのまま活かした護岸とし、青石による石組護岸と岩盤による自然護岸とがダイナミックな好対照をなす。また、背後の矢ノ島にはトンネルが開削され、海峡への通景線も得た構成を現出し、池の中島に架かる巨大青石の石橋や沢渡りなど細部の意匠にも優れている。

擬石・擬木を用いた庭園技法 本庭園で最も際立った特色となっているのは、飛石、景石、池泉護岸、階段土留め、庭園家具などにモルタル製の擬石・擬木を大量に用いていることである。驚くのはその量的な多さだけではなく、「大石を人工製作せむと思ひ立ち、セメントを以て試作せるに一見本物の自然石と異らざるもの出来上がり自ら興趣を湧かしめた」と長次郎の自叙伝『回顧七十



図15 東池泉庭の擬石護岸と雪見灯籠 北から

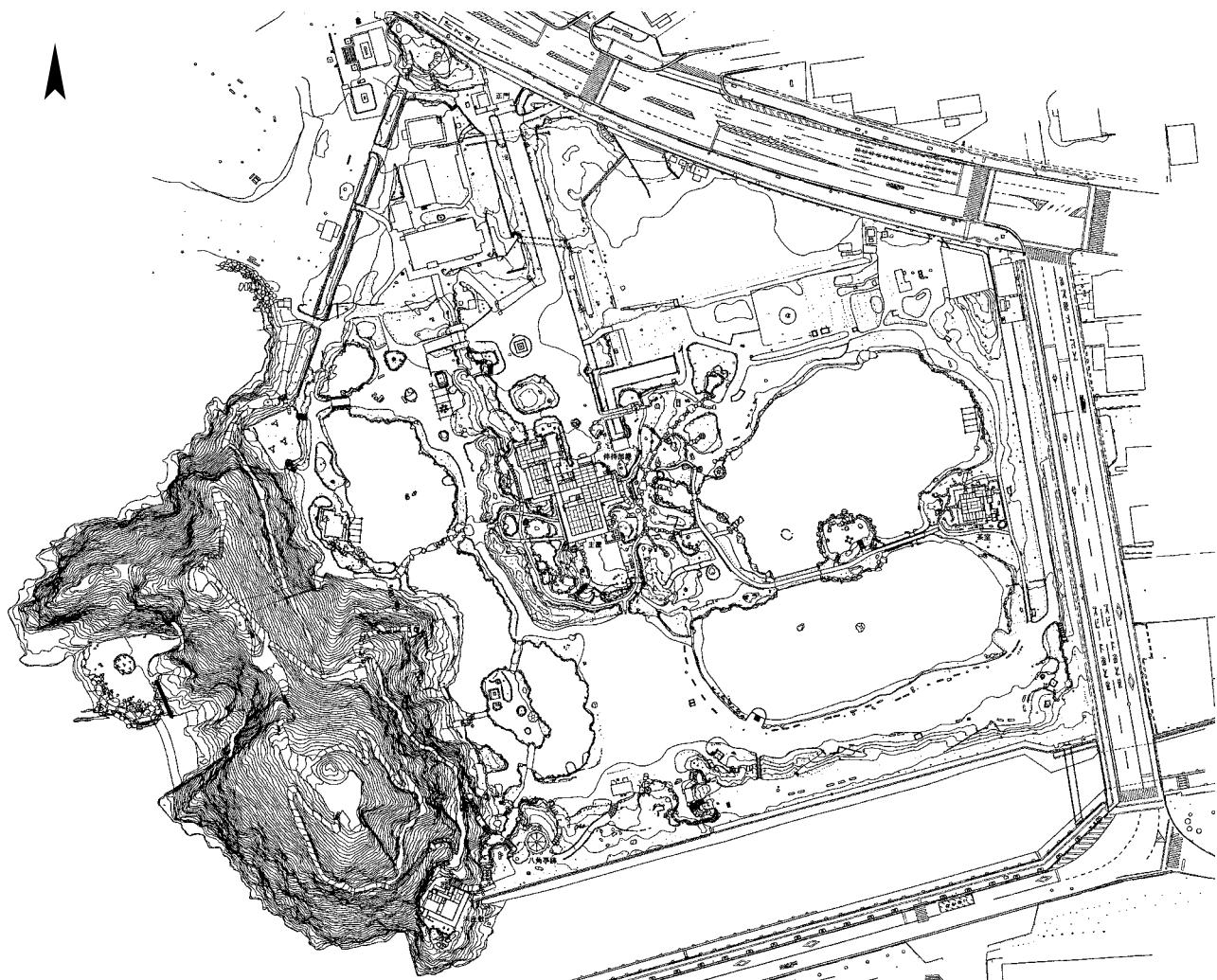


図16 琴ノ浦温山莊園現況平面図 1:2000

有七年』(1935) にあるように、長次郎自身がその製作をおこなっていたことである。特に、主屋周辺の飛石園路や景石、主屋東池泉庭の護岸石組などに、きわめて巨大な擬石による庭園造作がみられる。また石色も赤色、青色、暗灰色など、多様な染料を用いて製作している点が指摘できる。さらに園内には青石を模造したものもあり、石英が脈状に結晶した様子も造作している点は、製作技術の水準の高さを示す好模範といえるものである。これらは長次郎が大正元年(1912)の別荘造営当初から製作を開始し、大正後期には随所に擬石・擬木を導入し、その後昭和初期に至るまで部分的に手を加えながら現在の姿にしていったものである。

ところで、近代に庭園や公園が多数造営された東京、大阪など大都市圏では、擬石・擬木の工法が井下清、椎原兵市、松村重、橋本八重三、小林觀山ら、近代造園家

および造園技術者によって検討され始めたのが大正末期であった。そしてこれが方法的に確立され、造園資材として定着したのは、東京の有栖川宮記念公園池泉擬石護岸および擬木橋(1934)、大阪の天王寺公園和風庭園擬石製滝石組(1933)、京都の都ホテル庭園擬石製滝石組(1933)など、昭和8~9年(1933~1934)頃である。以上から、大正初期においてすでに長次郎によって擬石製作が着手されていた温山莊園は、擬石・擬木を利用した庭園として、造園史上きわめて先駆的な事例であったことが判明する。

また本庭園内には、近代造園における材料の変容を物語るコンクリート造庭園施設(眼鏡橋、正門等)も多数存在する。これについても、近代造園にコンクリートが導入された時期的動向を検討するうえで、本庭園はひとつの指標的事例と指摘できるものである。

(栗野 隆)

文化的景観の輪郭と多様性

はじめに　近年、新しい文化財の類型として「文化的景観」が注目されている。奈良文化財研究所では、その重要性を踏まえ、現在、文化的景観の保護のための基礎的・体系的な調査研究に着手してきた。

本稿においては、この調査研究の一環として、「文化的景観とは何か？－その輪郭と多様性をめぐって－」をテーマとして開催した文化的景観研究集会（第1回、2009年2月20日・21日）の成果を踏まえつつ、文化的景観についての基本的な考え方や調査研究上の課題を展望する。

研究集会のねらい　2005年、文化財保護法に新たに創設された文化的景観は、その対象や内容、構成については、従来扱われてきた「文化財」のイメージと大きく異なる部分があり、文化財を専門とする各分野においても、馴染みが薄いのが現状と言える。そのため、文化的景観に関する検討を進めるに当たって、まずは、そもそも「文化的景観とは何か？」ということについて、基本的な考え方と文化的景観の保護に向けた取組を確認し、広く情報を開示・共有することが極めて重要である。

そこで、まずは、文化的景観の対象、内容、構成などの輪郭、あるいは、様々な生業や風土によって培われてきた生活文化の違いから生じる多様性などについて、これからどのような視点や姿勢で臨んでいけば、「文化的景観」という文化財を十分に理解し、地域においてその価値を保護し活かしていくことができるのか、ということなどを、これまでの「文化財」の取組と比較する観点などをも取り入れながら検討することをねらいとした。

構成と論点　このような趣旨を踏まえつつ、本研究集会は、基調講演（第1部）と基調報告（第2部）、事例報告（第3部）として様々な立場からの視点と事例を提示した上で、これらを踏まえた総合討議（第4部）を行った。

第1部では、まず東京大学先端科学技術センターの西村幸夫教授から「文化的景観と都市保全学」と題し、都市景観保全の世界的な動向を踏まえつつ、採掘・製造、流通・往来及び居住に関連する文化的景観を扱うことの難しさやその保護手法としての都市保全学の可能性についての展望が示された。一方、広島大学大学院国際協力研究科の中越信和教授からは「文化的景観と景観生態学」

という視点から、農林水産業に関する文化的景観における生態学的な留意点や、地域内のシステムを維持していくための運営体制の重要性などについて示された。

第2部では、文化庁記念物課の鈴木地平氏から「文化財保護行政の取組みと課題」について、また国土交通省公園緑地・景観課の脇坂隆一氏から「景観行政の現状と課題」についての基調報告があった。両報告を通じ、文化的景観保護制度と景観法との関係が改めて整理されたとともに、最新の取り組み状況を踏まえた課題や今後の展望などが示された。

第3部では、「全国文化的景観地区連絡協議会事務局の取組—“近江八幡の水郷”を端緒として—」、「アイヌの伝統と近代開拓による沙流川流域の文化的景観」、「城下町金沢の文化的景観」、「四万十川流域の文化的景観」、「通潤用水と白糸台地の棚田景観」という5つの事例報告を各地の行政担当者等が行った。これら重要な文化的景観の保護に取り組む報告から、文化的景観の対象とする景観地やその価値の多様性とともに、各地域における制度の意義や課題などが示された。

そしてこれらの観点を受けて、第4部として総合討議を行い、文化的景観の価値の捉え方や保護の在り方、またその意義等について検討した。

この研究集会での発表や討議から、日本で取り組まれている文化的景観保護行政の特徴や課題として、次のことが挙げられる。

文化的景観の概念とその特徴　「景観」という概念は大きく2つの観点で捉えられる。一つは、景観を主に見た目から促えるもので、一般に普及しているのはこの観点である。いま一つは、ある地域において自然的・人文的なシステムが相互に関係した結果、植生や土地利用として表れたものであると促える観点である。この場合は、景観を相互作用の結果として位置付けるため、その背後には、自然との関わりにおいて社会や文化を形成し、地域を変化させてきたシステムやプロセスに価値が見出される。

「文化的景観」は後者の観点に軸足を置いている。さらに文化的景観を促える上でも、これまでの具体的な事例の検討を踏まえれば、2つの重要な観点を示すことができる。すなわち、人間の居住と地域の自然の関係を軸とした文化的景観は、持続可能な生態系のシステムとして、

一方、人間の生活と地域の産業の関係を軸とした文化的景観は、保全的な地域振興のプロセスとして、その実態を把握することができるものである。

保護制度上の特性 文化的景観はある一定の景観的特徴を示す「景観地」を対象としていることから、その価値の捉え方次第で非常に広い区域を対象にすることができる。これまで積み重ねられてきた建造物や庭園のような単体レベル、また伝統的建造物群などの地区レベルでの保護の実績を踏まえ、より広い圏域レベルでの保護を可能にしていることは文化的景観の特色である。今回の報告にあった沙流川流域や四万十川流域、金沢市の事例は、流域全体や旧城下町全体を価値の対象としたもので、文化的景観の特徴をよく示していた。

文化的景観の対象は様々だが、農林水産業に関連する文化的景観は生活や生業の在り方そのものが景観を形成しており、そのシステムに本質的価値があると捉えられる。しかし採掘・製造、流通・往来及び居住に関連する文化的景観、特に金沢市のように都市の全体性を価値の対象にした場合では、その内部に含まれる生活や生業の在り方は複雑で、そのシステムが景観に必ずしも直結しない。そのため、前者の保護においては景観の背後にあるシステムの継承に焦点が置かれ、後者では価値を踏まえた都市計画の在り方に焦点が置かれている。

文化的景観の課題と可能性 農林水産業に関連する文化的景観においては、現在行われている管理システムが継続されていく限り、ゆるやかに変化しつつもある一定の景観が維持されていく可能性は高いが、その対象が広域になればなるほど内在する生活・生業の在り方は多様になり、林業と水産業との依存関係のように、それぞれの景観地内だけで完結しない複雑な課題が生じる。文化的景観の保護を通じて、今まで個別に生活や生業の安定性を議論してきた視点から、それらを一連のシステムとして捉え、その安定性を問う視点へと変化しつつあることは、文化的景観をきっかけとした持続的な地域経営への足掛かりとして期待できる。

一方、採掘・製造、流通・往来及び居住に関連する文化的景観は、産業の変化や都市の発展とともに斬新で不可逆的な変化が速いスピードで起こるため、何を安定した仕組みとして保護していくべきなのか、判断が難しいという課題がある。このような景観地は、区域の画定を



総合討議の様子

行う際に判断材料となりやすい自然的要素が希薄である上に多様な要素を含み、さらに区域外の影響を受けやすいため、文化的景観の区域設定を適切に扱うための手法についても十分に検討する必要がある。

この他にも文化的景観に関する重要な課題は多くあるが、今回の事例発表等を通じて、文化的景観の取組には、地域を熟知して丁寧に価値づけし、長い目でその保護に取り組む体制の必要性が確認され、改めて地方公共団体における文化財専門職員の重要性が示された。また文化的景観保護行政の推進と質の向上を図る観点から、取組事例や研究事例の収集や蓄積、その検証、さらにそうした情報の提供・発信が求められており、奈良文化財研究所の今後の取組に対する期待も提示された。

おわりに 今回の研究集会を通じて、これまで農林水産業に関連する文化的景観と、採掘・製造、流通・往来及び居住に関連する文化的景観とで別々に議論されてきた「文化的景観」を、同じテーマのもとで議論することができた。講演や報告、総合討議等から両者の特色や課題等についての共通点や相違点が明らかになり、文化的景観の輪郭や多様性が見えてきた意義は大きい。

文化的景観は、多様な価値のあり方を許容する文化財であり、ひとつの制度の下で様々な対象を取り扱っていくことになる。この保護のために、今後は、文化的景観のもつ柔軟性を活かしながらその価値を見出し保護していく手立てや、有形・無形の観点からこれまで取り組まれてきた保護ツールを活用する手法等を、多岐にわたり関係する研究分野と連携しながら構築していく必要がある。

(恵谷浩子・清水重敦・平澤 耕)

興福寺の論義草奥書に みえる歴史

—戦国時代南都の飢饉・一揆・武将—

はじめに 歴史研究室では興福寺所蔵典籍文書の調査を進めており、2008年度には『興福寺典籍文書目録』第四巻を刊行した。論義法会が盛んな興福寺の性格を反映して、論義草を多く含むが、その中には、歴史学の史料としても注目すべき記述も存在するので紹介する。

第79函・80函は、冊子本の論義草を納める。その大部分は、江戸前期の寛文～延宝年間に、信雅・真敬が他筆により書写させ、表紙のみは自筆で記したものと思われる。今回取り上げる①②③の3冊もその一部である。①②の末尾には彼ら自筆の奥書があり、②③の表紙左下には「信雅」と記す。これらは、元来別巻だった複数の論義草を1冊にまとめて書写している場合が多く、①は前半は顕範の草、後半は草主不明。②は前半は訓専、後半は好胤の草。③は前半は草主不明、後半は好胤の草だろう。以上の草者、また書写者として本奥書に見える盛賢・善芸院はいずれも、他の興福寺典籍にも見え、中世の興福寺僧である（第60・79・80函、72函30号等参照）。中世の書写を経ているので、その書写本奥書には、右頁に掲げたように、中世の興味深い事実が記されている。

①永正元年(1504)本奥書 ①の巻末には、永正元年6月10日付の長大な書写本奥書が存在し、前年の文亀3年(1503)以来の旱魃・一揆・疫病等が生々しく記録されている。要点を記すと、文亀3年は5月以降雨が降らずに旱魃となり、8月より馬借が蜂起して四方から奈良を攻め、福寺をはじめ、眉間寺・天神宮等を焼いた。冬は厳寒で、年が明けた2月には大雪が降り、物価は騰貴し、餓死者が多く出た。般若寺・眉間寺・白毫寺には足の踏み場もないほど、路頭にも数知れず、また井戸堂・長原・丹波にはそれぞれ50～100人ほど、他の郷々里々にも数え切れないほどの餓死者が存在した。4月中旬からは疫病が流行して病死者が多く、葬送の念佛が絶えない。筆者の感慨としては、一天こぞって一向宗となつたために、神がいさめたのだろうか、と最後に書き付けている。

これは極めて生々しい記述である。文亀3年の土一揆は既知の史料でも法隆寺文書に見え（神田千里『土一揆の時代』吉川弘文館、2004年、19頁）、また9月頃に徳政が実施されたことは知られていたが（中村吉治『土一揆研究』

校倉書房、1974年）、判明する事実が断片的だった。①はその全体像を述べる貴重な記録である。馬借が「堂塔悉焼」いた福寺とは、現存しないが、『大乗院寺社雜事記』では「藤家氏寺三個内」と言われた寺院だった（明応7年3月19日条）。場所は奈良市南京終町5丁目に戦後まで存在した福寺池附近に比定されている（現在は石碑が立つ。山田熊夫『奈良町風土記』豊住書店、1976、肘塚南方町・肘塚新町条など）。それ以外の眉間寺（奈良市法蓮町聖武天皇陵附近）、天神宮（奈良市高畠町天神社（天満神社）カ）も奈良の周縁にあり、馬借が外から奈良を攻めていた様相が窺える。今回の土一揆は法隆寺文書からも、南都や法隆寺に徳政を要求した主体が「大和惣国百姓等」だったことが判明する（『大和古文書聚英』天理時報社、1943、146号）。一揆の内実には更に検討の余地がありそうである。

翌永正元年にかけての飢饉も、全国的には著名だが、^{〔特〕}大和国については従来、「天下飢饉、餓死多、和州時多死」等の記事から窺える程度だった（「続南行雜錄」所収「二条寺主家記抜萃」、『日本中世気象災害史年表稿』高志書院、2007年）。今回初めて、その悲惨な実態が明らかとなった。奈良周縁の律寺である般若寺・眉間寺・白毫寺や（松尾剛次『中世の都市と非人』法藏館、1998）、農村地帯の井戸堂（天理市東・西井戸堂町）・長原（天理市永原町）・丹波（天理市丹波市町）の惨状を生々しく描写する。

またこの点、年輪年代法で用いるヒノキの年輪幅と対照させてみると、光谷拓実作成の標準パターングラフでは、1503年は順調に生育しているが、1504年は生育が極めて悪い（奈良国立文化財研究所『年輪に歴史を読む』1990、64頁）。米延仁志等によると、ヒノキの生長は春先（太陽暦で2～4月）の気温と相関が高いという（Yonenobu,H.,and D.Eckstein (2006).Reconstruction of early spring temperature for central Japan from the tree-ring widths of Hinoki cypress and its verification by other proxy records,Geophys.Res.Lett.,33,L10701）。①では、永正元年（1504）は春も寒く2月に大雪が降ったがあるので、年輪との相関関係を考える参考になるかもしれない。

①の筆者は、この天災の原因を、一向宗の浸透に求めている。奈良で一向一揆が起きるのは天文元年（1532）だが、興福寺による一向宗の禁制は、長禄2年（1458）にはすでに記録されている（神田千里『一向一揆と真宗信仰』2頁、吉川弘文館、1991）。①からは、一向宗の浸透と、そ

积文

① 第九識牘顕範 奥書 (第八十函 144号)

写本云
永正元年六月十日、当坊毎月講用書之、

写本大急之間、速疾書之畢、願者值遇

大明神、二親得脱、自他法界平等拔苦矣、

写本云
一文亀三年癸五月廿日雨已後、至八月一同早天之

間、諸人愁吟重過也、然間興福・東大両寺、殊諸

寺・諸山、祈雨繁事沙汰在之、雖然少雨更不下、

一天之早損〔早過〕、同年八月ヨリ馬借蜂起

而日々夜々從四方責奈良、路次悪事超言者也、則

カリ田以外也、就中福寺馬借入、則堂塔悉

焼畢、同眉間寺・天神宮、其外墓所率〔卒斯〕都

婆・経樓已下焼払廻、雖末世澆季、如期事理

運眼前凶段、言語道断歎而尚有余也、兼又

冬月嚴寒、久年更無比類、春三月同寒風、即

二月中旬大雪下、是又凡事也、然而分去年

依炎〔旱〕、買賣之類一向無不令高、去程土民百

姓等、望飢餓死重過也、諸人拳云、般若・眉

間・白毫之死人無足踏跡〔云々〕、其外辺土路頭

骸死不知數、則當時口遊云、井戸堂一里飢

死五十六人、長原九十四人、丹波六十二人、其外郷々

里々算數不及也、凡去來之暮露衆多也、次又

四月中旬比始六月至、疾病倍、家而死人二

三四五無不之〔候力〕、入行鐘声書夜六時不止之、亡失胸

之涙、無被于人荼毘、葬送之念佛家而無不唱之、

誠催哀勞之思慮、增自心懺悔之少意期時也、

推之、一天挙成一向衆、諸業惣増罪法矣、

尊神驚諷之故歟、

(以上本奥書)

不注之、六月十日

② 無記五識好胤 奥書

(第七十九函 125号)

天文十五年丙午卯月五日写之畢、昨日四日、為筒井順昭

沙汰、十市方依有不義之子細、數多之人勢下彼

領地、悉以處闕所畢、諸給人等過半為他国人

之間、寺門領等雖及届可致押領歟、一寺之愁

歎不可過之者也、

なか、れとなにおもひけむ世の中の

うきめを見るはいのちなりけり

専勝房 盛賢

(以上本奥書)

③ 果上許縁好胤答 奥書

(第七十九函 118号)

右一帖書写之事、近者來下問講問出仕之用、遠者為

佛子菴之糧因之也、爰仁曲事ハ日損、云去年ト當年ト云

越常篇、土貢之事全無足、諸人之悲歎為此期、如今者

寺住之儀難統者也、從而希代者、去月廿五日初夜半時

ヨリ、當社大明神拝殿御内之物上託宣シテ曰、當國上下之

面々意樂惡候間、從去年六月廿六日武家ヲ許容、或ハ日損ト

云々、乍去慈悲万行之貴サハ可有哀愍納受ト御神託也〔託也〕、

末世乍云、何ヲ疑可申哉、此外種々之御託也、別紙仁一々注之

時刻之事、初夜半時ヨリ九ツ半時迄之御神託也、難有々々、

及当時者三百年モ御託者無之事也々、諸共也、

于時永禄三年庚申六月五日、即爾書之、

重而六月六日之夜御託也、

様躰之事、世上流布之間

色々サマノ御託也、 求法沙門善藝院

(本奥書)

れに対する興福寺僧の思いを読み取れる。

② 天文15年(1546)本奥書 ②の天文15年4月5日付の書写本奥書によると、4月4日に筒井順昭が十市方に下向し、彼らの領地を没収したという。給人は過半が他国人なので、筆者は寺門領の押領を心配している。

この時期は、大和に侵入した木沢長政の死後にあたり、筒井順昭が勢力を伸ばしつつあった。8月に十市藤勝は竹内城を攻めるが敗北し、9月に自らの城を抜けて吉野に逃れ、筒井順昭が占領している(『奈良県史11大和武士』名著出版、1993)。②は、そのような十市氏没落に至る事情の一端を示すものだろう。

③ 永禄3年(1560)本奥書 ③の永禄3年6月5日・10日付の書写本奥書では、次のように述べる。去年・当年続いて旱魃で、年貢が入らず寺住も困難な折、5月25日夜に春日社の者に託宣があった。国内の者の行ないが悪いので、永禄2年の6月26日より武家を許容し、また旱魃となった。しかし慈悲深く憐れみを垂れるだろうとの神

託だった。続けて6月6日夜にも、様々な神託があった。

この時期、三好長慶の配下にあった松永久秀は、永禄2年8月に大和に侵入し、筒井順慶や十市遠勝(藤勝を改名)らと戦ってこれを破っている。永禄2年には信貴山城を修築し、永禄3年頃から、奈良の北側、眉間寺の地に壮麗な多聞城の建設を開始し、大和国の支配者となる(『奈良県史11大和武士』前掲等)。③からは、旱魃や松永の大和侵入に対し、興福寺側が不安な状態でいた様子を窺い知ることができるだろう。

おわりに 戦国時代、大和の諸勢力は合従連衡を繰り返し、他国勢力も盛んに侵入する。その過程で興福寺権力は衰えていくが、①②③はその節目節目を、興福寺僧の立場から書き留めた史料と評価できる。また、旱魃・疫病等の天災が、社会・政治に大きな影響を与えていた様相も読み取れて興味深い。

(吉川 聰)

本稿を成すにあたっては、綾村宏・大河内隆之・高橋大樹・萩原大輔・水谷友紀・山田徹の各氏のご教示を得た。

〔別筆〕
〔延宝六年八月日〕

カンボディア・ 西トップ寺院の調査 —第9次—

1 はじめに

奈良文化財研究所はこれまで継続的にカンボディア・アンコール遺跡群のなかの西トップ寺院 (Western Prasat Top)において、現地機関APSARAと共同で調査研究を続けてきた。西トップ寺院は高さ8mほどの中央祠堂を中心とした3塔形式の比較的小規模な石造寺院であるが、近年さまざまな環境要因によって遺跡の崩落が進行している。なかでも2008年5月には中央祠堂の屋根に取り付いていた樹木の根が周囲の石材と共に崩落し、破風が欠損する結果となった。文化遺産保護という観点からも、今後の調査は遺跡の将来的な保全・管理に資する内容に重点を置くことが内外から求められている。

おりしもクレーンメーカーの(株)タダノ(高松市)が西トップ寺院の修復事業のために機材(ラフテレンクレーン・高所作業車・カーゴクレーン各1台)を提供して下さることとなり、同年6月11日には現地で贈呈式が執り行われた(図17)。修復事業にはイースター島のモアイ(人面石)修復や高松塚古墳石室解体に携わった(株)飛鳥建設(奈良市)の左野勝司氏の協力も得られることとなった。これから奈文研による調査研究も、今後の修復事業を見据えた形で進めることとなるだろう。

本年度は当初、8月と12月に二回の発掘調査を実施する予定であったが、12月にはタイにおける騒擾のため研究員2名がカンボディアに入国できず、発掘調査を実施できなかった。そのため翌2月に、これまでの



図17 (株)タダノによる提供資材の贈呈式

出土遺物の調査および散乱石材の現地調査が実施された。

(杉山 洋・石村 智)

2 第9次調査

今回の調査は中央祠堂と南塔の関係を確認し、その基礎の構造を解明することを主眼とした。南塔の東辺に沿って東西3m、南北9mの調査区を設置した(Hトレーニチ)。第8次調査のGトレーニチとは東西中心軸に対し線対称の位置にある。一部は東側へ拡張している(図18)。調査期間は2008年8月4日~8日。

3層の主要な層位を確認した。第1層(深さ0~10cm)は表土である。第2層(10~60cm)は灰黄褐色~黒褐色のシルトで、ラテライトの碎片を若干含む。13世紀後半~14世紀頃と考えられる中国製陶磁器をはじめとする土器を含む。中央祠堂および南塔の地覆石の据付掘方はこの層の上面から掘り込まれている。後述するレンガ敷き構造はこの層に含まれる。第3層(60~70cm以深)はにぶい黄褐色の粘土で、比較的よく締まり、土器を若干含むものの、その数は少ない。今回の発掘では地山まで到達していない。

第2層の上面で中央祠堂と南塔の地覆石の据付掘方を検出したが、南塔の東面階段には地覆石の据付掘方が検出されず、地覆石が第2層の上面に直接置かれた状況が確認された。一方で、東面階段の地覆石は南塔本体との取り付き部において内部(西側)に入り込んでいた。このことから、階段は後世に付け加えられたのではなく、南塔本体と一緒に構築されたことは明らかである。こうした状況から、もともと南塔は階段がないプランで設計されたが、工事途中で設計変更され

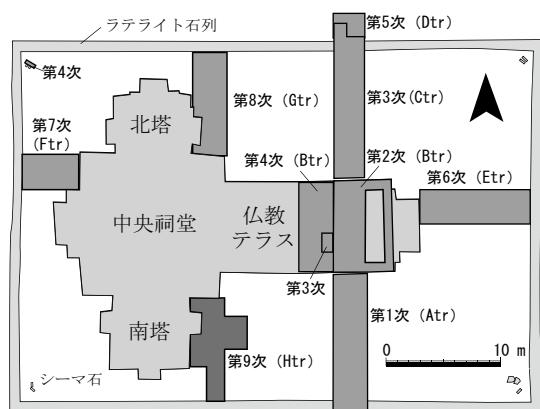


図18 西トップ寺院のトレーニチ配置図 1:600

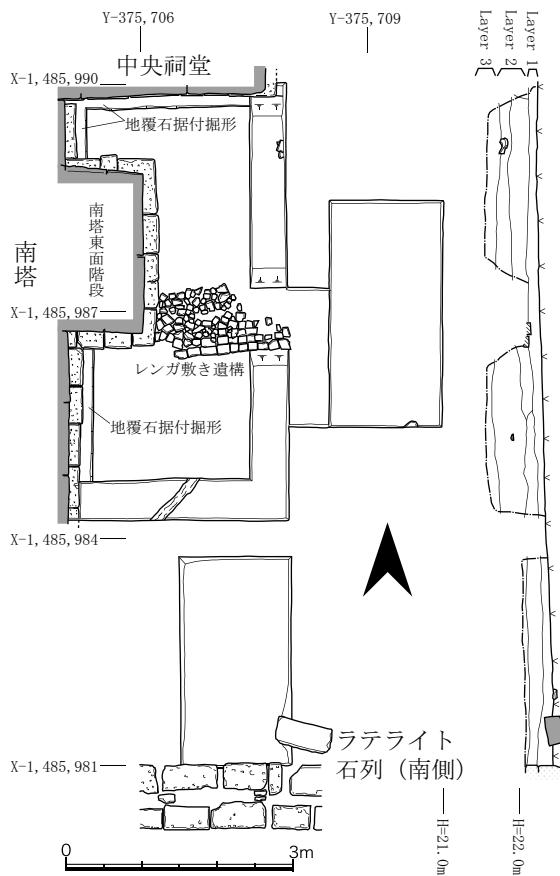


図19 第9次調査遺構平面図・東壁断面図 1:100

たことが想定される。一方、第8次調査ではちょうど対称の位置にある北塔の東面階段について調査したが、そこには地覆石が無く、明らかに後世に付け足された様相を示していた。また階段の建築的構造にも両者の間で差異がある。こうしたことから、両者の階段が取り付けられた様相は異なり、それは北塔・南塔の建築時期の違いを反映している可能性がある。

また中央祠堂と南塔の地覆石の構築状況を検討すると、明らかに南塔が後から拡張されたことが確認された。これはこれまでに想定した建造物の構築順序と矛盾しない。

南塔の東面階段の前面には、南北約100cm、東西約180cmの範囲でレンガ敷きの遺構が確認された。東側の拡張区はこの分布範囲を確認するためのものだったが、分布はそこまで及んでいなかった。レンガは第2層の上面に一段分敷かれていた。この遺構の性格は不明であるが、レンガは西トップ寺院本体では使用されていない建材である。第6次調査(Eトレンチ)で検出され

た下層遺構との関連も示唆される。

今回の調査においても、掘込地業や砂地業といった基礎地業は確認されず、中央祠堂・南塔ともども、比較的軟弱な整地土の上に直接構築されていることが確認された。

(豊島直博・石村)

3 散乱石材の調査

西トップ寺院の遺跡の周辺、とくにラテライト石列の外側の北・西・南辺には多くの石材が列状に並べられており、石材には彫刻が施されたものが多い。これは1920年代にフランスのEFEOが西トップ寺院のクリアランス発掘と部分的修復をおこなった際、転落石材を片付けたものと謂われている。これら石材についてもこれまで順次調査し、インベントリーを作成した。

石材に施された彫刻のモチーフで多いのは仏陀像で、結跏趺坐し触地印を結ぶものが主体で、破風の三角小間(tympan)に配される。仏陀が単体で配されるものと、仏陀の両脇にひざまずく供養者像が拝されるものがあり、破風の大きさに応じて配置が異なる。こうした仏陀の表現は上座部仏教のものであり、ヒンドゥー教および大乗佛教の寺院が多いアンコール遺跡群の中では非常に珍しいものである。

こうした仏陀像のモチーフは、アンコール王朝の衰退とともにタイから上座部仏教が浸透してきた14世紀以降の状況を示すものと考えられる。そしてこのモチーフは、表現の差こそあれ、中央塔および南北両塔のいずれの破風にも認められる。建築学的・考古学的に見るとこれらの建物の建立には時期差があるが、彫像のモチーフには共通性が認められることから、いずれも上座部仏教の寺院建物として機能していたと考えられる。もっとも、後世における改修の結果である可能性も否定できない。

いずれにせよ、西トップ寺院はアンコール遺跡群において数少ない上座部仏教寺院であり、おそらく石造仏教寺院ではアンコール王朝の最後期に建立(もしくはヒンドゥー教寺院から改築)されたものである。本遺跡は、アンコール期からポスト・アンコール期への社会変化を探る上で非常に重要な位置づけがなされるものである。

(石村・佐藤由似/奈良文化財研究所カンボジアプロジェクト・杉山)

西トップ寺院の建築調査

—2008年度の成果—

調査作業の経緯 建造物研究室では2006年度より西プラサート・トップ寺院（以下西トップ寺院）の建築的調査を継続しておこなっている。調査では、修復をおこなう場合の基本資料となりうる図面の作成、建物の特徴と歴史的変遷の解明、建築当初の復元検討をめざす。これまで、2007年1月に予備的調査、2008年1月には基壇下部の実測調査を実施している。

今年度の調査は2008年8月におこない、実測調査による基本図の作成と、観察による基本データの収集を主目的とした。実測調査は、外周ラテライト列の平面図の作成と、『紀要2004』掲載3D図面を下図とした立面図の修正および中央祠堂上成基壇・南北塔の石材の寸法実測をおこなった。中央祠堂の補強が実施されていなかったため、中央祠堂の実測調査は次年度におこなうこととした。この他、類例調査として、バンテアイ・スレイ、バンテアイ・サムレ、東プラサート・トップ寺院、以上の観察調査をおこなった（図20）。

破損状況 2008年5月、大雨により中央祠堂東面の伐採木が転落し、同時に約40石が転落した。2003年前後に伐採した木が枯死し、支持力を失った結果、転落したものとみられる。転落部位は、東正面の妻を形成する石で、全体のバランスには影響は少ないと考えられる。ただし、東面突出部屋根を形成する3石が片持ちでバランスを保つ状況で、崩落の危険が残っていた。

調査時に確認した破損状況は以下のとおりである。東面上部に食い込んでいた木の根が残存し、石に絡みなが

らも目地を押し開いており、変形の一因をなす。特に東面から南面東半部でその傾向がみられる。南面リンテル（装飾楣石）東半部が、開口部楣石上を滑り出し、転落寸前である。南面リンテルは西トップ寺院で唯一転落せず遺存しているもので、転落・破損の回避が特に必要である。西面主体部は北半部を早くに失っており、南半部の突出部のみ残存しているため、北へ転びつつある。それに引っ張られて、南面西半部が北西に転び、西面と南面が時計回りに回転している（図22）。

このように、中央祠堂を中心にさらなる崩壊の危険性があるため、急遽崩壊を防止するための補強を実施することとなった。2008年12月にはJSA（日本国政府アンコール遺跡救済チーム）による鋼管足場の設置と補強が実施された（図23）。変形の激しい中央祠堂上部や転落の危険性が大きかった3石も丁寧に補強され、崩壊の危険性は少なくなった。なお、補強方法に関しては、JSAの一員として参加中の早稲田大学大学院教授新谷眞人氏（建築構造学）による助言を得た。

建築的特徴 未整理の部分が多いが、観察によって得られた西トップ寺院の建築的特徴を述べる。

西トップ寺院は、一般的なクメールの宗教建築と同様に、切石を積み上げてつくる組積造であり、屋根は「迫出し構造」と呼ばれる疑似アーチを用いる。

石材は、堂塔本体と基壇の表面は灰色砂岩、基壇は内部にラテライトを使用し、中央祠堂上成基壇では内部のラテライトに化粧縁形が確認できる。中央祠堂屋根部分にはラテライトや紅色砂岩の混入がみられる。中央祠堂、南北両塔で石積みの方法が異なる。使用する石材が小さく、石積みの目地が通る点が西トップ寺院の特徴である。

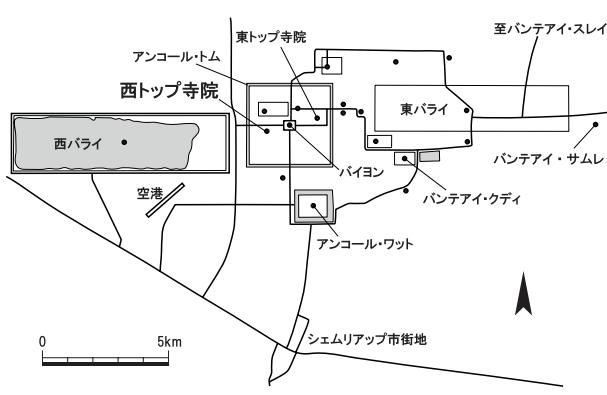


図20 西トップ寺院と他の遺跡の位置



図21 中央祠堂全景



図22 中央祠堂頂部の破損状況

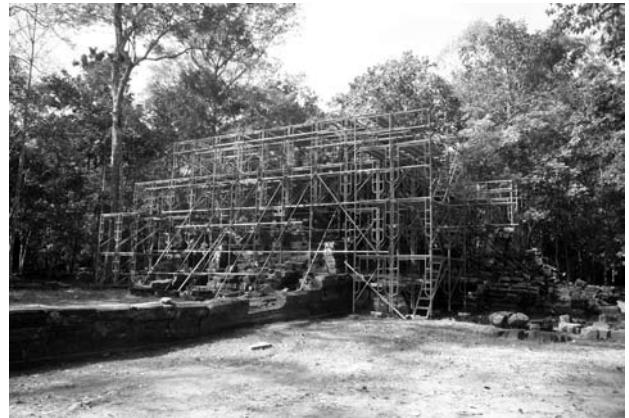


図23 鋼管による補強



図24 開口上部の比較（左：西トップ寺院、右：バンテアイ・スレイ）



中央祠堂の迫出し構造の部分が長い点も特徴としてあげられ、内部では屋根より下の部分から連続して迫出しているように観察される。

中央祠堂の平面形状は矩形の四方に前室がつく十字形である。開口部は紅色砂岩を用い、側支柱と楣材で補強し、リュンテルと装飾側柱の彫刻はバンテアイ・スレイ様式である。実際には開閉しない石造の扉、いわゆる偽扉は存在しなかったようである。クメール石造建築には内部に木製の天井が張っていたと考えられるものがあるが、西トップ寺院には該当する痕跡は見られない。

類例調査 バンテアイ・スレイは、967年に作られたヒンドゥー教寺院で、アンコール遺跡群の北東約40kmに位置する。比較的小規模な寺院ではあるが、紅色砂岩とラテライトを多用し、特に破風・楣石・柱・壁・偽扉など紅色砂岩に施された彫刻は精緻かつ洗練されている。側支柱と楣材による開口部の補強方法や仕口、収まり、リュンテルと装飾支柱に施された彫刻の様式など、開口部の仕様に西トップ寺院との類似点がみられる（図24）。

バンテアイ・サムレはアンコール・トムから東に約

10kmに位置する、12世紀初頭に建てられたヒンドゥー教寺院である。中央祠堂の平面形状は矩形の四方に前室がつく十字型で、平面形状の比較対象とした。

今後の調査 2009年度は、鋼管による補強がおこなわれ、中央祠堂の実測調査が可能となったため、引き続き基本データの収集・整理を進め、同時に、仏像台座および中央祠堂東面階段の改造過程、中央祠堂・南北両塔の石積み技法などの検討を予定している。また、周辺類例調査を進めながら、西トップ寺院の建築的特徴とその位置づけを明確にしていきたい。

今年度調査では澤田知香氏（奈良女子大学）に調査の協力を得、クメール建築に関する多大な教示を受けた。謝意を表する。

（番 光・大林 潤）

参考文献

片桐正夫『アンコール遺跡の建築学』連合出版、2001。

重枝豊『アンコール・ワットの魅力 クメール建築の味わい方』彰国社、1994。

片桐正夫・崔炳夏・三輪悟・高橋正時・石津菜央・香川正子・片町健「クメール建築の開口部とその施工技術について（1）～（7）」『日本建築学会学術講演梗概集』1999～2000。

漢魏洛陽城・ 北魏宮城2号門の発掘調査

はじめに

2008年3月、奈良文化財研究所と中国社会科学院考古研究所の間で、漢魏洛陽城の共同発掘調査に関する協定が調印された。それに基づいて、2008年度は春期（4～6月）・秋期（11月～1月）の2回にわたり、漢魏洛陽城の北魏宮城2号門遺構の発掘調査が行われた。ここでは、その概要を報告する。

1 漢魏洛陽城の位置と環境

洛陽は河南省北西部に位置する。西部高原地帯と東部平原地帯の境界にあたり、陝西省西安の閔中盆地へ通じる交通の要衝でもある。漢魏洛陽城は洛河と伊河が合流する地点の西20kmに所在し、南に洛河、北に邙山を望む。なお、隋唐洛陽城は、漢魏洛陽城の西15km、現在の洛陽市とほぼ重なって存在している。

2 漢魏洛陽城の歴史と都城構造の変遷

洛陽は西周期に東方経営の拠点として洛邑が築かれて以来の古都とされ、秦に滅ぼされるまで東周の都城であった。その後、後漢光武帝が洛陽を都に定めると、西周・東周・秦の城壁を基礎として、北魏時代まで続く

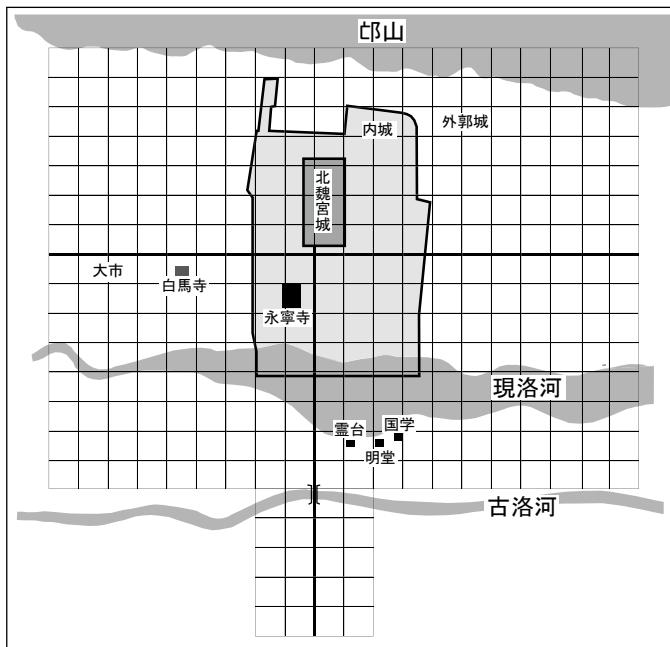


図25 北魏時代の漢魏洛陽城と条坊

内城構造が形成された。現在は南城壁が洛河の北移によって失われているものの、東壁・北壁・西壁は部分的に版築を残しており、現存長東壁3895m、北壁2820m、西壁3510mでいびつな長方形を呈する（図25）。

後漢末には略奪放火で一時荒廃するものの、魏の文帝によって再建整備され、再び都となる。魏晋期には、宮城北西隅に金墉城が置かれるとともに、後漢北宮の地に太極殿が造営された。

西晋が滅ぶと、華北は五胡十六国時代となるが、鮮卑族拓跋氏が興した北魏は、3代太武帝が華北を統一すると、6代孝文帝が洛陽を都とした。北魏時代には、魏晋期に造営された長方形の宮城が整備されるとともに、内城の外側に東西20里・南北15里、さらに南側に東西4里・南北5里の突出部を持つ碁盤目状の外郭城(条坊)が整備された(図25)。これによって条坊を完備する初めての本格的な都城構造が形成され、後の隋唐都城に引き継がれることになる。

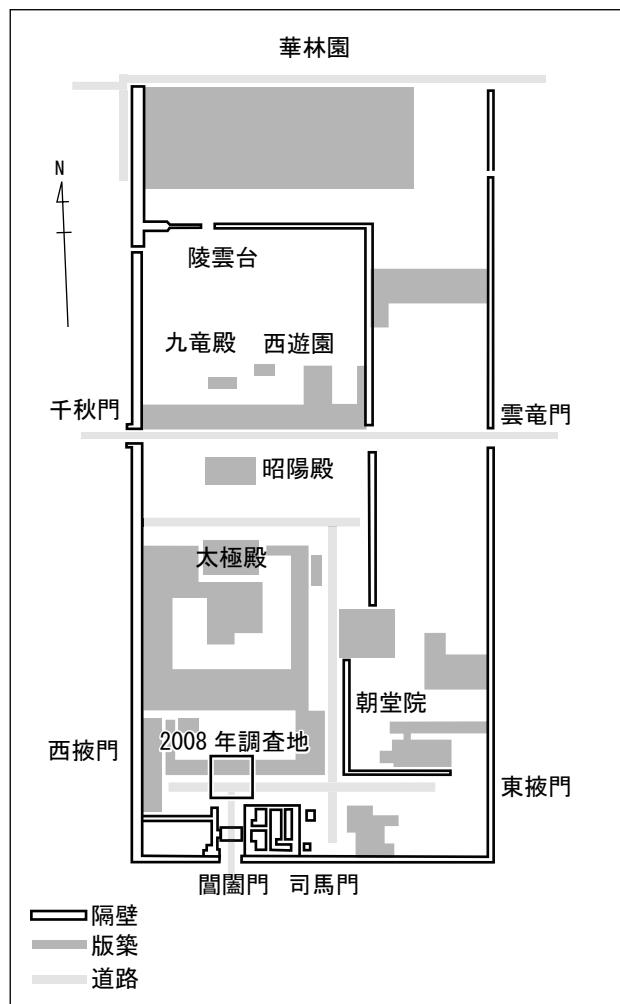


図26 北魏宮城のボーリング探査成果

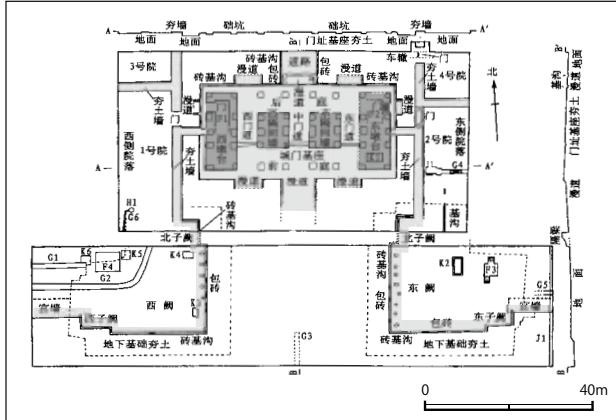


図27 閣闈門の発掘調査成果

3 北魏の宮城構造と閣闈門の発掘成果

北魏時代の宮城は既にボーリング探査によって、およその構造が判明している（図26）。南北1398m、東西660mの長方形プラン内は、東西道路によって南北に2分される。南の西院北側には、金鑾殿と呼ばれる東西100m、南北60m、版築層2mの巨大な基壇が遺存しており、北魏時代の太極殿と考えられている。太極殿中軸の南延長上には宮城の正門：閣闈門、その南には銅駕街が宮城外郭まで貫通している。

閣闈門は、1999年・2000年に社会科学院考古研究所により発掘調査されている（図27）。閣闈門の発掘では、東西44.5m、南北24.4mの門の版築基壇と前庭左右に大型の門阙が検出された。なお、基壇外装は磚積みで構築され、漆喰で塗装されていた。また、基壇上には4つの建築物基壇が確認され、大型殿堂式建造物の存在が想定されている。このように北魏期の宮城正門が全面発掘されている意義は大きいが、共同調査ではその成果を基礎とし、さらに閣闈門から太極殿までの北魏宮城中枢部の解明を目的とし、この地域の集中的な発掘を計画した。

4 2008年度の発掘調査成果

北魏宮城中枢部の解明を目指す共同調査の目的を踏まえ、2008年は閣闈門の北側部分の発掘調査を行った。この部分には、既にボーリング調査によって閣闈門とほぼ同規模の門遺構（2号門）が確認されていたため、春期に試掘で範囲確認を行った上で、秋期に2号門遺構の全掘調査を実施した。以下、概要を説明する。

春期は、門遺構の範囲確認を目的として西側にトレチを設けるとともに、南北に存在する道路遺構の確認調査を行った。その結果、2号門の基壇版築の範囲を確定



図28 2号門基壇全景（東南隅から）



図29 2号門基壇外装・北側の磚積み（東から）

し、道路遺構についてもその位置を確認した。

秋期は、その成果を踏まえて、2号門遺構の範囲を全面調査するため2400m²の調査区を設定した。その結果、東西約44.5m、南北23.0mの大型の門基壇を検出した（図28）。基壇外装は磚積みでその上から漆喰を施しているが、基壇版築の南北には北魏時代の瓦が全面的に散布している状況が明らかになった（図29）。また、基壇の南北には、西門道・中門道・東門道の3つの門道に対応するスロープ（漫道）の突出を検出し、門の東西には版築壁が接続する状況を確認した。さらに門基壇上には3つの門道を挟み込む4つの建築物基壇とそれに伴う礎石の据付掘方を検出した。これらの成果から、2号門遺構は、閣闈門とほぼ同一の構造をもつ大型殿堂式建造物である事実が判明した。

おわりに

2008度は、本格的な日中共同調査の一年目となったが、来年以降は2号門のさらに北側部分の発掘調査を進める予定である。漢魏洛陽城中枢部の様相解明が期待される。

（城倉正祥）

慶州・チョクセン遺跡の 発掘調査

—日韓発掘調査交流2008—

1 はじめに

奈良文化財研究所と大韓民国の国立慶州文化財研究所双方で2006年度に取り交わされた「日韓共同発掘調査交流協約」に基づき、2008年7月22日から9月19日までの60日間、筆者は慶州文化財研究所に滞在した。以下、滞在中に発掘調査に参加した四天王寺址、およびチョクセン遺跡の調査成果を紹介するが、なかでもチョクセン遺跡を中心に報告する。

2 四天王寺址の発掘調査

概要 四天王寺址は、文武王19年（679）に完成した統一新羅の護国寺院であり、慶州市街地から5kmほど東の低丘陵上に所在する。これまでも双塔式伽藍配置を有する寺院として知られていたが、2006年から国立慶州文化財研究所により伽藍全体の発掘調査が実施されており、金堂址・東西両木塔址・回廊址・軒廊址・灯籠などが確認されている。調査面積は12,840m²である。

東木塔址・西木塔址の発掘調査 今回、東木塔址基壇部の発掘調査に参加した。基壇東半分は残存状況が良好で、磚積化粧の状況が西木塔址以上に明瞭であった。具体的には、地覆石上に隅柱と東柱を設置し、その間に長方形博を最低3段にわたって積み重ね、各面中央に取り付く階段脇に四天王像博を配する¹⁾。一方の西半分は、基壇化粧の残存状態が良好とはいえないが、地覆石の抜取痕跡や階段部が検出された。基壇外周に西木塔址と同じく犬走り（塔区）を設ける。

西木塔址基壇構造の解明のため、トレンチによる断ち割り調査の結果、西木塔址の基壇は掘込地業を有し、掘込地業底部から基壇頂にいたるまで10回以上にわたり大型の割石と砂質土を互層に積み重ねたことが判明した。なお、基壇に版築技法は用いられていない。東木塔においても、基壇残存部で大型の割石が露出しているので、同様な築造方法が用いられた可能性がある。また、西木塔址では、基壇造成後に礎石位置を掘り下げ、底部に根石を敷設した後に、礎石および心礎を据えていた。

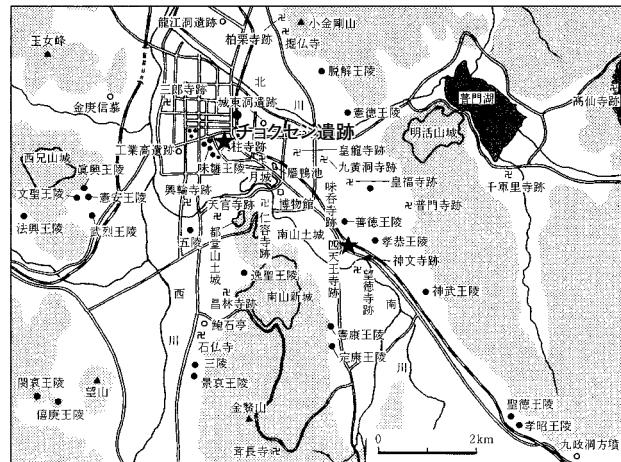


図30 チョクセン遺跡・四天王寺址の位置

(中尾 芳治ほか『古代日本と朝鮮の山城』2007より佐藤興治作図を一部改)

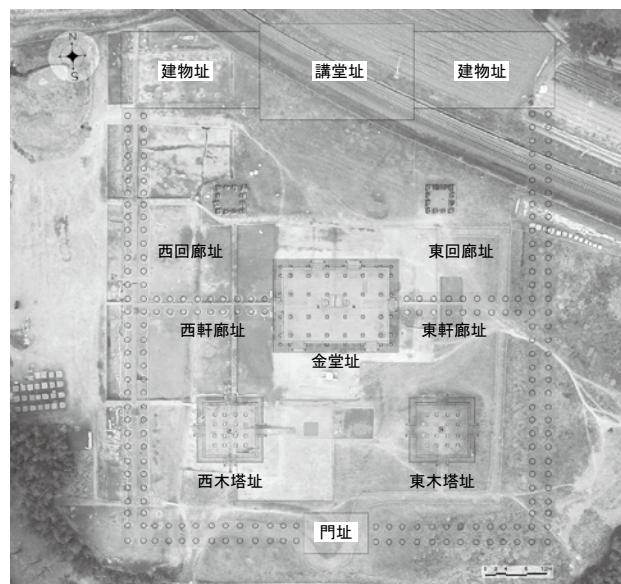


図31 四天王寺址伽藍配置

3 チョクヤン遺跡の発掘調査

概要 チョクセン遺跡は、国指定史跡である慶州市皇南洞・皇吾洞・仁旺洞の各古墳群一帯545,000m²（約165,000坪）の中央部に所在する4世紀から6世紀にかけて造営された新羅古墳群である。面積は384,000m²、2007年3月20日から発掘調査が開始された。これまでチョクセン遺跡は、すでに史跡整備された地点から外れていたため、間歇的に遺跡の破壊が進行し、その都度緊急調査が実施されてきたが、今回は一帯の史跡整備にともなう本格的な学術調査として、遺跡全域を5次25年にわたって発掘調査する計画である。今回の大規模な発掘調査により、新羅古墳群の本格的な構造的解明が期待される。



図32 チョクセン遺跡B1・2・3号の全景

B地区の新羅古墳 2007年～2008年調査地点は大陵苑の東側に隣接し、A・B・C・Dの4地区に分かれる。各調査区では積石木槨墓・石槨墓・甕棺墓が多数確認されている。各種墳墓の構成をみると、大型の墳丘を有し、単葬の積石木槨墓の近隣に、積石木槨墓が群集して一つの墳丘をなす墳丘径10m強の古墳が造営され、さらに石槨墓や甕棺墓が周囲に点在する。

具体的にみると、B地区では中心的な古墳である53号墳、それより墳丘規模がやや小規模の甲塚・乙塚からなる54号墳という2基の積石木槨墓を中心に古墳が展開し、これまでに積石木槨墓48基、石槨墓3基、甕棺墓9基が確認されている²⁾。なお、54号墳は1934年5月に有光教一氏によって発掘調査が実施されている³⁾。

前述の通り、54号墳の西に位置するB2号は、B1号・B2号・B3号・B6号と呼ばれる複数の積石木槨墓が近接して築かれたものの1基であり、これら積石木槨墓群の周囲を護石で囲い、ひとつの墳丘とする。こうした墓制は、三国時代の竪穴系埋葬施設にしばしば見受けられる。同一墳丘内で比較すると、B1号が副葬品の質量ともに最も豊富であり、B2号ではB1号を簡略化したといえる様相を示し、具体的には、主槨では三葉環頭大刀、環頭大刀、金銅製耳環、陶質土器など、副槨では陶質土器や馬具類などが出土している。ちなみにB1号では、これ以外に金製耳飾、首飾、銀製帶金具などが含まれ、材質面や種類の豊富さからみてワンランク上の副葬品組成を示しているといえる。

44号墳 本墳については、墳丘の一部が残存しているため、墳丘部を確認するためのトレンチ調査を実施した。

墳丘中央部から西側は宅地によって墳丘が破壊されており、また崖状に切り崩された宅地隣接部には宅地造成時の石垣が構築されるなど、残存状況は決して良好ではない。表土除去後、すぐに残存する墳丘部の上面で礫が密にみとめられたが、筆者の参加期間中は、これが積石木槨墓の積石部かどうか断定するまでには至らなかった。

4 まとめ

四天王寺址は、東木塔址の基壇化粧が良好に残されており、西木塔址基壇では明確でなかった磚の積み重ね方や配列方法などの基壇化粧の詳細が判明した点、さらに掘込地業をもつことなど、西木塔址基壇の築造方法が判明したことなどが調査成果として特記される。

チョクセン遺跡は、墳丘規模が20mを超える大型の積石木槨墓、10m前後的小規模な墳丘を有する群集する積石木槨墓、さらにその周囲を石槨墓および甕棺墓がとりまく。この分布状況からみて、新羅古墳が階層性をもって築造されたことが推察される。さらに既に指摘したとおり、積石木槨墓のなかでも副葬品の質量に違いが認められ、この点からも明確な階層性の存在を容易に察することができる。このことから、新羅古墳は日本の古墳に比して厳然とした階差があったことがうかがえる。

このようにチョクセン遺跡は、階層分化を知る上で、また三国時代新羅の王権構造を理解する上でも欠かせない重要な遺跡と位置づけられる。新羅古墳群を把握するために欠かせない事例として、重要な位置を占めることが予想されるチョクセン遺跡は、発掘調査の進捗に伴い、調査成果のさらなる進展が期待される。

また日韓双方が、発掘調査交流を通じて継続的に発掘調査における情報や成果を共有し、密に連携していくことにより、一層の研究の発展が見込まれる。（青木 敬）

注

- 1) 国立慶州文化財研究所四天王寺址発掘調査団「大韓民国慶州四天王寺址」『考古学研究』55-2、2008。
- 2) 国立慶州文化財研究所「慶州チョクセン遺跡発掘調査」諮問委員会資料、2008。
- 3) 有光教一『古蹟調査概報 慶州古墳 昭和8年度』朝鮮総督府、1934。

西安碑林博物館所蔵の石造物

はじめに 中国社会科学院考古研究所との共同発掘調査は2001年度から5ヶ年計画で実施した。調査対象は陝西省西安市に位置する唐長安城大明宮太液池遺跡である。この遺跡の発掘調査では、唐代の宮城苑池内で使用された石造物が多数出土した。すでにわかっているものだけでも、礎石、彫刻を施した基壇外装、欄板と親柱、燈籠、獅子や象などの彫刻がある。ほとんどは破片で、全体像がわからないものが多い。

これらの石造物を考察する上で、類似品の調査をおこなう計画を立てた。西安市内にある陝西省碑林博物館にはほぼ完形の欄板と燈籠が所蔵されている。いずれも収集品で出土状況は明確ではないが、太液池遺跡出土の石造物を研究するうえで重要な比較資料となる。当研究所では西安碑林博物館の協力を得て欄板と燈籠の調査を計画し、2007年3月19日に実施した。写真撮影を牛嶋茂（写真室）、燈籠の調査を箱崎和久・金井健（都城発掘調査部遺構研究室）、欄板の調査を今井晃樹（都城発掘調査部考古第3研究室）、写真撮影補助を南部裕樹（立命館大学講師）がおこなった。

欄板 この石造物は1955年に西安市東郊外にある唐長安城興慶宮遺跡から出土したとあるが、詳細な報告はな

い（『陝西古代石刻芸術』三秦出版社、1995、99頁）。

中国建築における欄干は欄板と親柱からなる。今回調査した欄板は通称青石とよばれる石灰岩の1枚の板石を彫刻して製作している。全体に灰白色を呈するが、水ミガキで仕上げた面は青灰色である。架木そのものは失われ架木を支える3本の束も一部欠けているが、下半の彫刻部分とその周囲の枠はほぼ損傷なく残っている（図33）。

各部の寸法は最大値を示す。長さ127.3cm（両脇のはぞは含めない）、底面から彫刻部上枠までの高さ51.5cm、彫刻部下枠の高さ15.0cm、厚み18.0cm、彫刻部のみの高さ28.2cm、幅98.3cm、彫刻部上枠の高さ8.3cm、厚み18.0cm、彫刻部両脇枠の両脇部の幅15.0、厚み12.5cmをはかる。

中央の彫刻部には2頭の有翼馬が配され、その周囲に雲気文をあしらった透彫りになっている。彫刻部を囲む枠はすべて水ミガキされ平滑で、植物文の線刻画で満たされている。彫刻部上枠の上面にも線刻がある。上枠上には雲気文の束が3本あり、これらが架木を支えていた。この欄板には表裏があり、上述した彫刻とは別の面は異なった図柄が彫刻されており、粗い仕上げになっている。有翼馬の面が表面になるだろう。欄板底面は平坦で鑿痕がのこり仕口はみられない。両側面は全体に凹面となり鑿痕がのこる。側面下端にはほぞが彫り出されている。欄板側面のほぞは親柱のほぞ穴にはめ込み連結される構



図33 欄板

造である。また、欄板側面の形状から親柱は円柱状であったと推測される。底面には仕口が見られないで、欄板は建物基壇の葛石か地覆石に直接据えられたと考える。しかし、これでは安定しないので親柱の底面にはぞかほぞ穴があり全体で固定されていたと推測する。

太液池出土の欄板とは透彫りの彫刻図案がことなるが、石材や寸法は非常に近い。太液池出土品の長さは126.7cm、架木までの高さは66.7cmある（『紀要2006』）。これを興慶宮出土品と比較すると、長さは8mm差でほぼ同寸法であるといえよう。欄干の長さは当時の4尺で設計されていると考える。出土地点や太液池出土品との寸法の類似からも唐代の作といえよう。

燈籠 1959年に陝西省乾県西湖村石牛寺から博物館に移管されたものである（『陝西古代石刻芸術』三秦出版社、1995、98頁）。

燈籠は青石製で全体の高さは193cmをはかる。8つの部位から構成されており、上から順に請花、笠、火袋、蓮華座、円形座、中台、竿、台座となる（図34）。

請花は平面方形で四辺には雲文状の浮彫りが計8つ配される。下部は断面方形の柱状で笠の頂部にある穴に差し込まれている。上面には突出部があり、その中央にはぞ穴があることから、本来は宝珠の類が載せられていたと考えられる。笠は宝形造りで瓦屋根にする。軒先には蓮華文の瓦当を表現し、隅木の先端には龍頭が飾られる。隅木下面の龍頭よりやや後方には小穴があり、風鐸がさげられていたのだろう。軒（笠の底面）には格子文と蓮華文が一面に線刻される。傘の底面中央には火袋をはめる仕口がある。火袋は方形で各面に正方形の穴をあける。蓮華座の上面には火袋をはめる方形の仕口を作り出しているが、水ミガキされておらず加工痕がのこる粗い仕上がりである。円形座は6つの突出部があり、その先端にはハート形を逆さにした文様と小さな珠文を配した円形文が交互に飾られる。円形座をはめる仕口は火袋にも中台にもみられない。中台は平面八角形で角の稜線上端に龍頭をかざる。側面はすべて線刻文で満たされている。竿には4頭の龍が絡み合う。龍頭は正しく4方向に配されそれぞれ正面からやや下を向き、口からは雲状のものを吐き出している。右前足で中台を支え左前足で後足の付け根を押さえている。龍頭の上部と後足の間の空間には雲文が飾られる。台座は正方形の台上に8つの山

の浮彫を配している。そのうちの一つには座仏風の彫刻がある。この彫刻のある面が燈籠全体の正面であろうか。

中台や竿に飾られた龍の頭部、手足や鱗の表現が太液池出土の欄板の龍と類似しており、唐代の作と考えてよいとおもう。竿に龍を表現する例は中国においても少なく、大きさや作りの良さからも、かなり格の高い燈籠であると考える。

おわりに 太液池出土の石造物は破片が多く、全体像の不明なものが多いため、発掘調査を経た出土品であり、時代が唐代であることは間違いない。これらの資料は唐代石造物の基本資料となる。一方、中国各地の博物館には採集あるいは寄託された石造物が散見する。これらは完形のものが多いが、その時代については全体の雰囲気から判断されることがおおい。破片の出土品と完形の遊離資料を比較することで、唐代の石造物の特徴を浮かび上がらせていくことが今後の課題となる。

（今井晃樹）



図34 燈籠

平城宮土器大別の検討（2）

—前半期SD3035 出土土器を中心に—

1 はじめに

平城宮跡出土土器の研究についてはその大別を含め検討の段階にあることを指摘すると共に、最初の作業として東院SD8600出土土器をとりあげ分析をおこなった（『紀要2008』）。検討に際しては個々の土器群についての具体的な実態把握と類例の蓄積が急務と考え、宮内出土土器について逐次作業を進めている。今回は1965年と1993年に調査され、具体的資料提示のないままに平城Ⅱの標式資料と位置づけられた溝SD3035出土土器をとりあげる。

2 溝SD3035出土土器の実態

遺構と層序 平城宮の東張出し部の北半西寄りには、宮内省被官の一つである造酒司が置かれたことが明らかになっている（『平城宮木簡二 解説』1975）。SD3035は造酒司の井戸の一つSE3046から南への排水溝で幅は0.7～0.8mであるが、一部は幅広い水溜施設となってる（『年報1965』）。水溜部は南北約7.5m、東西約4.5m、深さ約0.4mの規模である。堆積層は上から順に黒色砂、暗褐色砂、有機質を多く含む黒色土、灰褐色砂の4層となる。土器は各層から出土しているが、特に下層の厚さ0.2m前後の灰褐色砂層からは質・量ともに良好な状態で出土し、今回の検討対象とした。なお、第3層からは神亀元年、第4層からは靈亀2・3年（716・717）、養老2年（718）の紀年木簡が出土し、おおよその年代が推定できる。

出土土器 土師器と須恵器がある。焼き物の種類や器種を問わず完形もしくは大片に復元できることから、土器の大半は一括投棄された可能性が高い。

口縁部を中心とした出土点数は200点以上となる。出土量の70%以上を土師器が占め、器種別では食器類が80%以上となり、従来から指摘してきた宮内出土土器の様相とほぼ一致する。土師器の主要食器である杯A・B・C、皿Aの出土点数は各々9・6・65・8点となり、杯Cの出土量が多い反面、杯BI、高杯AI、鉢、盤、壺Aなどの器種を欠いている。須恵器は杯A15点、杯B6点、甕10点があり、なかでも杯Aでは口縁部と底部の境界の不明瞭な丸底状の杯Aや播磨、和泉、尾張、美濃など各地で生産された大小の甕類の出土比率が高い。造酒司で

使用された土器群の特徴として醸造・貯蔵用の須恵器甕に加え、土師器杯Cや須恵器丸底杯Aのように液体用器種の出土量が多いことを指摘できる。

土師器のうち杯A・Cの特徴をまとめると以下のように要約できる。

法 量 杯AではSD8600堆積層出土土器に見られた口径13cm未満の杯AⅢではなく、口径15cm前後、17cm前後、18cm以上の3種となる可能性がある（表2）。杯Cも同様に口径13cm未満のCⅢではなく、口径13～14cmと口径15.8～20cmのグループがあり、なかでも口径17cm前後のものが出土量の主体となる^{注)}。

調整手法 杯A・Cともに暗文土器と無暗文土器の二者がある。暗文土器は、杯A・Cともに底部にヘラケズリ、口縁部にミガキ調整を加えるb1手法が主体となるが、無暗文の杯Cの調整は基本的にa0手法である。杯Aの口縁部内面の暗文構成には、①二段放射暗文、②一段放射+連弧暗文、③一段放射暗文の3種があり、暗文構成①は1点のみで主体となるのは暗文構成②である。杯Cは②と③がほぼ等量あり、杯A・CともSD8600例と同様に単一の暗文構成で統一されるものではない。

群 別 細部の形態、暗文を含めた調整手法、胎土、色調などの点において共通する特徴があり、いくつかのグループとして把握できる。その場合、甕を含め比較的多くの器種を含むグループと限定された器種のグループがある。A（3・7・11）・B（9・10）群は従来のI・II群に近いものである。C群（1・5）は褐色を呈し、胎土に白色粒子や雲母を多く含むもので、丁寧なヘラケズリを特徴とする。D群（4・8）は口縁内端部が小さく丸く肥厚し、その直下が沈線状になるもので、内底面は細かい単位の多重螺旋暗文となる。E群（2・6）は無暗文土器で口縁端部内面が内湾するものである。F群（12）はa0手法で調整し、胎土に大きな粒子の砂粒を含むもので、砂粒は器表面に現れる。このほかに、外面に丁寧なヘラミガキを施す杯Eのグループや口縁部下半から底部にかけて全面にヘラケズリを施す鉢Hのグループがある。

3 平城Iの検討

SD3035出土土器の実態が明らかになったことによって、先に分析を行ったSD8600出土土器との比較検討が可能となった。先述したようにSD3035出土の杯A・Cの

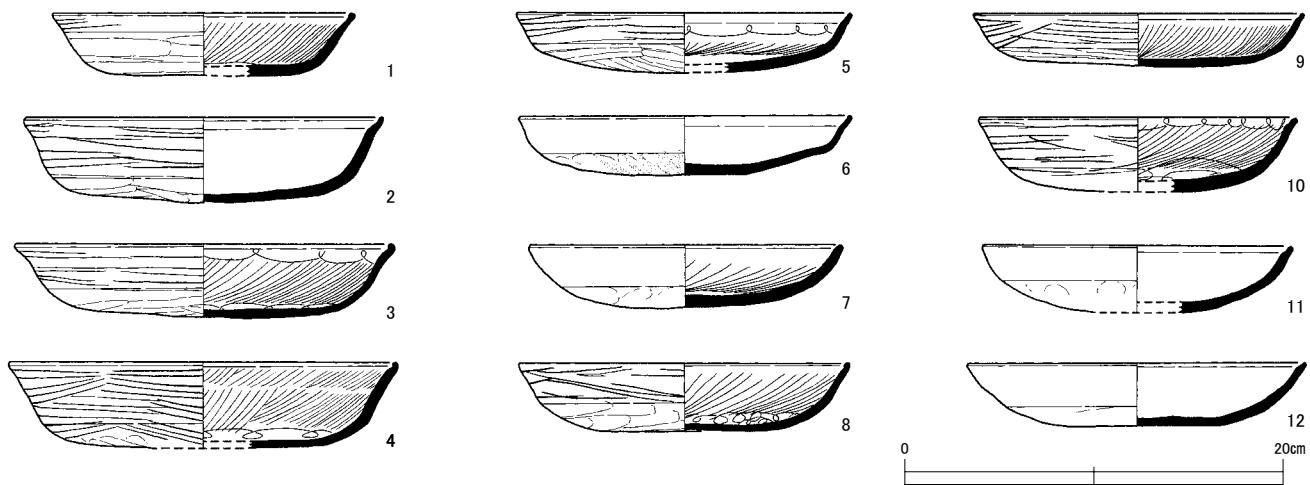


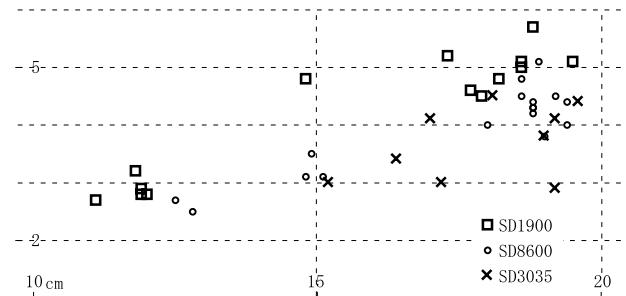
図35 SD3035下層出土土器 (1~4: 杯A、5~12: 杯C) 1:4

法量分化はSD8600とは明らかに異なり、新たな基準のもとに行われたことが予測される。暗文構成も杯Aでは①・②併行から②主体、杯Cでは②主体から②・③併行へと変化する。一方、SD8600出土土器と先行する朱雀門下層SD1900出土土器（『平城宮報告IX』）との比較では、土師器の杯類は杯A 3種、杯B 2種、杯C 3種で構成されることは従来の平城Iと同じであるが、SD8600では器高は低下し、口径は拡大する傾向が認められる（表2）。また、土師器杯AI、杯CIに一段斜放射+連弧暗文のように新たな暗文構成が出現することはすでに指摘した（『紀要2008』）。さらに、杯Aの器種分化は、異なる種類の暗文構成をもつ土器群によって成立しているのである。

SD8600出土土器と同様の土器群は、平城宮では第一次大極殿院西方の溝SD12965下層（『1977平城概報』）、京では長屋王邸の溝SD4750、井戸SE4336・4770（『平城京左京三条二坊（長屋王邸）報告』）、薬師寺井戸SE037（『薬師寺発掘調査報告』）などからも出土しており特異なものではなく、むしろ造営期を含めた平城京遷都直後の一般的な土器様相と考えられる。「平城宮土器」の大別をはじめて提示した『平城宮報告VII』やその後一部について修正と資料の追加を行った『平城宮報告XIII』では、いずれも平城Iを飛鳥Vの概念で捉えている。先述したようにSD8600出土土器と同様の内容をもつ土器群の実態は従来の平城I（飛鳥V）の範疇に収まるものではなく、新たな様式、すなわち、藤原宮の土器様式（飛鳥V）を継承しながらも新たな展開を始めた土器群として評価でき、むしろこのような土器群を平城Iとして規定すべきであろう。

時期については、平城宮の土器変遷のなかで位置づけるべきであるが、SD8600やSD4750出土の最新紀年木簡は和銅8年、靈亀2年であり、その他の遺構からは養老4年紀年木簡を最新としている。一方、SD3035出土の

表2 土師器杯A法量分布



紀年木簡は靈亀2年から養老2年である。土器様式の変遷には靈亀年間に一つの画期があり、養老年間中頃に新たな様式への移行が終了したと考えることも可能である。

4 おわりに

造酒司で使用されたSD3035下層出土の土師器は、SD8600出土土器に続く土器群であり、生産単位や生産地を反映したと考えられる8群以上のグループで構成されている。単に造酒司という製造部門に限られた現象である可能性もあるが、いずれにしても平城宮へ供給された土師器の生産地を解明するうえでの基準資料となる。

また、SD8600出土土器を含む平城宮遷都当初の土器群を新たに平城Iと規定した。元来、平城京の各遺構から出土する土器は同時期であっても、均一な様相を示す例は少なく、しかも土器変遷は斬新的である。型式・様式設定の明確な基準を確定するうえでも、今後更なる類例の増加が待たれる。（川越俊一／客員研究員、西口壽生）

注

法量のばらつきは同一器種でも多少認められるが、特に、杯C・椀Aの法量分化は境界が不明瞭でばらつきが大きい傾向にある。基本的な要因としては、「写し」の見本となった重鏡などの金属容器に由来することや表2のSD3035杯A例が示すように各々の土器生産地での法量にたいする認識差などが想定される。

中国細石刃石器群の初步的分析

はじめに 中国細石刃文化については、最近資料の蓄積が著しく、研究の深化が進んでいる。筆者も、そうした研究状況に対応すべく、まずは、石器群の集成をおこなった。そして、初步的な分析として、実見の結果、調査概報等の記述、実測図、写真をもとに、各石器群の細石核を①角錐・円錐・柱状、②船底形、③楔形に分類し、楔形細石核の割合を求めた（表3）。

中国東北部 中国東北部では、細石核の中で楔形のものの占める割合が高く、平均で71%にのぼる。特に、北部の黒龍江流域と西部のホロンバイル高原では、その割合が高い一方、中西部の嫩江流域では低い。また、東部の長白山西麓は、両者の間の値を示している。

華北地域 この地域全体での楔形細石核の割合の平均は30%である。桑乾河流域および、その西隣の黄河大屈曲部で、割合が高いのを除くと、おしなべて楔形細石核の割合が著しく低い。また、近年明らかになってきた、約1.8万年前を前後する年代測定値をもつ出現期の細石刃石器群では、楔形細石核は基本的にはみられない。桑乾河流域・黄河大屈曲部では、約1.5万年前とされる油房遺跡で73%と楔形細石核の比率が高くなったあと、約1.3万年前の馬鞍山遺跡以降、90%以上の高率で楔形細石核が他のものを凌駕していく。この馬鞍山以降のものは、いずれも、いくつかの細石刃技法を組み合わせて細石刃を生産する虎頭梁細石刃技術複合によっている。このほ

かの地域では、薛閔、柿子灘S1中区L3、大崗、趙王村、孟家莊など、約1.4~1.0万年前という年代をもつものになると、孟家莊を除き、割合こそ低いものの、楔形細石核を保持する。これらの石器群は、上記の桑乾河流域・黄河大屈曲部の虎頭梁細石刃技術複合をもつ石器群と両面調整小型槍先形尖頭器や石斧などのツールを共有し、年代もほぼ並行している。このため、両者は関連性をもつと想定される。また、沂河・沭河流域の石器群など、薛閔等の石器群と類似するものは、それらと年代的に並行関係にあると考えられる。

楔形細石核からみた中国北部の細石刃文化 約1.8万年前に出現する中国細石刃文化。筆者は、その出現過程に北方系細石刃文化の影響を見出している（『第10回 北アジア調査研究報告会要旨集』2009、37~40頁）。

一方、1.3万年以降、桑乾河流域・黄河大屈曲部で盛行する虎頭梁細石刃技術複合をもつ石器群については、その楔形細石核の割合の高さから考えて、南下してきた北方系細石刃文化そのものと考えられるかもしれない。今、中国東北部の細石刃石器群をみると、北部と西部の遺跡で楔形細石核が、桑乾河・黄河大屈曲部のものと同等の高さの割合で出土していることがわかる。このため、これらとの関連を探る必要がある。一方、同じ、東北部でも嫩江流域のものとは、楔形細石核の割合が大きく異なることから、直接的な関係はないと推定する。また、華北地域で、1.4万年前以降、広くみられる若干の楔形細石核をもつ石器群は、虎頭梁細石刃技術複合をもつ石器群の影響を受けて成立したものであろう。（加藤真二）

表3 中国北部・東北部の細石刃遺跡の細石核組成表

省・自治区	遺跡名	地区	細石核形状(点)			年代値 (yrsB.P.)	楔形細石核割合 (%)	参考文献
			角錐状	舟形	楔形			
黒龍江	十八站	黒龍江流域			○		100	鄧聰氏私信
	老卡	黒龍江流域	0	0	1		100	『北方文物』1996-2
						平均	100	
吉林	邵家店	長白山西麓	0	0	1		100	『北方文物』2006-1
	沙金溝	長白山西麓	0	2	0		0	『華夏考古』2008-4
	柳洞	長白山西麓	0	0	3		100	『華夏考古』2005-3
	石人溝	長白山西麓	1	0	4		80	『辺疆考古研究』6
						平均	70	
黒龍江	缸窯	嫩江流域	8	0	21		72	『北方文物』1992-3
	大興屯	嫩江流域	1	0	0	11800±150	0	『人類學學報』3-3
黒龍江	神泉	嫩江流域	5	0	17		77	『考古學研究7』
吉林	大坎子	嫩江流域	0	1	5		83	『北方文物』2001-2
吉林	大布蘇85	嫩江流域	2	0	2		50	『人類學學報』8-1
内蒙古	嘎查	嫩江流域	0	7	6		46	『考古』1983-3
						平均	55	
内蒙古	松山3	ホロンバイル高原	0	0	1		100	『考古學報』1978-3
内蒙古	松山5	ホロンバイル高原	0	0	3		100	『考古學報』1978-3
内蒙古	松山6	ホロンバイル高原	0	0	2		100	『考古學報』1978-3
内蒙古	松山7	ホロンバイル高原	0	0	1		100	『考古學報』1978-3
内蒙古	松山8	ホロンバイル高原	1	0	3		75	『考古學報』1978-3
内蒙古	松山9	ホロンバイル高原	4	0	3		43	『考古學報』1978-3
内蒙古	松山10	ホロンバイル高原	0	0	1		100	『考古學報』1978-3
内蒙古	ハイラル蛙谷	ホロンバイル高原	7	0	43		86	『内蒙古細石器文化研究』
						平均	88	
						東北部平均	78	

省・自治区	遺跡名	地区	細石核形状(点)			年代値 (yrsB.P.)	楔形細石核割合 (%)	参考文献
			角錐状	舟形	楔形			
河北	孟家泉	渤海湾北岸	1	1	0	17540±250	0	『文物春秋』1991-1
河北	爪村上層	渤海湾北岸	1	0	0		0	『文物春秋』1993-4
河北	渟泗澗	渤海湾北岸	0	19	0		0	『文物春秋』1993增刊、『人類学学報』16-1
河北	東灰山	渤海湾北岸	2	3	0		0	『考古』1989-11
						平均	0	
河北	二道梁	桑乾河流域	1	6	0	18085±235	0	『泥河湾旧石器文化』
河北	官厅	桑乾河流域	0	8	0		0	『泥河湾』
河北	油房	桑乾河流域	3	0	8	15ka	73	『人類学学報』8-1
河北	虎頭梁	桑乾河流域	0	0	290	11000±210	100	『人類学学報』25-2
河北	籍箕灘	桑乾河流域	4	0	117		97	『文物春秋』1993-2
河北	千家溝3b層	桑乾河流域	1	1	85	11100±900	98	『旧石器考古学』
河北	大底圍	桑乾河流域	0	0	6		100	『泥河湾旧石器文化』
河北	馬鞍山	桑乾河流域	10	328		13080±120	97	『旧石器考古学』
山西	王龍溝	桑乾河流域	0	0	2		100	『考古与文物』1993-4
山西	密子頭	桑乾河流域	3	7	0		0	『史前研究』1984-4
山西	尉家小堡	桑乾河流域	1	0	12		92	『人類学学報』27-3
						平均	69	
山西	羊頭山	太行山系	3	0	0		0	『文物季刊』1983-2
山西	下川1978	太行山系	161	0	34		17	『考古学報』1978-3
山西	下川1996	太行山系	50	13	12		15	『中原文物』1996-4
山西	嵐峪	太行山系	1	1	0		0	『文物季刊』1989-1
山西	大泉頭	太行山系	3	1	0		0	『華夏考古』1990-2
山西	趙王村	太行山系	6	4	1	10290±110	9	『人類学学報』14-3
山西	孟家莊	太行山系	2	4	0	11960±150	0	『人類学学報』14-3
山西	東形彰	太行山系	3	0	2		40	『史前研究』1998
山西	南密村	太行山系	1	0	1		50	『史前研究』1998
						平均	15	
山西	大堊	汾河流域	15	0	15		52	『中原文物』1990-5
山西	丁村77:01	汾河流域	2	3	1		17	『文物季刊』1994-3
山西	丁村94:01	汾河流域	1	0	0		0	『文物季刊』1995-1
						平均	23	
山東	鳳凰嶺	沂・沭河流域	9	5	0		0	『考古』1983-5
山東	黑龍潭	沂・沭河流域	4	17	0		0	『考古』1986-8
山東	宅科	沂・沭河流域	4	13	3		15	『東南文化』1990-4
山東	九頂蓮花山	沂・沭河流域	0	2	0		0	『考古』1986-11
山東	馬陵山04	沂・沭河流域	2	5	3		30	『史前研究』1987-1
山東	馬陵山08	沂・沭河流域	4	7	1		8	『史前研究』1987-1
山東	馬陵山09	沂・沭河流域	2	15	3		15	『史前研究』1987-1
山東	馬陵山19	沂・沭河流域	0	2	0		0	『史前研究』1987-1
山東	馬陵山226	沂・沭河流域	0	7	0		0	『史前研究』1987-1
江蘇	大賢莊	沂・沭河流域	6	10	0		0	『東南文化』1
江蘇	爪徵	沂・沭河流域	12	13	43		63	『東南文化』1987-2
江蘇	何山頭	沂・沭河流域	1	0	2		67	『東南文化』1
江蘇	南山	沂・沭河流域	0	0	2		100	『東南文化』1
江蘇	石碑	沂・沭河流域	1	1	6		75	『東南文化』1
江蘇	范頂子	沂・沭河流域	0	2	1		33	『東南文化』1
江蘇	將軍崖	沂・沭河流域	0	2	0		0	『人類学学報』2005増刊
						平均	25	
山西	柿子灘S14	黄河沿岸	2	0	0		0	『考古』2002-4
山西	柿子灘S12A	黄河沿岸	0	16	0	16050±160, 18180±270	0	『考古学研究』7
山西	柿子灘S12C	黄河沿岸	0	8	0	19375±60	0	『考古学研究』7
山西	柿子灘S12D	黄河沿岸	0	1	0		0	『考古学研究』7
山西	柿子灘S12E	黄河沿岸	0	1	0		0	『考古学研究』7
山西	薛闕	黄河沿岸	15	53	19	13550±150	22	『人類学学報』2-2
山西	柿子灘S1	黄河沿岸	65	64	79		38	『考古学報』1989-3
山西	柿子灘S1中区L2	黄河沿岸	1	1	0	10490±540	0	『考古』1998-6
山西	柿子灘S1中区L3	黄河沿岸	4	2	1	14340±250~12660±190	14	『考古』1998-6
陝西	王龍辿	黄河沿岸	大半	無	極少	20~15ka		『考古』2007-7
						平均	25	
河南	靈井	黄淮平原	11	0	1		8	『考古』1974-2
河南	大崗	黄淮平原	9	0	19	1.2ka ?	12	『人類学学報』15-2
						平均	10	
陝西	育紅河	閩中盆地	9	1	1		9	『大荔・蒲城旧石器』
陝西	沙苑S7	閩中盆地	9	0	5		36	『史前研究』1986-1・2
陝西	沙苑S9	閩中盆地	6	0	3		33	『史前研究』1986-1・2
陝西	沙苑S10	閩中盆地	4	0	6		60	『史前研究』1986-1・2
陝西	沙苑1955	閩中盆地	8	0	9		53	『考古学報』1957-3
						平均	38	
山西	丁家村	黄河大屈曲部	0	0	3		100	『考古』1985-7
						平均	100	
寧夏	彭陽PY03	六盤山東麓	1	0	0	18350±70	0	『人類学学報』24-4
寧夏	彭陽PY05	六盤山東麓	1	0	0		0	『人類学学報』24-4
						平均	0	
						華北平均	30	

大官大寺の縄文土器（1）

はじめに

1970年代におこなわれた大官大寺の発掘調査では、中期末～後期前葉と、後期末～晩期前葉の縄文土器も出土している。とくに1977年の第4次調査では縄文時代の包含層が確認され、西北調査区での下層の調査では縄文時代の遺構も検出されている。土器資料の一部は公表されており（『藤原概報8』）、近畿地方南部における中期末土器群の一定点となっている。近年、関西の縄文中期末の土器に関しては、研究の当初に注目されていた小地域性に再び焦点があてられるなど、研究の展開が認められる。ここでは未発表となっている縄文土器を報告することにより、研究の新たな動向に資することにしたい。

整理にあたっては以下の方針をとった。①対象は、まとまった量がある第4次調査と、少量ながら良好な例のある第1次調査出土土器とし、報告済みの土器は除く。②接合と同一個体認定は大まかにおこなう。③資料化は口縁部片と底部片を対象とする。前者では5cm以上で口

縁端部の残存しているもの、後者では底径が復原できるものに限定した。表4に土器の全量と、資料化の対象となった土器の数を示した。以下の説明では、とくに断らない限り第4次調査出土品を指す。

第4次調査の遺構出土土器

遺構の理解で不十分な点もあるが、当該期の遺構出土例の少なさに鑑みて、土坑出土品のみ報告することにする。1～4はSK315出土とみられるもの。注記内容が『概報8』の22と同じで、時期的にも2と一致する。5～7はSK321出土とみられるもの。以上は下層調査区内で地山を掘りこんだ、縄文時代の土坑である。なお本遺跡の縄文時代土坑は、帯状にのびる礫層に沿うように南北に点在している。本遺跡は飛鳥川右岸の比較的低湿な環境にあるが、こうした特徴は、本郷大田下遺跡など近年増加した列島西部の貯蔵穴の調査例と類似する点は注意しておくべきだろう。8・9、10～16、17・18も各土坑から出土したもの。これらは下層調査区の範囲外にあり、縄文時代の包含層を掘りこんだ土坑とみられ、現状では時期不明といわざるをえない。今後、他時代の遺物の出土状況などを含めて検討する必要がある。12・13

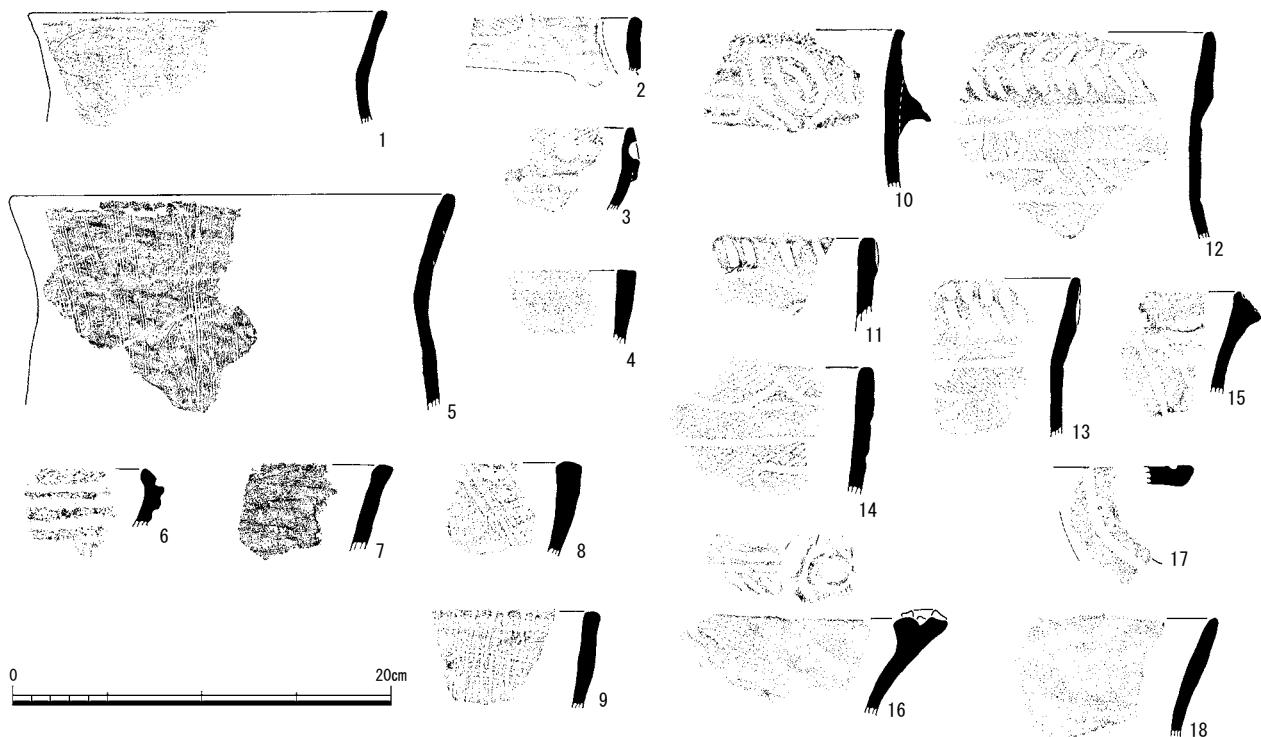


図36 土坑出土土器 1:4



図37 中期末～後期初頭の土器 1 1:4

は口縁部隆帯下に1条沈線と窓枠状のモチーフをもつ。沈線の一部をナデ消し窓枠状モチーフを描出すする手法は、口縁部隆帯のない14の口縁部モチーフに似る。中期末～中津式移行期のものとして興味ぶかい。

包含層等出土土器

ここでは中期末～後期初頭の有文土器を中心に報告する。条線文、全面繩文、無文土器等については後期～晚期の土器と併せて、改めて紹介する機会を設けたい。19～22は深鉢A1類¹⁾。資料化対象内で口縁部主文様に渦文をもつ土器は僅少で19と、口縁部主文様が円文に退化し胴部に磨消繩文をもつ北白川C式でも新しい部分に位置づけられる20のみである。第1次調査出土の23は深鉢A2類か。24～28は連弧文をもつ深鉢A4類。中期末でも古いもので、『藤原概報8』で報告された同様の特徴をもつSK320の資料は北白川C式2期に位置づけられている。これにより本遺跡は深鉢A4類の印象が強くもたれているが、資料化対象内では必ずしも多いとはいえない。25は押引沈線で文様を描出するもの。29～38は深鉢A類の範疇とみられる土器を一括しておいた。29は波状口縁に3条の押引沈線文を施すもので、26や27と同じく深鉢A4類か。38は縦長の浮文をもつ土器。39・40は口縁部に隆帯や屈曲をもたず、橢円区画文で胴部との区分をする土器で深鉢A5類にあたるとみられる。41～47は奈良県下で特徴的に認められる土器。41～44は口縁部に短沈線文を施すもので、羽状に施すものと、短く垂直に施すものがあるが、資料化対象内では双方を含めて数点程度にとどまる。45～47は口縁が肥厚する土器。48～53は沈線を伴わない帶状の繩文帯を有する、いわゆる帶繩文土器で、北白川C式の新しい部分から後期初頭に位置づけられるもの。口縁部に隆帯を有するものと無いものがある。53は面取りする口縁端部が内傾しており、鉢形の器形である可能性がある。

54は深鉢B類で、突起化した橋状把手をもつ。55もこれに含まれる可能性がある。資料化対象内の深鉢B類はこれで全てである。

56～60は深鉢C類。第1次調査出土の56は内面に凹点があり北白川C式でも古いもの。57～58は口縁部が台状の山形になるもの。こちらは北白川C式の新しい部分のもので口縁部に橢円文、波頂部下には直線的沈線のモチーフがある。60は山形の口縁になるものか。深鉢C類

表4 繩文土器の全量（報告済含）と資料化対象数

	整理箱	口縁部	底部
第1次調査	2箱	3点	1点
第4次調査	38箱	228点	93点

の量は数点にとどまっており、深鉢B類と同じく本遺跡では僅少である。61～75は幅の広い磨消繩文をもつ土器で深鉢A6類にあたる。ほとんどが中津式だろう。61は第1次調査出土。76～79は口縁部に隆帯をもちながらも、沈線や繩文のない土器。帶状文土器から繩文施文を差し引いたものと理解できるが、量は多くない。80～87は浅鉢。積極的に掲載する方針を探ったので、数多くみえるが、全体では1～2割以下にとどまるだろう。80は突起化した橋状把手をもつもの。上面觀は三角形で、口縁が外屈する器形である。胎土は非常に精良。82も精良な胎土をもつ。口縁端部を水平に置いたが、あるいは内屈する器形か。83・84は幅広の磨消繩文をもつもので、中津式だろう。これらに関しては、胎土に精良さを欠く。86・87は同一個体とみられるもの。口縁部が屈曲する器形で、口縁が波状になる可能性がある。内外面ともミガキに近い丁寧なナデ調整され、胎土も比較的精良である。88は底部片のうち、文様をもつ唯一の例である。3単位の垂下沈線の間に、蛇行垂下沈線を棒状工具で描く。

まとめ

深鉢の器種では、B・C類の量が極めて少ない。とくに奈良県下では一定の組成を占める深鉢C類の少なさが際立っている。また器種では標識遺跡である北白川追分町遺跡では明瞭でない短沈線文、口縁肥厚、帶繩文土器といった奈良県下に特徴的な土器が認められる。前2者はさほど多くはないが、帶繩文に関しては一定の組成を占めているといえる。これまで、本遺跡は北白川C式でも古い部分に位置づけられることが多かった。だが、中期末から後期初頭に限って評価すれば、深鉢A類の器種や帶繩文の存在から、北白川C式の古い部分を含みつつも新しい部分から後期初頭までの資料を多分に含んでいくとできる。

なお本報告をまとめるにあたり、石田由紀子氏に多大なる教示と協力を得た。

（加藤雅士／任期付研究員）

註

1) 泉 拓良「中期末繩文土器の分析」『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅲ』1985

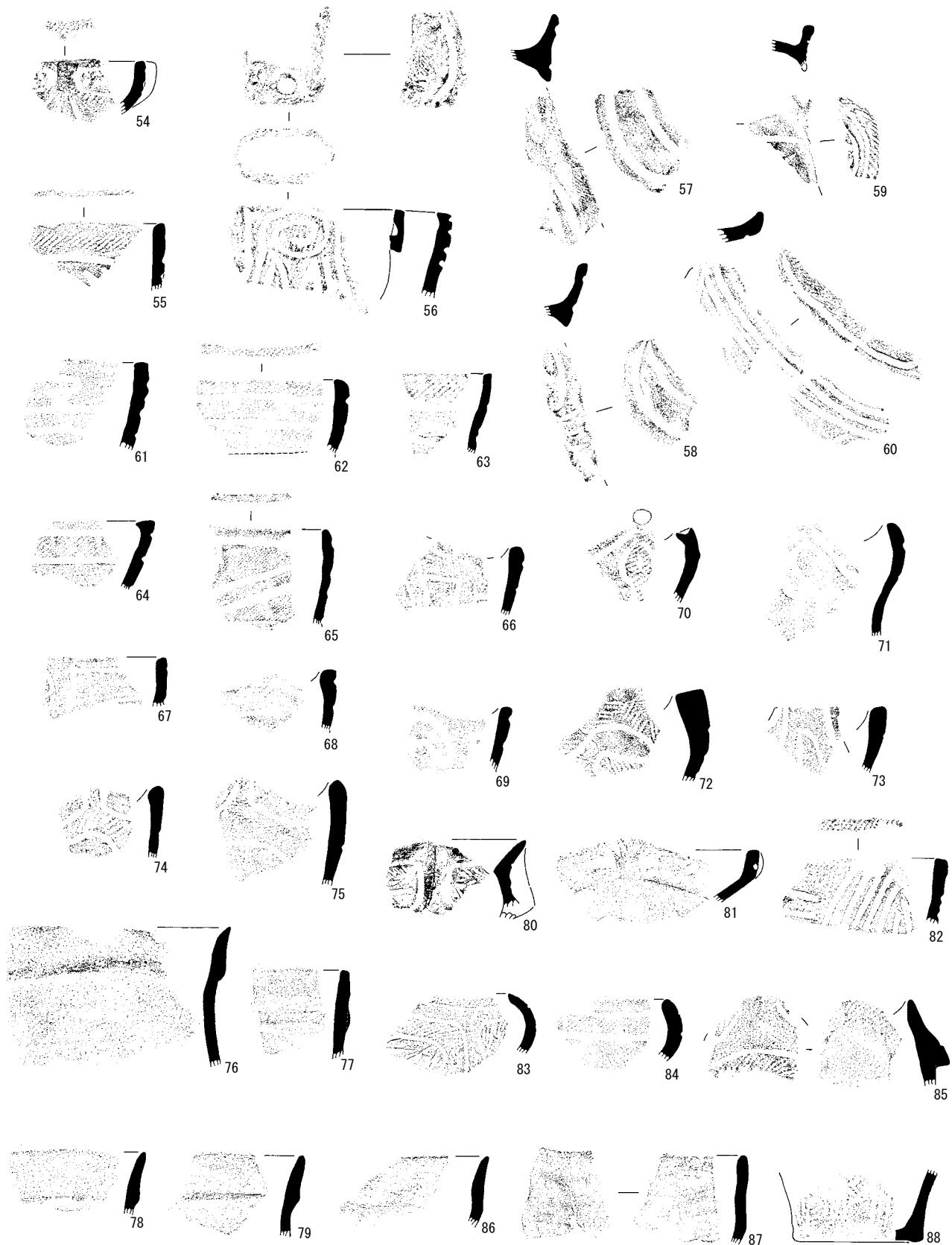


図38 中期末～後期初頭の土器2 1:4

平城宮東南隅第32次・ 32次補足調査出土 冶金関連遺物の再検討

1 はじめに

平城宮東南隅における冶金関連遺物の調査研究は、古く第32次調査まで遡る。続いて第32次補足調査があり、その後およそ20~30年の時を経て、第155次・222次・236次・273次調査で関連遺構・遺物が検出された。

顕著な工房遺構として、第32次補足調査の炉跡群、第222次調査の鋳銅工房、第236・273次調査の鉄滓廃棄土坑などがある。第222次調査では銅精製ないし精錬から青銅製品鋳造までの一連の工程が想定できる遺構や遺物が確認されたが、第32次補足調査出土遺構・遺物についてはなお、漠然と銅器生産に関連すると考えられてきた。今回、主として第32次・32次補足調査出土の冶金関連遺物を再検討することにより、いかなる業種の冶金関連工房が存在したかを追究してみたい。

2 冶金関連遺物出土遺構

第32次・32次補足調査 第32次調査は、1965年12月~1966年4月に実施され、二条大路と東一坊大路の交差点を調査した。遺構はSA3902、SA4005、SD1250、SD3410、SD3905、SD3911、SD3935、SD3956、SD4006、SD4090などが検出された。このうち、溝SD3935・SD3410・SD4090から多数の冶金関連遺物が出土した。

SD4090は、宮東面大垣東雨落溝ないし東一坊大路西側溝として南へ流れる幅6.9mの溝である。10世紀を降らない唾壺・緑釉水瓶・土師器・須恵器が出土した。他に出土遺物には瓦・木製品類・金属製品・石製品・土製品などがある。SD4090は二条大路以南のSD3935へと流入する。また、SD3410は東面大垣西雨落溝であり、南端で二条大路北側溝SD1250と合流して東折しSD4090に合流する。

第32次補足調査は1966年5月~12月に実施され、南面大垣SA4120、南面大垣北雨落ち溝SD4100、東面大垣西雨落溝SD3410、築地塀SA4150、礎石建物SB4208、炉跡などを検出した。多数の冶金関連遺物はSD4100及びSD3410から出土した。第32次補足調査で検出した

SD4100は、第155次調査で検出されたSD11640以東のそれに相当し、平城宮IV~V土器を主体として出土、木簡も天平12年(740)を最古としてそれ以降の天平勝宝・天平宝字・天平神護・神護景雲・宝亀年間の年紀木簡が出土した。また、炉跡はSA4150撤去後に設置され、奈良時代末から平安時代初めと考えられている。

冶金関連遺物出土状況 冶金関連遺物出土地点は、SD4100に集中し、SD4100とSD3410の合流点から南、SD3410とSD1250の合流点から東、SD1250とSD4090合流点周辺から南、さらにSD3935にかけて分布する。第32次補足調査区の西に接する第155次調査区では全体として冶金関連遺物の出土が少なく、SD4100からはほとんど出土しておらず、東隣調査区と顕著な差異を見せてている。こうした出土状況からみて、冶金関連遺物の多くは32次補足調査区ないしその北側の工房から投棄されたものと考えられる。

ただし、SD4090出土遺物のうちSD1250との合流点より上流でも冶金関連遺物が出土しており、SD4090・3935については、SD4090の上流から流下して来た遺物を含む可能性が残されている。

3 出土冶金関連遺物の分類・分析

冶金関連遺物概要 これらの溝から出土した冶金関連遺物には鉄塊などの鉄関連遺物、熔結銅などの銅関連遺物、鉛片などの鉛関連遺物、炉壁、坩堝などの土製品、砥石等その他の遺物がある。冶金関連遺物以外にガラス小玉・ガラス大玉、水晶、赤色顔料、壁土、鼈甲、焼骨なども出土した。

鉄関連遺物 ①鉄片類には鉄小塊、鉄小片、鉄剥片、鉄粒が、②鉄滓類には椀形鉄滓、椀形灰色鉄滓、黃色鉄滓、灰色鉄滓、灰黒色鉄滓、褐色鉄滓、椀形褐色鉄滓、小礫+褐色鉄滓、玉状鉄滓、粒状鉄滓、ガラス質鉄滓が認められる。

鍛造剥片類は採取されていないようであるが、椀形鉄滓はいずれも小型で、鍛錬鍛冶滓である。小礫を囲み込む鉄滓は、飛鳥池遺跡でも出土している。

銅関連遺物 ①銅片・銅塊類には床尻銅+白色砂粒胎炉壁、床尻銅+炉壁、円柱状銅片、銅塊、銅滴、銅粒、円板状熔結銅、不定形熔結銅、円盤状熔結銅鉄、不定形熔結銅鉄、熔結銅+銅滓、不定形熔結銅+銅滓、銅粒+銅

滓が、②銅滓類には銅滓、銅滓+熔結銅、銅滓+銅粒、銅滓（精製工程？）、銅滓（鋳造工程？）、ガラス質銅滓、銅鉢？が認められる。

床尻銅は、付着熔結土が坩堝と異なるため火床炉底に熔結した銅と考えて仮称するものである。白色砂粒胎炉壁とは細かな長石ないし石英粒を含む硬い焼結土で、坩堝とは異なるため炉壁と判断した。類例は飛鳥池遺跡でも出土している。熔結銅鉄とは熔結銅塊に僅かながら鉄が一体となって（熔着して？）おり、弱いながらも磁着するものをいう。円盤状熔結銅鉄は中世以降の銅製鍊に見られる円板状カラミに形態が類似する。銅滓の一種であろうか。これらは、銅の精製ないし精鍊に関連すると考えられる。

鉛関連遺物 ①鉛片類には鉛片、熔結鉛があり、ほかに②鉛滓あるいは鉛滓かと思われるものが認められる。

鉛片は厚さ0.4mmの鉛板の切れ端と見られる。熔結鉛は薄く広がった熔融鉛が丸まりながら固結したもので、表面に皺がよる。

鉛滓はいずれも小塊で、A) 角礫状を呈するもの、B) 板状を呈するもの、C) 葡萄状あるいは鍾乳状を呈するものがある。蛍光X線分析の結果では、銅滓などと比較



図39 鉛滓(左から板状・鍾乳状・角礫状)

して鉛が顕著に認められ、他に銅や鉄を多く含んでいる。

炉壁関連遺物 炉壁類には火床炉壁、白色砂粒胎炉壁、炉壁+銅滓+銅、白色砂粒胎炉壁+熔結銅、炉壁+熔結銅、炉壁+鉢状銅滓、白色砂粒胎炉壁+銅滓がある。

冶金関連土製品 ①坩堝類には坩堝、銅熔解坩堝、取瓶が、②羽口類には羽口、鉄鍛冶羽口、鑄銅羽口が、③鑄型類には鑄型（湯口？）、湯口（未使用）が、④その他に精製鉢形土製品が認められる。

精製鉢形土製品は佐渡金山遺跡佐渡奉行所跡出土の盤状土器に外観が類似するが、蛍光X線分析の結果では佐渡例とは異なり、銀は検出されなかった。

冶金関連石製品等 これらには砥石、焼瓦片、焼礫、焼土などがある。

4 出土遺物からみた冶金関連作業

冶金関連遺物の細分・分析からは、奈良時代末から平安時代初めに、宮東南隅において鉄鍛錬鍛冶、銅精製ないし精鍊、鑄銅、鉛調整加工に関わる作業が行われたと推定される。宮東南隅には複数業種の冶金工房が存在していたと考えられ、ほかに漆刷毛が第32次補足調査でSD4100から出土していることから、冶金と冶金以外の漆工との複合冶金工房でもあった可能性が高い。しかし非冶金業種でもガラス工は伴っていないと考えられる。

鉄鍛冶工房は東南隅でも北半部に存在する可能性が高く、南半部は鑄銅ならびに鉛調整加工関連工房が主体と考えられる。鑄銅には銅の精製ないし精鍊が伴う可能性がある。銅の精製ないし精鍊の技術は飛鳥池遺跡において認められる技術が奈良時代にも長く継承されていた痕跡が窺える。鉛関連技術についてみると、ここではガラス製造坩堝が発見されておらず、宮東南隅においてはガラス坩堝による方鉛鉱の直接熔解・鉛ガラス製造と副産物としての金属鉛の生成は行われていない。ここで鉛滓が生成された作業や工程はいかなるものであったのかは、今後の課題である。

今回の再検討に当たり、蛍光X線分析については当研究所保存修復科学研究室の協力を仰ぎ、降幡順子、脇谷草一郎の手を煩わせた。記して謝意を表する。

この報告は、科研費基盤研究C（20520675）「古代の鉛調整加工技術に関する考古学的研究」の成果の一部である。
(小池伸彦)

参考文献・注

- 奈良国立文化財研究所『年報1966』36-39頁。
奈良国立文化財研究所『年報1967』35-45頁。

平城宮跡東院地区から出土した縉銭

はじめに 2007年度に実施した平城宮跡東院地区の発掘調査（平城第423次調査）で、平城宮跡内では初例となる縉銭が出土した（『紀要2008』）。縉銭は全国的に見ても類例の少ないものであり、また宮都からの出土ということと相俟って、その学術的意義は決して小さくない。ここでは今後の研究の進展に寄与すべく、研究の基礎となる基本的な情報を紹介しておきたい。

縉銭の出土状況 発掘調査成果について概要報告（『紀要2008』）があるので割愛して、縉銭が埋納されていた土坑SK19121について述べることとする。

埋納土坑SK19121は長軸40cmの不整形の土坑で、残存する深さは約20cmである。ただし、現場中の不注意から土坑を認識することなく一部掘削してしまったため、正確な土坑の形態や深さは不明である。

この土坑のなかに、据え置かれた状態の土師器皿2点と縉銭を確認した。その据え方は、まず土坑の底に10cm

ほどの厚さで土（図43・2～4層）を敷き、その上に縉銭を置く。その後、縉銭の周囲を炭混じりの土（同1層）で埋め戻した上に、土師器皿を2枚並べて置いているようである。土師器皿は2点とも正位である。

SK19121の時期 遺構の時期について見ておくと、遺構の重複関係（図40）からは、埋納土坑SK19121は奈良時代後葉の掘立柱建物SB19115の後に位置づけ得る。また、土坑内から出土した土師器皿は直径約18.0cm・器高約2.5cmをはかり、いずれもAⅡ型式に属する。風化が著しく調整などの観察が困難なため、時期比定は難しく奈良時代中葉との推測にとどまる。以上のように、遺構の重複関係からみた時期比定と土器のそれとの間には若干の差異が認められるものの、埋納土坑という遺構の性格や土器の遺存状況なども考慮して、ひとまず奈良時代後葉に位置づけておくことが妥当であろう。

縉銭の様相 縉銭は銭貨の中央孔に紐を通してまとめられており、直線状に束ねたものを「U」字状に折り曲げて土坑内に置かれていた。土師器皿と縉銭との位置関係の維持を重要視して、出土状態のまま取り上げて保存処

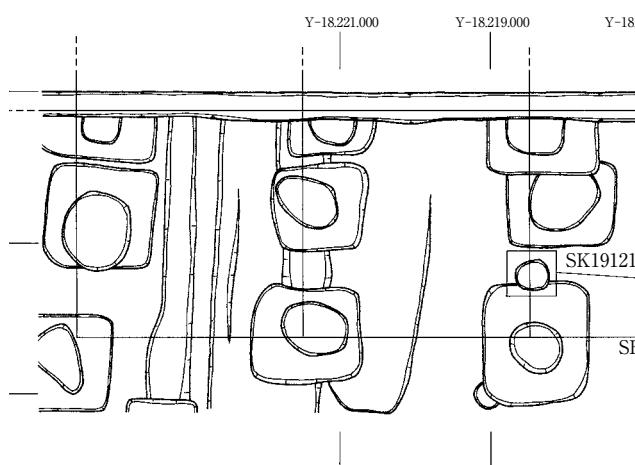


図40 第423次調査遺構平面図



図41 SK19121（南西から）



図42 SK19121（西から）

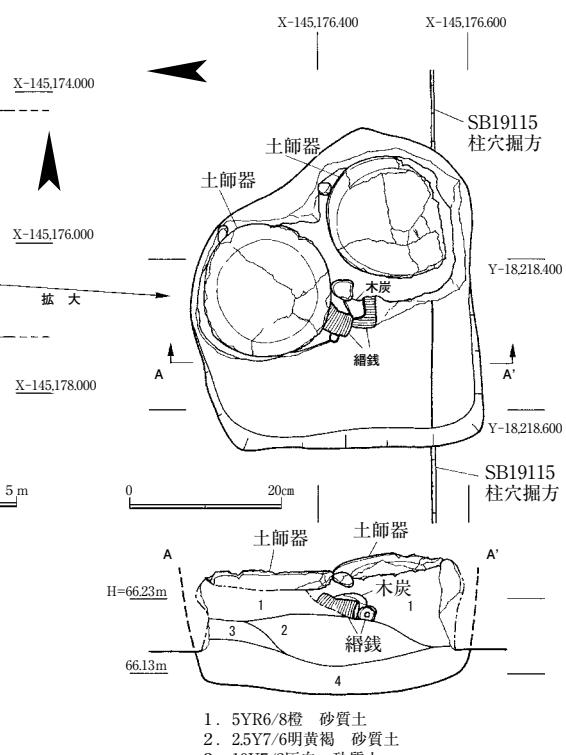


図43 SK19121平面図・断面図 1:10

理をおこなった。そのため、現状ではX線CT法による断層撮影がおこなえず、銭貨の枚数は肉眼で銅貨119枚を確認した。なお、縉銭の紐は切れてはいたものの、出土状況から銭貨の遺失はないと思われる。銭文が判読できる5枚はすべて和同開珎であり、そのうちの2枚は隸開の和同開珎である。銭貨の法量は直径2.51cm・厚さ0.19cmであり、縉銭の長さは約28.6cmとなる。

おわりに 奈良時代後葉という遺構の時期から、当例には萬年通寶（初鑄760年）や神功開寶（初鑄765年）が含まれている可能性もあり、今後はX線CT法などを用いて銭種や枚数の確認、紐の材質の特定といった作業が求められる。また実測図も必要であり、3次元計測器を用い

て作業を進めているところである。

『続日本紀』和銅元年（708）12月癸巳条には「鎮祭平城宮地」の記事があり、平城宮造営時に地鎮祭がおこなわれたことが知られる。今回の発見により、その後も宮内で地鎮がおこなわれていたことが確実となった。今後は、宮都や各地の地鎮遺構との比較や、『延喜式』の記事との比較検討を通じて、地鎮の具体相や性格を明らかにしていく必要がある。

また、SK19121がどの建物に付随する地鎮遺構なのかについては、調査区の北東隅で検出された状況もあって、一切不明である。上述の課題とともに、隣接地における調査の進展に期待したい。

（和田一之輔）

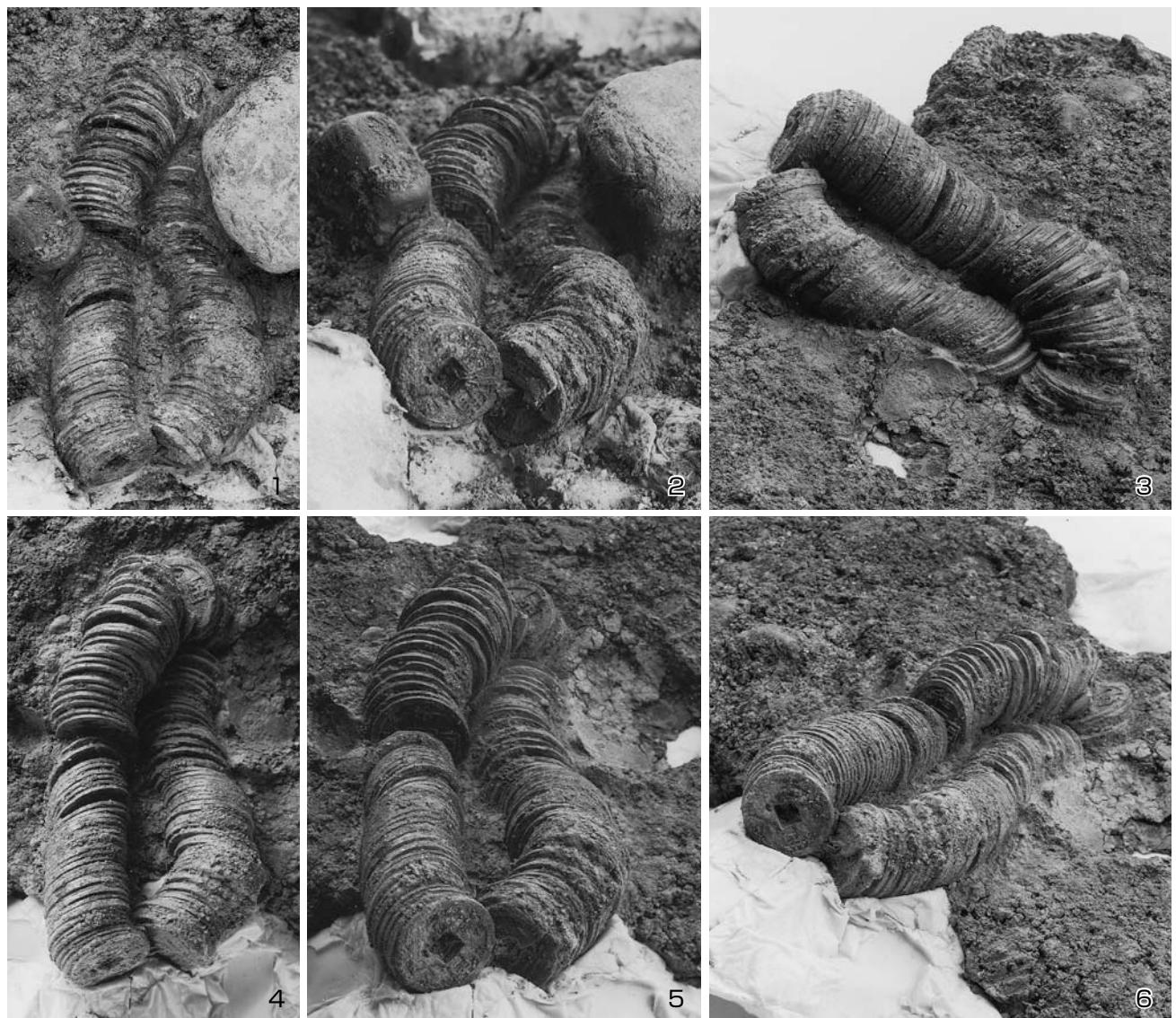


図44 埋納土坑SK19121から出土した縉銭（1・2：処理前、3～6：処理後）

黒漆塗工具及び刀子の事前調査

1 はじめに

飛鳥寺1991-1次調査により出土した黒漆塗工具1点 (No.2188)、および飛鳥池遺跡93次調査により出土した黒漆塗刀子1点 (No.673)について、保存処理を実施するために事前調査をおこなった(図45・46)。目視観察では表面が漆塗膜で覆われているため、木取りや樹種、漆塗膜の構造などに関する知見を得ることができず、したがって適切な保存処理方法を選択し実施することが困難であると判断したためである。

今回実施した事前調査の内容は、工具・刀子内部の劣化状態を観察するためにX線透過撮影をおこない、その後、漆塗膜の構造を明らかにするため塗膜が剥離していた箇所より $1\text{ mm} \times 0.8\text{ mm}$ 大の漆膜破片を採取し、樹脂包埋後研磨し断面観察をおこなった。さらに木取りや樹種についての調査をマイクロフォーカスX線CT装置にて実施した。マイクロフォーカスX線CT撮影は黒漆塗刀子・工具を含む4点の出土資料について実施し、そのうちの1点については樹種が推定できたため、ここに報告する。

2 塗膜構造

採取した漆塗膜片を樹脂包埋・研磨し、断面観察をおこなった。塗膜構造を把握することにより、塗膜の木胎部からの剥離や反りなどをできるだけ防ぐことを目的としている。顕微鏡観察から黒漆塗工具 (No.2188) の漆層の厚さは $70\text{ }\mu\text{m}$ であった。剥離片を用いた観察のため塗膜構造の詳細は不明確であるが、漆層と木胎の間に明確な下地層は観察されなかった。黒漆塗刀子 (No.673) の漆層の厚さは $30\text{ }\mu\text{m}$ である。木胎と漆層の間に黒色層が観察できるため、混和物などの確認のために蛍光X線分析をおこなったが、木胎部含め全体が鉄さびで覆われており、鉄以外の元素は検出できなかった。漆は一回塗りと考えられるが、鉄の腐食による劣化などが影響していると思われる。これらの観察から、資料の層構造は脆弱なことが予想されるため、保存処理に際しては表面を保護するなどの対策が必要であると考えられる。

3 マイクロフォーカスX線CT撮影

調査資料は前処理として50%メタノール・水混合液に含浸させた。これは、水の密度が約 1 g/cm^3 であることに対し、メタノールは約 0.8 g/cm^3 であるため、木材細胞壁の密度(約 1.5 g/cm^3)に対する差をより大きくすることによって撮影時のコントラストを明確にすることを目的としている。

撮影は、測定中の乾燥を防ぐため50%メタノール水溶液を満たしたTPXシリンダー(密度約 0.8 g/cm^3)に、刀子をできるだけ直立させた状態でおこなった。測定条件を表4に示す。

黒漆塗工具 (No.2188) は、柄の端からA15mm、B50mm、C100mmの各位置の断層画像、さらに柄に並行な透過画像の撮影をおこなった。これらの画像を図45に示す。得られた画像の特徴から、本資料では年輪は観察できなかつたが、環孔材の特徴はなく、広放射組織が明確かつ高さが $1\text{ - }3\text{ mm}$ 程度あるため、心去り材のブナ材であると推定した。ブナ材は乾燥時に歪みが生じやすい材質のため、真空凍結乾燥法にて処理を実施することとした。黒漆塗刀子 (No.673) は、柄の端からA60mmの位置の断層撮影をおこなった(図46)。しかし明確な画像が得られず木取りなどはわからなかった。

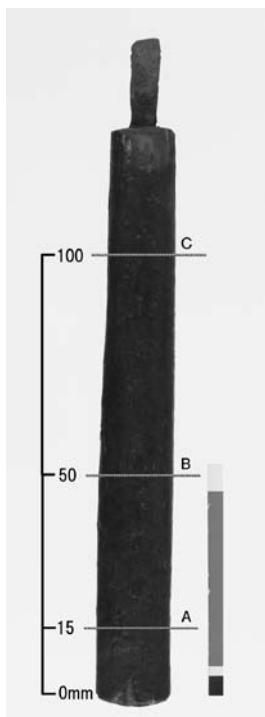
また飛鳥池遺跡93次調査で出土した工具2点についても、鉄サビなどの影響のため木取りが明瞭に観察できなかつたため、X線CT撮影による調査をおこなった。その結果、工具 (No.704) は柄の端からA30mm、B10mmの位置の断層撮影から木口面が観察でき、樹種は不明であるが、早晚材の移行が急で年輪幅が広い針葉樹であり、心持ち材ではないことがわかった(図47)。したがって工具 (No.704) は高級アルコール法での処理が可能であると判断した。もう1点の工具 (No.597) では明瞭な画像が得られなかつた。

このように漆塗膜で覆われ木取りや樹種が不明である木質遺物に対してX線CT撮影を使用し、その材質的な特徴を把握し、より適した処理方法を選択することが可能となつた。今後、このような総合的な事前調査の実施例が増加することにより遺物の保存処理がより適した手法でおこなわれ保存活用していくものと思われる。

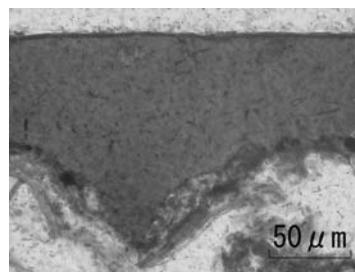
(降幡順子・大河内隆之)

表4: マイクロフォーカスX線CT撮影条件

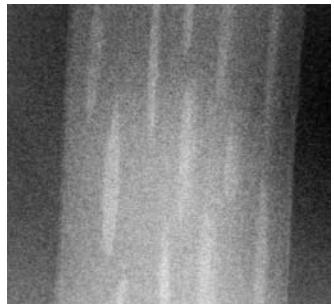
管電圧	75kV	ビュー数	1800
管電流	$85 \mu\text{A}$	撮像視野	16~20mm
スライス厚	0.25mm	画像サイズ	2048×2048pixel



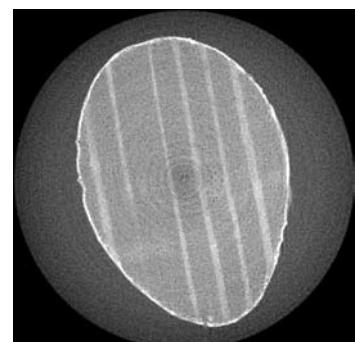
45-1: 处理前写真



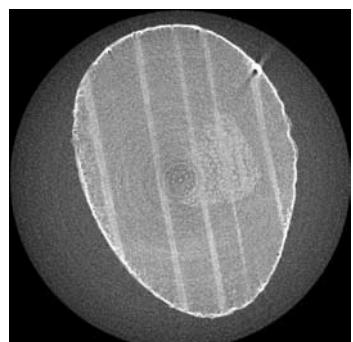
45-2: 漆塗膜の顕微鏡写真



45-3: 透過X線画像



45-4: 断層画像A

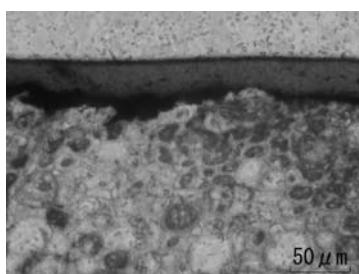


45-5: 断層画像B

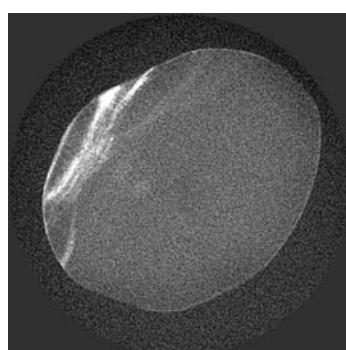
図45 飛鳥寺出土黒漆塗工具 (No.2188)



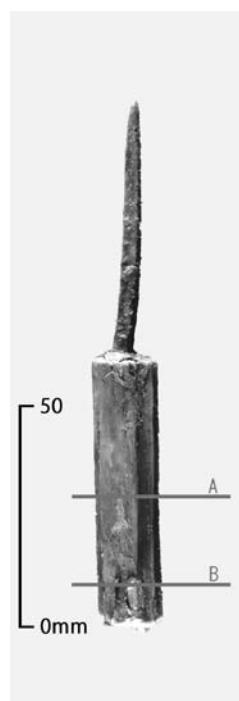
46-1: 处理前写真



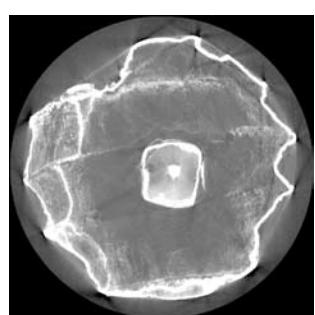
46-2: 漆塗膜の顕微鏡写真



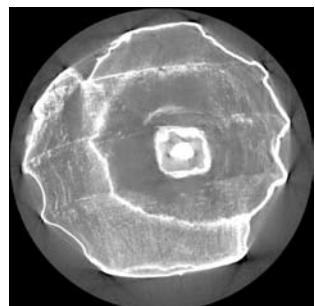
46-3: 断層画像A



47-1: 处理前写真



47-2: 断層画像A



47-3: 断層画像B

図46 飛鳥池遺跡出土黒漆塗刀子 (No.673)

図47 飛鳥池遺跡出土工具 (No.704)

長徳寺木造薬師如来坐像の年輪年代調査

はじめに 熊耳山長徳寺は、山口県山口市秋穂東に所在する曹洞宗の寺院である。本報では、同寺の本尊である木造薬師如来坐像（図48）の解体修理を機に実施した同像の年輪年代調査の成果について紹介する。

調査対象 本像は、右手を屈臂して胸前で施無畏印とし左手は膝上で薬壺を執り、拳身光背を負って蓮台上に結跏趺坐する薬師如来像。内衣・裳を着し、袈裟を偏袒右肩にまとう。螺髪を刻むが後頭部は省略。肉髻珠・白毫相をあらわし、三道を刻む。ヒノキ材製。木心（樹心）を腹前に逃がし、木裏に彫刻する。割矧造り、彫眼、漆箔仕上げ。白毫・肉髻珠は水晶嵌入。頭体幹部は両肩先を含んで一材より彫成、左耳後と右耳中を通る線で割り放ち、内刳り、後頭部材のみ割首。膝前に横一材を寄せ、裾先を別材とする。両肘先、両手首先、薬壺は別材製。肉身部・衣部ともに鋸下地漆箔仕上げ。頭部は群青彩、肉髻珠・白毫の底部に朱彩、眼部に彩色を施す。背面・像底部は箔を押さない。右耳朶を割損、膝前部は遊離、表面漆箔は著しく剥落ないし剥離。右肘より先、両手先、薬壺、表面仕上げおよび台座・光背は後補。銘記等なし。伝来不詳。法量は、像高68.8、髪際高58.1、膝張52.5、腹奥21.0、総高169.9cm。未指定。

円満な相貌、伏し目がちに薄く開いた目、低い地髪部といった面相部の表現には、形式化した定朝様が認められ、なだらかな肩、体奥の薄い体幹部、平坦な膝前といった抑揚をおさえた諸表現からも平安時代後期の雰囲気が看取される。構造上の特徴を踏まえ、修理により面目を一新して引き締まった面貌（図49）を考慮に入れると、本像の制作時期は12世紀後半頃を一つの目安と考えるのが穩当であろう。

調査方法 年輪年代調査は、接写用レンズを装着した高解像度のデジタル一眼レフカメラを用いて年輪の観察可能な体幹部前面材の像底部を撮影し、その画像をもとに年輪幅を計測する方法¹⁾で実施した。また、体幹部背面材については年輪の観察が難しく、本像に残存する最外年輪を確認するため、マイクロフォーカスX線CTを用いて非破壊で撮影した断層画像から年輪計測する方法²⁾を併用した。年輪幅の計測には、奈良文化財研究

所と千葉大学で共同開発した年輪画像計測ソフトウェア³⁾を用いた。

年輪年代測定に際しては、主に近畿地方の建造物や考古資料などの年輪データを基に作成した暦年代の確定しているヒノキの標準パターン（以下、暦年標準パターンと記す）を用い、対数変換と5年移動平均ハイパスフィルタ処理を施したのち、相関分析とt検定によった⁴⁾。奈良文化財研究所では、概ね100年以上の重複区間をもち、t値5以上であることを統計的な照合成立の基準としている⁵⁾。また、測定対象と暦年標準パターンの時系列データをプロットしたグラフを重ね合わせることで、暦年標準パターン上の特徴的な年である指標年ににおける両者の一致についても確認した。

結果 調査の結果を図50に示す。体幹部前面材では172層の年輪を確認することができ、残存する最外層の年輪年代は像底の右腰部において1067年であった。また、体幹部背面材には62層の年輪を確認することができ、残存する最新年輪の年代は1066年であった。体幹部前面材と体幹部背面材は、t値7.6と年輪パターンの類似性が高く、両材が同じ原本に由来することを示唆し、本像が割矧造りであることを裏付けている。なお、体幹部背面材と暦年標準パターンの照合は、単独では前記の照合成立基準を満たさないものの、体幹部前面材と同材であることを考慮に入れると、ここでの照合成立の是非には影響しないものとして扱うことができる。また、本像には辺材や樹皮が残存していないため、今回測定された年輪年代は原本伐採の上限年代を示している。

考察 調査対象に辺材や樹皮が残存していない場合には、得られた年輪年代にくわえ、原本から造像する過程で切除された辺材部や心材部に含まれていた年輪数ぶんを考慮しなければならない。筆者らのこれまでの経験では、調査対象が心材のみから成る場合、得られた年輪年代は、最低でも実際の伐採年代より数十年程度、場合によっては100年以上古くなることもある。本像の場合、計測箇所における最外層付近の平均年輪幅が約0.9mm・ヒノキの標準的な辺材幅が3cm程度であることから、切除された辺材に相当する年輪数として少なくとも30mmを0.9mmで割った三十数層程度を1067年の年輪年代に加算して考える必要があろう。さらに、辺材に続く心材部も併せて切削された可能性もあり、これらの



図48 長徳寺木造薬師如来坐像（修理前）

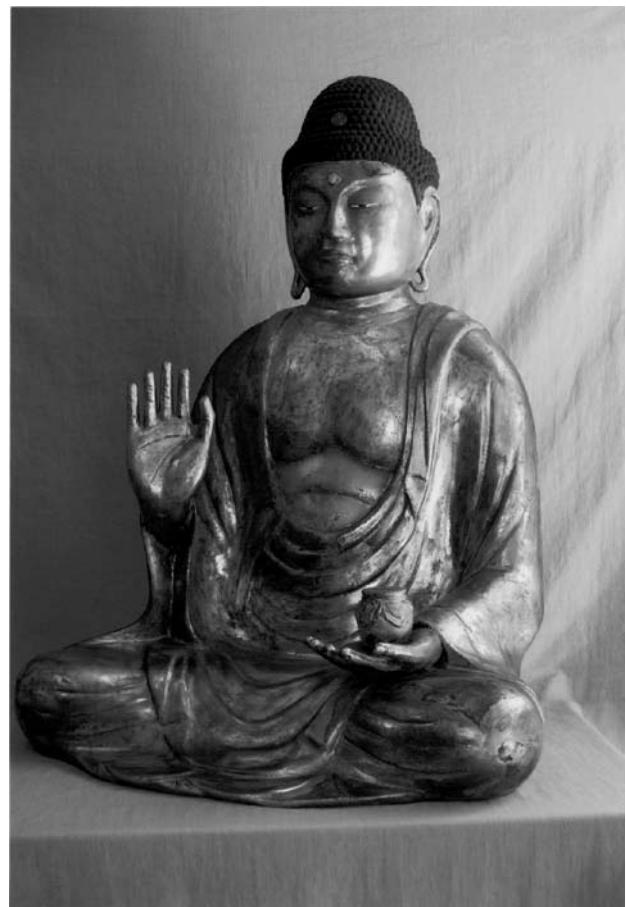


図49 長徳寺木造薬師如来坐像（修理後）

部材名称	照合年輪数	年輪年代	t 値	辺材幅	700	800	900	1000	1100	1200	A. D.
体幹部前面材(像底)	172	1066+(1)	6.9	-				(895)	██████	(1067)	
体幹部背面材	62	1064+2	4.8	7.6	-			1003	████	1066	

図中の括弧つきの年代値は、調査対象の表面において末端部の年輪数を正確に数えることが困難なため、若干の誤差を含む可能性があることを示す。

図50 長徳寺木造薬師如来坐像の年輪年代調査結果

点を考慮すると、本像制作ための用材調達時期は、年輪年代の示す1067年を上限として12世紀に下る蓋然性が高い。

まとめ 年輪年代調査によって得られた本像制作のための用材調達時期を12世紀とする結論は、本像の制作時期を12世紀後半頃とする美術史学的な所見とも矛盾しない。 (大河内隆之・児島大輔 / 日本学術振興会特別研究員)

参考文献

- 1) 大河内隆之『年輪年代調査におけるデジタル画像技術の活用』埋蔵文化財ニュース135、奈文研埋蔵文化財センター、2009。
- 2) 大河内隆之『マイクロフォーカスX線CT装置を用いた木造文化財の非破壊年輪年代測定』埋蔵文化財ニュース118、奈文研埋蔵文化財センター、2004。
- 3) 大河内隆之(出願人・発明者)『木材の年輪箇所検出方法および年輪幅計測方法』特願2002-330131、特許第4218824号。
- 4) 田中琢・光谷拓実・佐藤忠信『年輪に歴史を読む—日本における古年輪学の成立—』奈文研学報48、1990。
- 5) 光谷拓実「年輪年代法と文化財」『日本の美術』第42号、至文堂、2002。

遺構露出展示の今日的課題

はじめに 本稿においては、平成20年度遺跡整備・保存修復科学合同研究集会「埋蔵文化財の保存・活用における遺構露出展示の成果と課題」(2009年1月30日・31日)での検討を踏まえつつ、遺構露出展示の今日的課題を展望する。

研究集会開催の趣旨 奈良文化財研究所では、平成4年度以来『保存科学研究集会』を、また、平成18年度からは『遺跡整備・活用研究集会』を開催してきた。

一方、現在、文化遺産部遺跡整備研究室では、遺跡の望ましい保存と活用のための整備の観点から、「遺構露出展示に関するデータベース」(以下、「露出展示DB」という。)構築の検討をはじめ、「遺構露出展示に関する調査研究」(以下、「調査研究」という。)を進めており、また、埋蔵文化財センター保存修復科学研究室においても、遺構露出展示に関わる調査や処置などの技術的課題をはじめとする諸問題について継続的に取り組んでいる。

遺構の露出展示は、公開活用上の観点から、遺跡を構成する要素を直接展観することでその内容や価値を直感的に伝達するのに極めて有効な手段のひとつであり、大きな成果を挙げてきたといえる。一方で、保存管理上の観点から、遺構の風化や劣化を抑制するのが難しいため、その意義や計画の検討、また、実施の前提となる調査や技術の点に数多くの課題があることは、これまでのさまざまな実績が示しているところである。しかし、それらの具体的な成果や課題に関する情報については、必ずしも網羅的に把握されていないという実情もある。

そのため、今回は、さまざまな実績を踏まえつつ、遺構露出展示について検討すべき課題を明らかにし、包括的に検討するため、「埋蔵文化財の保存・活用における遺構露出展示の成果と課題」をテーマとして、文化遺産部遺跡整備研究室と埋蔵文化財センター保存修復科学研究室との合同で研究集会を企画し、開催した。

遺構露出展示に関する調査研究 今回の研究集会の背景にある「調査研究」においては、特に地下に埋蔵されていた遺構を露出展示している事例を中心として全国的な状況を網羅的に把握し、それぞれに生じている課題及びこ

れまでの対処の効果等を検証する作業を基礎として「露出展示DB」を構築するとともに、これから遺構露出展示を計画する場合の検討過程、あるいは、既にある遺構露出展示の維持管理等に関わる指針の案を提示することなどを目的としている。

研究集会において配布した参考資料『「遺構露出展示」事例所在一覧（基礎調査／未定稿）』は、「調査研究」の推進に当たり、全国各地の遺構露出展示の事例について、平成20年7月、都道府県教育委員会文化財保護主管課に対し所在概要調査の協力を依頼して得られた回答を基本とし、事例の確認・補足等を含めて、整理・検討の途中成果を示したもので、700件余りの検討すべき事例を確認することができた。この協力依頼に際して、意見・要望等も同時に求めたところ、全体として共有される傾向としては概ね以下のように要約できる。

(1) 現状で①開口している横穴式石室を持つ古墳（又は横穴墓）、②城跡・寺跡などの石垣、③露頭している礎石、④石碑などの石造物、など、今回の一覧に掲載する場合の基準の見極めが難しい事例が少なくないこと。

(2) (1) の理由としては、①単に露出しているものを露出展示として取り扱うことが適當か判断するのが難しいこと、②開口している横穴や露頭している石垣などについては極めて数が多いためにどの範囲までを把握すべきかがにわかに明らかでなく、また、実際の把握には相当の手間と時間を要すること、③「露出展示」という概念があまり明確でないこと、④したがって、場合により、主として保存を目的とする施設を設けているもの、何らかの保存整備をしているもの以外については、除外されるべきか判断が難しいこと、などが挙げられている。

(3) 「調査研究」の成果等として期待することなどとしては、①保存状況の経年変化、②露出展示による遺構劣化の原因、③日常管理の方法、④保存処理方法、⑤保存のための施設の構造・材質・面積等、⑥空調管理に関する情報、などのほか、⑦露出している遺構及び施設の全体や部分を示す写真・図面、あるいは管理状況等を示す写真等、を掲載した資料の作成と、それを共有できる仕組みを整備すること、などを挙げることができる。事例の取り上げ方や「遺構露出展示」に対する考え方などについては、①それぞれの地域に所在する遺跡の種類

や特性、②調査研究・保存活用の歴史や経緯、③遺跡の保存・活用に関して現在取り組んでいる主な方針や視点、などの違いを反映して、一様に共有されていないことが推察され、気候等の違いも含めると、ある程度地域別の対応を検討していく必要があると考えられる。

以上のようなことから、「調査研究」が主たる対象とすべき事例の確認については、さらに細かな把握を重ねていく必要があるが、今回の事例基礎調査の成果を踏まえ、遺構露出展示手法について現段階で検討すべき類型としては、①「露天」、②-a「覆屋（開放型）」、②-b「覆屋（半開放型）」、③-a「遺構保護施設（半密閉型）」、③-b「遺構保護施設（密閉型）」、④「小規模遺構保護施設」のほか、特に開口している横穴式石室を持つ古墳（又は横穴墓）の事例については、⑤-a「開放」、⑤-b「半開放」、⑤-c「密閉」、また、関連する整備・展示の手法としては、⑥「断面剥取展示」、⑦「遺構切取展示」、⑧「遺構再現展示」などについても視野に入れて、なお検討を進めていくことが適当であると考えられた。

研究集会の構成と論点 このような遺構露出展示の特質と現状を踏まえつつ、研究集会においては、「基調講演」・「事例報告」・「技術報告」として、遺構露出展示の意義や実績、課題とともに保存措置検討のため必要な調査法について確認し、「総合討論」を行った。

基調講演では、「遺構露出展示の意義と計画」として、広く歴史遺産の観点から露出展示の意義を捉え、特に遺跡においてこれまで取り組まれてきた事例を種類別に検討した。また、遺構露出展示を検討・実施する際の手順、さらには、露出展示の運営と展示遺構の維持管理について、これまでの実施事例を踏まえた整理が示された。その上で、日本においては土で構成される地下構造の遺構が多いことなどを踏まえ、特に調査から、施工、運営・維持管理を一貫して取り組むことの必要性のほか、各段階で最大限の留意を払うべきことなどが強調された。

事例報告では、《様々な遺構露出展示の実績と課題》をテーマとして、史跡三殿台遺跡（神奈川県横浜市）、史跡吉胡貝塚（愛知県田原市）、ハニワ工場公園（史跡今城塚古墳附新池埴輪製作遺跡、大阪府高槻市）、特別史跡及び特別名勝平城京左京三条二坊宮跡庭園（奈良県奈良市）、史跡金隈遺跡（福岡県福岡市）の5つの報告を通じ、それぞれの遺跡をめぐる諸条件に応じた多様な整備の考え方

と実施及び管理の実績を踏まえ、さまざまな観点から、遺構露出展示の成果と現状の具体的課題が示された。

技術報告では、《遺構露出展示のための調査法》をテーマとし、「遺構露出展示のための調査法について」、「遺構保存と水」、「石材の風化とその計測法について」、「赤外線サーモグラフィによる屋外文化財の劣化診断」の4つの報告を通じて、遺構露出展示を検討する場合において必要な調査とそのための様々な手法などが示された。

総合討論では、《遺構露出展示の成果と課題》をテーマとして、「環境条件」、「遺構条件」、「展示条件」、「管理条件」を柱とした討論を行うとともに、これから遺構露出展示をさらに有意義なものとするための「露出展示DB」の構築と運用の在り方、あるいは、管理計画及び管理マニュアルの検討などに関わる様々な工夫について期待が寄せられた。

遺構の露出展示を検討するための課題 悠久の歴史の中で人々が営んできた諸活動の具体的な証拠である遺跡は、将来に向かって生きる私たちの生活の中で、そのすべてを遺していくことはできない。遺構露出展示が検討されるのは、その中でも永く保護されることが合意された、ごく限られた遺跡においてである。それらの遺跡を、実際に永く保護していくためには、物質的な保存のみならず、人々の心の中にその価値が継承されていくことが必要不可欠である。その点において、遺構の露出展示は、遺跡がアリティを持って、私たちにその貴重な存在を伝えてくれる最も効果的な在り方のひとつであるといえる。それは、様々な表現手法とも相俟って、遺跡全体の総合的なマネージメントに位置付くことで、はじめて十分な効果を発揮するものである。しかし、本物の持つ力に対する過度な期待のため、必ずしも準備が十分でないままに露出展示されている事例も少なくない。

今後、これまで数多く試みられてきた実績の検討を通じ、それぞれの遺跡が有する文化的、自然的、社会的な環境の条件を十分踏まえつつ、その保護の意義を確認するところから遺構露出展示の可能性を検討し、十分な調査を行うことを前提とするような遺跡整備事業の在り方を示すとともに、継続的なモニタリング、定期的なメンテナンスを一連の流れとして組み込んだ管理計画及び管理マニュアルの作成とそれらの運用指針を具体的に示していく必要がある。

（平澤 豊・高妻洋成）

平成20年度秋期特別展

—「まぼろしの唐代精華—黃冶 唐三彩窯の考古新発見—」始末記—

きっかけ 飛鳥資料館は、平成17年度、日中共同研究として奈良文化財研究所が行った唐長安城大明宮太液池の調査の成果を中心とした秋期特別展「東アジアの古代苑池」を研究パートナーである中国社会科学院考古研究所ほかと主催することができた。これを受け、当館学芸室では、おりあらば、奈文研が実施している他の海外共同研究の成果も特別展として広く公開する方針を立てた。そうした中、奈文研と河南省文物考古研究所が進めている共同研究の成果の展覧会を開けないかという話が持ち上がり、田辺征夫館長から検討するよう指示があったのがきっかけだった。

展示品 基本的な展示コンセプトが共同調査の成果の公表であり、中国の文物は中国国内で既報告のものでなければ海外展示できないという制約もあることから、『黃治唐三彩窯の考古新発見』（奈文研史料73冊、2006）にそって展示を行ない、展示品もそこから選定することとし、巽淳一郎副所長（当時）と協議しながら選定作業を進めた。そこでは、唐三彩の優品ばかりではなく、できるだけ多様な器種や唐青花などを含む多種のもの、操業開始期から停止期にいたる各時期のもの、製品ばかりでなく、未製品や窯道具など、従来、日本では展示されてこなかった生産関連品などを選定することに努めた。そして、加藤と西田紀子が平成19年4月22日～27日におこなった資料調査を踏まえ、最終的には、河南省側からも推薦があった黃治窯近隣の北窑湾唐墓群出土品などを加えた71件93点を展示品として決定した。

図録類の作成 平成19年12月5日～19日に牛嶋茂、平成20年5月27日～6月6日に井上直夫、岡田愛を河南省に派遣し、図録掲載写真、図録表紙とポスター用写真を撮影した。図録には展示品全点のカラー写真を提示することとしたが、カラー図版のページ数に限りがあり、個別資料の詳細写真も『黃治唐三彩窯の考古新発見』に掲載されていることから、集合写真を巻頭のカラー図版各ページに1枚ずつ載せることとした。また、図録本文については、協議の結果、河南省文物考古研究所、降幡順子、飛鳥資料館で執筆することになり、河南省側から孫新民所長、郭木森研究館員の玉稿「鞏

義黃治窯跡の調査と発掘」を賜った。飛鳥資料館担当部分では、ちょうど河南省文物考古研究所と中国文物研究所が報告した「河南鞏義市黃治窯址発掘簡報」『華夏考古』2007年第4期が大変参考となり、そこから挿図なども作成した。

展覧会の実施 平成20年10月2日～8日に杉山、加藤が展示品借用に出張したのを皮切りに、展覧会の実施段階に移った。10月8日、展示品とともに河南省文物考古研究所の郭移洪、郭培育の2名が検品、展示指導のため来日し（15日帰国）、開梱と展示作業が始まった。15日には、孫新民所長以下、代表団6名が来日している（24日帰国）。そして、16日夕方、開幕式が行なわれ、翌17日から展覧会が開始された。10月18日には記念講演会を平城宮跡資料館講堂で開催した。演題と講演者と演題は、次のとおり。郭木森「鞏義市黃治窯址に対する考古発掘と初步的研究」、巽淳一郎「唐三彩の生産と供給」、劉蘭華（中国文化遺産研究院）「黃治窯址出土の藍花器からみた唐代青花瓷器の発生と発展」、孫新民「鞏義黃治窯とその他唐三彩窯の異同」。また、期間中は、後援の読売新聞大阪本社のご好意で、奈良版に展示品解説を連載したほか、朝日新聞等でも取り上げていただいた。

12月8日の閉幕後、12月14日には、検品と撤収指導に来日した河南省文物考古研究所の孫建国、王蔚波の2名とともに、杉山、加藤、井上の3名が展示品の返却に訪出し、18日に無事返却を終えた。

特別展の参観者は11,695名。19年度より2000名ほど増加した。最後に、関係者の方々に感謝いたします。

（杉山 洋・加藤真二）

II 飛鳥・藤原宮跡等の調査概要



表5 2007・2008年度 都城発掘調査部(飛鳥藤原地区) 発掘調査・立会調査一覧

調査次数	調査地区	遺跡	調査期間	面積	調査地	担当者	調査要因	掲載頁
(2007年度)								
151次	5AKG-K・L	甘樅丘東麓遺跡	2007.11.12～2008.4.28	950m ²	明日香村川原	豊島直博	学術調査	68
(2008年度)								
153次	5AJF-M	藤原宮朝堂院	2008.4.1～11.11	1650m ²	橿原市高殿町	玉田芳英 小田裕樹 廣瀬 覚	学術調査 墳丘整備	50
154次	5ALI-J	高松塚古墳	2008.7.1～2009.2.13	370m ²	明日香村平田	水野敏典(橿原考古学研究所) 相原嘉之(明日香村教育委員会)	94	
155次	5BHQ-A～C・E・F・R 檜隈寺周辺 5ALK-S・T 5ALO-D		2008.7.14～2009.3.25	1666m ²	明日香村桧前	関広尚世 石田由紀子 若杉智宏	公園整備	99
156次	5AMD-R・S	石神遺跡	2008.10.2～2009.3.27	480m ²	明日香村飛鳥	青木 敬	学術調査	76
157次	5AKG-K・L	甘樅丘東麓遺跡	2008.12.16～継続中	1150m ²	明日香村川原	丹羽崇史	学術調査	68
152-1次	5AJD-R	藤原京左京六条二坊	2008.4.24	2m ²	橿原市高殿町	次山 淳	水路改修	48
152-2次	5BAS-J	飛鳥寺	2008.7.15～7.18	15m ²	明日香村飛鳥	次山 淳	個人住宅	88
152-3次	5BAS-L	飛鳥寺	2008.7.23～7.25	13m ²	明日香村飛鳥	次山 淳	個人住宅	89
152-4次	5AMH-H	雷ギヲ山城	2008.10.2～10.9	38m ²	明日香村雷	石田由紀子	個人住宅	86
152-5次	5BAS-N、5AKA-H	飛鳥寺南方	2008.10.28～12.2	95m ²	明日香村飛鳥	市 大樹	個人住宅	90
152-6次	5AJF-R	藤原宮内裏西官衙地区	2008.11.25～2009.2.23	345m ²	橿原市醍醐町	豊島直博 黒坂貴裕 小田裕樹 石田由紀子 番 光	埋設管付替	66
152-7次	5AJH-A・B	藤原宮朝堂院東地区・南面大垣	2009.1.13～2.16	210m ²	橿原市別所町	木村理恵	水路改修	62
152-8次	5AMJ-P	古宮遺跡	2009.2.17～3.6	56m ²	明日香村豊浦	木村理恵	個人住宅	48
152-9次	5AJG-D	藤原宮朝堂院東地区	2009.3.16	6m ²	橿原市高殿町	青木 敬	植栽整備	48
152-10次	5BKH-F	川原寺	2009.3.25～4.23	33m ²	明日香村川原	小田裕樹 青木 敬 高田貴太	遺跡整備	48

表6 2008年度 都城発掘調査部(飛鳥藤原地区) 小規模調査等の概要

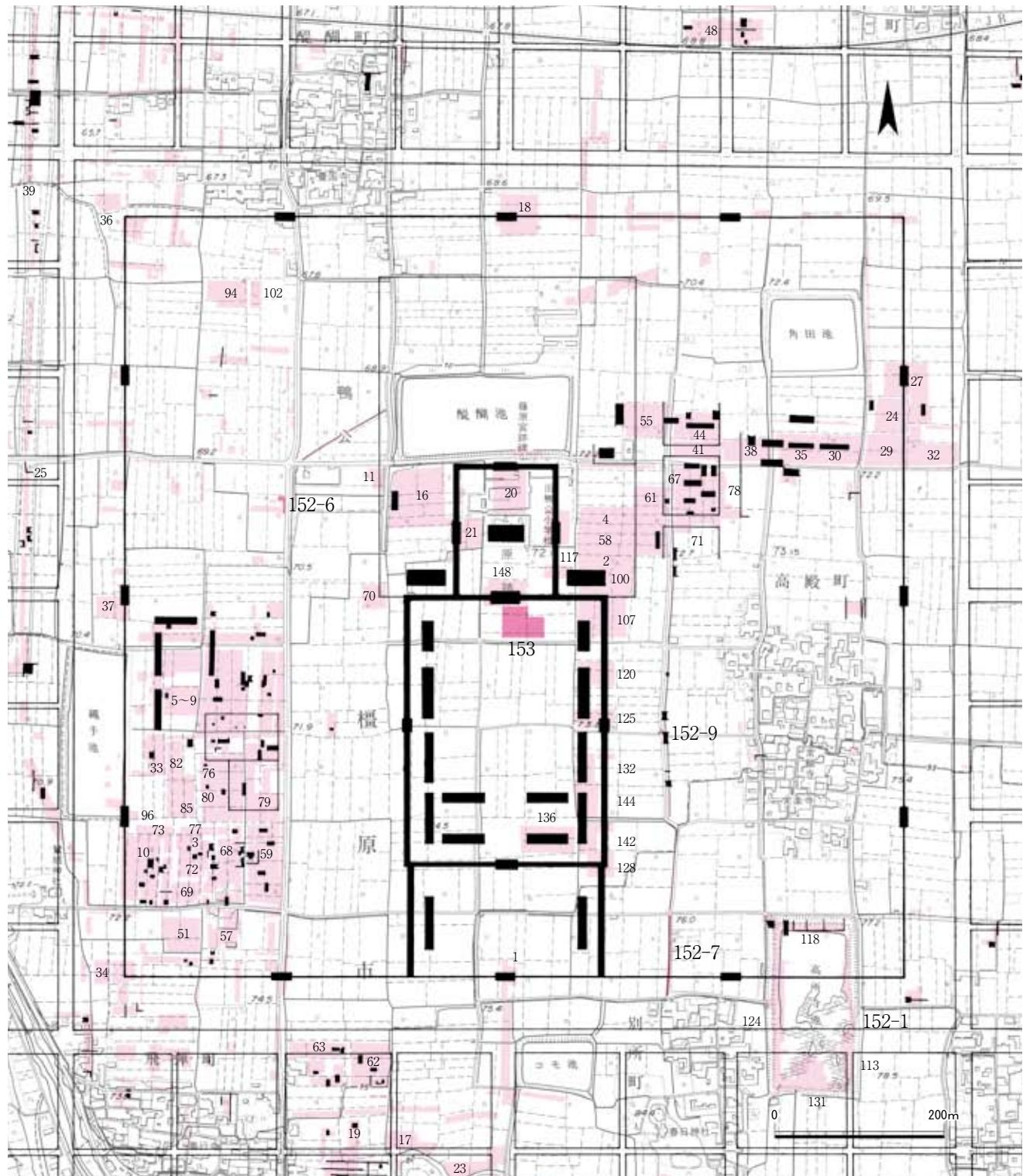
調査次数	遺跡	調査の概要
152-1次	藤原京左京六条二坊	高所寺池東辺の水路改修に伴う立会調査。掘削は遺構面に達しなかった。
152-8次	古宮遺跡	住宅改築に伴う事前調査。阿倍山田道に関わると考えられる整地と溝2条を検出。詳細は次年度報告の予定。
152-9次	藤原宮朝堂院東地区	藤原宮の植栽整備に伴う立会調査。掘削は遺構面に達しなかった。
152-10次	川原寺	整備済の礎石劣化による取り替えに伴う立会調査。掘削は遺構面に達しなかった。

表7 2008年度 都城発掘調査部(飛鳥藤原地区) 現場班編制

※総担当者

春	夏	秋	冬
※玉田 芳英(考古第二) 高田 貴太(考古第三) 番 光(遺構) 廣瀬 覚(考古第一) 木村 理恵(考古第一)	次山 淳(考古第三) 黒坂 貴裕(遺構) ※小田 裕樹(考古第二) 関広 尚世(考古第二) 若杉 智宏(研修)	市 大樹(史料) 豊島 直博(考古第一) ※青木 敬(考古第一) 石田由紀子(考古第三) 山崎 健(埋文センター:研修)	箱崎 和久(遺構) ※丹羽 崇史(考古第二) 若杉 智宏(考古第二) 木村 理恵(研修) 加藤 雅士(考古第三)
総括:部長 松村 恵司	写真担当:井上 直夫、岡田 愛(写真室)		保存科学:降幡 順子(考古第一)

II-1 藤原宮の調査



朝堂院の調査

—第153次

1 はじめに

都城発掘調査部は、藤原宮朝堂院の様相の解明を目的として継続的な調査を実施してきた。これまで東第一堂（第107次）、東第二堂（第120・125次）、東第三堂（第132次）、東第四堂（第142・144次）、東第六堂（第136次）、回廊東南隅（第128次）の調査を実施し、主要な殿舎の配置と構造の詳細が明らかになるとともに、朝庭には礫を敷いて整地している状況が一部判明していた。また、昨年度の大極殿院南門（以下、南門と省略）の調査（第148次）では、礫敷の下に藤原宮造営期の運河や建物の柱穴があることが判明し、それらの状況の解明が課題として残った（『紀要2008』）。また、平城宮では中央区、東区の朝堂院とともに、朝庭に天皇が即位した際の大嘗祭をおこなった大嘗宮があることが判明しており、藤原宮における大嘗宮の様相の解明も課題となっている。

そのため、都城発掘調査部は藤原宮朝堂院の全体像の解明のため、今後は朝庭の調査を継続的に実施することとした。今回の発掘調査は、第148次調査区の南方に調査区を設定して実施した。藤原宮で朝庭の本格的な発掘調査は初めてとなる。当初は東西54m、南北25mの調査区で、後に西から36mの範囲を北に12.5m拡張した。調査面積は約1650m²で、調査期間は2008年4月1日～11月11日である。

2 検出遺構

調査区の基本的な層序は、上から整備盛土（80cm）、旧耕土・床土（20～30cm）、灰褐色土の遺物包含層（5～15cm）で、地表下約120cmで藤原宮期の遺構面となる。遺物包含層は薄く、場所によっては床土直下が遺構面となる。礫敷直前段階の第二次整地土（橙褐色粘質土）は厚さ約5～10cmで、その下に約20～40cmの旧地形の起伏をならす第一次整地土（暗褐色粘質土）がある。調査区西半部は整地土下が黄褐色粘質土の地山となるが、東半部では沼状の堆積土となる。

検出した遺構は、大きく藤原宮造営期、藤原宮期、藤原宮廃絶後の3期に区分できる。藤原宮造営期の遺構は、

運河1条、斜行溝2条、先行朱雀大路東側溝1条、南北溝1条、柱穴、土坑等を確認している。藤原宮期のものとしては、礫敷広場、柱穴列、柱穴群、南北溝1条、東西溝1条、石詰暗渠1条などがある。また、藤原宮廃絶後の遺構には道路状遺構1条、東西溝2条と土坑4基がある。ここでは、まず藤原宮造営期の遺構と藤原宮期の遺構を中心として述べ、次いで藤原宮廃絶後の遺構について述べる。

（玉田芳英）

藤原宮造営期の遺構

藤原宮造営期の遺構は、全て礫敷を除去した後に検出した。

先行朱雀大路東側溝SD10705 調査区西よりの断割トレーニチで、部分的に検出した。幅2.3m、深さ40cmの素掘溝である。埋土は灰色砂質土の混じる暗褐色粘質土で、水の流れを示す砂などの堆積はなく、人為的に埋め戻したと思われる。第二次整地土により覆われている。

南北溝SD10796 SD10705の西で、断割トレーニチの壁面にて確認した。幅2.3mで、深さは40cm。第148次調査で検出したSD10707に対応する可能性があるが、平面的には確認できていない。

運河SD1901A 調査区中央を南北に貫流する。東西畦を挟んで、北側に運河調査区1、南側に運河調査区2を設定して整地土を除去し、それぞれ6.5mと2.5m分を調査した。第一次整地である暗褐色粘質土から掘り込んでおり、幅は約3～4mで、深さ約2mを測る。これまで北面中門（第18次『藤原概報6』）、大極殿北方（第20次『藤原概報8』）、および内裏南辺地区（第83-7次『年報1998-II』）の調査で確認しているが、従来の調査所見よりも幅が狭い。埋土は、下から機能時の堆積を示す粗砂層（40～50cm）、細砂層（30cm）、埋め立て時の青灰色粘質土層（60cm）である。粗砂層と細砂層は、大量の流水があったことを示すものである。粗砂層と細砂層は土器や動物骨、木器などを多く含んでいたため、研究室に持ち帰って水洗選別をおこなった。埋め立てに際しては、後述する斜行溝SD10801Aの底と同じ高さまで埋めた後、瓦を一括投棄し（SX10812）、さらに青灰色粘質土（30～70cm）で一気に埋めている。なお、第148次調査区南壁の土層では、南門基壇に近接するために、青灰色粘質土と灰黄色砂質土を互層にして丁寧に埋め立てている状況が確認できたが、ここではみられない。

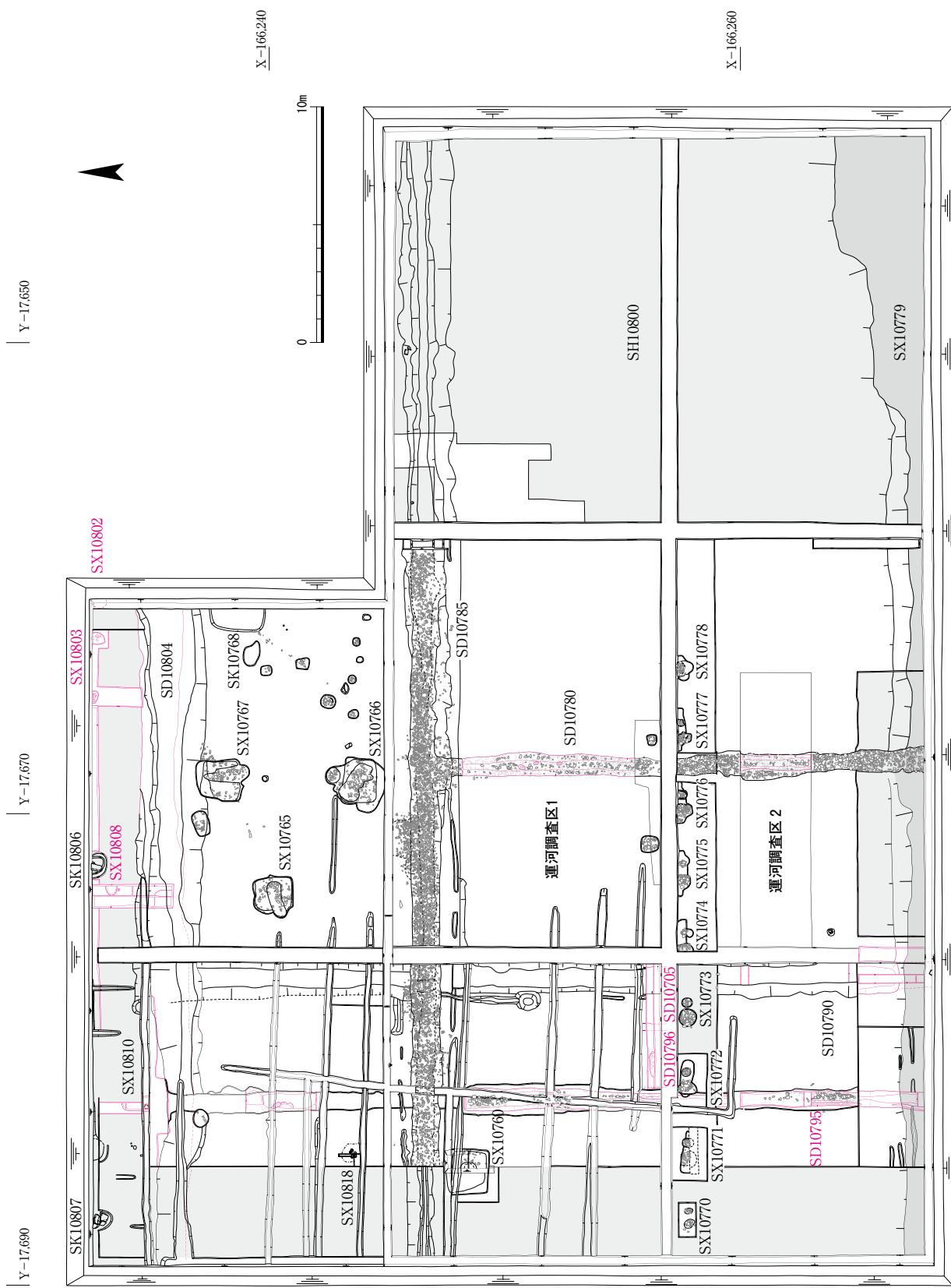


図52 第153次調査遺構図 1:250



図53 SX10812瓦出土状況（北東から）

瓦溜SX10812 運河調査区2では、SD1901Aの西肩に大量の瓦が投棄されていた（図53）。SD1901Aを1.4mほど埋め立てた後に、西側から投棄したものとみられる。SX10812を挟む上下の層は一連の運河埋め立て土（青灰色粘質土）であり、極めて短い時間幅の中で瓦が投棄されたものと考えられる。詳細は出土遺物の項で報告するが、軒丸瓦が3点、軒平瓦が22点出土し、大垣所用瓦が主体である。軒瓦や丸・平瓦の分布に偏りはない。

斜行溝SD10801A 調査区中央でSD1901Aから枝分かれし、北東方向へ伸びる素掘溝。幅は約2.2～4mで、深さ50～80cmである。SD1901Aに取り付く部分ではラッパ状に広がる。この溝は約15mで途切れ、北へは続かない。埋土は暗青灰色粘質土で、炭や木片が混じる。底面は、SD1901Aより約1m高い。運河本流から水を引き込んで、造営資材を運ぶための機能が考えられる。

斜行溝SD10801B SD1901A・10801Aを埋めた後に新たに掘削する素掘溝。幅1.8～2mで、深さは70cm。調査区中央で南北方向から北東方向へ曲がり、調査区外へ延びる。幅が狭く直線的で、埋土は砂混じりの緑灰色粘質土である。当初はSD10801Aとの重複関係が区別できなかったため、東肩が確認できていない部分がある。運河調査区2ではSD1901A東肩と重複し、SD10801Bの東肩としていることから、SD1901Aの埋め立てとSD10801Bの掘削の時間差はあまりなかったものと考えられる。この溝が南門を避けるように曲がっていることから、南門建設開始後に掘削されたものとみられる。

沼状遺構SX10820 調査区東側の北壁、南壁の断割トレンチ内で検出した大規模な沼状の遺構。いずれも西肩のみを検出し、調査区を越えて東に続く。第一次整地の暗褐色粘質土から掘り込まれ、深さ70cm～1mである。底面は高低がある。埋土は有機質の混じる黒色粘質土が堆



図54 SX10816土器出土状況（東から）

積し、木片混じりの暗灰色粘質土で40～50cmほど埋めた後、西側から東に向けて暗褐色砂質土と黄褐色砂質土で埋めている。堆積土を中心には瓦が多く出土した。断割トレンチでの検出であり、SD1901AやSD10801A・Bとの併存関係や規模の大きさも含めて、範囲と性格の解明が望まれる。

南北溝SD10795 藤原宮期の南北溝SD10790の西5mにある素掘溝で、礫敷の下で検出した。幅50～70cmで、深さは25cmである。南門周辺の高まりSX10810南端から、調査区の南へ続く。基壇造成時の排水溝や第136次調査で提起された水準溝（『紀要2006』）としての機能も考えられるが、性格は不明である。埋土は藤原宮期の東西暗渠SD10785より北側は黄灰褐色砂質土で埋め、南側では灰色粗砂が堆積した後に褐色粘質土で埋める。SD10785より南側には、埋め立てに際して瓦を廃棄している。瓦の廃棄は、大きく4ヶ所に分かれて廃棄された状況が認められる。

下層柱穴SX10802・10803・10808 調査区の北側で3基の柱穴を検出した。いずれも礫敷の下にあるが、掘り込み面は礫敷直下と基壇状高まりSX10810の造成直前面の2つがある。第148次調査区の南壁で検出した柱穴に比べて規模は小さく、柱筋も通らない。周辺は礫の残存状況が良好で、下層の調査は一部にとどめたこともあり、建物の柱穴とは判断できなかった。

土器溜SX10816 SD10801Aの東側には、礫敷直前の第二次整地土に覆われて土器が集中して廃棄されていた（図54・63）。層位的にみて、SD10801Aよりも新しく、SD10801Bの埋め立てに伴う周辺の整地の途中に一括廃棄されたものとみられる。

土器集中区SX10818 調査区西側の宮中軸線付近で、礫敷直下から古墳時代の土器集中区を検出した。いずれも

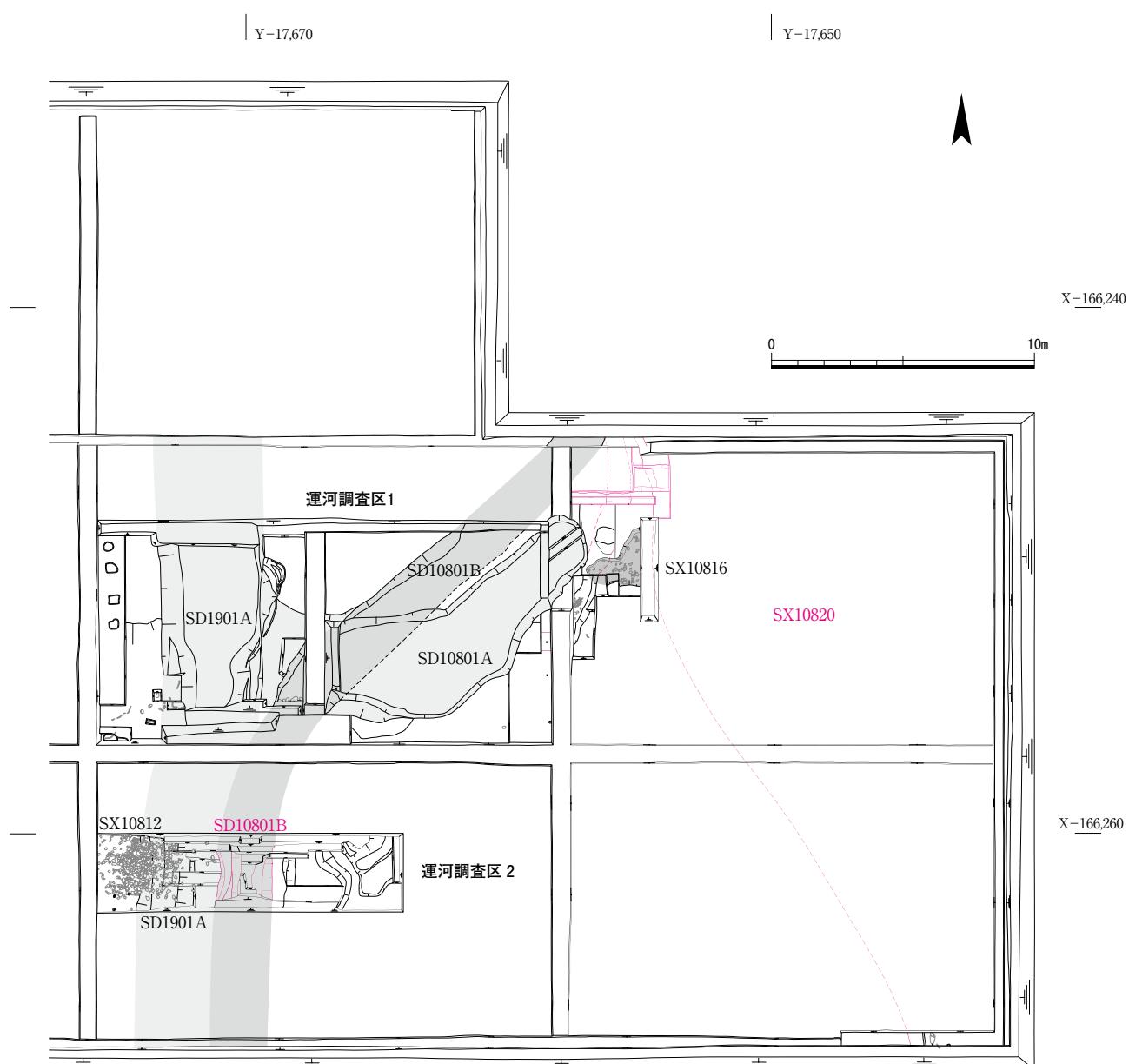


図55 第153次調査宮造営期遺構図 1 : 250

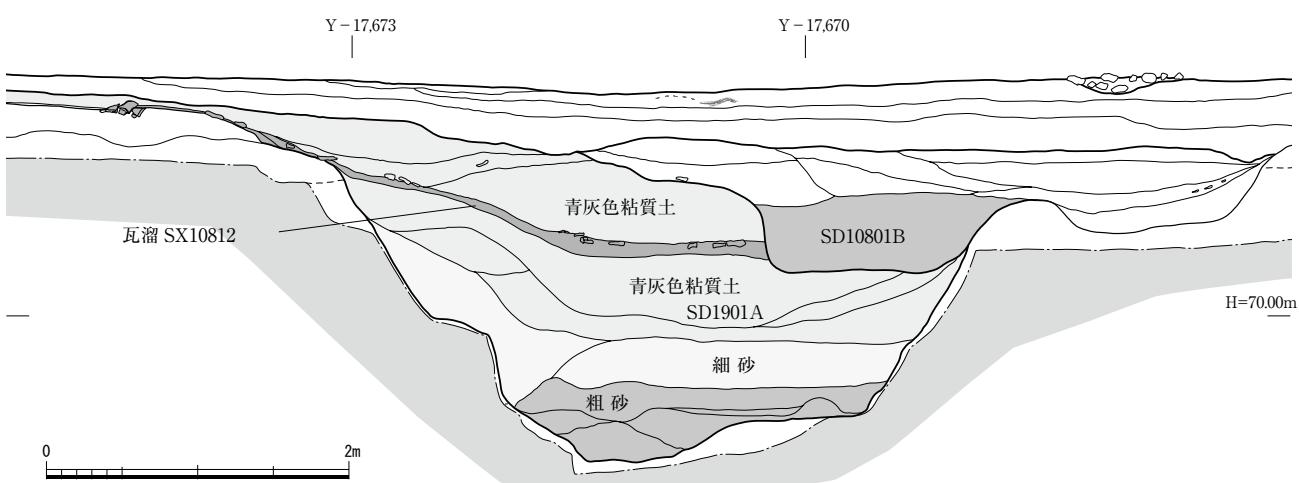


図56 運河調査区2北壁断面図 1 : 50

TK23～TK47型式の須恵器で、杯Hの蓋と身が3組、および甌、直口壺がまとまって出土した。掘方については幾度も検討したが、確認できなかった。これらは第一次整地の暗褐土整地の後に埋置されており、古墳周溝などの遺物が偶然遺存していたものではなく、整地以降で礫を敷く以前の段階に置かれたものである。（小田裕樹）

藤原宮期の遺構

礫敷広場SH10800 調査区全面に広がる。藤原宮造営に伴う橙褐色粘質土の第二次整地土の上に、部分的に黄褐色の整地土を薄く施し、その上に径3cmないし5～10cmの礫を敷き詰める。礫の残存状況はきわめて良好である。自然地形は北に向けて低くなっているが、この広場は南門基壇南方約20mの位置から南門に向けて高くなっている。特に調査区北端から約3mの範囲SX10810は、当初の整地面上に約35cmの盛土を施して嵩上げしている。この高まっている部分は10世紀の東西溝SD10804によって壊されているが、部分的に残存する礫の状況から判断すると、段をもつてではなく、なだらかに上がっていくものと考えられる。南門をはじめとした大極殿院を高めて視覚的な効果を図るとともに、排水の効果をもたらせる工夫がみて取れる。SX10810の上面では、礫敷が削られている部分で凝灰岩の粉末が面的に広がる状況が確認できる。凝灰岩切石で舗装していた可能性もあるが、高松塚古墳の調査では墳丘版築層で凝灰岩粉が散布する面を多数確認し、湿気抜きと推定されている（『紀要2008』）ことから、これも湿気抜きの目的であろう。なお、礫敷は全

て写真測量をおこなった（本書3頁参照）。

柱穴列SX10770～10778 調査区中央部で検出した。3m間隔で東西に9基並ぶ。SX10770～10777は東西約1.6～1.8m、南北約60cm、深さ約50cmの横長の柱掘方に、柱を2本東西に立て並べ、抜き取っている。柱の直径は約30～40cmと推定され、その間隔は心々で約60cmである。SX10771の断面観察では、抜き取りは1回とみるが、西側の柱穴のみ、2回以上の抜き取りの可能性も残る（図57）。一方、SX10778は一辺約1.2m、深さ約45cmの方形の掘方で、抜取穴は1つしかない。他の柱穴とは構造が異なり、性格か施工の時期差を示すものであろう。礫敷広場との関係は、礫を敷き詰めた段階で所定の位置に柱穴を掘って柱を立て、掘方部分には再度礫敷を施す。そのため、掘方部分の礫は周辺の礫に比較してやや大ぶりで敷き方に乱れがあり、全体にやや盛り上がっているものが多い。柱を抜いた後には、径10～20cmの大ぶりの礫を埋め込んでいる。これらは後述するように、儀式の際に立てた幡の柱を支える幢竿支柱である可能性がきわめて高い。構造からみて、当初はSX10770～10777を設置し、後にSX10778を加えた可能性がある。調査区内では9基検出したが、中軸線で折り返すと、2本柱を併置するものは13基、1本柱のものを加えると15基あるものと推定できる。南門階段の南端からは100尺（30m）の位置にあり、2本柱を併置する型式の東端であるSX10777は南門基壇東端の南延長とほぼ一致する。

柱穴SX10760 調査区西端近く、SX10770の北約9mの位置で検出した柱穴。朝堂院の中軸線上にのり、南門階段の南端からは70尺（21m）の位置にある。また、東西の延長は、朝堂院第一堂の北妻とほぼ一致する。掘方は一辺約1.9mで、深さは約90cmである。抜取穴の状況から、柱の太さは約70cmと推定される。掘方底では柱が重みに

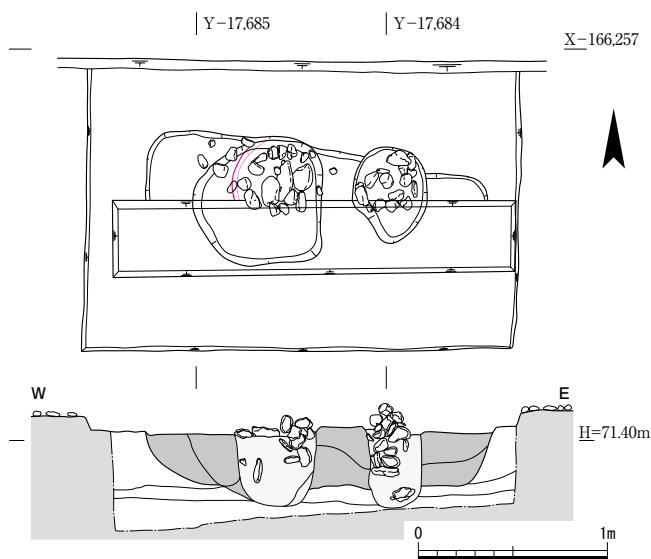


図57 SX10771平面・断面図 1:40

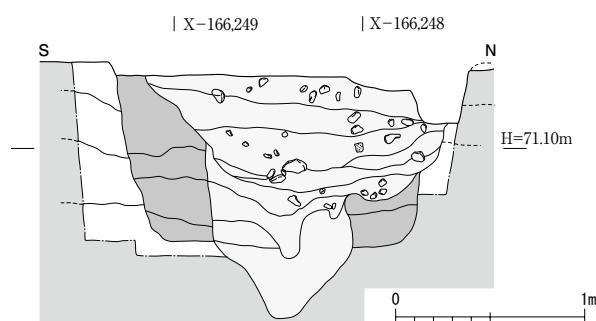


図58 SX10760南北断面図 1:40

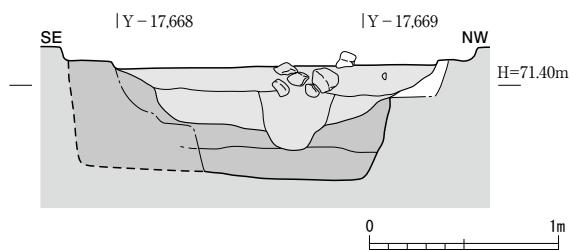


図59 SX10766東西断面図 1:40

より沈み込んだ痕跡がみて取れ、柱の先端は尖らせていたようである。礫敷を除去して検出したが、柱抜取穴内にSX10770～10778と同様に礫が入ることから、礫を敷いている段階で掘ったものと考えられる。

柱穴群SX10765～10767 南門基壇の南方、拡張区東半部で検出した3基の柱穴。SX10767とSX10766は南北に5.4m離れて並び、その5.1m西にSX10765が位置し、全体で三角形の配置となる。一辺約1.6mの方形の掘方で、深さは約80cmである。周辺には他に対応する柱穴はないので、建物になるわけではない。礫敷を除去した段階で検出したが、柱抜取穴には礫が入り、礫敷上でも大ぶりの礫が盛り上がった状況で見えていたため、礫敷以後のものである。

東西溝SD10785 調査区北寄りにあり、幅約1.1m、深さ約45cmを測る。礫敷の下にあり、素掘溝として機能した後に、砂と礫、瓦で埋め戻し暗渠としている。東に延長すると、第107次調査で検出した藤原宮造営期の排水溝と考えている東西溝SD9085につながる可能性が高い。調査区の自然地形は南から北にかけて下がっていくが、SD10785を境に北方は南門周辺の高まりSX10810に向て整地を上げていき、この部分が最も低くなる。藤原宮期にも朝堂院北端の暗渠排水溝として機能していたのであろう。

石詰暗渠SD10780 調査区中央を、南端からSD10785まで延びる。幅約1m、深さは約20cmで、内部に5～10cmほどの大ぶりの礫と、砂を詰める。周辺の水を集めて、SD10785に流す暗渠と考えられる。

南北溝SD10790 調査区西端から約12mの位置にある。幅約1m、深さ約15cmで礫を詰めている。SD10785以北ではわずかな凹みしか確認できず、南門付近まで延びていたかは不明である。礫敷広場内に設けられた、南門から南へ延びる通路状施設の東側溝の可能性もある。

藤原宮廃絶後の遺構

土坑SK10806・10807 調査区北端で一部を検出した。ともに内部に凝灰岩の切石や瓦を捨て込んでいる。凝灰岩は、南門基壇の化粧石の可能性がある。

土坑SK10768 拡張区東端で一部を検出した。南北長は約2.5mで、10世紀後半の土器が出土した。調査区外に延びるために完掘はしていないが、井戸になる可能性もある。

通路状遺構SX10779 調査区南端で検出した。瓦や砂を東西に土手状に盛り上げている。東に延長すると、朝堂院東第一堂のほぼ中央の位置にあたる。朝堂院地区では、平安時代後半に、各殿舎基壇の高まりを利用した宅地が展開することがこれまでの調査で確認されており、東第六堂の調査では基壇周辺に瓦を盛り上げた通路状遺構を検出している（『紀要2006』）。本例もそれに類するものであろう。

（玉田）

3 出土遺物

木簡 運河SD1901Aから木簡27点（うち削屑13点）が出土した。小断片や墨書不鮮明なものが大半を占める。確実に読み取れる木簡は、図60に示した1点のみである。上下両端折れで、左右両辺は二次的割截の可能性がある。厚さは8mmあり、木簡としては厚みのある部類に入る。墨書は現材の下半分のみにある。1文字目は片仮名の「マ」のような字形であるが、意味的に「又」とあると判断した。2・3文字目「遠水」は下に「海」と続くと推定される。遠江の古い表記である。第20次調査で同じ運河から「前玉評／大里評」（武藏国評名）の墨書瓦が出土しており、藤原宮・京の造営に東国の人々が徵發されたことが指摘されている。本木簡も同様の意味をもつであろう。なお、本木簡は「又」とあることから、複数の国名が書かれていた可能性がある。



図60 SD1901A出土木簡

（市 大樹）

瓦類 整理用コンテナにして353箱出土した。集計がほぼ終了した軒瓦について報告する。軒瓦は245点（軒丸瓦123点、軒平瓦122点）出土した。藤原宮式軒丸瓦は8型式15種68点、軒平瓦は7型式17種90点が識別可能であった（表8）。このうち、建物廃絶時に廃棄された資料に限定すると、6275A（23点）-6643C（18点）の出土量が最も多い。軒瓦の出土点数が少なかった大極殿院南門の調査においても、それぞれ5点ずつ出土した。よってこのセットが、大極殿院南門や南面回廊の所用瓦の一セットであったことは推定できよう。近接する朝堂院回廊東北隅や、東樓と推定される大極殿院東方の礎石建物SB530がこのセットを所用瓦とする第100次調査の所見（『年報2000-II』）とも矛盾がない。南門と南回廊が、朝堂院回廊などと一連で造営された可能性は高い。

今回出土した6275A-6643Cについては、大きく、胎土に砂粒を多く含むNもしくはPグループ（石田由紀子「藤原宮出土の瓦」『飛鳥白鳳の瓦づくり』奈文研、2008）と胎土にクサリ礫を含む高台・峯寺瓦窯産のものの二者がある。すでに、諸々の特徴から前者→後者の前後関係が想定されている（石田前掲）。また、6275Aは3段階変遷案（播磨尚子「内裏地区の調査 瓦磚類」『年報2000-II』）の1~2段階の資料を中心である。

大極殿院や朝堂院などの宮中枢部以外で、6275A-6643Cのセットが葺かれた可能性の高い場所には、東面北門地域がある（『藤原概報10』）。ここで出土した資料の胎土は砂粒を多く含むNもしくはPグループに属し、かつ6275Aはほぼ1段階に限定される。一方で、前述のSB530や朝堂院回廊東北隅ではNもしくはPグループとされる胎土の資料はみられず、6275Aは3段階の資料が大半である。今回出土した大極殿院南門や南面回廊所用の6275A-6643Cは、胎土や範傷から両者の中間に位置

表8 第153次調査出土軒瓦集計表

軒丸瓦				軒平瓦				
型式	種	点数	型式	種	点数	型式	種	点数
6233	Aa	2	6275	E	1	6561	A	5
	B	3		I	2	6641	Ab	1
	不明	1		C	2		C	1
6273	A?	1	6278	G	2		E	2
	B	2	6279	Aa	4		F	3
	B?	1		Ab	3	6642	B	1
6274	Ab	4		B	7		B?	1
	Ab or Ac	6	6281	A	6		C	5
	Ac	2		A or B	1	6647	Ca	3
6275	A	24					不明	1
	A?	1					重弧	2
	B	3					Ab	1
	C	3					B	2
							合計	122
								123

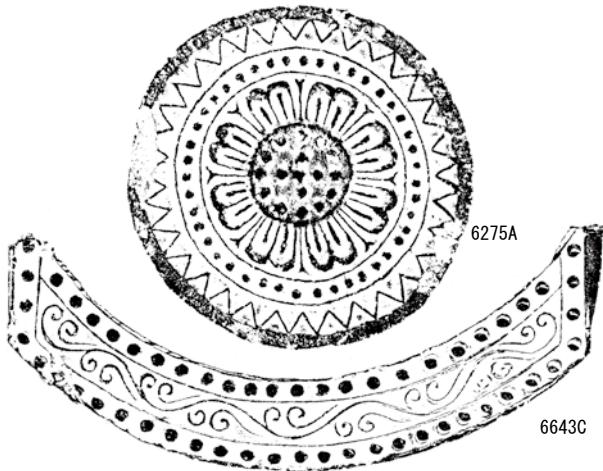


図61 大極殿院南門所用軒瓦 1:4

付けることができる。よって、このセットからみると、東面北門→大極殿院南門・南面回廊→朝堂院回廊東北隅・東樓SB530という屋根葺きの順序を想定できよう。

次いで、宮造営段階の瓦について見てみると、礫敷広場SH10800造成以前にあたる遺構SD1901A、SD10801A・B、SD10795や整地土（暗灰砂質土）からは、表9のように多様な型式の軒瓦が出土した。運河SD1901Aの埋め立て時に廃棄されたと判断できる瓦溜SX10812では6643Aaが22点出土した。6643Aは先行研究や今回の検討から以下の変遷を推定できる。

まず、範割れを起こす前の段階Aa1は、砂粒をほとんど含まない精良な胎土で日高山瓦窯産とされる。次に瓦範中央に縦方向の大きな範傷が生じる段階Aa2は、胎土に日高山瓦窯産と推定される精良なものと、砂粒を非常に多く含む粗いものの二つがあり、この段階でおそらく、日高山瓦窯から他瓦窯へ範が移動している。6643AaやAbの砂粒を多く含む胎土はこれまでPグループとされてきたが、近江俊秀の指摘のように6274Cの一部とともに

表9 宮造営期遺構出土軒瓦集計表

軒丸瓦								
型式	種	SX10812	SD10801A	SD10801B	SD10795	SD10785	SX10820	整地土
6233	Aa	1			1			
	B		2			1		
6274	Ab			1				
	Ac				1			
6275	A					2		
	C					2		
6279	Aa				1		1	
	B							
6281A				1				
軒平瓦								
型式	種	SX10812	SD10801A	SD10801B	SD10795	SD10785	SX10820	整地土
6641	Ab				1			
6643	Aa	22		2	1		2	
	C					1	1	
6646	Ba					1	1	
	C						1	
6647	Ca					1	1	1

にQグループに含めるべきであろう（近江俊秀「藤原宮の造瓦（上）」『古代文化』52、古代学協会、2000）。そして改範されて茎に大字葉の一つがついてしまう段階（Ab）がある。胎土にはQグループのものと、やや砂粒を含むが精良なもの、クサリ礫を多く含む高台・峰寺瓦窯産と推定できるものの三者がある。

以上のように6643Aは大きく、日高山瓦窯（Aa1、Aa2）→Qグループ（Aa2、Ab）→高台・峰寺瓦窯（Ab）という瓦範の移動を読み取ることができる。製作技法には、それぞれに共通点と相異点がある。まず、共通点としてAa1～Abに顎面や凹面広端にハケ目が残る資料が確認でき、Aa2・Abに瓦当脇区の外に無文部を有する資料がある。また、全体的に顎の深さが1.3～2cmと深く、それがAb段階まで維持される。相異点としては顎の長さがある。日高山や高台・峰寺瓦窯産と推定されるものは6.3～8cm程であるのに対し、Qグループ資料は8～10cm程と長い。以上の特徴は瓦範の移動に伴う製作工人の違いを反映するのであろう。

瓦溜SX10812出土の6643Aaの内訳は精良な胎土のAa2（図62-1）が1点、QグループのAa2（同-2・3）が21点であり、Aa2の段階で運河SD1901Aが埋め立てられたと判断できる。大垣所用瓦では、推定日高山瓦窯産の6643Aa1が西面中門の調査で27点、Qグループの6643Abが東面北門の調査で5点出土している。瓦溜SX10812で出土した6643Aa2は時期的に両者の中間に位置づけられる資料であり、大垣所用瓦として製作、持ち込まれた後に運河埋め立てに利用された可能性が高い。よって、運河SD1901Aは大垣の屋根葺作業が進行する過程で埋め立てられたと推定できよう。

運河と機能した期間が同様の斜行溝SD10801Aや沼状遺構SX10820、あるいは運河の埋め立て後に機能した斜行溝SD10801B出土の軒瓦も、大垣所用のものが主体である。一方で、礫敷を施す直前まで機能した南北溝SD10795では、それぞれ1点のみではあるが、朝堂院所用の6281Aや時期的に後出する6641Abが出土した。これは、朝堂全体の完成を待って一斉に礫を敷いたといふこれまでの調査成果を傍証するものといえよう。

なお、資料の実見・観察に際しては、奈良県立橿原考古学研究所付属博物館の協力を得た。記して謝意を表したい。

（高田貴太）



図62 瓦溜SX10812出土軒平瓦 1：4

土器・土製品 整理箱で43箱分出土した。藤原宮期やその直前の土師器、須恵器の他、奈良時代中頃の土器、平安時代の灰釉陶器や緑釉陶器、10世紀の黒色土器と、硯、土馬などの土製品、埴輪などがある。奈良時代中頃と10世紀のものは、第148次調査で検出した掘立柱建物や井戸と同時期のものであり、本調査区でも一連の土地利用をしていたことがわかる。以下、土器溜SX10816と運河SD1901A出土土器を中心に述べる（図63）。

SX10816出土土器 整理箱2箱分が出土した。これらの土器は、出土状況より礫敷以前の第二次整地に際して一括廃棄されたものと考えられる。土師器（1～4）と須恵器（5～12）があり、土師器は杯A、杯C、杯H、皿A、甕、竈、須恵器は杯A、杯B、杯B蓋、杯G、壺、甕が出土した。須恵器壺には漆が付着している。1は土師器杯A。やや厚めで口縁端部は丸みをもつ。a1手法で調整し、内面に二段放射暗文とラセン暗文を施す。径高指数は29.8。2は杯C。a0手法で調整し、内面に放射暗文がある。3・4は皿A。両者ともに口縁端部が肥厚する。3はa0手法で調整し、内面に放射暗文を施す。4はやや器高が深く、a0手法で調整し、底部外面には木の葉痕が残る。内面に放射暗文とラセン暗文を施す。

5～8は須恵器杯B蓋。いずれも頂部にロクロケズリを施す。5・6は平坦な頂部から緩やかに下降し、口縁部内面にかえりがつく。7・8は扁平な形態で、かえりがない。幅広の擬宝珠状のつまみをつける。9～11は杯

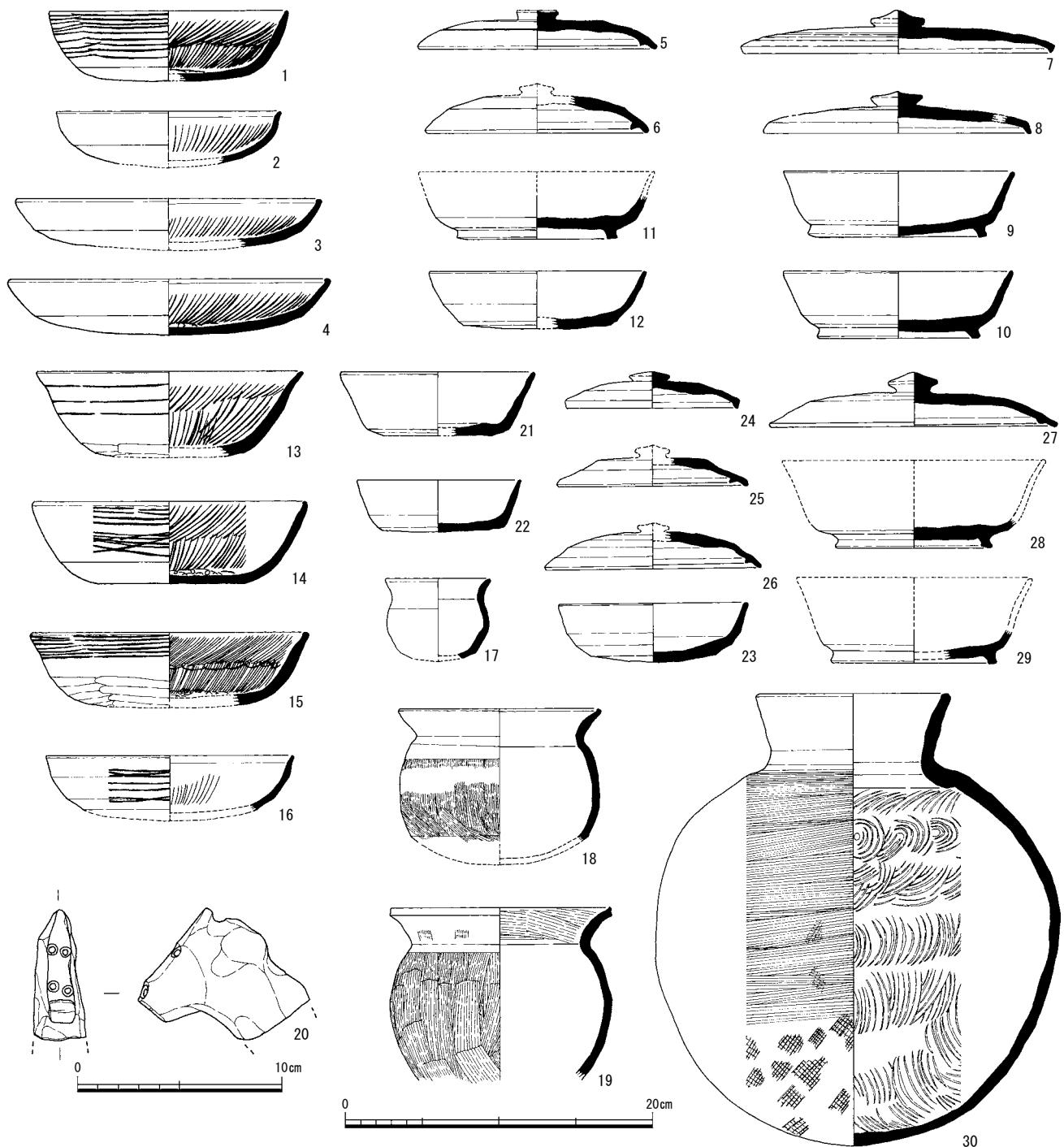


図63 第153次調査出土土器 1:4, 20のみ1:3 (1~12: SX10816, 13~30: SD1901A)

B. 口縁部と底部の屈曲点の位置が高い点が共通する。9は高台が底部縁辺につき、底部ヘラ切り不調整で、やや新しい様相を示す。10・11の高台は底部の内側につく。10は底部をヘラケズリし、11はヘラ切り不調整である。12は杯A。口縁部は外方に開き、底部はヘラ切り不調整である。以上の土器は飛鳥IV～Vの特徴を示す。

SD1901A出土土器・土製品 整理箱で10箱分出土した。今後、過去の調査で出土したものも含めて整理をおこなう予定である。運河機能時の堆積である粗砂層と細砂層から出土した代表的な土器と土馬のみ報告する。

土師器(13~19)は杯A、杯B、杯B蓋、杯C、杯G、杯H、皿A、高杯A、高杯C、鉢A、壺A、壺B、甕A、

甕B、竈、須恵器(21~30)は杯A、杯B、杯B蓋、杯G、鉢A、壺B、壺、甕がある。13~15は土師器杯A。13は口縁部が外方に大きく開く。b1手法で調整するが口縁部のミガキは粗い。内面に二段放射暗文を施す。14はa1手法で調整し、内面に二段放射暗文とラセン暗文を施す。15はやや浅く、b1手法で調整し、内面は二段放射暗文の間に連弧暗文を施す。杯Aの径高指数は26.9~32.5で平均は29.8。16は杯C。外面に粗いミガキがある。17は壺B。底部に焼成後穿孔がある。18・19は外面ハケ目、内面ナデ調整の大和型甕A。18は口縁端部を丸くおさめ、外面に墨状の付着物が認められる。19は口縁端部をつまみ出し、内外面にススが付着する。20は土馬。眼と鼻孔を竹

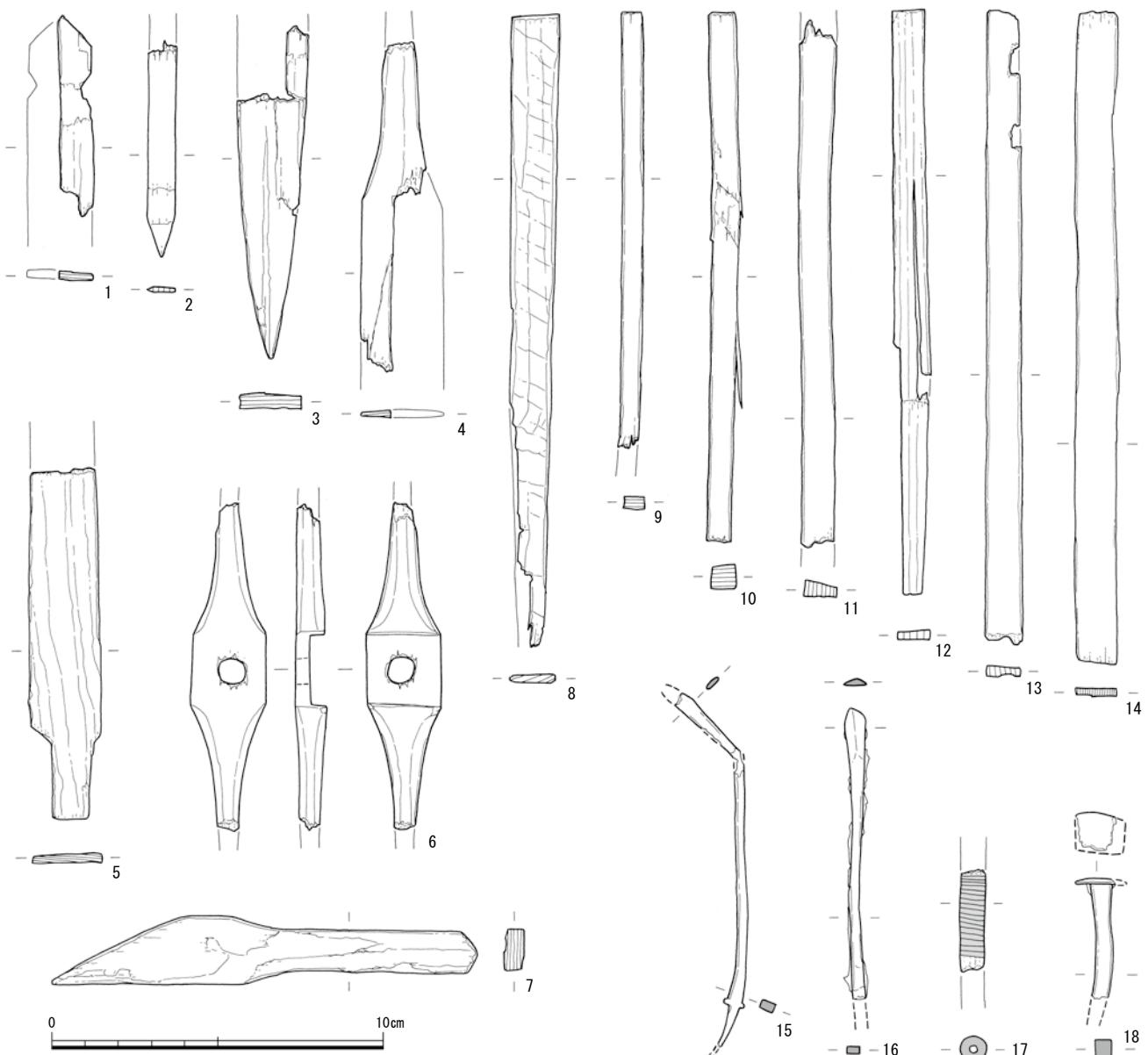


図64 第153次調査出土木製品・金属製品 1:2

管で穿つ。手綱などの表現はない。

21~23は須恵器杯A。外面底部はいずれもヘラ切り不調整。23は灯火器として使用されており、内面にはススが付着している。24~27は杯B蓋。口径の小さな24はかえりがなく、扁平なつまみがつく。27は高い擬宝珠状のつまみをつける。杯B(28・29)は全形を復元できる良好な資料が少ない。28は、外へ張り出す高台が内側につき、29は底部縁辺につく。両者ともに底部はヘラ切り不調整。30は完形の甕。長胴丸底の体部に直線的な口縁部がつく。以上の土器は飛鳥IVの特徴を示す。(小田)

木製品 木製品は運河SD1901Aの砂層・粗砂層から約60点出土した(図64)。

1は人形または斎串の破片。小片でどちらか確定し難い。2・3は斎串の破片。残存長はそれぞれ6.3cmと10.0cmである。4は杓子。両端を欠き、断面形はレンズ状を呈する。残存長9.9cm。5は刀形。一端を茎状に加工する。

残存長10.6cm。6は糸巻横木。棹木の接続部分を欠く。残存長9.9cm、最大幅2.3cm。7は完形の板状品で、頭部の表現から鳥形と考えられる。全長12.8cm。8は細長い薄板で、一方が幅広になるため檜扇と判断した。表面に丁寧な削りを施す。残存長19.1cm。9~14は籌木であろう。いずれも平滑に加工し、完形品の全長は約16~20cmと多様である。

金属製品 15・16は柳葉形の長頸鎌。15は矢柄の取り付け部分に突起をもつ、いわゆる棘状閥を呈する。両端を欠き、残存長11.6cm。16は茎部を欠くものの、鎌身部分の残りは良く、片丸造りで稜をもつ。残存長8.8cm。17は矢柄の破片。矢竹の口巻き部分に樹皮を螺旋状に巻き、黒漆を塗る。上記の鉄鎌2点とは離れて出土した。18は方頭釘の破片である。

なお、木製品と金属製品以外には鉄滓、銅滓、滑石製紡錘車、漆の漉布が出土している。



図65 SD1901A出土動物遺存体

植物遺存体 運河SD1901Aから植物の種子が出土した。ナツメ、ウリ、ヒヨウタン、モモ、スモモ、クリの堅果片などがある。
(木村理恵・豊島直博)

動物遺存体 運河SD1901Aや斜行溝SD10801Bなどから動物遺存体が出土し、ウシ、ウマ、イヌ、ニホンジカが同定された。また、SD1901A内の土壤を水洗して微細遺物を回収した結果、板鰓類の椎骨が検出された。

なお、運河SD1901Aの粗砂層からはカワニナなど清流に生息する巻貝の殻も出土し、滞留せずに流れている状況が推測できる。
(山崎 健:埋文センター)

4 柱穴列について

SX10770～10778 藤原宮期で最も注目される遺構は、東西に並ぶ9基の柱穴列である。SX10770～10777の8基は、1基の柱掘方に2本の柱を同時に立てるもので、通常の建物や壇とは考えにくい。これについては、朝鮮半島各地に残る幢竿支柱との関連が想起される。韓国では、統一新羅時代から石柱を2本立て並べてその間に幢竿を

立てる幢竿支柱がある。たとえば慶州市芬皇寺では、現境内外に地表からの高さ約3.7mの方柱状の石柱が約60cmの間隔で立ち、634年の創建と近い年代が与えられている。また、685年創建の慶州市望徳寺にも、高さ約2.5mの二本の石柱による幢竿支柱が残る。地下を調査した例はきわめて少ないが、深さ1m以上掘り下げ、石柱を埋めているようである。本例は柱穴の深さが約50cmであり、韓国の諸例のような長大な幢竿を立てたとは考えにくいが、構造的にみてそれと同様の性格が考えられる。

日本における幢竿支柱の例は、宮殿遺跡としては飛鳥淨御原宮(権考研『飛鳥京跡Ⅲ』2008)、平城宮(『平城学報XV』)、長岡宮(向日市教委『向日市埋蔵文化財調査報告書』第66集、2005)があげられる。飛鳥淨御原宮例は支柱が2本である点は本例と共通するが、1本が太くもう1本は細いもので、主柱と支柱の関係とみられ、藤原宮例とは構造が異なる。また、位置は正殿の四隅に設けたものである。平城宮例と長岡宮例は柱穴列が東西に並ぶことは同じだが、1基の柱掘方内に3本の柱を埋め込む型式であり、位置は朝庭ではなく大極殿院内の南門の北で、数も7基である。また、寺院遺跡では山田寺(奈良県桜井市:南門の南に6基と4基×2)、新堂廃寺(大阪府富田林市:南門の南に6基)、安芸国分寺(東広島市:中門南に2基)、武藏国分尼寺(東京都国分寺市:金堂南に2基×2と尼坊南に4基×2)、下野薬師寺(栃木県下野市:塔の西に2基)、夏井廃寺(福島県いわき市:東門推定地付近に1基)など、多数の例があげられる。

今回発見した柱穴列SX10770～10778は、以上の諸例と共に通点はあるものの、差異も大きい。最大の特徴は、宮殿の朝庭にあることと、その数であろう。『続日本紀』大宝元年正月1日条には、元日朝賀に鳥形、日像、月像、四神の7本の宝幢を立てたという記事があるが、SX10770～10778は本数からみてこれにあてることは困難である。平城宮例のように7本の宝幢を一列に立てるものであるとすれば、それは南門北大極殿院内に立てていた可能性が高まったと言えよう。一方、今回発見した幢竿支柱は朝庭では初の検出で、唯一の事例である。平城宮では該当する場所の調査は終了しているが、見つかっていない。文安元年(1444)成立とされる『文安御即位調度之図』(神宮文庫編『即位の礼と大嘗祭—資料集—』1990)には、前述の7本以外にもさまざまな幡を立てた

情景を描いており、今回検出した柱穴列も同様のものと考えられる。また、1基の柱掘方内に2本の支柱を立てるこことも特徴的である。断割調査の所見では、柱穴は深さ約50cmであり、新羅の幢竿支柱と同様の構造であるとすることは困難であるが、その関係は今後の検討課題としたい。

SX10760・10765～10767 磔敷広場SH10800には、他に4基の大規模な柱穴SX10760・10765～10767がある。いずれも単独で存在したり、建物としてはまとまらないもので、深さが90cmほどあることからも、幢竿支柱とすることが妥当である。柱穴の規模からみて、かなりの太さと高さのある柱を立てたものであろう。位置は、SX10760が朝堂院の中軸上にあり、SX10765～10767は正三角形をなし、かつSX10766・10767が南北に並ぶもので、計画的な配置をとっている。未調査である西側にも同様の柱穴群があるとすれば、その数は計7基となり、『続日本紀』大宝元年正月1日条に記された7本の宝幢との関連が問題となってこようが、現状では速断できるものではなく、南門北側の大極殿院の調査成果を待って結論を下すべきである。
(玉田)

5 まとめ

遺構変遷と宮中枢部の造営過程 本調査と第148次調査の成果から、藤原宮中枢部における造営過程がより細かな遺構変遷として明らかになりつつある。これらは大きく6段階に分かれる。まず、①周辺一帯を整地（第一次整地）し、先行朱雀大路を造る。②運河SD1901A、斜行溝SD10801Aを掘削する。沼状遺構SX10820もこの時期の可能性がある。③運河SD1901Aと斜行溝SD10801Aを埋め、斜行溝SD10801Bを掘削する。斜行溝SD10801Bが南北方向から南門を避けるように北東方向へ流れを曲げることから、この時南門の造営が始まっていったことがわかる。南門の掘込地業範囲内は、運河SD1901Aを浚渫した後に互層状に土を積むことで地盤を固めている。また、南門周辺は基壇状に高めてSX10810とし、南北溝SD10795を掘る。④再び一帯を整地（第二次整地）し、東西暗渠SD10785、南北暗渠SD10780の排水施設を設置する。この時、まとまった遺構としては確認できていないが、南門周辺に柱穴が存在することから仮設建物などを建てていた可能性がある。⑤礎を朝庭全面に敷く。南北

溝SD10790を造り通路状施設を設ける。これにより朝庭SH10800が完成する。そして、⑥幡などの朝庭でおこなわれる儀式用の諸施設を設置し、儀式の場として利用が始まる。

これらの遺構変遷からは、藤原宮中枢部の「資材搬入」→「中枢建物の造営」→「朝庭空間の整備」→「儀式の場としての利用」という造営から完成、使用に至る一連の過程が明らかになった。各段階の詳細な時期については遺物の年代観も含めた検討が必要だが、藤原宮全体の造営過程として、③は瓦からみて大垣の屋根葺き作業が進行する段階、⑤が朝堂院の完成した段階である可能性が高い。一方、今回の調査では第148次調査で検出した下層柱穴、先行朱雀大路東側溝SD10705西の南北溝SD10796、沼状遺構SX10820などの性格などについて明らかにするには至らなかった。今後、朝庭の調査を継続していく中で解明されることが望まれる。

礎敷広場SH10800 朝庭の礎敷広場SH10800を検出した。礎の残存状況は良好で、1300年前当時の姿をそのまま示すものである。南門基壇の近辺は一段高く造成し、かつ後にさらに嵩上げしていることが判明したことは、重要な成果である。また、礎敷広場内には暗渠を設けて排水系統を整備していたことなど、その機能や構造の詳細が明らかとなつたことも注目される。

幢竿支柱 東西に並ぶSX10770～10778と、SX10760・10765～10767の2種類の幢竿支柱と考えられる柱穴群を検出した。これは藤原宮では初めての検出で、宮殿遺跡では平城宮、長岡宮、および飛鳥淨御原宮に次ぐ事例である。しかし、その構造と位置や本数には差異があり、これまでの調査成果による知見や文献の記載とはまた異なる儀式の様相の一端が明らかになったと言えよう。日本最初の本格的な都城である藤原宮でこうした遺構を発見したことは、既に完成された儀式の形態が成立していたことを改めて示すもので、以後の宮殿儀礼の研究に貴重な事例を加えた。
(小田・玉田)

朝堂院東地区・南面大垣の調査

—第152-7次

1 はじめに

本調査は、農業用水路の改修工事に伴う現状変更の事前調査であり、橿原市教育委員会の委託を受けて実施した。調査地は第149-10次調査区（『紀要2008』）から東西道路を隔てた南方9mを北端とし、別所町集落から北流する水路部分の南北96m、幅約2~2.5mである。ここは藤原宮朝集殿院の東方にあたる官衙域であるとともに、宮南面大垣や大垣をはさんで内外につくられた濠があり、これらの遺構の検出が期待された。周辺では、本調査地の東方で、南面大垣および内濠・外濠が検出されている（奈文研『高所寺池発掘調査報告書』2006）。調査面積は約210m²である。調査は2009年1月13日に開始し、2月16日に終了した。

2 検出遺構

調査区の基本層序は上から旧耕土（0.7m~1m）、水路堆積土（粗砂混灰色砂質土:0.2~0.6m）、地山である。ただし、後述する溝SD10852の北約7mでは、水路堆積土の下に、上層から明褐色シルト（約0.2m）、暗赤褐色シルト（約0.2m）、黄褐色シルト（約0.2m）の3層を確認している。また、東西塀SA10850の北10mでも、水路堆積土の下に褐色シルト（約0.3~0.4m）を確認している。これらは藤原宮期の整地土と考えている。なお地山は基本的に粘性のある青灰色シルトであるが、暗青灰色粗粒砂の箇所もある。遺構は褐色シルトの整地上面および地山面で検出した。検出面の標高はおよそ74.6m~75.0mである。

調査区は現農業用水路およびその位置にあったと推定される旧水路（以下あわせて「水路」と呼ぶ）と重複するため、流水による浸食、しがらみや木杭による攪乱が著しく、地山面まで削平されている場所が多い。主な検出遺構には、藤原宮南面大垣、南面内濠、南面外濠、東西塀1条、掘立柱建物1棟、柱穴、東西溝2条（うち1条は先行条坊六条条間路北側溝）、藤原宮期整地の下層にある素掘溝2条、小穴などがある。小穴は時期不詳である。

藤原宮期の遺構

南面大垣SA2900 調査区南端の北約23mの位置で柱穴

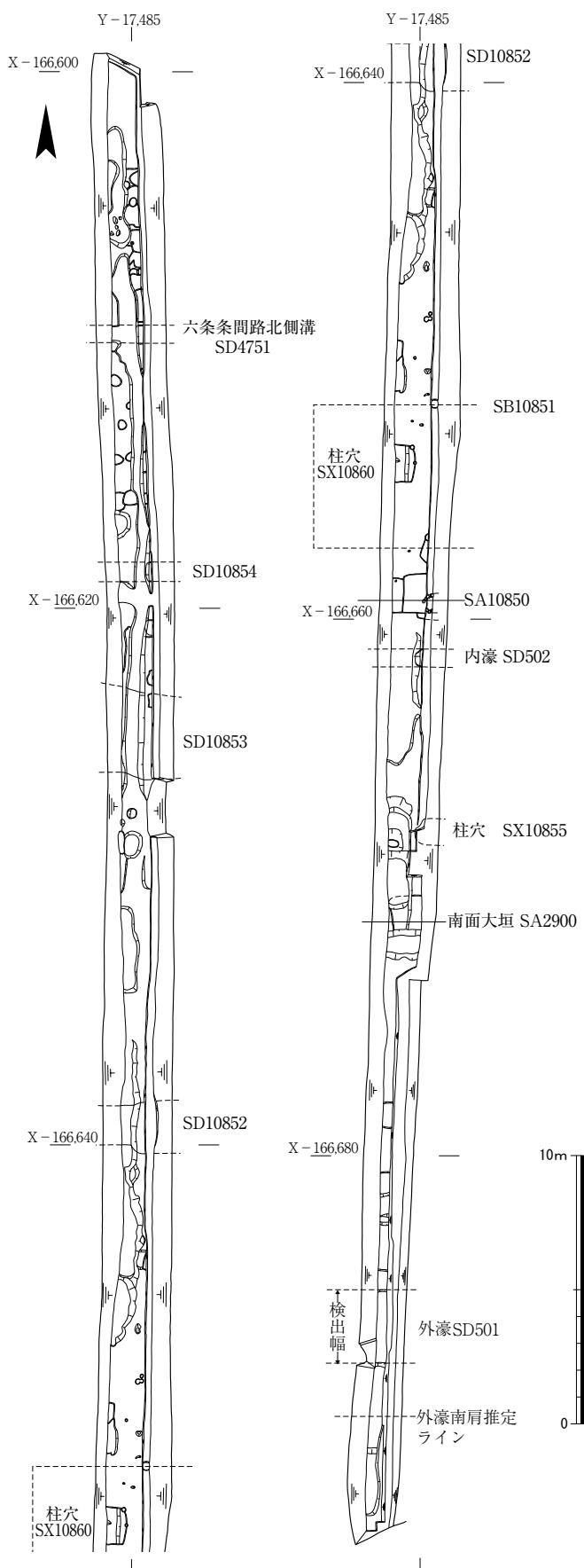


図66 第152-7次調査遺構図 1:250

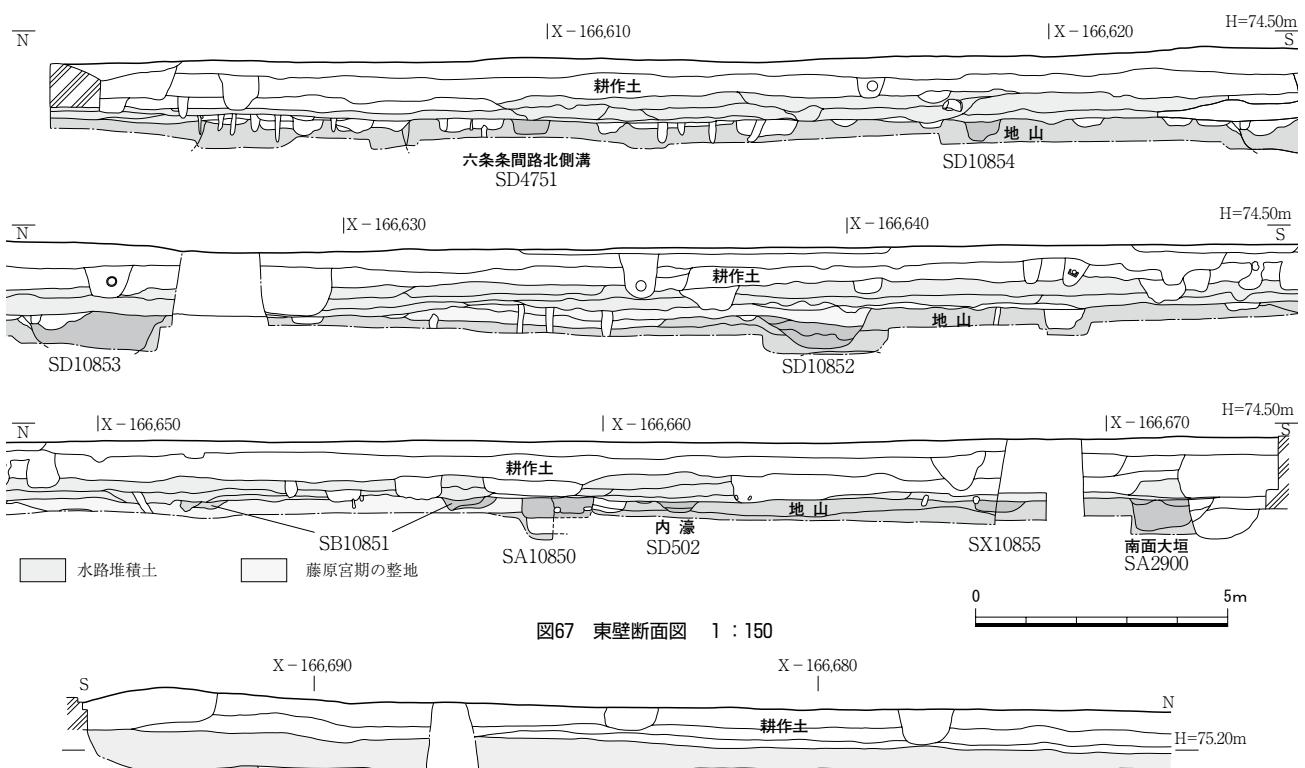


図67 東壁断面図 1:150

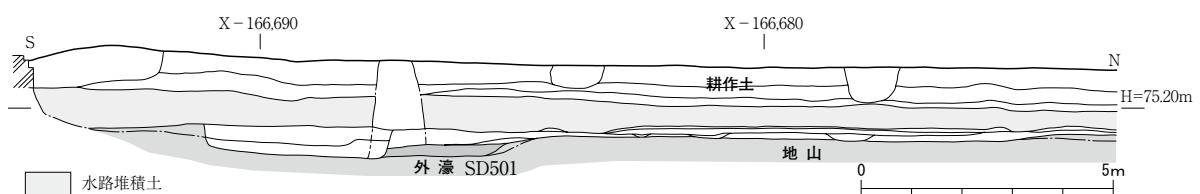


図68 南辺部西壁断面図 1:150

1基を確認した。柱穴の南肩が東西溝で削られ、北西部も水路により削平を受けており、南北1.3m程度、東西1.2m程度が残存している。本来の柱穴掘方の規模は不明だが、柱穴掘方の残存状況および既調査を参考にすると、一辺が1.5m程度に復元できる。東壁面で確認した深さは約0.6mである。掘方埋土は淡黄色のシルトブロックを多く含んでいる。抜取穴は不明瞭で確認できなかった。

南面内濠SD502 南面大垣の北9.5mにある素掘りの東西溝で、検出した幅は0.85m、深さは0.2mである。上部は後世の削平により残存しておらず、底部付近のみを検出したものとみられる。

南面外濠SD501 南面大垣の南約14mにある素掘りの東西溝で、検出した深さは約0.2mである。南肩が異なる東西溝によって削平されており、検出できた幅は約2.7mである。外濠南肩を削平する東西溝は幅3.4mであり、この間に外濠の南肩があると考えられることから、外濠の幅は最大でも6.1mとなる。南面外濠の幅は15大尺（復元値5.31m）であったと想定されていることより（井上和人「古代都城制地割再考」『奈良国立文化財研究所 研究紀要』VII、1984）、平面図では15大尺で復元した。

東西堀SA10850 内濠から北へ2.5mの地点で、柱穴を検出した。掘方底部の南東部には根巻石が残存している。



図69 第152-7次調査区全景（北から）

東壁にかかり東西幅は不明であるが、掘方南北幅は1.5mである。根巻石が径0.45m程度の円を描くように据えられていたため、柱の径もおよそ0.45mであったと推定できる。断割の結果、4基の柱穴が重複していることを確認した。北側にこれと対になって建物を構成する柱穴が存在しない点、この位置に柱穴が重複して掘られていること、内濠に接していることなどから、官衙等の南限を区画する東西塀と考えられる。

掘立柱建物SB10851 調査区中央部やや南よりに位置する。水路による攪乱のため平面では検出できず、東壁断面でのみ確認した。掘方は一辺約1mである。柱間は2.7m(9尺)で、梁行2間の東西棟と考えている。藤原宮期または以後の建物ではあるが、時期不詳である。

柱穴SX10855 大垣柱穴から北3mの位置で、一辺が約1mの柱穴1基を検出した。南北約0.85m、東西約0.3mを確認している。埋土が大垣柱掘方の埋土と類似し、淡黄色のシルトブロックを含むことから、藤原宮期の柱穴である可能性が高い。

柱穴SX10860 東西塀SA10850から北へ約5mに位置する。掘方の一辺が1.4mの柱穴であることから、藤原宮期の遺構と考えている。1基のみ検出しているため、どのような施設に復元できるかは、今後の調査に期待したい。

この他に、調査区北半の東壁面で、埋土に暗青灰色シルトをブロック状に含む小穴を5基確認した。また、六条条間路北側溝と東西溝SD10854の間で、小穴7基を平面で検出した。



図70 南面大垣SA2900（西から）

藤原宮期以前の遺構

六条条間路北側溝SD4751 調査区北端からおよそ10m南で検出した東西溝である。幅約0.8m、深さ約0.3mを測る。調査区の東壁から0.2m程度、および西壁から0.2m程度を平面で検出しているが、調査区中程は水路により削平されている。埋土は粘性のあるシルトと細粒砂が互層状に堆積している。遺物は出土していない。

東西溝SD10854 六条条間路北側溝SD4751の南方に東西方向の素掘溝を検出した。東壁断面と東壁から0.5m部分を平面で確認しているが、流路による削平のため、西側では検出できていない。幅は約0.7m、深さは約0.4mである。六条条間路北側溝SD4751の堆積土はラミナ状であり、流水があったことが想定できるのに対し、東西溝SD10854の埋土は暗灰色の粘質土である。

素掘溝SD10852 調査区中央部やや北よりに位置する。地山面で検出。幅約2.3m、深さ約0.8mの東西溝である。埋土は暗青灰色粘質土であり、遺物を含まない。上面が整地で覆われていることから、藤原宮期以前に形成された遺構である。SD10852からは埴輪片などは出土しなかったものの、上層の水路堆積土から埴輪が出土しており、古墳の周濠であった可能性も考えられる。

素掘溝SD10853 調査区北端から25m南に位置する。地山面で検出している。幅約2.8m、深さ0.7m以上のほぼ東西方向の溝である。埋土はしまりのよい暗青灰色の粘質土であり、遺物は含まない。溝上面のくぼみの一部が藤原宮期の整地で覆われている。

(木村理恵)



図71 東西塀SA10850（西から）

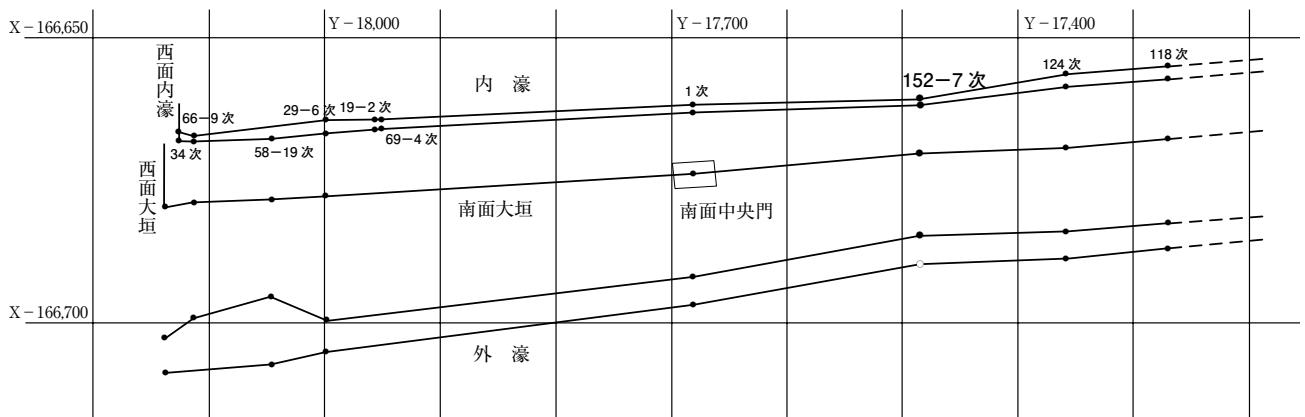


図72 南面大垣・内濠・外濠の座標

3 出土遺物

瓦類 藤原宮所用軒丸瓦5点、軒平瓦4点、中世巴文瓦2点をはじめ、丸・平瓦が遺物整理箱で30箱出土した。軒丸瓦は6276Cが2点、6275Aと6279Abが各1点出土している。軒平瓦は6641Cと6647Caが各2点、6643Cが1点ある。丸瓦248点(33.6kg)と平瓦802点(89.9kg)があるほか、道具瓦、中・近世の瓦が少量出土している。ほとんどが水路堆積土からの出土である。
(加藤雅士)

土器 増輪数点、藤原宮期の土師器、須恵器をはじめ、平安時代前半の黒色土器A類、緑釉陶器、中世以降の瓦質土器、陶磁器類などが整理箱9箱分出土した。量的には中近世の土器が主体を占める。

その他 南面外濠およびその南にある東西溝から木屑が少量出土した。水路からは「開元通寶」(初鑄621年)および「至和通寶」(初鑄1054年)が出土している。この他、獸骨や炭片も少量出土した。

4 まとめ

本調査は水路による攪乱や狭長な調査区という制約はあったが、ほぼ想定していた位置に、藤原宮南面大垣・内濠・外濠を確認することができた。加えて、内濠に北接して官衙区画塀や東西棟建物と考えられる柱穴を検出したことは、朝堂院東地区の土地利用を復元する一つの手がかりとなった。

また、ほぼ想定位置に先行条坊六条条間路北側溝SD4751を検出した。北側溝と南方の東西溝SD10854との溝心心間距離は約9mである。東西溝SD10854は六条条間路南側溝の推定位置より約1.5m南にずれるが、こ

の溝が南側溝であるとすると、側溝心心間距離が約9mとなる。藤原京左京六条三坊(藤原宮第47次『概報17』)で検出している六条条間路の側溝心心間距離が8.8mであり、本調査区で確認した溝も南側溝である可能性はある。しかし、宮域内先行条坊の小路の側溝心心間距離は6.25~7.1mの間であるとの指摘もあり、断定はできない(井上和人、前掲、1984年)。今後の調査に期待したい。

南面大垣と外濠の関係については、東にいくほど段階的に両間が狭くなるよう設定されていた、あるいは単に両者の方位の振れが異なるため、東にいくほど両間が狭くなる、という議論がある(井上和人「藤原宮南面外郭施設設定規格復元考」『紀要2004』)(入倉徳裕・小澤毅「藤原京六条大路の再検討」『紀要2008』)。今回の調査で検出した大垣と外濠の北肩との間隔は約14m(40大尺)である。既調査および今回の調査で得られた南面大垣の柱穴および内濠・外濠の北肩・南肩の座標は図72(奈文研『高所寺池発掘調査報告』2006、83頁Fig.65に加筆)の通りである。南面大垣東部では大垣、外濠の間隔は40尺に設定されていたという井上の指摘に合致するが、今後の調査で報告例が増えるのを待って再検討したい。

また、水路より12~13世紀以降の中近世および近現代に至るまでの土器類が数多く出土しており、12~13世紀頃に調査地周辺の土地利用に画期があったことを示している。藤原宮域における中近世の土地利用史も今後検討していく必要があろう。
(木村)

内裏西官衙地区の調査

—第152-6次

調査の経緯 本調査は、近畿農政局による農業水路の改修にともなう事前の発掘調査である。調査地は奈良県橿原市繩手町のJA橿原市鴨公支店駐車場に位置し、藤原宮の内裏西官衙地区に相当する。調査区は水路の新設区間の形状に合わせ、東西の最大幅8m、南北20m、総面積は62.5m²。調査期間は2008年12月1日～12月15日である。なお、周辺では本調査区以外にも配水管埋設にともなう掘削が複数箇所あった。立会調査によって個別に対応し、工事深度が遺構面に達しないことを確認した。

基本層序 層序は上から順に造成土の黄褐色砂質土、耕作土の茶褐色砂質土、古墳時代の土師器片を含む暗褐色粗砂、弥生土器を含む青灰色粘質土、自然流路の堆積土と考えられる黒灰色砂質土、青灰色粗砂である。茶褐色砂質土と暗褐色粗砂は調査区の南半部分のみで確認できた。藤原宮期の遺構は暗褐色粗砂の上面で検出し、検出面の標高は約69.1mである。

おもな遺構 暗褐色粗砂および青灰色粘質土の上面で東西溝2条、楕円形の土坑1基を確認した。調査区北側に位置する東西溝SD10840は幅約1.2m、深さ約50cmである。また、それよりも南側で確認した東西溝SD10841は幅約1.2m、深さ約30cmである。中世の土坑SK10842によって北側の溝の中心を確定できなかったが、2本の溝はほぼ平行し、心心間距離は7m前後であろう。藤原宮第11・16次調査で確認している藤原宮の先行条坊、四条条間路SF1731とは位置がずれるものの(『藤原概報5』)、宮内道路の両側溝である可能性がある。

土坑SK10840は東西約3m、南北約2.4mの楕円形を呈し、深さは約50cmである。埋土からは中世の羽釜が出土した。

出土遺物 出土遺物はコンテナ1箱程度で、土師器、須恵器、弥生土器などがある。瓦、木製品、金属製品は出土しなかった。

まとめ 本調査区では、西方官衙に関わる建物などは検出できなかったものの、東西溝2条と土坑を確認した。今後の調査によって西方官衙地区の様相が判明することに期待したい。

(豊島直博)

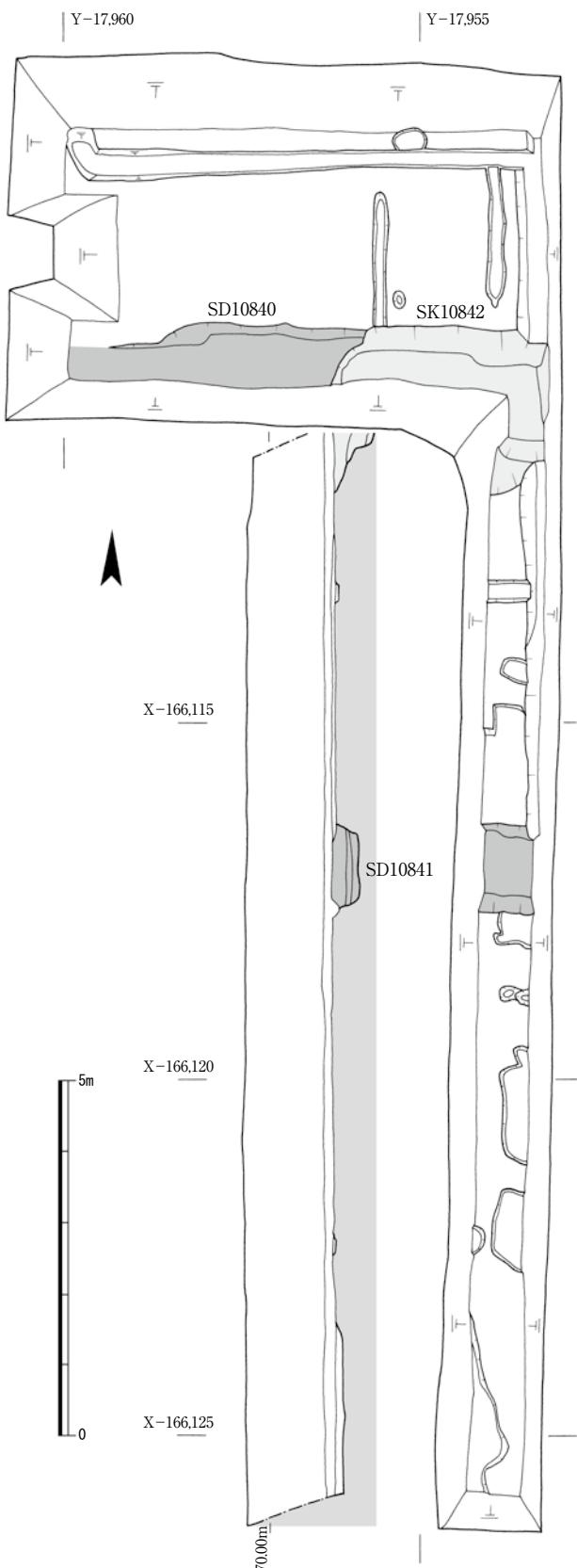


図73 第152-6次調査遺構図・西壁断面図 1:100

II-2 飛鳥地域等の調査

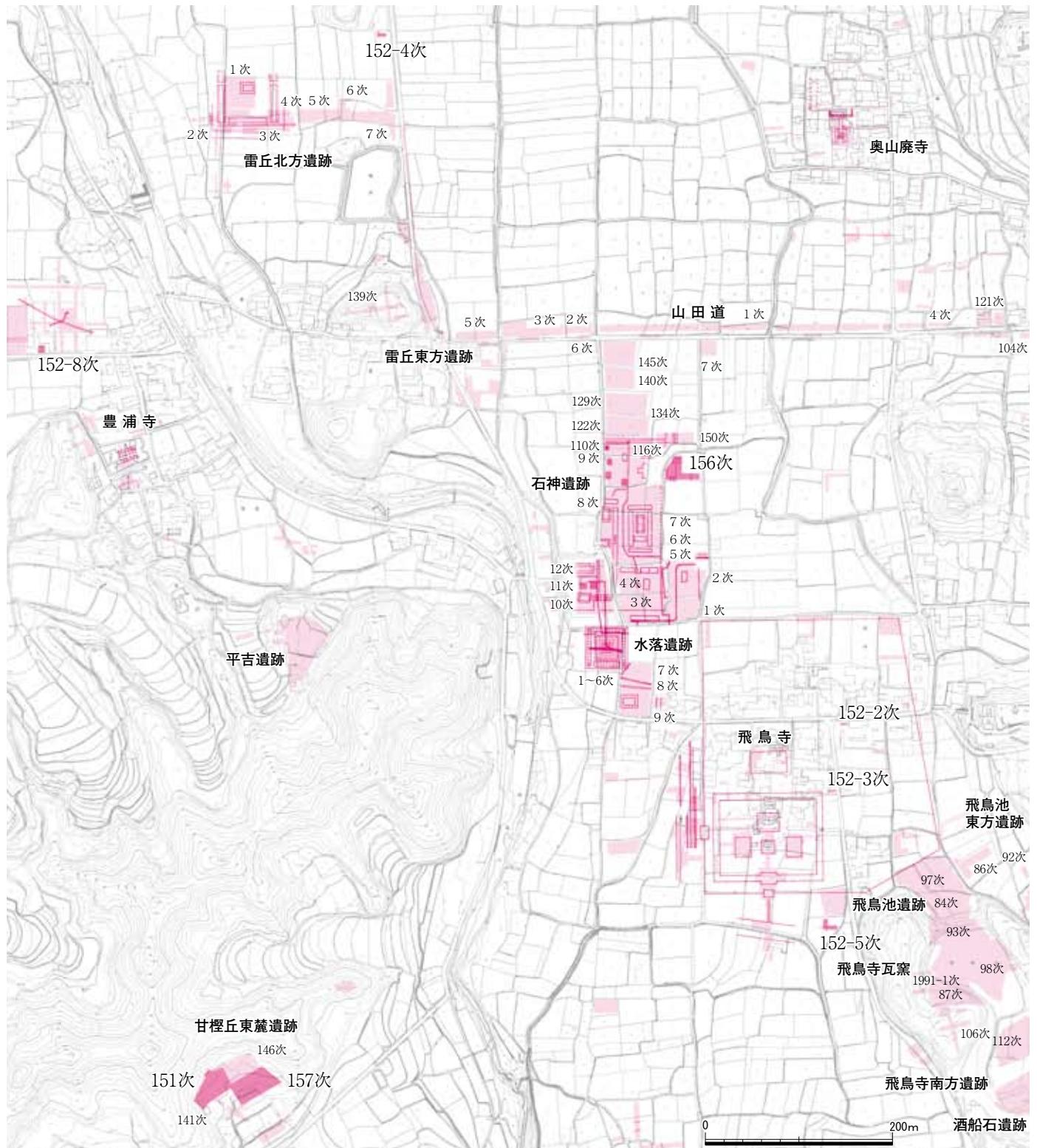


図74 飛鳥地域発掘調査位置図 1 : 6000

甘樺丘東麓遺跡の調査

—第151・157次

第151次調査

遺跡の位置 甘樺丘は飛鳥川の西岸に広がる標高約150m、比高約50mの丘陵である。現在は国営飛鳥歴史公園甘樺丘地区として整備され、多くの観光客が訪れている。丘陵の東麓にはいくつかの谷が入り込む。調査地もそれらの谷の一つで、約6,000m²の平坦地が広がっている。

遺跡の北東約600mには蘇我馬子が建立した飛鳥寺があり、南東約800mの飛鳥京には、歴代の宮殿が展開した。甘樺丘東麓遺跡は、飛鳥地域の西端にあたるが、きわめて重要な場所に立地している。

これまでの調査 甘樺丘東麓では、小規模なものも含めて7回の発掘調査がおこなわれている。駐車場建設に伴う第75-2次調査では、谷の入口付近で7世紀中頃の焼土層を確認した。焼土層からは土器とともに焼けた壁土、炭化木材が出土しており、『日本書紀』に記載された蘇我蝦夷・入鹿の邸宅との関連が指摘された(『藤原概報25』)。また、公園整備に伴う第141次調査では7世紀の掘立柱建物群を検出した(『紀要2006』)。さらに、2006年度から遺跡の内容を解明するための学術調査を続けている。第146次調査では石垣、掘立柱建物、塀、石敷、炉、溝など多くの遺構を確認した。7世紀の遺構はI～III期に分けられ、7世紀を通じてこの地が活発に利用されていた様相が判明した。また、I期とII期の遺構のいずれかが蘇我氏の邸宅と関わる可能性が浮上した(『紀要2007』)。

今回の調査区は第146次調査区の南西に接し、調査面積は950m²。調査期間は2007年11月12日から2008年4月28日までである。

1 検出遺構

基本層序 層序は上から順に表土、明灰色砂質土(近世の土器を含む堆積土)、茶褐色砂質土(中世の土器を含む堆積土)、黄褐色粘質土(II期の整地土)、橙灰色粘質土(I期の整地土)、黄褐色砂質土(地山)である。谷の縁辺部では明灰色砂質土直下で地山が露出する。また、II期の整地土である黄褐色粘質土は谷の中心付近の狭い範囲のみに残存し、遺構の多くは地山とI期の整地である橙灰色粘

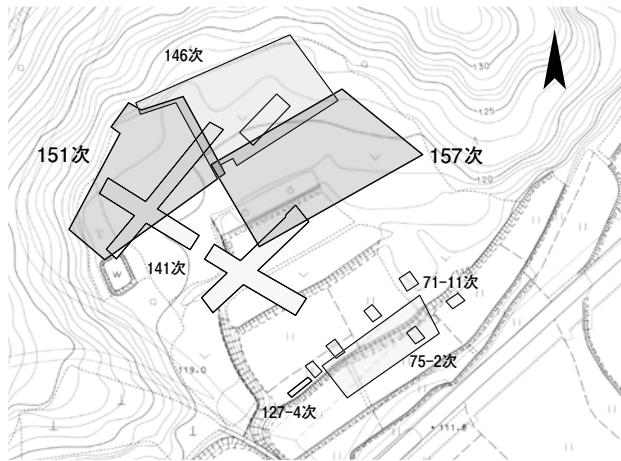


図75 調査区位置図 1:2000

質土上で検出した。なお、第146次調査で確認したIII期の整地土は今回の調査区まで及んでいない。

遺構の概要と時期区分 今回の調査では新たに7世紀の掘立柱建物、区画塀、土坑、溝などを検出し、谷の奥側にも広く遺構が分布することを確認した。さらに、過去の調査で部分的な検出に留まっていた建物の規模を確定することができた。

なお、第146次調査では7世紀における甘樺丘東麓遺跡の遺構をI～III期に区分しているものの、詳細な年代を示すには至らなかった。今回の調査では、整地土や土坑から多くの土器が出土し、各時期の年代を限定する資料が得られた。I期を7世紀前半、II期を7世紀後半、III期を7世紀末頃とする。以下では時期ごとに遺構について詳述する。

I期の遺構

建物2棟、塀2条、溝1条が相当する。建物は地山の標高が高い部分を利用し、低い部分には若干の整地をおこなって建てられている。

掘立柱建物SB150 調査区の西寄り、谷の奥側で確認した総柱建物。桁行5間、梁行3間で柱間は1.7m等間。柱穴の大きさは50～80cmである。建物の主軸は北で西に約50°振れる。

建物内部の柱穴は配置に乱れが認められるので、3×2間の建物2棟に分かれる可能性も考慮した。しかし、両者の距離が近すぎること、側柱列が揃うことから1棟の総柱建物と判断した。すべての柱穴を半截して断面を確認したところ、建物内部の柱穴は側柱列に比べて掘方が浅い傾向が認められた。柱穴の1基から鉄製座金具(図81-4)が出土した。



図76 第151次調査遺構図 1:250

SB150の面積は第146次調査で確認した総柱の掘立柱建物SB120とほぼ等しいが、柱数や柱穴の大きさが異なる。

溝SD165 SB150の北側をL字状に巡る素掘溝。後世の削平によって一部しか残存しておらず、全周していたか否かは不明である。SB150の雨落溝とするには幅が広く、谷の後背斜面から流れ込む雨水を処理する排水溝の可能性がある。

掘立柱建物SB70 第141次調査で確認した桁行5間、梁行2間の掘立柱建物。今回の調査ですべての柱穴を検出した。柱間は桁行2.2m、梁行1.6~1.8m。柱穴の大きさは60~100cmである。建物の軸線は北で西に約35°振れる。なお、第141次調査で東側に焼土、炭と飛鳥Iの土器を含む溝SD67を検出しており、今回の調査でもその延長部分を確認した。SD67は削平によって部分的な検出に留まったので、SB70の雨落溝である確証は得られなかった。

掘立柱塀SA166 掘立柱建物SB150の北側に位置する掘立柱塀。6間分を確認した。柱間は約1.8mである。正確な時期は確定できないが、SD165の手前で途切れるため、I期の遺構と判断した。後背部の斜面と谷の内側を区画する塀であろう。

掘立柱塀SA161 掘立柱建物SB120の南側で確認した5間の掘立柱塀。柱間は平均約2m、柱穴の大きさは30~70cmと、やや不揃いである。方位は北で西に約40°振れる。SB120の側柱列と平行することから、SB120の目隠塀と考えられる。SB120とSA161の柱穴は、いずれも後述する土坑SK160によって壊されている。



図77 SB150全景（北西から）

II期の遺構

建物3棟、塀7条、土坑4基が相当する。さらに、年代を確定できなかった建物2棟と塀1条もII期に属する可能性が高い。建物はI期の遺構が廃絶した後、再び整地をおこなって建てられている。

掘立柱建物SB60 第141次調査で確認した桁行3間以上、梁行3間の掘立柱建物。新たな柱穴1基を検出したことにより、桁行3間以上であることが判明した。柱間は桁行2.0m、梁行1.6m。柱穴の大きさは約0.7~1.0mである。建物の軸線は北で西に約35°振れる。建物の両側に掘立柱塀SA171とSA172が付設される。

掘立柱建物SB65 第141次調査で確認した桁行4間、梁行2間の掘立柱建物。今年度の調査で北側の3間分を検出し、建物の規模が確定した。柱間は桁行が平均1.9m、梁行2.0m。柱穴の大きさ60~90cm。軸線は北で西に約40°振れる。

掘立柱建物SB168 新たに確認した桁行4間、梁行2間の掘立柱建物。SB65と並んで建てられている。柱間は約2.3m等間。柱穴の大きさは約60~90cmである。建物の軸線は北で西に約35°振れる。

掘立柱塀SA170 調査区の南西部で確認した掘立柱塀。後述するSA171、SA172、SA173とともに、2棟の建物SB65とSB168をコ字形に取り囲む区画施設を構成する。5間分を確認し、柱間は約1.8m。軸線は北で西に約35°振れる。

掘立柱塀SA171 SA170からほぼ直角に折れ、SB60につながる掘立柱塀。一部を後世の溝によって削平され、3間分のみを確認した。柱間は約1.6mである。



図78 SK160土器出土状況（北東から）

掘立柱塀SA172 SB60に付設され、北東側に延びる掘立柱塀。9間分を確認した。柱間は約1.6m。

掘立柱塀SA173 SA172からほぼ直角に折れ、調査区北端付近まで延びる掘立柱塀。一部を削平され、6間分を確認した。柱間は約2.0m。

これらの塀のうち、谷の縁辺部に近いSA170は他の塀に比べて柱の掘方が大きく、敷地の内外を分ける区画塀の可能性がある。また、SA171とSA172の柱穴のうち、SB60に近い柱穴は他のものよりも大きい。

掘立柱塀SA174 SA170の北側で確認した掘立柱塀。4間分を確認した。柱間は約2.0m。軸線は北で西に約35°振れる。

SA174は後述する塀SA175、SA176とともにコ字形の区画を構成する。SB60の廃絶後、それに伴う区画塀を若干狭めて建て替えたものと考えられる。

掘立柱塀SA175 SA174からほぼ直角に折れ、北東へ続く掘立柱塀。16間分を確認した。柱間は約1.7m。柱穴の重複関係から、SB60よりも新しいことがわかる。また、中央付近に2間分の空白が存在し、区画内への入口であった可能性がある。

掘立柱塀SA176 SA175から直角に折れ、調査区北端付近まで続く掘立柱塀。8間分を確認した。柱間は約2.0mである。

掘立柱建物SB116 調査区南東隅付近に位置し、第146次調査で確認した総柱建物。新たに柱穴1基を検出し、桁行3間以上、梁行2間の総柱建物と判明した。柱間は桁行が2.3m、梁行が1.8m。柱穴の大きさ50~60cmである。

掘立柱建物SB57 調査区南西隅で新たに確認した掘立柱建物。桁行2間以上、梁行2間。梁行の柱間は1.8m。柱穴の大きさは70~80cmである。

掘立柱塀SA157 SA170の南西側で確認した掘立柱塀。4間分のみを確認し、調査区外へ続く。柱間は約2.0m。SA170やSA174とほぼ平行であるためⅡ期と推定したが、前後関係は不明である。

土坑SK160 調査区の北端、SB120の南側で確認した楕円形の土坑。長さ約4m、最大幅約2m、深さ約30cm。埋土からは7世紀中頃の土器が多量に出土した。土器は土坑の底付近ではなく、埋土の上層から出土する傾向が認められた。また、埋土には木炭も多く含まれていた。出土した土器の内容については後述する。

土坑SK155 I期の掘立柱建物SB70の南で確認した不整形の土坑。長さ約3.5m、最大幅約2.5m、深さ40cm。埋土から、7世紀中頃の土器が少量出土した。掘立柱塀SA172とSA175によって一部を壊されている。

SK160とSK155は、I期の建物群が廃絶したのち、Ⅱ期の建物を建てる直前に掘削された廃棄土坑と考えられる。

土坑SK164 調査区中央の東西畦付近で確認した土坑。長辺1m、短辺0.8mと小型であるが、多量の土師器と須恵器が出土した。

Ⅲ期の遺構

溝1条と配石遺構が相当する。第146次調査では炉SX132や掘立柱建物SB133を確認しているが、今回の調査区ではⅢ期の遺構が希薄である。

溝SD129 第146次調査で確認した素掘溝。今回の調査区内で直角に曲がり、コ字形を呈することが判明した。最大幅は2.8m、深さ60cm。後述する配石遺構SX68につながる。埋土から飛鳥IV~Vの土器が出土した。

配石遺構SX68 拳大の扁平な石をすり鉢状に並べる配石遺構。調査区南東端付近に位置する。第141次調査で部分的に確認し、今回の調査で全体を検出した。一部を後世の棚田の造成によって削平されている。SD129から流入する水を受ける施設の可能性がある。

その他の遺構

その他、正確な時期の不明な遺構について記述する。

石組溝SD158 調査区北西隅にある石組溝。拳大の石を側石とし、底面に扁平な円礫を敷く。東側は削平されている。断面調査の結果、Ⅱ期の掘立柱塀SA170を壊していることが判明した。

土坑SK159 調査区の北西端付近で確認した土坑。調査区の北西壁にかかるため、大きさは不明である。石組溝SD158の一部を壊している。埋土から、土師器甕が出土した。

石列SX156 調査区の中央付近で確認した石列。人頭大的石を長さ約2mにわたって並べる。石組暗渠の一部の可能性がある。

溝SD167 調査区の西端付近で確認したやや彎曲する南北方向の素掘溝。背後の斜面から流入する水を排水するための施設と考えられる。埋土からは中世の瓦器片が出土した。

(豊島直博)

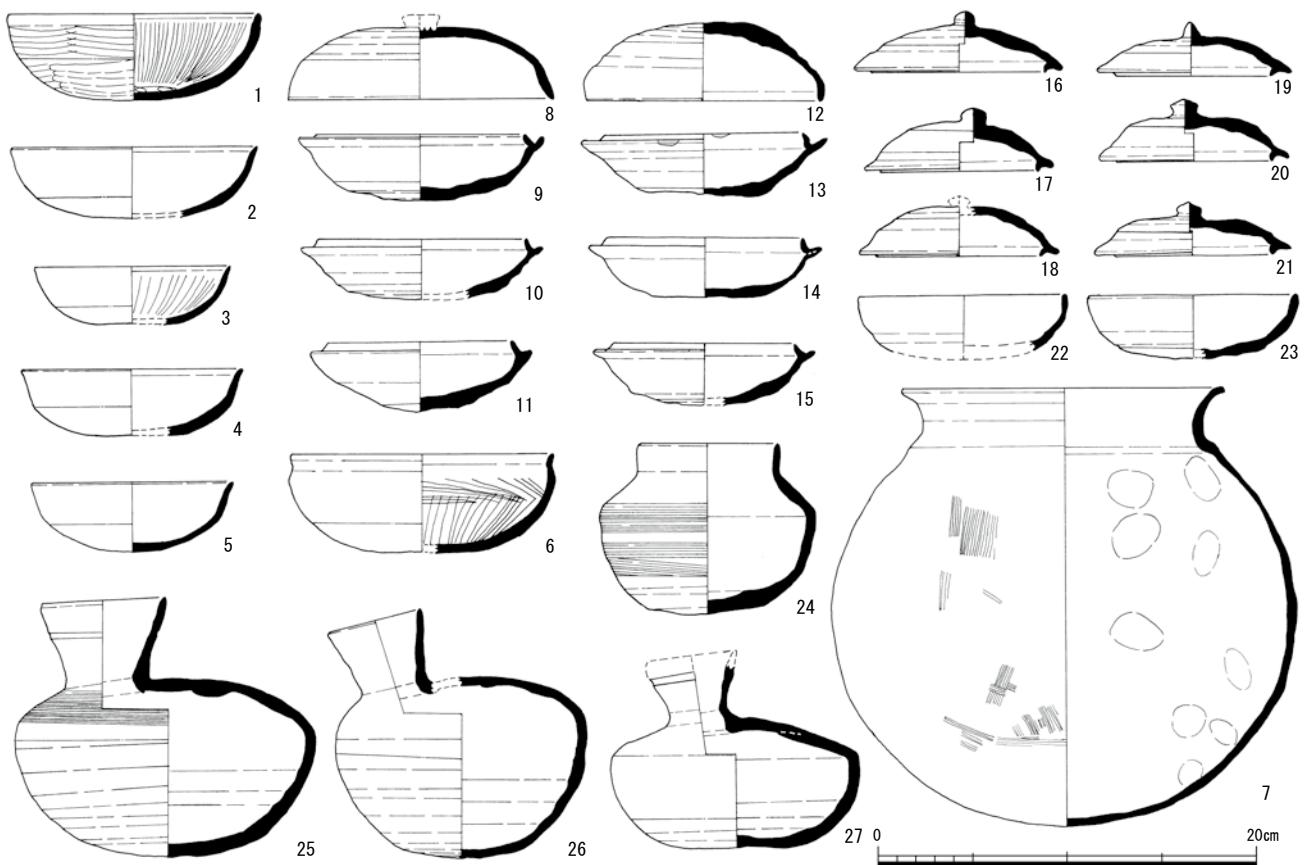


図79 SK160出土土器 1:4

2 出土遺物

調査区全体から多量の土器が出土した。土器以外には少量の瓦、鉄製品、鋳造関係品などがある。

土器・土製品 調査区全体から整理箱49箱分の土器・土製品が出土した。土師器、須恵器のほか、円面硯、転用硯、土馬、漆付着土器、陶磁器などがある。ここではⅡ期の土坑SK160より出土した資料を報告する(図79)。

SK160からは、整理箱6箱分の土師器(1~7)と須恵器(8~27)が出土した。土師器は杯C、高杯、甕、須恵器は杯H、杯G、平瓶、壺などからなる。

1~6は杯C。1は外面にヘラケズリとヘラミガキを施す(b1手法)が、3・6はナデ調整のみ(a0手法)である。2・4・5は、磨滅により暗文や調整は不明。径高指数は28.5~37.7で、平均は32.5。口径は10.4~13.8cmで、法量により1・2・6と3・4・5の2つに区分できる。なお、6は飛鳥Iの杯Cに見られる二段暗文を有するが、傾向指数は37.7とやや浅めで、口縁が屈曲したやや異質な個体である。7は甕A。外面はハケ目を施すが、大部分が磨滅している。内面には全体に指頭圧痕がある。

8はつまみが欠損し、高杯の蓋と考えられる。9~15は杯H。口径は10.4~12.4cmで、平均は11.5cm。杯底部と蓋頂部外面の調整は、ヘラ切り5点(9・11・13~15)と

ロクロケズリ2点(10・12)である。なお13は、口縁の一部を打ち欠き、スヌが付着していることから灯火器と考えられる。16~23は杯G。身(22・23)の口径はともに10.8cm、蓋(16~21)は8.9~9.6cm。23の底部は粗いロクロケズリで調整する。24は壺C。胴部にカキ目を施し、底部はロクロケズリで調整する。25~27は平瓶。25・26は胴部上半から、27は胴部下半から底部にかけてロクロケズリを施す。25は肩部にカキ目がある。27の胎土は他のものに比べ小石や砂粒が目立つ。

以上のSK160出土土器のうち、土師器杯Cの径高指数や外面調整のあり方、ならびに杯G蓋の口径は、坂田寺SG100出土土器群(『藤原概報3』)に代表される飛鳥IIの特徴に近い。また、平瓶の丸みを帯びながらも肩部の張り始める形態的特徴は、飛鳥IIに位置づけられる石神遺跡SE800砂層(3層)出土の平瓶(西口壽生「石神遺跡SE800出土土器の再検討」『年報1997-I』)と共通する。一方で須恵器杯の外面調整にロクロケズリが残存するあり方や土師器杯Cにみられた二段暗文の存在は、飛鳥Iの新しい段階とも共通するが、土器群全体の様相は、飛鳥IIの特徴に近い。よってSK160出土土器は飛鳥IIに位置づけることができ、SK160に壊されるI期の掘立柱建物SB120や掘立柱塙SA161が7世紀半ばまでに廃絶したことを示している。

(丹羽崇史)

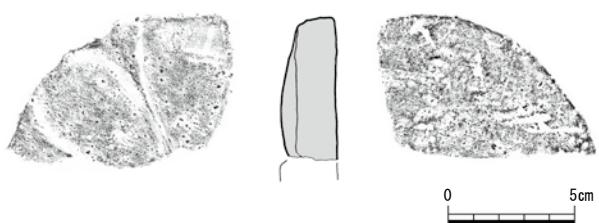


図80 第151次調査出土垂木先瓦 1 : 3

瓦類 古代の瓦類としては、軒丸瓦1点、垂木先瓦1点、熨斗瓦1点、丸瓦104点(10.06kg)、平瓦38点(34.16kg)、磚1点が出土した。軒丸瓦は、川原寺所用の601型式である。中房および蓮弁の大部分を欠いているため、種の同定はできない。須恵質の堅緻な焼成で、色調は灰色。包含層から出土した。図80は、船橋廃寺式の特徴を備える垂木先瓦である。焼成はやや軟質で、粗い胎土には長石、石英を多く含む。色調は外面が黄灰色で内面が黒灰色。溝SD129から出土した。同様の垂木先瓦は、第146次調査区でも5点出土している(『紀要2007』)。ただし、第146次調査では、古宮遺跡出土垂木先Aのほかに新型式と思われる資料が出土しているが、今回出土した資料は磨滅が著しく、中房も欠けているので、この2種のうちのどちらと同範疇かは判断がつかない。(石田由紀子)

金属器等 遺構および遺物包含層から、鉄斧、刀子、鉄座金具などが出土している(図81)。

1は耕作土から出土した袋状鉄斧の破片である。残存長6.3cm、刃部幅4.5cmで、袋部を欠く。2・3は整地土から出土した叩折釘の破片である。残存長はそれぞれ8.0cmと4.6cm。4は環状の鉄製品で、掘立柱建物SB150の柱穴から出土した。中心付近に長方形の孔をあけ、座金具と考えられる。

鉄器の他には焼土、羽口、砥石、鋳型らしき細片など、工房に関連する遺物も少量出土している。

3 まとめ

今回の調査と、第146次調査で確認した遺構の変遷案(図82)を示し、遺跡の性格について検討したい。

遺構の変遷

I期の遺構(7世紀前半) 石垣SX100とその南西側に広がる谷を挟んで、両側に建物群が展開する。谷の西側には2棟の総柱の掘立柱建物SB120とSB150がある。両者は建物の面積がほぼ等しく、関連性がうかがえる。建物の主軸が直交するのは、SB150が谷の斜面近くに配置され、旧地形の制約を受けたためであろう。また、両者の間には掘立柱建物SB70が建てられる。いっぽう、石垣SX100の北東側には掘立柱塀SA101があり、さらに小規模な掘立柱建物SB105がある。

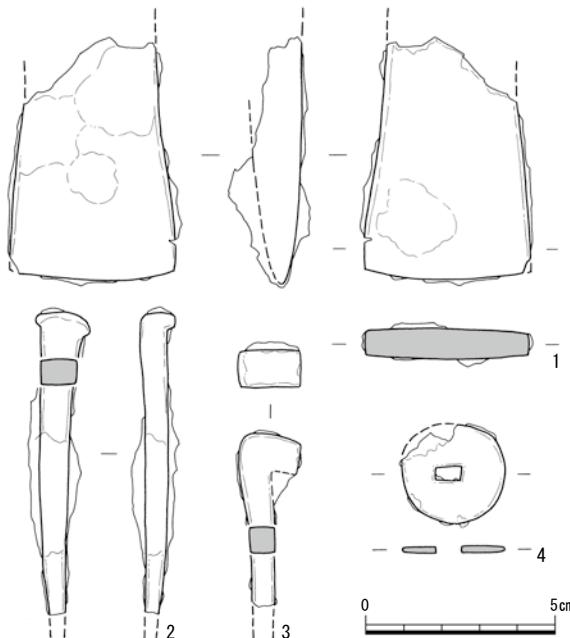


図81 第151次調査出土鉄器 1 : 2

これらの建物は、谷の深い部分を避け、地山の標高が高い部分を選んで建てられている。また、I期の建物には建て替えが認められず、比較的短期間のうちに廃絶したと考えられる。

IIa期の遺構(7世紀後半) II期の遺構は建て替えを伴う。ひとまずIIa期とIIb期に区分するが、今後さらに細分できる可能性が高い。

IIa期にはI期の石垣SX100と谷を埋め立て、多くの掘立柱建物が建てられる。南西側には桁行4間、梁行2間の掘立柱建物SB65とSB168が並ぶ。両者は南東の側柱列を揃え、計画的な配置が見て取れる。また、掘立柱建物SB60とそれに取り付くコ字形の掘立柱塀SA170・SA171・SA172・SA173によって2棟の周囲を区画する。SB60が門の機能を果たしたのか否かは、建物の全体を確認して判断する必要がある。なお、SB65とSB168の南西側が広い空閑地となっているが、その付近では建物としてまとめきれなかった柱穴が多数見つかっており、削平されたII期の建物が存在した可能性が高い。

いっぽう、谷の東側は掘立柱塀SA115によって区画され、その延長線上に掘立柱建物SB125が存在する。SB125の側柱列はSA115と柱筋を揃え、両者が共存したと考えられる。区画の内側に当たる北寄りには、掘立柱建物SB110が配置される。

IIb期の遺構(7世紀後半) IIb期には、建物SB60と付設される区画塀が取り壊され、若干範囲を狭めた区画塀SA174・SA175・SA176に建て替えられる。同様に東側の塀SA115と掘立柱建物SB125も壊され、新たに掘立柱建物SB111が建てられる。掘立柱建物SB116もこの時期のものであろう。

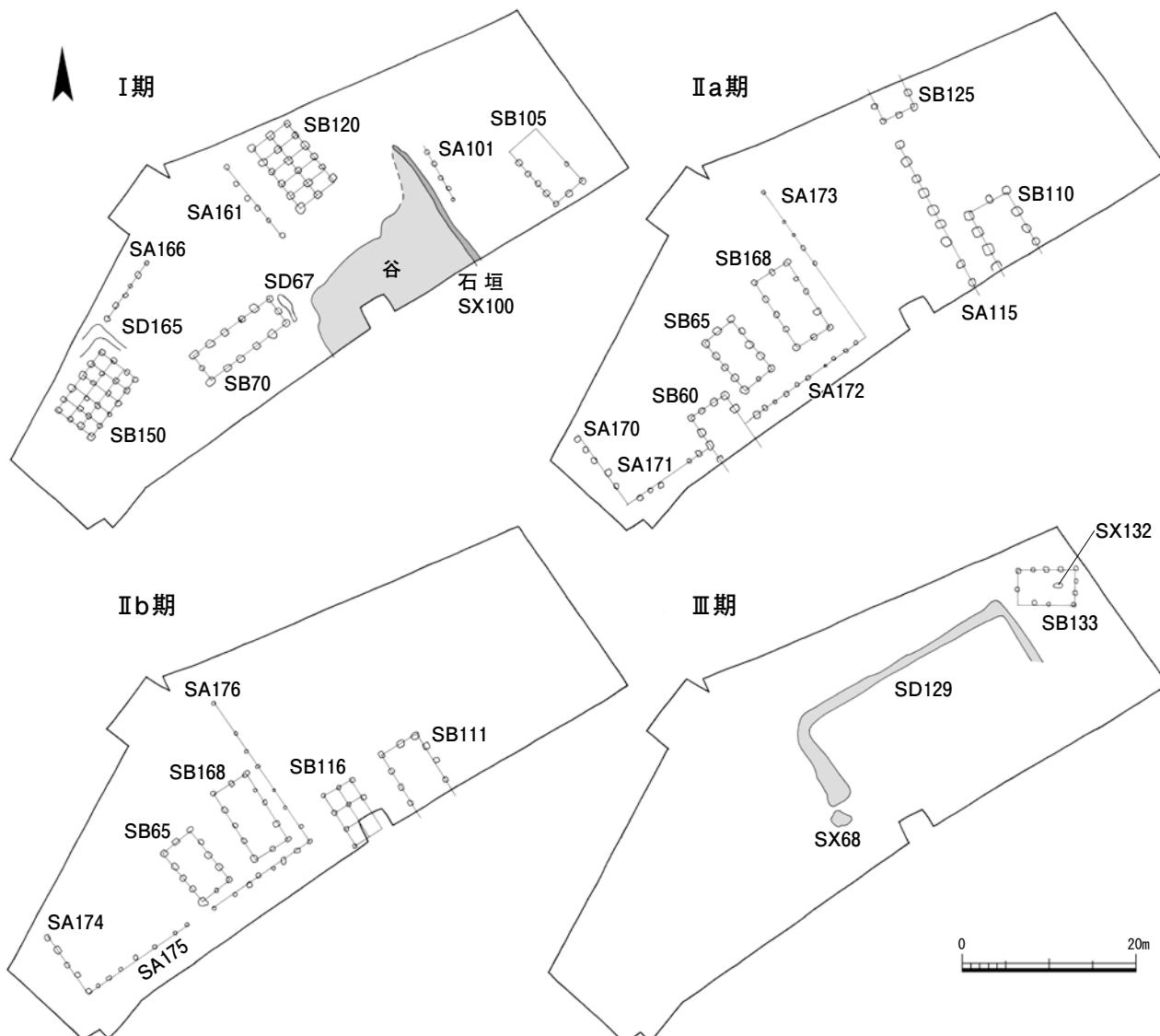


図82 第146・151次調査遺構変遷図 1:800

Ⅲ期の遺構（7世紀末頃） Ⅱ期の建物群が廃絶したのち、再び整地をおこなう。谷の北東奥に掘立柱建物SB133が建てられ、周辺に炉SX132が作られる。谷の中央付近にはコ字状の溝SD129が掘削される。

Ⅲ期の遺構は全体に希薄で、土地利用の形態が大きく変化した様相がうかがえる。

遺跡の性格

I期の建物群の性格 第146次調査では、I期の建物は石垣SX100の東側のみに存在すると考えられていた。しかし、今回の調査によって掘立柱建物SB120の時期がI期までさかのぼることが判明し、調査区の南西部でも別の掘立柱建物SB150を確認した。I期の建物群は谷全体に広がることが明らかになり、土地利用の変遷について新たな手がかりを得た。

また、土坑SK160から出土した土器群の検討により、I期の建物群は7世紀中頃までに廃絶することが判明した。石垣SX100や第75-2次調査で確認した焼土層の存

在も考慮すると、I期の建物群が『日本書紀』に記された蘇我氏の邸宅と関わる可能性が高まった。今後は大型建物や居住空間の有無が問題となり、谷の中心部や入口付近の調査がさらに重要性を増した。

Ⅱ期の建物群の性格 Ⅱ期には大規模な整地によって石垣SX100を埋め立て、谷の中心部にも掘立柱建物や塀が建てられる。谷の縁辺部だけではなく、中心部を含めた全体が利用されるようになる。また、Ⅱ期の建物群は塀によって区画され、土地利用の計画性がうかがえる。

Ⅱ期の建物群は建て替えを経て、7世紀末頃までに廃絶することが明らかになった。調査区全体で齊明朝から天武朝にかけての土器が多量に出土していることも、長期にわたる土地利用の裏付けとなる。建物群の性格と全体像の解明という新たな問題が提起された。

以上の成果と課題を受け、今後も継続的な発掘調査が必要である。調査を重ね、甘櫻丘東麓遺跡の全容の解明を目指していきたい。
(豊島)

第157次調査

調査にいたる経緯 第157次調査は、2006年度の第146次調査で検出した石垣の全体像の解明のほか、第151次調査で谷部全面にⅠ期の遺構が展開することが明らかになつたのを受け、大型建物と居住空間の有無の確認、遺構のより詳細な変遷過程の解明、ならびに谷部全体の様相の解明を目的とし、第146次調査区の南東側に調査区を設定した。調査面積は1150m²。2008年12月16日に開始し、現在も継続中である。ここでは2009年3月末時点での調査の概要を紹介したい。

調査成果 今回の調査では、谷部の広い範囲で複数回にわたり整地がおこなわれ、大規模な造成がなされたことを確認した。調査区西部を中心に、黄褐色の整地土の面を主体として複数の柱穴、土坑などの遺構を検出した。まだ建物としてまとまつてはいないが、今後の調査に期待される。また、調査区東部では石敷遺構も部分的ではあるが確認し、第146次調査で検出している7世紀中頃

(Ⅱ期)の石敷との関連が考えられる。調査区中央付近では、幅3~4mにわたる南北方向の溝を検出した。2005年度の第141次調査では、調査区南西区の南東端付近で溝SD83を検出しており、今回検出した溝はその延長部であろう。さらに、調査区南部ではⅡ期の整地土に埋められた人頭大の石列を確認している。これは据付掘方が全く確認できず、状況からみて第146次調査で検出した石垣の延長部の可能性がある。それぞれの遺構の詳細な時期は、現状では確定できない面があるが、7世紀のものが主であろう。これらに加え、底部に炭を敷いた土坑も確認しており、中近世の墓と考えられる。

調査は継続中のため、現状では不明な点も多いが、遺跡の性格や甘樫丘における土地利用の変遷を考えるうえで重要な資料が得られつつある。

遺物 須恵器や土師器など整理箱29箱分の飛鳥時代～近世までの土器のほか、整理箱1箱分の瓦が出土している。このほか、土馬、漆付着土器、鉄器、鉄滓、碁石、紡錘車などの遺物が出土している。

(丹羽崇史)



図83 第157次調査区全景（北西から）

石神遺跡（第21次）の調査

—第156次

1 はじめに

石神遺跡は水落遺跡の北側、飛鳥寺の北西に隣接し、明治35・36年に有名な須弥山石と石人像が発見された遺跡として知られる。7世紀中頃の齊明朝には、『日本書紀』にみえる、飛鳥寺の西で蝦夷・隼人や外国使節を饗宴した施設が存在したと推定される。既往の調査で7世紀代を中心に建物、広場、園池、井戸、石組溝などが配置され、何度も造り替えられたことが明らかにされている。遺跡の時期は、A期（7世紀前半～中頃）・B期（7世紀後半）・C期（藤原宮期）の3時期に分かれ、さらにA期はA1期、A2期、A3-1期、A3-2期、A3-3期の5時期に細分されている。

都城発掘調査部では、1981年以降継続的に石神遺跡の発掘調査を実施してきた。第1・3次調査で南限施設と推定される掘立柱塀を発見して以降、北へと調査を続け、第13・14次調査で掘立柱塀と石組溝からなる北限施設を確認した。その後の調査では、北限施設以北では建物の展開が希薄であることが判明し、第19次調査では山田道を確認した。昨年度に実施した第20次調査からは、石神遺跡東限の確定を目的とし、南北方向の縦柱建物SB4300が東限施設の有力な候補となったが、その全容と性格の解明が課題となった（『紀要2008』）。このことをふまえ、今回は東限とその周辺の様相を明らかにすることを目的として昨年度の調査区より一段高く、遺構の残存状態も良好と考えられる第20次調査区の南側に調査区を設定して実施した。面積は480m²で、調査期間は2008年10月2日から2009年3月27日である。

2 検出遺構

基本層序 上から、水田耕作土（厚さ15～18cm）、水田床土（厚さ25～40cm）中世の堆積土（灰褐色砂質土：20～40cm）、B期整地土（暗灰色砂質土：10～30cm）、A期整地土（黒灰色砂質土：10～30cm）、自然堆積土（黄褐色砂質土：20～32cm）、地山（礫混褐色砂・明黃褐色細砂）である。地形は北西に下る緩傾斜面で、傾斜を水平にするように整地がおこなわれている。

検出した主な遺構は、掘立柱建物9棟、塀9条、柱穴列2条、石組溝1条、素掘溝5条、土坑5基などである。調査区西側の2回にわたる大規模な整地および遺構の重複関係などから、古代が8期、中世が1期の合計9時期に区分できる。

A期以前

調査区一帯の整地以前にあたる段階であり、石組溝が相当する。東限と推定される塀などはまだ存在しない。南北石組溝SD4348 調査区西壁際に位置する南北方向の石組溝。幅0.3m、深さ0.35m、長さ10m分を検出した。溝はA期整地土によって埋められている。南北方向に一直線でなく、東寄りにやや彎曲して北側へ延びる。溝底は素掘りで、細かい砂が薄く堆積しており、短期間だが北側へ通水していたようである。

A1期

A1期になると、調査区の西側を中心に黒灰色砂質土で厚さ約20～30cmほど整地する。依然として明確な東限施設はなく、東西方向の柱穴列および基壇建物に伴っていたと推定される素掘溝が存在する。

東西柱穴列SX4357 東西1.5m、南北1.2m、深さ1.5mという大型の柱掘方を有する掘立柱列。柱間は2.4m（8尺）等間。調査区内で4基分の柱穴を確認しているが、これが塀か建物の一部かは不明である。

素掘溝SD4345 調査区西側を南北方向に延び、途中で東側に突出し、調査区南端から北へ3m地点で西側へ折れる、幅1m前後、深さ0.15mの素掘溝。突出部は東西1.1m、南北6.5m、突出部の南西端から溝の南東隅までは5.5m。溝内から丸瓦・平瓦が出土し、畔付近では溝の東側を中心に小礫が密にみとめられる。この溝の性格は断定できないものの、小礫の状況などから雨落溝の可能性が高いと判断されるが、基壇外装の抜取溝の可能性も否定できない。SD4345を壊して建てられたSB4340の南西隅の柱掘方内に残存直径50cm、厚さ40cmの大型の石材が投げ込まれており、これが基壇建物の礎石であった可能性がある。また、SD4345周辺の整地土上面にだけ橙色粘質土が縞状にみとめられたが、これは基壇土に由来するのかもしれない。これらのことから、当初は溝の西側に基壇を有する瓦葺の礎石建物が存在し、それがA2期に東限施設が整備される際に基壇部が削平されたと推定される。



図84 SB4340全景（北から）



図85 SB4343全景（北から）

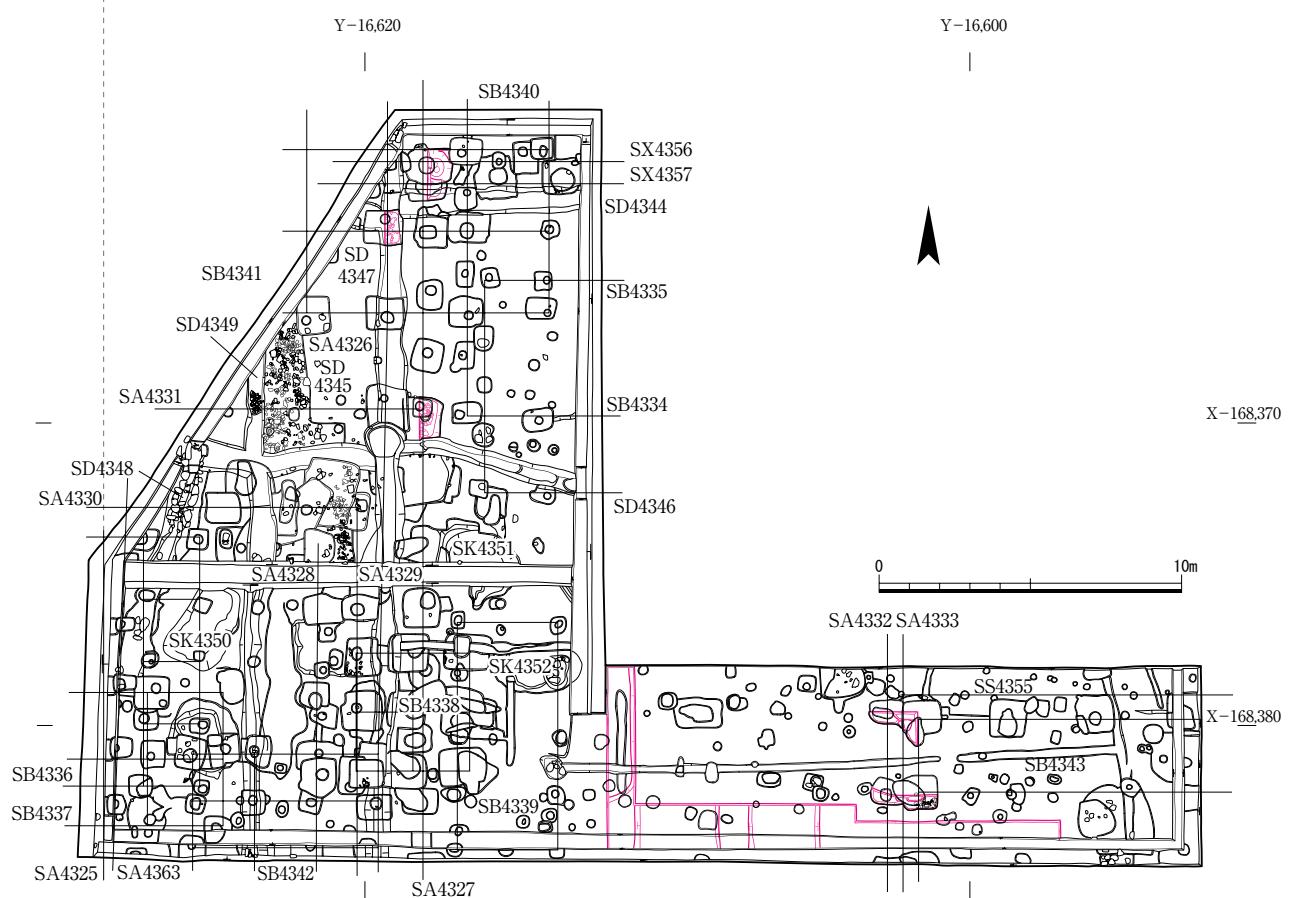
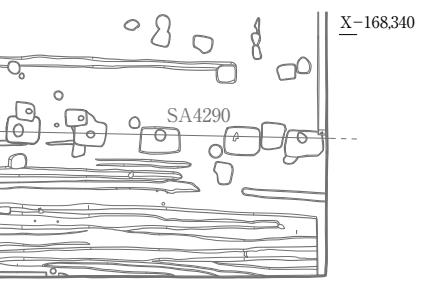
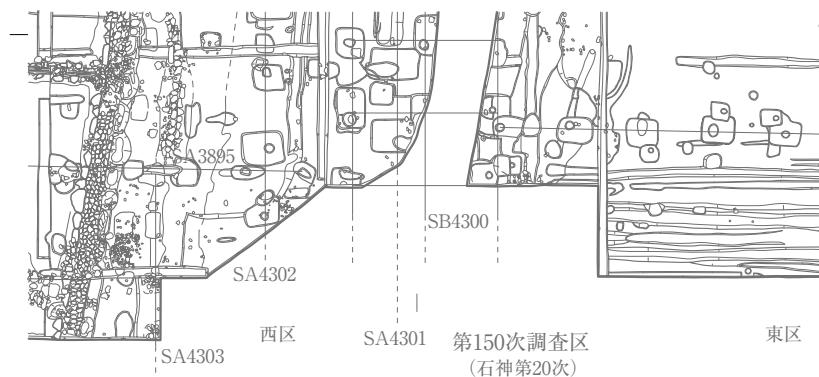


図86 第156次調査遺構図 1:250

A 2期

南北棟の掘立柱建物、南北塀、土坑が相当する。東限を画するとみられる南北塀や掘立柱建物が造営される。また、東限の塀の東側にはもう一条の南北塀があり、この間が遺跡外側の通路であった可能性がある。

掘立柱建物SB4341 調査区北側に位置する桁行5間以上、梁行2間の掘立柱南北棟建物。柱間は桁行方向が2.1m(7尺)、梁行方向が3.0m(10尺)、柱掘方は一辺1~1.8m、深さ0.45~0.9m。東側柱の一部には柱を抜き取った痕跡がみとめられない柱穴もある。

南北塀SA4327 SB4341の東側柱から南へ延びる柱間2.1m(7尺)の掘立柱塀。柱掘方の規模は一辺0.9~1.2m、深さ0.5~0.9m。調査区の南側へ延びる。第20次調査区では明確に確認できていないが、北への延長部は東区と西区の間の未調査部分にあたるため、SB4341よりさらに北へのびる可能性もある。なお、建物の側柱列に塀が取り付く事例は、石神遺跡では第1次調査区SB125とSA105(B期)や、飛鳥京跡岡地区SB7205とSA7206(権原考古学研究所『飛鳥京跡発掘調査中間略報-昭和47年度-』1973)など、近傍にも類例がある。

南北塀SA4333 調査区東側にあり、A3期の南北塀SA4332、およびB期のSB4343の西妻柱列によって壊されている掘立柱塀。柱間2.4m(8尺)で、柱掘方は東西1m以上、深さ0.7m前後。SA4333からSA4327の間は15.4m(51尺)離れており、この間にA期の遺構はみとめられないことから、ここに通路状の空間が存在していた可能性が高い。

南北塀SA4325 調査区西端に位置し、柱間2.1m(7尺)の掘立柱南北塀。柱掘方は一辺1m前後、深さ0.35~0.8m。SA4327までの距離は9.7mである。また、柱の位置や並びからすると、20次調査区で確認された南北塀SA4303につながる可能性がある。

土坑SK4350 南北3.0m以上、東西1.8m、深さ0.6mの不整長方形を呈する土坑。調査区内の他の土坑より深く、底面は地山である礫層に達していた。主として古墳時代の土師器が出土した。

A 3期

それまでの東限施設であるSB4341やSA4327・4333を取り壊し、ほぼ同じ位置に同様の施設を建て替える。A2期から続いて、東限塀SA4326の東側には通路状の

空間がみとめられ、幅は約15.6m(52尺)である。

掘立柱建物SB4340 調査区北側、SB4341と重複して位置する南北2間以上、東西3間以上の総柱建物。柱間は2.7m(9尺)等間、柱掘方規模は長辺1.6m、短辺1.1m、深さ0.5~0.7m。東側柱列はほかの柱穴に比べて柱掘方が小規模であることから、東側1間分は庇であった可能性が高い。西側にも庇が存在する可能性があるが、調査区外のため未確認である。検出した西端の柱筋は、第20次調査区で検出した掘立柱南北棟建物SB4300の西側柱と一直線に並ぶことから、SB4300と同時期の所産と考えられる。南妻柱列の1基の柱穴には柱根が残る。推定棟通り柱の延長線上にSA4326が取り付く。

掘立柱建物SB4342 調査区西側の南端に位置する東西3間、南北2間以上の総柱建物。そのまま調査区南側へ延びる南北棟の可能性が高い。柱間は東西2.1m(7尺)、南北が1.8m(6尺)、柱掘方は一辺0.8~1.3m、深さ0.3~0.5m。側柱および妻柱の柱穴は相対的に深く、屋内の柱穴は浅いため、床束建物の可能性が考えられる。

南北塀SA4326 SB4340の推定南妻中央柱から南側へのび、SB4342の東側柱へ取り付く掘立柱塀。柱間は2.4m(8尺)、柱掘方は一辺1.3~1.5m、深さ0.5m前後。A2期のSA4327より約1.1m東側に移動しているが、位置およびここより東側は遺構の存在が希薄なことから、A3期に建て替えられた東限塀と考えられる。

南北塀SA4332 調査区東側、B期のSB4343の西妻柱列に壊される掘立柱塀。柱間2.4m(8尺)の掘立柱塀で、柱掘方は一辺0.9~1.1m、深さ0.4m前後。位置からみて、SA4333が建て替えられたものであろう。

南北塀SA4363 調査区西壁および排水溝底で確認した掘立柱塀。柱間2.4m(8尺)、柱掘方は一辺0.6~1m、深さ0.4~0.8m。位置からみて、SA4325が建て替えられたものとみられる。

B 1期

遺構の重複関係からB期は2時期に細分される。B1期に灰褐色砂質土で再度整地する。B1期の建物や塀は整地土上面で柱抜取穴のみ確認され、整地土を下げる柱掘方が検出できたことから、立柱後に整地あるいは基礎を設けたと考えられる。A期の東限施設や東側の通路を撤去し、新たに東西・南北方向の溝で区画して区内を塀がめぐり、掘立柱建物が点在するようになる。

B 1期は、SB4334、SA4329・4330、SD4346、SK4351が相当する。

掘立柱建物SB4334 調査区北側に位置する桁行4間以上、梁行2間以上の南北棟建物。柱間は2.7m(9尺)等間、柱掘方は一辺0.8~1m、深さ0.3~0.5m。

南北塙SA4329 調査区南側から北へ延びる掘立柱塙。

柱間は3.0m(10尺)、柱掘方は一辺1.1m、深さ0.6m前後。

東西塙SA4330 SA4329の北端から西へ伸びる掘立柱塙。柱間は2.4m(8尺)、柱掘方は一辺1~1.2m、深さ0.6m前後。

東西溝SD4346 SB4334の南側、調査区中央部を東西方に横断する素掘溝で、幅0.5~1.3m、深さ0.4m前後。調査区中央付近から10°南に振れる。埋土をみる限り、通水していた痕跡はみあたらない。

土坑SK4351 調査区中央付近東西畦をまたいで位置する東西3.0m、南北2.3m、深さ0.3mの不整形な土坑。

B 2期

B 2期は、東西方向のSD4344、南北方向のSD4349により区画を整備する。新たに中心的なSB4343をはじめ、建物SB4335・4336や塙SA4328をつくる。

掘立柱建物SB4343 桁行4間以上、梁行3間以上の総柱建物で、確認柱間は桁行方向3.0m(10尺)、梁行方向2.4m(8尺)、柱掘方は1.2~1.4m、深さ0.5m前後。床束柱として、直径0.3~0.7m、深さ0.2mの小柱穴が西妻柱から東西方向に並んでいるが、両側柱の柱列を結ぶ線上には位置せず、その柱間中央に柱穴がみとめられる。北側柱列のすぐ北側には、足場穴SS4355が東西に並ぶ。なお、北側柱列の柱穴で、柱掘方から飛鳥IV~Vと考えられる須恵器杯Bが出土し、柱抜取穴からは8世紀前半の須恵器平瓶が出土しており、本建物の存続年代を示すものである。

掘立柱建物SB4335 調査区北側の東壁沿いに位置する桁行4間、梁行2間以上の南北棟の掘立柱建物で、柱間は桁行1.8m(6尺)、梁行2.1m(7尺)、柱掘方は一辺0.5~0.7m、深さ0.3m前後。

掘立柱建物SB4336 調査区南側の西壁沿いに位置する桁行4間、梁行2間以上の東西方向の掘立柱建物で、総柱構造を探る。柱間は桁行方向1.8m(6尺)、梁行方向2.1m(7尺)、柱掘方は一辺0.6~0.7m、深さ0.3m前後。

南北塙SA4328 SB4336の東側にある掘立柱南北塙。3

間分確認し、柱間は2.7m(9尺)、柱掘方は一辺1.0~1.2m、深さ0.4m前後。長さがSB4336に対応するため、SB4336にともなう目隠塙の可能性がある。

東西溝SD4344 調査区北端付近を通る素掘溝で、幅0.8~1.3m、深さ0.4m前後。溝底は西側へ向かうにつれ深くなり、溝底に砂が薄く堆積していたため、短期間だが西側へ通水していた可能性がある。

南北溝SD4349 調査区西側を通る素掘溝で、幅0.6~1.0m、深さ0.35m前後。溝底は北側に向かって深くなり、底に砂が薄く堆積していたため、短期間北側へ通水していた可能性が考えられる。埋土の状況が似通っていることなどから、SD4344・4349は調査区の外側で合流していた可能性が高い。

柱穴列SX4356 SD4344のすぐ北に位置する東西方向の柱穴列で、柱間は3.0m(10尺)、柱掘方は一辺0.5~0.7m、深さ0.3m前後。建物の一部か塙か確定できない。

土坑SK4352 調査区中央南側の西壁沿いに位置する東西2.7m以上、南北1.6m、深さ0.2mの長楕円形を呈する土坑。古墳時代後期の土師器や須恵器が出土した。

C 1期

C 1期も遺構の重複関係から2時期に細分できる。C 1期は、総柱建物であるSB4337・4338が調査区西側に展開するが、これら建物にともなう塙や溝などの区画施設は確認されていない。SB4343はC 1期も存続する。

掘立柱建物SB4337 調査区南西隅に位置する南北2間、東西2間以上の総柱建物。柱間は南北2.1m(7尺)、東西2.4m(8尺)、柱掘方は一辺1.0~1.3m、深さ0.4m前後。

掘立柱建物SB4338 調査区南側に位置する東西・南北とも2間の総柱建物。柱間は1.8m(6尺)等間、柱掘方は一辺1.2~1.4m、深さ0.6~0.9m。建物規模に比して柱掘方が大型で、倉庫であった可能性が高い。

C 2期

SB4337・4338を撤去し、南北方向の素掘溝を掘る。SB4343はこの時期まで使用されていたようであるが、遺構展開は希薄となる。

南北溝SD4347 調査区内を南北に縦断する幅0.5~1m、深さ0.35m前後の素掘溝。時期は詳らかではないが、C 1期の掘立柱建物SB4338の柱穴を壊していることから、今調査区における古代の遺構では最も新しい時期の所産である。

中世

中世の遺構は、掘立柱建物1棟、東西塀1条、土坑3基が確認された。

掘立柱建物SB4339 調査区中央の南側に位置する桁行4間、梁行2間の掘立柱南北棟建物。柱間は1.75m等間、柱掘方は長径0.7m、短径0.3m、深さ0.3m前後。

東西塀SA4331 調査区中央やや北寄りを東西方向に延びる掘立柱塀。柱間は2.4m(8尺)、柱掘方は直径0.3m、深さ0.3m前後。

(青木 敬)

3 出土遺物

土器・土製品 整理箱で52箱分出土した。7世紀代の土師器、須恵器が中心だが、整地土を中心に古墳時代の土師器や須恵器が比較的多く出土したほか、中世の土師器、瓦器、近世陶磁器が少量ある。現在、整理作業中のため、柱穴および整地土から出土した代表的な土器のみを報告する(図87)。

柱穴出土土器 1は、SB4342出土の須恵質土器蓋。頂部外面に二条の沈線を施した後、櫛状工具で三条の列点状の施文を施す。口縁部と頂部との間に凹線状の段をもつ。中央が凹み、高いつまみを貼り付ける。2は、SB4341から出土した土師器杯A。口縁部が外方に開く形態で、b1手法で調整し、底部は分割ケズリである。内面に

幅1.5~2mmの太い二段放射暗文を施す。径高指数は38.2。飛鳥Iの特徴を示す。3・4は、SA4363出土。土師器杯G(3)は茶褐色系の胎土で口縁端部に内傾する面をもち、口縁部をヨコナデする。甕A(4)は外面をケズリ、内面はハケ目で調整する。被熱により器表が荒れている。5は、SB4343柱抜取穴出土の須恵器平瓶。体部に稜をもち、面取りをした把手がつく。奈良時代前半のものである。

整地土出土土器・土製品 6・7はA期整地土(黒灰色砂質土)出土。6は須恵器杯H。口径12.2cm、立ち上がりが高く、底部口クロケズリ、底部外面にヘラ記号がある。7は須恵器短脚高杯。脚に2方向の円孔を穿つ。この他、黒灰色砂質土からは口縁部立ち上がりの低い須恵器杯Hや、土師器杯Cの小片が出土しており、飛鳥Iの年代が与えられる。8~12はB期整地土(暗灰色砂質土)から出土した。8は円面硯。硯面の海・陸部の境は明瞭でない。幅広の透かしを開ける。9は須恵器高杯としたが、蓋の可能性もある。口縁部と底部外面に櫛状工具による列点文が巡る。10・11は土師器杯C。やや浅い形態で、10はa0手法、11はb1手法で調整する。12は土師器甕B。内面をヨコ方向のハケ目、外面をタテ方向のハケ目で調整し、挿入法により把手を接合する。これらは飛鳥II~IIIの特徴を示す。

(小田裕樹)

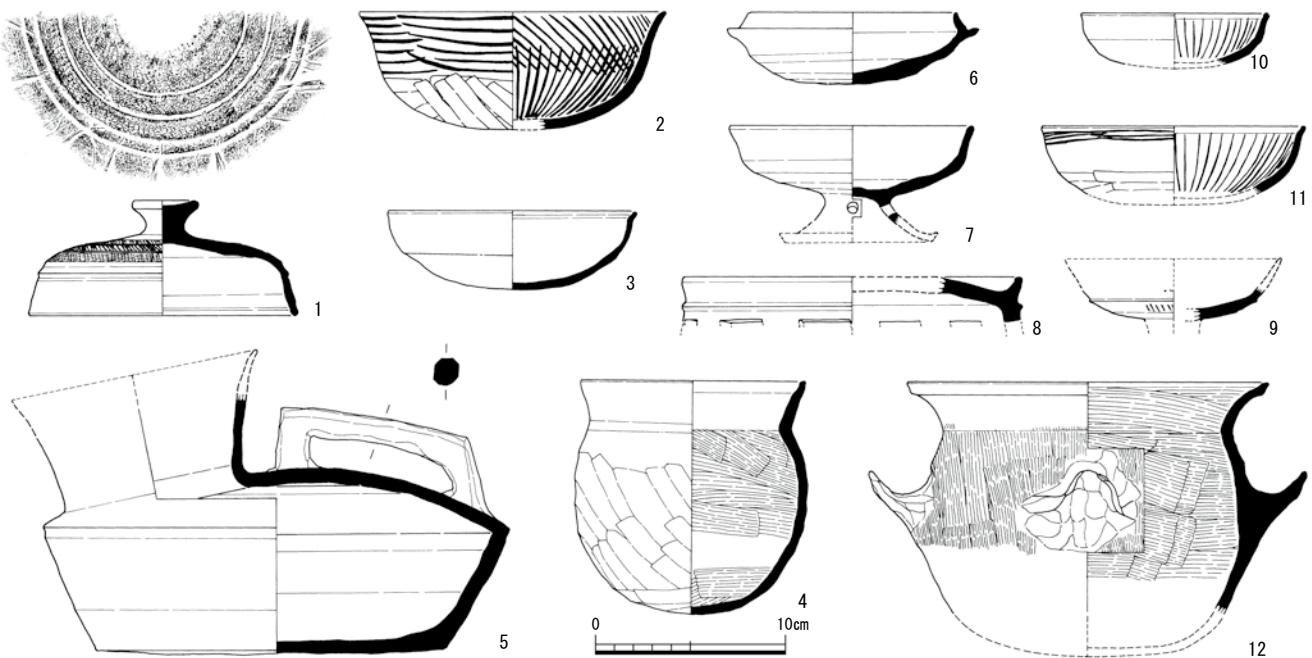


図87 第156次調査出土土器 1:4

瓦類 瓦類としては、軒丸瓦2点、丸瓦365点(39.8kg)、平瓦1301点(141.7kg)が出土した。

軒丸瓦は2点とも、奥山廃寺式とよばれる角端点珠の素弁八弁蓮華文軒丸瓦。小片で型式・種は特定できない。図88-1は、丸瓦接合部の形状から、丸瓦先端を片ほぞに加工して接合したことがわかる。中世の堆積土から出土した。

丸・平瓦に関しては調査区全体から出土しているが、特にSD4345から大量に出土した。これまで石神遺跡では、少量ながら瓦が出土することが知られていたが、今回の調査で初めて遺構に伴う瓦の出土を確認できた。ここでは、SD4345出土の丸・平瓦を中心に報告する。

SD4345から出土した瓦は、すべて丸瓦と平瓦で丸瓦102点(16.0kg)、平瓦254点(44.6kg)である。ただし、軒丸瓦の丸瓦部が2点出土しており、そのうちのひとつは丸瓦先端の形状から片ほぞ接合であったことがわかる。また、平瓦でも、広端面に2~5条の浅くて細い弧線をもつものがあり、軒平瓦として使用された可能性が高い(図88-2~4)。これらは、弧線と弧線の間がほぼ同じ間隔を保っており、平瓦に分割する前の粘土円筒の状態で、櫛歯状工具を広端面に当てながら回転台を利用して施文されたと考えられる。丸・平瓦の製作技法に関しては、両者ともに粘土板技法である。丸瓦は玉縁式がほとんどで丸瓦模骨が玉縁部まで達しないA手法(大脇潔「丸瓦の製作技術」『研究論集IX』奈文研、1991)である。玉縁部内面

は粗く削っている。平瓦は、凸面の格子叩きや平行叩きを丁寧にナデ消したものが多数を占める。繩叩きはみられない。側縁部には、分割界線が残るものも多い。

以上のことから、SD4345から出土した瓦類は、軒丸瓦の瓦当こそ出土していないものの、軒丸瓦丸瓦部の接合手法や丸瓦の特徴からみて、従来から石神遺跡で出土している奥山廃寺式軒丸瓦の製作技法と合致する。したがって両者は同時期と考えられる。奥山廃寺式軒丸瓦の年代は、瓦当文様および製作技法から620~630年代に位置づけられており、齊明朝の饗宴施設としての石神遺跡以前の年代を示す。このことは、SD4345が、齊明朝の東限施設であるSB4340に壊されているという遺構の重複関係とも一致する。花谷浩は、石神遺跡から瓦が出土することに関して、仏教施設が存在した可能性を示唆している(花谷浩「石神遺跡の瓦」『紀要2004』)。今回の調査でこの問題を検討する十分な材料が揃ったとは依然としていいがたい。しかし少なくとも石神遺跡において、齊明朝の饗宴施設よりも古い瓦葺建物の存在が確認できたことは、重要な成果といえる。

なお、SD4345から竹状模骨丸瓦の狭端部が1点出土した(図88-5)。竹状模骨丸瓦とは、一木の模骨のかわりに丸棒状の側板を綴じ合わせたものを模骨にして製作した丸瓦のことである。棒状の側板は1cm前後で、狭端から広端に向かって約12cm下がったところに側板を連結する綴紐の痕が確認できる。凸面は丁寧にナデ調整する

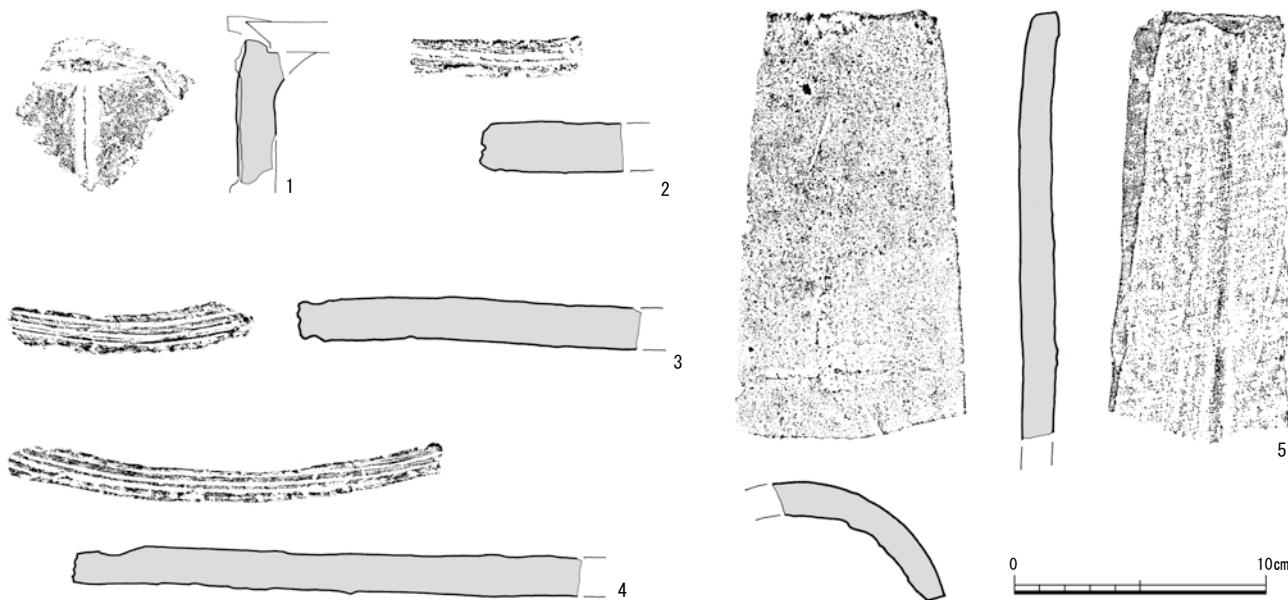


図88 第156次調査出土瓦 1:3

ために、叩きの種類は特定できない。飛鳥において竹状模骨の使用年代は7世紀後半と考えられており、今回出土した資料は、SD4345の年代からみても従来の年代観より四半世紀以上遡ることになる。竹状模骨は百濟から伝わった丸瓦製作技法と考えられ、その使用年代は九州の竹状模骨丸瓦との関連性を考える上でも重要な問題である。これに関しては、石神遺跡から出土した瓦をもう一度検討した上で再度報告したい。
(石田由紀子)

石製品 弥生時代の所産とみられるサヌカイト製石器、および古墳時代の滑石製品が出土した。サヌカイト製の石器は石鏃を中心に213点、滑石製品は白玉が9点、有孔円板が1点出土した。このほかに碧玉製品の破片なども出土している。

金属製品 鉄製品の出土量はごく少なく、確実な遺物は鉄釘が1点出土したにとどまる。冶金関連遺物としては鉄滓13点、埴堀片1点、土製鞴羽口片3点が出土した。このほか、焼土塊が若干量出土した。

4まとめ

まず、今回の調査区における遺構変遷を整理し、つぎに各時期の遺構の性格について考察する。

遺構変遷の概要 東限施設が存在せず、瓦葺で礎石建ちと推定される建物および東西柱穴列が営まれるA1期を経て、東限施設となる掘立柱塀と掘立柱建物が営まれるA2・A3期の3時期を確認した。東限施設はほぼ同じ場所を踏襲して建て替えられていたことが判明した。

B1期の整地後、東西南北を溝で区画し、新たに掘立柱建物や塀などが点在する状況が確認された。東限施設に付帯して塀や建物が整然と並ぶA期とは明らかに様相が異なる。B期以降、それまでの東限施設や通路は姿を消し、一帯が大規模に整地され、A期東限のさらに東側にも遺構が展開する。

A期遺構の性格 A1期の雨落溝SD4345をもつ建物は、瓦葺の礎石建物であった可能性が高く、饗宴施設としての体裁を整える前段階の遺構とみられる。饗宴施設以前に整地をおこなった上で瓦葺建物が存在したとなると、石神遺跡の成立を考える上で重要な知見となろう。というのも、7世紀前半の瓦葺建物といえば、仏教施設が想定されるからである。これは、石神遺跡内に仏堂の存在を推定した花谷浩の見解を裏付けることになる（花谷浩、

前掲）。ただし遺構として確認したのは今回が初めてであり、伽藍としての体裁を整えていたかどうかは、周辺の調査を待って判断する必要がある。

既往の調査においても瓦は出土するものの、瓦葺建物と推定される遺構は確認できていなかったが、これは饗宴施設としての整備時に撤去され、さらに整地などの地形的改変によって建物の痕跡が消失したことによる。饗宴施設としての石神遺跡の成立前史を考える上で、貴重な知見が得られた。A1期の年代については、出土した瓦から620～630年代と考えるのが妥当である。ただし、まだ東限施設を設けていない点や、その後は瓦葺建物が存在しない点を勘案すると、当該時期は饗宴施設としての石神遺跡とは性格を異にする施設だったと理解すべきであり、A1期という時期呼称についても再検討する必要があろう。

饗宴施設としての石神遺跡の体裁は、A2期以降に整備されていく。A2・3期の東限施設は掘立柱建物と塀

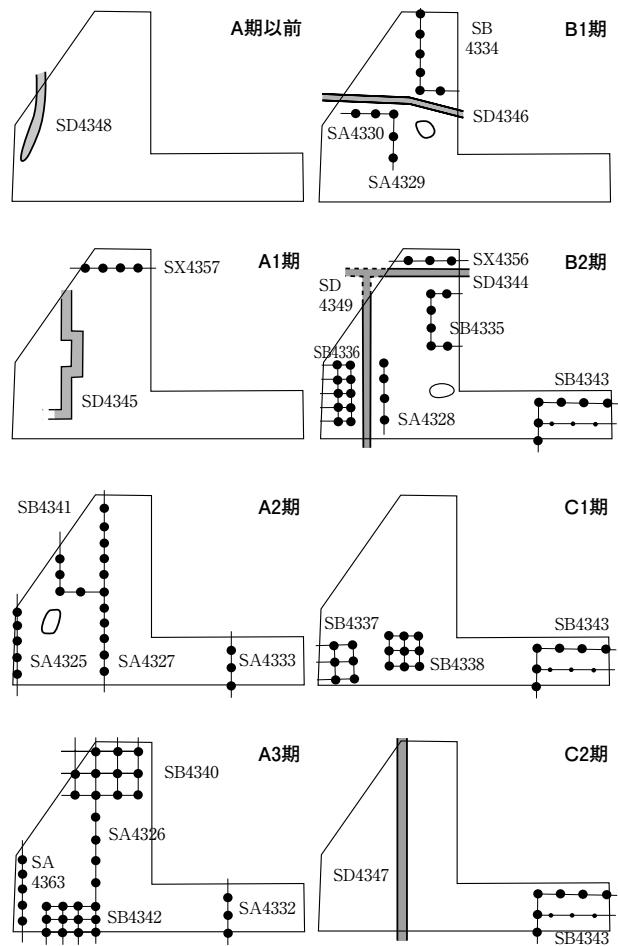


図89 遺構変遷図 1:1000

などからなり、東限施設の東西両側に営まれた塀も含めて、ほぼ位置を同じくして建て替えがおこなわれたとみられる。なお、東限施設の外側には北限でみられるような石組溝は存在しない。一方、SA4363のすぐ西側には南北石組溝SD332が通っており、北限施設とは排水系統の様相がやや異なる。またA2・3期には、東限施設の東側には南北塀に挟まれた幅16~16.5mの空間があり、ここが遺跡外周の通路と推定される。

また、A2・3期における東限塀に取り付く建物に関しては、東側にある通路状の空間を評価するならば、A3期のSB4340は門の可能性が高い。一方、同時期とみられるSB4342については、南北塀に取り付く床張建物の可能性が高く、門の可能性は低い。A2期の建物SB4341は、構造的に門といえる建築ではないが、すでに外周の通路が存在することや、その後のSB4340がほぼ同じ位置に造営されたことを勘考すると、機能的に門であった可能性は捨象できない。よって、今回の調査区では遺跡北東部に設けられたA2・3期の南北塀と門を確認したと評価できるのではなかろうか。なお東限施設の西側にも南北塀がみとめられるが、中枢部を取り巻く塀のひとつとして考えておきたい。

B・C期遺構の性格 既往の調査成果からは、天武朝とされるB期には官衙の存在が推定されているが、今回の調査成果からみる限り、官衙と推定できる明確な証左は得られなかった。ただ、A期東限以東でも建物が造営され、さらに調査区東側にも展開していく可能性が高いことなどを勘案すると、天武朝における官僚制整備とともになった官衙域の拡大と関わる可能性は十分あろう。既往の調査でB期の南限と北限についてはA期の位置をほぼ踏襲することが判明しているが、東限については今回の調査区以東に移動していることは確実である。これはB期遺構の南限塀が東へ延びるという既往の調査成果と矛盾しない。なおSB4343は、出土遺物から廃絶が奈良時代まで下ると判断されるため、B2期の造営からC2期までは確実に使用されていたようである。

C1期については、調査区内からさらに南側や西側へ展開する倉庫群の一角を検出した可能性が高いが、その存続年代は短かったようである。これら倉庫群に伴う区画が調査区内で確認されていないことも、倉庫群が調査区外へと広がる推定根拠となろう。その倉庫を壊して設

けられる南北溝SD4347は、B2期以降東側に位置するSD4343とともに掘られた溝の可能性がある。

遺跡全体の遺構変遷 これまで21回にわたる石神遺跡の調査成果から、遺跡全体の遺構変遷の概要(図90)とその性格を整理する。

正方位でない石組溝が設けられるなど、土地利用の一端は垣間見えるものの、具体的には性格が明らかになっていないのがA期以前である。

A1期は、まとまった建物群などは確認されていないが、整地をおこなった上にSB3900など、正方位にのった建物が点在する時期である。今回の調査で判明したように、瓦葺建物も一部で造営されたようである。なお、東南部でも今回出土したものと同時期とみられる瓦が出土していることからすると、瓦葺建物は複数棟存在した可能性が高い。少なくともA2・3期とは性格の異なる施設が存在したとみられ、その性格は仏教関連施設を想定しておく。官衙内に仏教関連施設が所在する可能性について古市晃らが指摘しており(古市晃『日本古代王権の支配論理』塙書房、2009)、その具体的な性格についても今後詳細な検討が必要である。

続くA2期には、瓦葺建物などを撤去し、遺跡の四至が定まり、区画内に大型の掘立柱建物SB1320をはじめ、比較的小規模な総柱建物SB1540などや石組溝が造営される時期である。ただし、明確な中枢部分といえる建物はこの時点ではみとめられない。したがって、この段階から饗宴施設とすべきかは今後の検討を要する。

A3期は、長廊状の建物によって区画された空間内に大型建物を設けた明確な中枢部が営まれた時期であり、饗宴施設として整備された最盛期である。中枢部以外には、全面石敷の広場や大型の井戸、噴水施設などが設けられ、基幹水路SD332・335などから各所に配水するなど、石組溝をはじめとした通水体系なども本格的に整備される。また、中枢部ではA3期に再度整地がおこなわれる。一方、水落遺跡もこの時期に整備され、関連する施設として営まれている点も注意しておきたい。

B期は、塀で区画された空間に建物が点在するが、今回の調査区以外には溝が存在しない。大型の建物は遺跡北西部および今回の調査区が位置する北東部、さらに南東部にみとめられ、中心的な施設が遺跡東側と西側の二カ所に存在したようである。

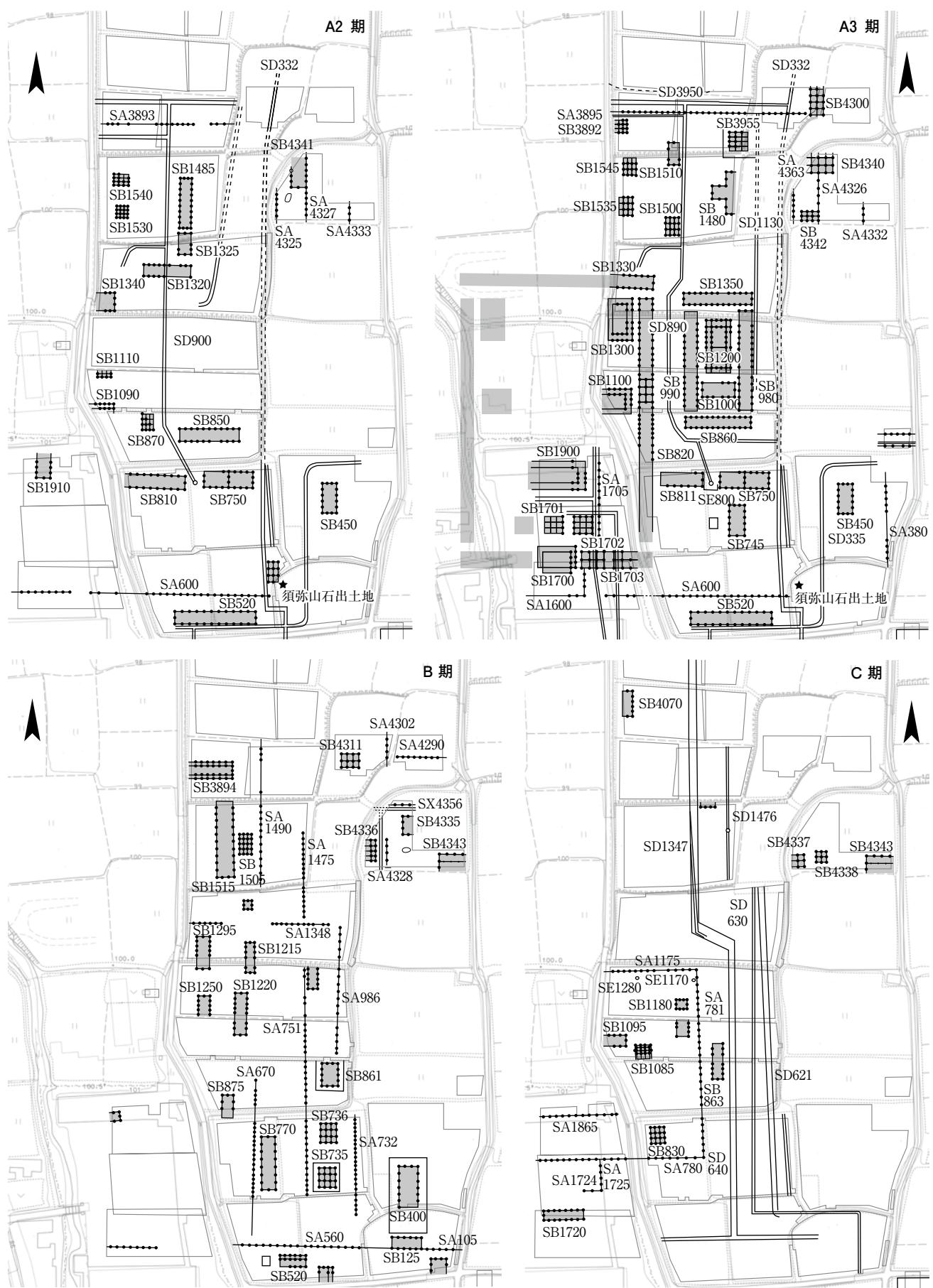


図90 石神遺跡遺構変遷図 1:2000

C期になると、数条の南北溝や塀によって東西にそれぞれ明確に区画され、B期よりさらに東西の区分が進むようである。建物が点在する様相はB期と変わりがないが、B期から続くSB4343以外に顕著な建物がみとめられなくなる。

東限施設の建物と塀 今回確認された東限施設では、建物の側柱に塀が取り付くという特徴が明らかとなった。同じ特徴を有する類例は、先述した飛鳥地域だけにとどまらない。7世紀代の類例を瞥見すると、列島各地に散見されるが、傾向としては東北地方の郡庁など官衙中枢部に比較的多くみとめられる。管見におよんだ類例として、仙台市太白区郡山遺跡I期官衙中枢部（7世紀中頃～末）、宮城県古川市名生館遺跡官衙中枢部（7世紀末以降）、福島県南相馬市泉廃寺I期・II-A期郡庁院（7世紀後半～8世紀）などがあげられる。いずれも郡庁の類型ではIA類に該当する（中山敏史「郡庁」『古代の官衙遺跡II』奈文研、2004）。

石神遺跡と東北地方との関連をうかがわせる資料として、東北地方産とみられる内面黒色土器は、飛鳥地域における出土が石神遺跡にほぼ限定されること、また石組方形池が石神遺跡と郡山遺跡で確認されることなどをあげることができよう。このことから、石神遺跡および郡山遺跡などは、蝦夷の往来を裏付ける事例とこれまで評価されてきた。

今回確認された建物と塀の取り付き方も、人々の飛鳥と陸奥の往来をうかがわせる事例といえるかもしれない。官衙造営にあたり、石組池のみならず建造物の配列までも含んだ土木技術全般が飛鳥地域から東北地方へもたらされた可能性も考えられよう。

石神遺跡の規模 A期の遺跡東限がほぼ確定した今回と既往の調査成果をふまえると、A2・3期における石神遺跡の規模は、昨年度調査で導き出された南北約180m、東西約130mとした推定値の蓋然性が高まった。石神遺跡の全体像解明へ向けて成果をあげることができただけでなく、通路と想定される空間を確認したことなど、古代飛鳥における空間復元にも有効な情報がえられた。今後、21次にわたる発掘調査成果をふまえ、各時期における統一的な遺構の変遷と性格の変化と位置づけについて、周辺遺跡なども含めて遺構・遺物の両側面から精査することが必要となろう。

今回の成果のまとめと課題 最後に、今回の調査で得られた成果を要約する。

まずA期には、東北隅に近いという場所にもかかわらず、2度にわたる大規模な整地をおこない、建物や塀が何度も建て替えられた状況が判明した。これら整地土から出土した土器をみると、A期整地土のものは飛鳥I、B期整地土は飛鳥II～IIIの特徴を示し、明確に年代が分かれることが明らかとなった。遺構出土土器のみならず、整地土出土土器により、それぞれの時期の年代を考えるうえで重要な情報が得られた。さらに、A1期としたSD4345出土瓦の年代が620～630年代に位置づけられることから、今回の調査区におけるA期整地はこの直前におこなわれたと考えられる。

A1期については、饗宴施設に先行する仏教関連施設が造営された時期と評価できるようになったことが重要な成果である。したがってA1期の石神遺跡は、A2・3期とは性格が異なっていた可能性が高く、饗宴施設とは別の施設として考える必要がある。

つぎに、A期の通路および門と推定できる遺構を検出したことも重要な成果と位置づけられる。これは飛鳥地域全体の中における石神遺跡の位置づけを考える上で新たな問題を提起したもので、周辺の調査成果をも総合して検討していく必要がある。

また、遺構の重複関係からB期とC期がそれぞれ細分され、4小期にわたることが判明した。7世紀後半の石神遺跡が、南方に展開した飛鳥板蓋宮などの諸宮といかに連関したかを考えるうえでも、細かな時期変遷によってより精緻な議論を展開することが可能になったといえよう。

最後に、A2・3期における東限施設が確認されたことから、A期東限がほぼ確定したことが最も重要な成果である。これにより遺跡全体の規模もほぼ確定でき、今後の検討に貴重な資料を提供した。

今後、これまでの21回にわたる調査成果をふまえ、中枢部および周辺地域の整地の状況や重複関係を分析し、全体的な遺構変遷を詳細に検討していくかなければならない。また、土器、瓦、木製品、金属製品、木簡をはじめとした出土遺物の精査などもあわせておこない、石神遺跡の性格およびその変遷を一層明らかにしていくこととしたい。

（青木）

雷ギヲ山城の調査

—第152-4次

1 はじめに

本調査は、個人住宅の新築にともなうものである。調査地は雷丘北方遺跡から約80m北に位置し、村道耳成線の西側に面している。

調査区の北西部に隣接するギヲ山は、中世には山城として利用され、雷ギヲ山城として『日本城郭大系』に掲載されている（児玉幸多・坪井清足監修『日本城郭大系』第10巻、新人物往来社、1980）。また、調査区一帯は古くから大官大寺式の瓦が出土・採集されることでも知られており、寺院（雷廢寺）もしくは瓦窯の存在が指摘されていた。現状では、これらに関連する遺構は検出されていないものの、調査区から50m北に位置する第81-7次調査では7世紀前半から平安時代にかけての遺構が検出されている（『年報1997-II』）。

調査区は長さ約9m、幅約4mで設定し、その後北西隅を、1.3m幅で北に1.5m拡張した。調査面積は38m²。調査期間は2008年10月2日から同月9日までである。

2 検出遺構

基本層序 調査区の基本層序は、①耕土（10~20cm）、②床土（10~15cm）、③灰褐色粘質土（地山の凹凸を均すための薄い整地土）、④地山（明橙色粘質土）となる。遺構面は地山直上で検出した。

検出した遺構には、東西溝1条、南北溝1条、柱穴2基、土坑2基および小穴、耕作溝がある。以下、主要な遺構について述べる。

東西溝SD4320 調査区の北肩を東西に流れる溝。調査区西端から6.6m東で北に向かって折れ曲がり、後述するSD4321には合流しない。溝の北肩を確認するために調査区北西隅を約1.5m北へ拡張したが、溝幅が広く拡張部分で検出することはできなかった。溝の深さは掘込面である地山から約1.6m。溝は掘込面から30~50cm落ちた部分でやや緩やかに傾斜する面をもち、そこからさらに1m急激に落ち込む。溝の底面から約1mの厚さで植物遺体を大量に含む沼状の堆積層を形成しており、溝が機能していた当時は水を湛えていたことがわかる。溝

幅は不明であるが、拡張区北辺付近がSD4320の中心と仮定すると溝幅はおよそ3.6~4mになると思われる。12~14世紀に位置づけられる瓦器碗や羽釜が出土した。雷ギヲ山城をめぐる水濠と考えられる。

南北溝SD4321 調査区の東辺を南北に流れる溝。溝の東肩は調査区外になるため確認できていないが、検出した部分から推定すると溝幅は1~1.5m程度になると思

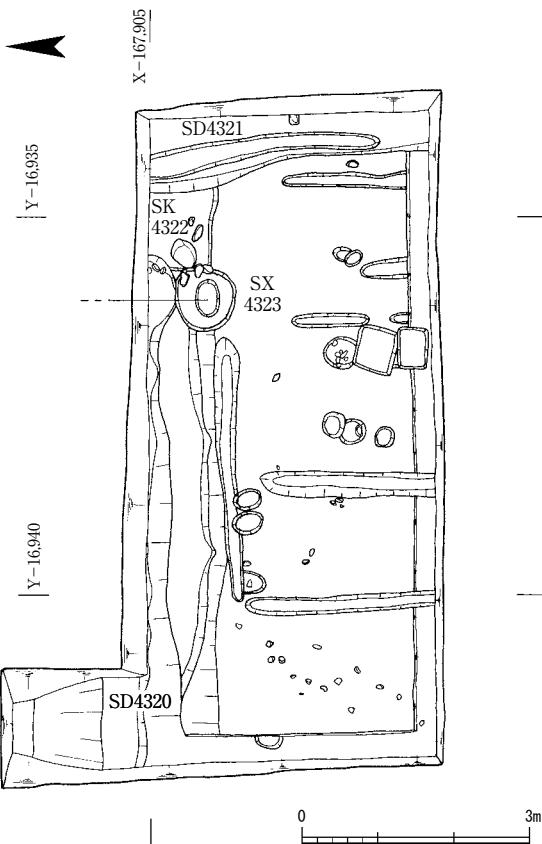


図91 第152-4次調査遺構図 1:100

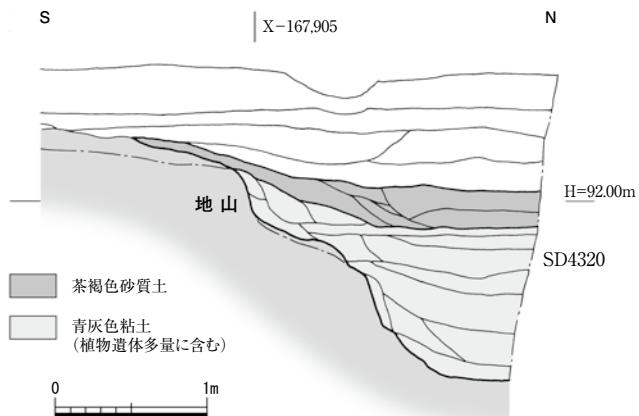


図92 SD4320南北断面図 1:50

われる。深さ約40cm。溝の埋土には土器を少量含むものの、すべて小片で時期は不明である。

土坑SK4322 調査区東北隅から約1.5m西に位置する。SD4320およびSX4323に壊されており、調査区の中ではもっとも古い遺構。柱穴の可能性もあるものの、土坑の一部が北壁にかかっていることもあり、柱抜取穴は認めることができなかつた。直径85cm、深さ30cm。

柱穴SX4323 調査区の東北隅から、約2m西に位置する。1基のみ検出した。柱穴の掘方は一辺80cm、深さ50cm。柱穴の規模からみて、古代の遺構の可能性がある。SD4320に壊されており、柱穴の東・西および南延長線上には次の柱穴が認められなかつた。従って、SX4323を起点にして北へ延びる南北堀、もしくは東延長線上の柱穴がSD4321によって壊されたとすれば、掘立柱建物の南西隅柱の可能性も考えられる。

3 出土遺物

瓦類 調査区からは瓦類の出土はごくわずかである。瓦類は、いずれも古代のもので、丸瓦4点(400g)、平瓦14点(1470g)が出土した。
(石田由紀子)

土器 調査区からは整理箱1箱分の土器が出土した。中世の土師器、瓦器が主で、7世紀から奈良時代にかけての土師器、須恵器のほか、製塩土器や近世陶磁器が少量出土している。SD4320からは、土師器小皿、羽釜、瓦器碗が出土した。1・2は土師器小皿。口縁部を強くヨコナデする。3~5は瓦器碗。4は器壁が薄く、退化した高台を貼り付ける。5は高台が低い台形を呈する。最下層出土。6・7は羽釜。6は口縁部が強く外傾し、端部を折り返す。7は口縁を折り返さず、丸くおさめる。これらは12~14世紀代のものである。
(小田裕樹)

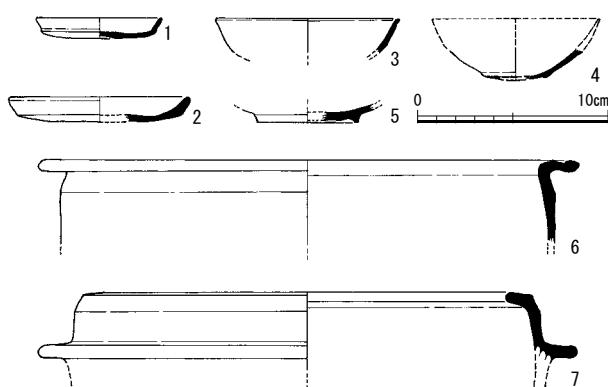


図93 SD4320出土土器 1:4

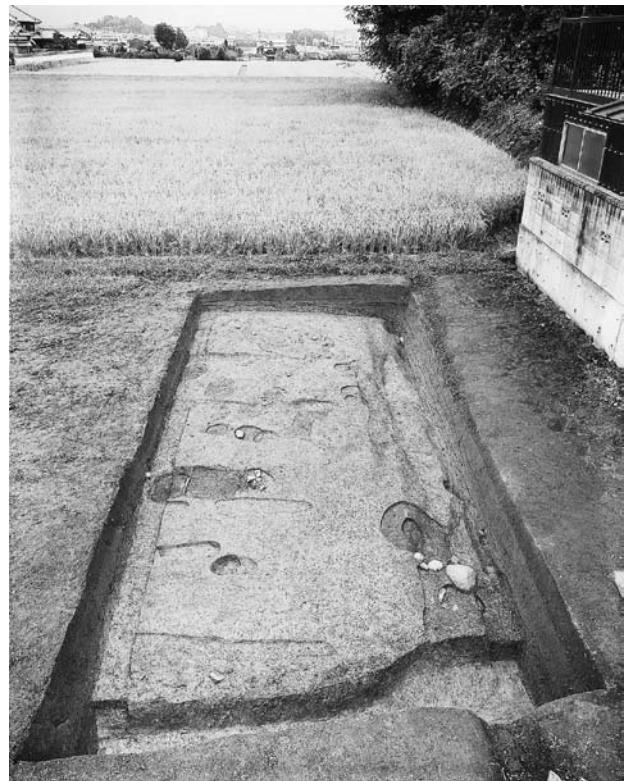


図94 第152-4次調査区全景（東から）

4 まとめ

今回の調査では、古代のものと考えられる柱穴は検出したものの、建物などは明確には確認することができなかつた。しかし、雷ギヲ山城の水濠と考えられる遺構を検出することができた。

雷ギヲ山城は、城主、築城年代、存続期間など、詳細は不明の城であった。しかしながら、城をめぐる水濠SD4320が検出されたこと、しかもSD4320から12~14世紀代の土器が出土したこと、雷ギヲ山城の城郭構造および存続期間に関する手がかりを得ることができた。雷ギヲ山城が機能していた時期は、比叡山の末寺となった多武峰と興福寺とが対立し、十数回もの相論・武力衝突が起きており、飛鳥地域でも東部の坂田、細川、冬野などが戦場となっている（吉川真司「中世の飛鳥」『続明日香村史』明日香村、2006）。したがって、多武峰へと向かう要所にある雷ギヲ山城も、あるいはこのような争乱と関わりがあるのかもしれない。

以上、今回の調査は狭小な調査区であったが、中世の飛鳥地域を考えるうえで重要な成果を得ることができたと言える。
(石田)

飛鳥寺の調査

—第152-2・152-3次

第152-2次調査

個人住宅建替えによる史跡飛鳥寺跡の現状変更にともなう発掘調査である。調査地は現飛鳥寺東辺の南北道路と飛鳥坐神社から西へのびる東西道路がT字に交わる東南角、飛鳥寺講堂の東北にあたる。1995年には同一敷地内において調査をおこない、柱穴の可能性も考えられる土坑3基を検出している（飛鳥寺1995-1次『藤原概報26』）。敷地北端に南北2m、東西7.5mの調査区を設定した。調査面積15m²。調査期間は2008年7月15日～18日。

基本層序 現地表面から、住宅解体にともなう搅乱層、旧表土である明褐色砂質土層、灰褐色砂質土層、多量の遺物を含む暗褐色土層となり、現地表下50～60cmで遺構検出面である黄褐色粘質土層となる。

検出遺構 検出した主な遺構には、瓦敷面、東西溝がある。瓦敷面SX2000は、調査区北東部で検出したもので、南北80cm、東西3mにわたって確認した。調査区の東および北へさらに広がるものと考えられる。黄褐色の粘質土（花崗岩風化土）により上面が覆われていた。瓦敷の西端は接地面にそってわずかに西に傾斜する。南端は、東西溝SD2003の北側に接し、東西2箇所に穴状の掘り返し（SX2001・2002）を受けている。SX2002からは飛鳥寺I型式の軒丸瓦が1点出土した。

東西溝SD2003は、調査区の南半で検出したもので、幅50cm、調査区西端で深さ50cm。調査区西端付近で南に折れていた可能性がある。部分的に遺存する石から両側に石を据えていたものとみられるが、南側石は長さ40cmほどの塊石を内側に面を揃えて据え、北側石は20cmほどの小ぶりなものとする。このことから、調査区の南方に基壇状の施設が存在し、SD2003はその北辺の雨落溝であった可能性がある。また、調査区西壁の断面観察によりSD2003は再掘削され、2時期あるものと考えられる。このほか、SD2003の北岸に、柱穴状の穴SX2004などを検出した。

これらの遺構を覆う暗褐色土層には、中世前半の土器が含まれる。また、崩落したSD2003の南側石脇からも中世の土師器皿が出土した。一方、SX2001・2002からは、奈良時代から平安時代にかけての土器が出土しており、瓦敷SX2000および石組溝SD2003は、中世前半に埋め立てられたものと考えられる。

出土遺物 創建期の軒丸瓦を含む多量の瓦、土器、金属製品がある。軒丸瓦は、いずれも素弁の飛鳥寺I型式3点、VI型式1点が出土し、平瓦632点（47.07kg）、丸瓦184点（25.71kg）、計816点出土している。

まとめ 以上のように、今回の調査は、小規模であるにもかかわらず、古代の飛鳥寺に関わる遺構が良好な状態で遺存することが判明した。また、中心伽藍東北部における基壇建物の存在の可能性など、あらたな知見を得るものとなった。

（次山 淳）

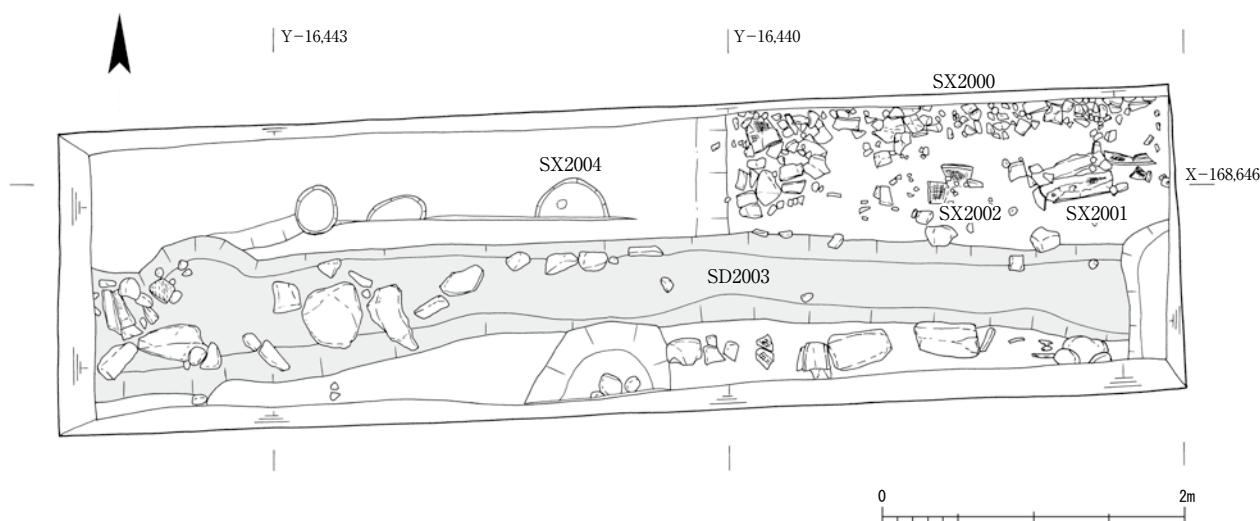


図95 第152-2次調査遺構図 1:50

第152-3次調査

個人住宅建築による史跡飛鳥寺跡の現状変更にともなう発掘調査である。

調査地は、現飛鳥寺駐車場の北側、飛鳥寺回廊東北隅の東に隣接する。敷地南端に、南北1.5m、東西8.5mの調査区を設定した。調査面積13m²。調査期間は2008年7月23日～25日。

基本層序 現地表面から、コンクリート等を含む埋め立て土、暗褐色砂質土、黄褐色粘質土、橙褐色砂質土、明褐色砂質土、灰褐色砂質土となり、橙褐色砂質土以下が遺構検出面となる。遺構検出面は、調査区内で西から東へ緩やかに傾斜し、西端で地表面から60cm、東端で120cmを測る。後述するように、橙褐色砂質土は大きく削平を受けているが、堆積のあり方から、この傾斜はある程度旧地形を反映したものと考えられる。

検出遺構 この遺構面上で検出した遺構は、南北素掘溝1条、石組遺構1基、土坑1基にとどまる。南北素掘溝SD2011は、調査区西端で検出した。幅40cm、深さ50cmで、ビー玉や石炭等が出土したことから近代以降のものと考えられる。石組み遺構SX2012は、直径40cmほどの平面円形に小礫を詰め込んだものでSD2011の埋土を掘り込む。土坑SK2013は、調査区東北端で検出した。層位と

出土遺物から、近代以降のものと考えられる。

また、遺構検出面からの遺物の出土は極めて乏しいものであった。したがって、飛鳥寺にかかる古代の生活面は、近代以前に削平を受けたものと考えられる。

出土遺物 出土遺物は、全体に乏しく、包含層中から出土した少量の古代の瓦（平瓦44点、丸瓦1点）、陶磁器などの土器類、SD2011埋土より出土した金属製簪、ビー玉、石炭などがある。

まとめ 今回の調査地の西隣接地では、飛鳥寺第3次調査および明日香村教育委員会による再調査で、北面回廊基壇の一部を検出している（奈文研『飛鳥寺発掘調査報告』1958、明日香村教育委員会「2005-8次 史跡飛鳥寺跡範囲確認調査」『明日香村遺跡調査概報平成17年度』2007）。

しかしながら今回の調査範囲では、削平により古代の遺構の遺存状況がきわめて悪く、回廊外周の遺構等を確認することができなかった。第3次調査の遺構実測図では、回廊東北隅の推定東辺ラインよりも西側に、回廊基壇の東への落ちが表現されており、削平が回廊基壇東辺（東面回廊）まで及んでいた可能性がうかがわれる。

一方、現在は平坦地となっている現飛鳥寺東辺の南北道路付近の地形が埋め立てによるもので、本来は南北方向の谷状の地形であったものと推定され、飛鳥寺境内地の旧地形を復元するための材料が得られた。（次山 淳）

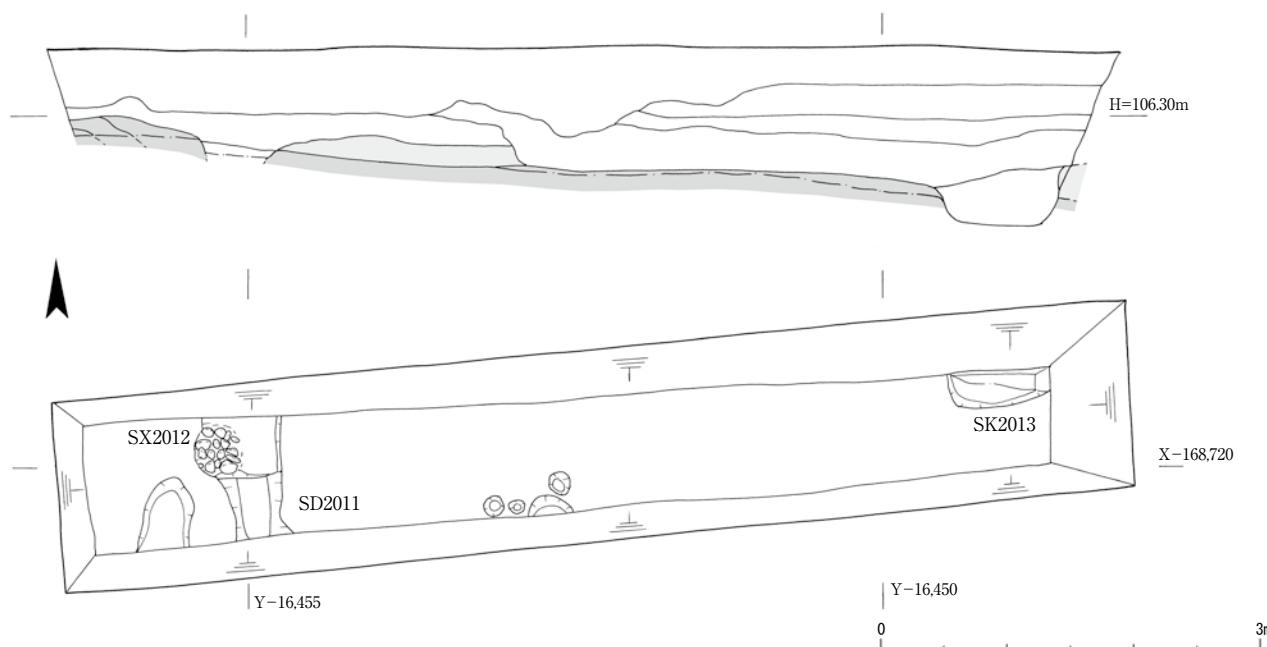


図96 第152-3次調査遺構図・北壁断面図 1:60

飛鳥寺南方の調査

—第152-5次

1 はじめに

本調査は、倉庫建設計画とともに史跡飛鳥寺跡の現状変更に関する事前調査である。調査地は、飛鳥寺の南東、寺域を画する南面築地堀SA535の南約30mに位置する。また、東約30mには飛鳥寺所用瓦を焼いた瓦窯の立地する丘陵が迫り、南方には飛鳥の諸宮が展開する。

今回の調査地の北約5mにおける1978年度調査では、飛鳥寺南限の築地堀、掘立柱建物、堀、木樋、石組溝などを検出している（『藤原概報9・10』）。なかでも2間×2間の総柱建物は、道昭が飛鳥寺東南隅に建立した禅院（通称、東南禅院）の経蔵に関わる遺構として注目を集めた。飛鳥池遺跡の北側で実施した1992年調査では、礎石建ちの基壇建物を検出し（『藤原概報23』）、所用瓦の検討などから、こちらが東南禅院の有力な比定地となっているが、1978年度調査地の重要性に変わりはない。

また飛鳥寺南方では、1956年度の飛鳥寺第2次調査、

1982・83年度の調査などで、西で北に7～8°方位が振れる幅約20.5mの「石敷広場」を検出しており（『飛鳥寺発掘調査報告』、『藤原概報13・15』）、その東延長線上に本調査区は位置する。

今回の調査では、1978年度調査で検出した遺構の南への連続性の有無と、飛鳥寺南方の石敷広場の展開状況の2点の解明を目的とし、L字形の調査区を設定した。調査期間は2008年10月28日～12月2日、面積は95m²である。

2 検出遺構

基本層序 基本層序は、現地表面から順番に、①表土・耕土（約15cm）、②床土（約50～90cm）、③黒褐色砂質土（約10～30cm）。調査区の東端のみ存在しない）、④茶褐色砂質土（約5～10cm）。調査区の東西両端には存在しない）、⑤古代の各種整地土、⑥地山となる。調査区の東側には丘陵が迫ることもあるが、⑤は岩盤を切り崩したような明るい黄褐色砂質土が用いられているが、調査区の中程から西側にかけては暗い茶灰色砂質土が⑤の主体をなす。調査区の四周に設けた排水溝を利用した断面調査の所見では、調査区の東南隅では整地土は厚さ約90cmに及び、他の地点では地山はまったく確認できない。地形的にみて、丘陵に迫る東端で約90cmの整地があったことからすれば、西側に向けて傾斜していく他の場所では、さらに厚い整地がなされていたと推定できる。

遺構検出 重機で②床土まで除去した後、中世の瓦器を含む③黒褐色砂質土で第一回目の遺構検出をおこない、幅約1m、深さ約30～50cmの斜行溝SD2017、素掘小溝数条（SD2016・2023・2025など）などを検出した。

つぎに③黒褐色砂質土を除去すると、調査区の東西両

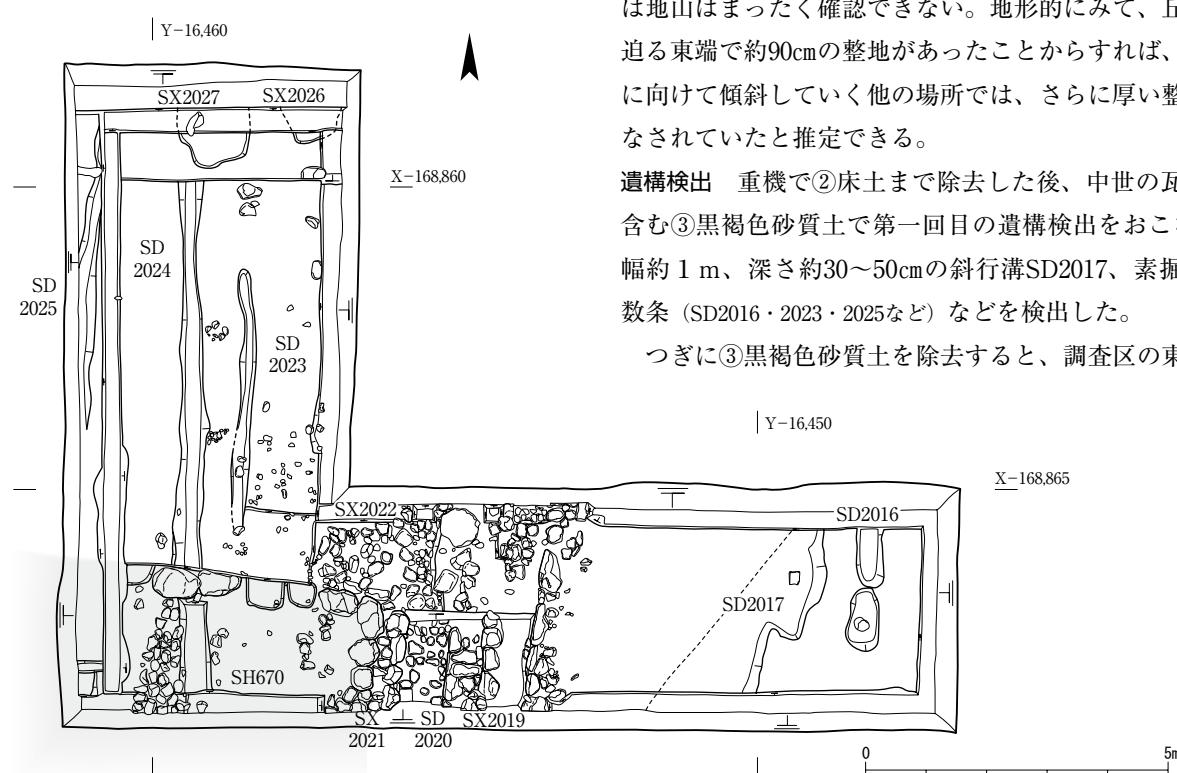


図97 第152-5次調査遺構図 1:125

端では古代の整地土が姿を現すが、調査区の中程では古代の包含層とみられる④茶褐色砂質土が覆っており、後述する石を用いた遺構は、一部その最上面がかろうじて確認できたにすぎない。そこで、④茶褐色砂質土を完全に除去し、⑤古代の各種整地土の最上面で遺構検出をおこなった。検出面は現地表下約70~110cmで、基本的に東はやや浅く、西が少し深くなっている。

整地土の最上面で検出した遺構、および、その掘り下げの過程で検出した主な遺構は、飛鳥寺南方に展開する石敷広場SH670、これと一連の造作になる石敷SX2021、石組溝SD2020、階段状遺構SX2019、そして、これらの遺構が廃絶した後の散石遺構SX2022などである。また、調査区の最北端において、排水溝を利用した断面調査によって、SX2026・2027を検出した。

以下、飛鳥時代を中心とする古代の遺構を報告する。
石敷広場SH670 前述した飛鳥寺南方の石敷広場の東延長上にあたる位置で、北の縁石と石の抜取穴を東西約9m分検出し、さらにそれが南に折れ曲がって2m以上続いている状況を確認した。遺構の状況から、石敷広場の東北隅部と判断できる。縁石は人頭大よりやや大きめの花崗岩を用い、外側の面を揃えて据える。中世の土器を含む南北素掘溝SD2024と重複する縁石は、石の周辺部が少し掘り込まれていたが、石を動かすにはいたっていない。縁石よりも内側には、約20cm大の川原石が敷き詰められているが、後述する散石遺構SX2022に再利用されたり、後世の溝などによって破壊されたため、調査区の西南隅部以外は残存状況はあまりよくなかった。調査区の西南隅部では、良好な残存状況を示しており、平坦面をなすように石を並べている。

石敷SX2021 石敷広場SH670の東縁石よりも約15~20cm下がった、幅約20cmの犬走り状の石敷。北で東に7~8°方位が振れる。約20cm大の川原石を敷く。

石組溝SD2020 SX2021の東隣に位置する、幅約70cmの石組溝。北で東に7~8°方位が振れる。溝底には10~20cm大の川原石を敷く。東西側石は約40cm大の花崗岩を1石ずつ使う。ただし西側石は石を立てるが、東側は石を寝かせているので、底石から側石の最上面までの高さは、西側が約35cm、東側が約15cmである。

階段状遺構SX2019 SD2020の東隣に位置する、2段からなる階段状の石敷。SD2020の東側石を起点として、



図98 階段状の石組溝（南から）

(A) 幅約60cmの石敷、(B) 高さ約30cm姿を現す側石、(C) 幅約50cmの石敷、(D) 高さ約30cm姿を現す側石と続く。いずれも北で東に7~8°方位が振れる。(A)は約40cm大の河原石、(C)は約20cm大の小型の石を主体とする。(C)は残存状況があまりよくなかった。

階段状の石組溝 上記4つは一連の遺構であり、いわば階段状の石組溝である。石組溝の本流は最下層のSD2020であるが、水量が多いときはSX2019・2021とSH670東縁石が一体となって、溝としての機能を果たしたとみられる。階段を構築する際、東西対称とはせず、西は2段、東は3段に側石を積んでおり、ステップも西は狭いが、東はややゆとりをもたせている。また最上部における東西側石の標高も、東に向かって高くなる地形に対応するためか、東が西よりも約10cm高い。東方における空間利用のあり方が注目されるが、今回の調査区では顕著な遺構を確認できなかった。道路の存在なども含めて、今後多角的に検討を進めていく必要がある。

なお本調査では、石敷広場の東北隅部を検出したが、その東縁に沿って設けられた石組溝は、向きを変えて石敷広場の北縁沿いを流れることなく、少なくとも今回の調査区内ではまっすぐ北に延びている。

排水溝を利用した土層観察の所見では、階段状の石組溝を構築する際、整地土を掘り込んだ形跡はとくに認められなかった。このことは、周辺一帯の整地作業をおこなうと同時に、階段状の石組溝を構築したことを物語っている。建設時期をおさえられる所見は得られなかったが、7世紀の飛鳥時代の可能性が高い。

一方、階段状の石組溝が埋没した時期は、最上層から9世紀頃の土師器皿が出土しており、この時期とみられ



図99 第152-5次調査区南半全景（西から）

る。もっとも、溝の中層からは藤原宮期の土器が出土しているので、この時期に埋没が始まった可能性もある。ただし、今回完掘したのは南北1.5m分にすぎず、埋没時期は今後の調査によって判断すべきである。

石組溝が最終的に埋没した後、多くの石が捨て込まれ、散石遺構SX2022が形成された。ぬかるんだ地盤を固めるためであろうか。石敷広場の石の大半は抜き取られていたので、これらの石を使用した可能性が高い。調査区の北縁には長さ約65cmの大型石があるが、石敷広場の縁石に由来する可能性がある。

SX2026・2027 調査区の最北端で検出した2基の柱穴もしくは土坑。整地土の途中から掘り込んでおり、7世紀でも比較的古い時期となる可能性があるが、出土遺物はなかったため、詳しい時期は不明。SX2026は直径約1m、深さ約50cm、SX2027は直径約1.2m、深さ約50cmである。埋土は、前者が暗灰色粘質土～粘土、後者が淡黄灰色砂質土を主体とし、土質はまったく異なる。

3 出土遺物

出土遺物は、平瓦181点(14.8kg)、丸瓦58点(4.9kg)、土器整理箱3箱、鉄釘4点、羽口1点である。瓦は小片が多い。丸瓦のなかには、筒部だけに模骨を用い、玉縁部は模骨の上端に粘土板を積んで作成し、その内面を横へラケズリした玉縁式丸瓦があり、飛鳥寺創建に近い時

期のものである。平瓦は粘土板桶巻き作りで、格子叩きや平行叩き、繩叩きのものなどがある。土器は、古代の土師器、須恵器のほか、中世の土師器、瓦器などがあるが、いずれも小片で図示できない。

4 まとめ

本調査は小面積であったが、飛鳥寺南方の石敷広場の東北隅部を検出したことが最大の成果である。その座標は、X-168,866.7、Y-16,456.1であり、飛鳥寺の中軸までは石敷広場の振れに沿って約62mとなる。

また、石敷広場の東縁に沿って階段状の石組溝が形成されていたが、よく似た遺構は南縁でも検出している(1983年度調査、『藤原概報15』)。すなわち、石敷広場の南に接する石敷SX671、その南に接する石組溝SD662である。だが今回検出したものとは構造が異なり、石敷広場に接する面のみ階段状となる。また石敷SX671は幅約75cmあり、それに相当する今回検出したSX2021が幅約20cmにすぎないのに比べ、幅広である。なお石組溝はSD662とSD2020との間に顕著な違いはない。

一方、石敷広場の北側では、過去の調査で階段状の石組溝はみつかっていない。今回の調査でも、階段状の石組溝は北へ延びることを確認するとともに、石敷広場の北縁にはこうした遺構はないことを再確認した。西縁は未調査で不明だが、少なくとも石敷広場の南縁および東縁を階段状の石組溝がめぐっていたことになる。

ただし、今回の調査区のすぐ北側の1978年度調査地では、階段状の石組溝に対応する遺構を検出していない。逆に、南に延びる別の石組溝や木樋などをみつけているが、今回の調査区では確認できなかった。未調査となつた約5mの間で状況が劇的に変化することになるが、その確認は将来の課題とせざるを得ない。

また今回の調査区では、階段状の石組溝より東側で古代の遺構は確認できなかった。飛鳥の東の丘陵の裾部には南北方向の古代道路が存在し、その側溝となる石組溝を南方の各所(飛鳥京跡、酒船石遺跡、飛鳥寺南方遺跡)で検出している。この道路は地形に沿って緩やかに彎曲しているため、北側にどのように延びるか不明であるが、そのひとつの候補として、本調査区内の東部をあげることも可能である。その当否は周辺の発掘調査成果を見守りつつ、判断していく必要があろう。

(市 大樹)

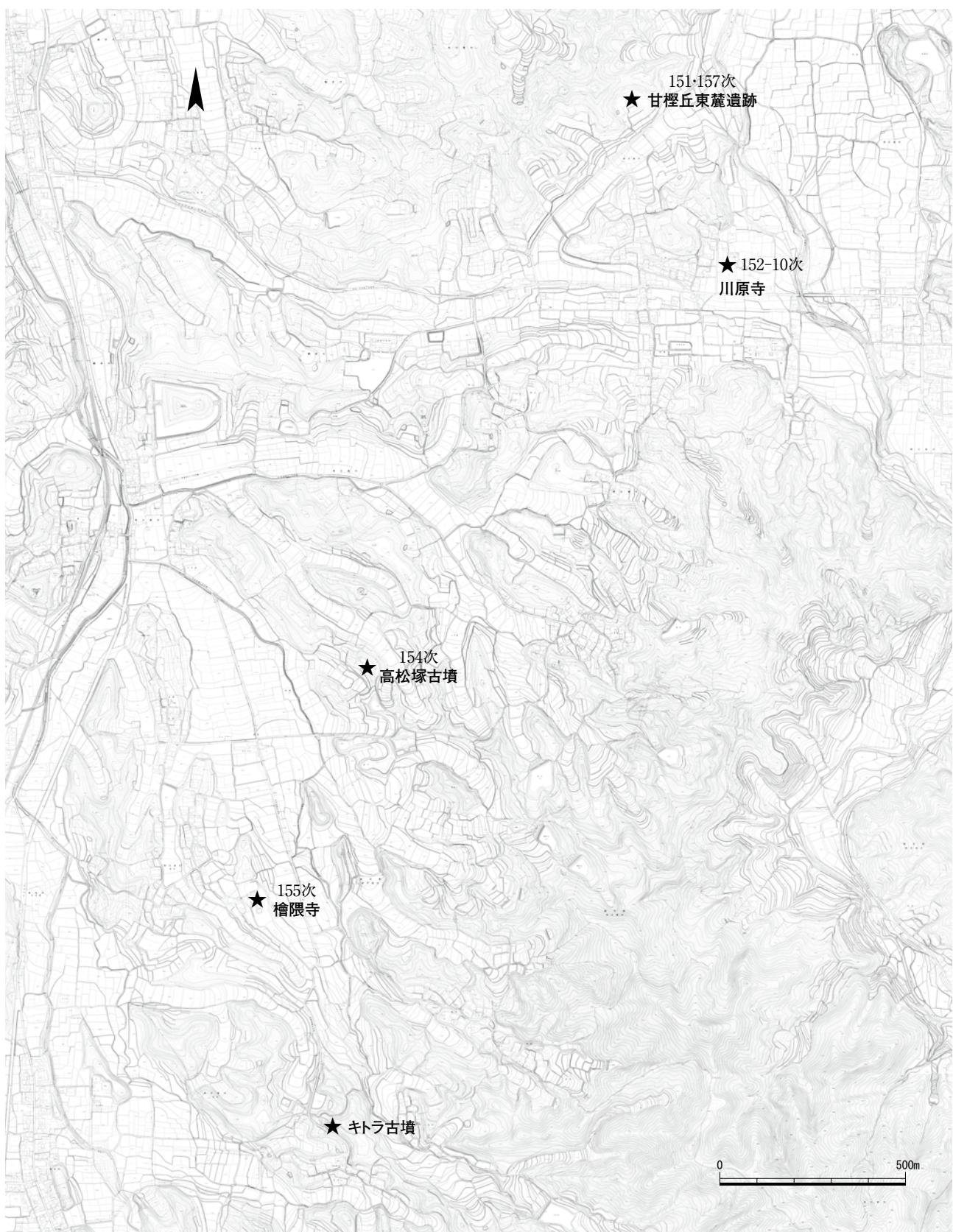


図100 高松塚古墳・檜隈寺周辺の地形図 1:15000

高松塚古墳の調査

—第154次

1 はじめに

2007年度に実施した石室解体事業に引き続き、高松塚古墳の仮整備にむけた発掘調査を、奈良県立橿原考古学研究所、明日香村教育委員会と共同で実施した。調査面積は370m²で、調査期間は2008年7月1日～2009年2月13日である。

高松塚古墳の墳形および規模については、2004年度に実施した発掘調査で、墳丘北半部をめぐる周溝を検出し、上段部の直径17.7m、下段部の直径23mの二段築成の円墳であることが判明している（奈文研編『高松塚古墳の調査国宝高松塚古墳壁画恒久保存対策検討のための平成16年度発掘調査報告』2006）。しかしながら、墳丘南半部には、1975年に建設された保存施設の上部を覆うように厚く盛土がなされており、古墳は瓢箪形に姿を変えている。仮整備事業では、旧来の保存施設を撤去し、古墳を築造当初の姿に復元整備することが決定された。これに伴って、整備盛土の除去や保存施設撤去後の墓道部の再調査が必要になるとともに、これまで調査が及んでいない墳丘南半部についても発掘調査を実施し、整備のための情報収集をおこなうこととなった。

調査は、まず、墳丘南半部を覆う整備盛土を全面的に除去した後に、2004年度に墳丘北東側で検出した周溝の南への延び、ないしは収束のあり方を明らかにする目的で、墳丘南東側を276m²にわたって平面的に調査した。



図102 南東側調査区全景（南東から）

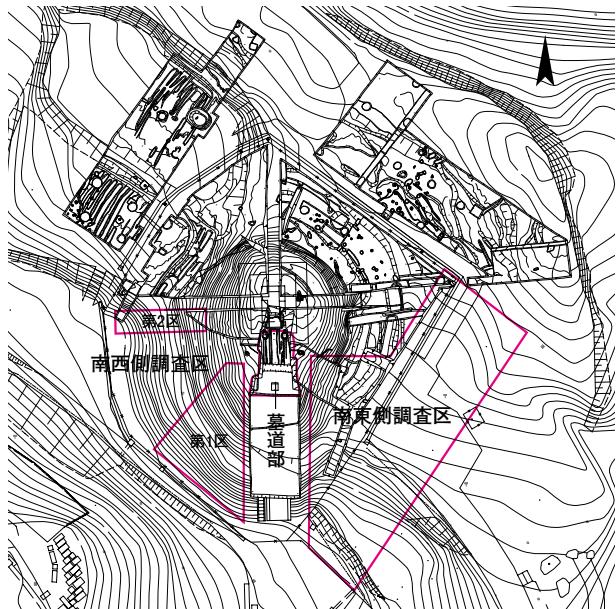


図101 調査区位置図

南東側の調査終了後に、保存施設（2階部分）の解体工事をおこない、続いて、墳丘南西側と露出した墓道部の調査を合わせて実施した。

高松塚古墳における造成土下の基本層序は、上から整備以前の表土層、瓦器を含む中世以降の遺物包含層、周溝埋土、墳丘封土（版築層）、7世紀代の土器を含む遺物包含層、白色シルト層・黄褐色粗砂・砂礫層からなる地山層である。

2004年度の調査では、古墳の北側と東側で墳丘下の基盤面の様相が異なることが判明している。すなわち、北側では地山を開削した基盤面上に直接、墳丘が築かれているのに対し、東側では墳丘および周溝下に7世紀代の土器を含む遺物包含層が存在することが明らかになっている。今回の墳丘南半部の調査でも、地山上を7世紀代の遺物包含層が広く覆う状況を確認した。この遺物包含層は、後述するように、墳丘基盤面の造成に伴う人工的な整地土と判断できる。



図103 保存施設撤去後の高松塚古墳（南から）



図104 高松塚古墳遺構図 1 : 200

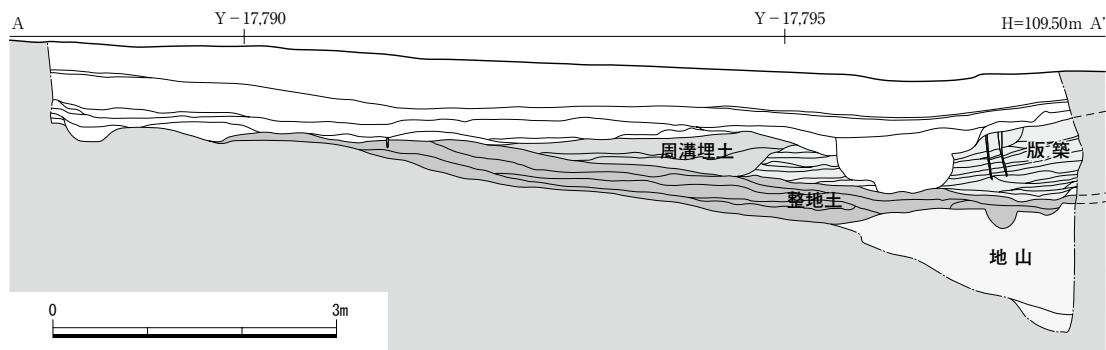


図105 旧東第2トレンチ南壁断面図 1 : 80

2 墳丘南東側の調査

墳丘南東側は、北東から南西にむかって下降する緩やかな斜面をなしており、史跡整備時に敷設されたインターロッキングおよびそれに伴う造成土で覆われていた。それらを除去すると、1972年調査時の旧トレンチが2本、調査区北側と中央で検出された。2004年度調査時に検出・再調査した旧東第1トレンチと同第2トレンチの東半部分にあたり、両者とも地山面まで掘り抜かれていた。この2本の旧トレンチを東へ拡張し、層序の確認をおこないながら調査を進めた。

周溝SD110 2004年度の調査区から続く墳丘の南東側裾部分、およびそれをとりまく周溝SD110を整地土上で検出した。後世の削平のため、周溝の深さは0.4mと浅く、幅も2.8~4mと一定でない。墳丘も削平をうけており、その上面には同じく2004年度調査区から続く中世溝SD139、近代溝SD140が弧状に走る。

周溝内壁は版築層を掘り込んでおり、各所とも30~40°の傾斜で立ち上がる。その下端が墳丘裾にあたるが、上

面には断面三角形状の黄褐色粘質土が厚く堆積しており、墳丘上部からの崩落土によって墳丘裾が早い時期に埋没した状況がうかがえた。したがって、墳丘裾については、本来の状態をとどめている可能性が高い。その形状をもとに墳丘を復元すると、直径23m余の円墳となり、2004年度の復元案の妥当性を追認する結果となった。

なお、後述のように、調査区南端は後世に大きく開削を受けており、周溝の南端部分も失われていた。

石詰暗渠SD250 保存施設東脇で、周溝に向かって延びる石詰暗渠を検出した。先端は削平を受けているが、幅0.5m、深さ0.4mの断面箱形の溝に7cm大の角礫を充填しており、版築の施工前に整地土の上面から掘り込まれている。いわゆる墳丘内暗渠であり、封土下に存在するため、その正確な配置状況を明らかにしがたいが、約3m北の保存施設建設時の掘削面にも続きが認められることから、墳丘南北軸から東約4mの位置に直線的に配置されているものと理解できる。

基盤面の造成 調査区南端は、丘陵下に広がる谷水田の造成時に基盤層ごと大きく削り取られていたが、その開

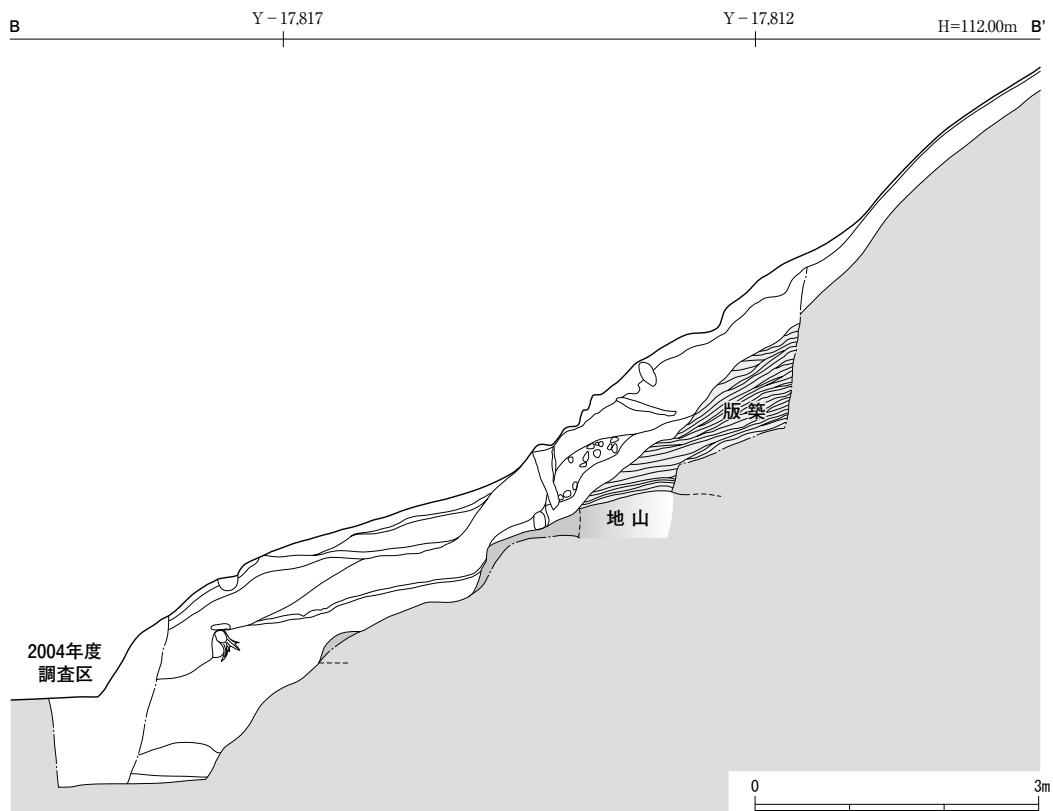


図106 南西側第2調査区北壁断面図 1:80

削面では、整地土下に古墳築造以前の旧表土（灰色粘質土）層が観察され、約30°の傾斜で北西向きに落ち込む状況を確認した。後述の墳丘南西側の調査でも、封土下で南東向きに下降する旧表土層を確認しており、これにより、古墳南裾から東裾にかけて古墳築造以前の谷が入り込むことが明確となった。その規模は、幅約12m、深さ2.3m以上と推定される。2004年度の調査時にも、古墳は、丘陵斜面の地山を開削するとともに、南東側に存在した谷を埋め立てて造成した基盤面の上に築造されていることが推測されてきたが、今回の調査により、谷の埋め立てが予想以上に大規模であること、また、それに伴う整地土が丘陵の東や南側へも広く及ぶことが判明した。なお、整地土内に含まれる土器は、飛鳥V（藤原宮期）を下限とすることを再確認した。

3 墳丘南西側の調査

墳丘の残存状況 南西側の墳丘や周溝の形状、丘陵斜面や基盤面の処理のあり方を明らかにする目的で、2ヶ所に計80m²の調査区を設定した。しかしながら、2ヶ所の調査区にまたがって、幅約10m、奥行き約2mにおよぶ地滑り跡が検出され、大規模地震によって墳丘南西斜面

が崩落した状況が把握された。加えて、谷水田の造成による開削が及んでおり、南西斜面については築造当初の墳丘の姿をとどめていないことが明らかになった。

ただし、南東側の調査成果に基づき図上で直径23mの円を描くと、地滑りを免れた南斜面では斜面裾のわずかに外側を円が通過する（図104）。したがって、南斜面については、後世の開削の影響が小さく、比較的当初の形状が残存しているものとみられる。

基盤面と旧地形 南西斜面でも南東側と同様に、版築下で古墳築造以前の谷と、その埋め立てに伴う整地土層を確認した。谷は予想以上に深く、調査区内では、谷底や南側の立ち上がりを捉えきれなかった。整地の範囲も調査区を越えてさらに南側へと延びる（図107）。一方、旧表土層および地山の岩盤層は北西にいくにつれて上昇し、墳丘西側では地山上に直接版築が施される。

現存する版築下端の標高は、南端で106.6m前後、西端で107.0m前後を測る。基盤面は、概ねテラス状に造成されているものの、墳丘南西側では10~15°前後の傾きで南向きに下降しているようである。

石詰暗渠SD251 保存施設東脇に続いて、西脇でも、石詰暗渠を検出した。幅0.6m、検出長約2mであるが、

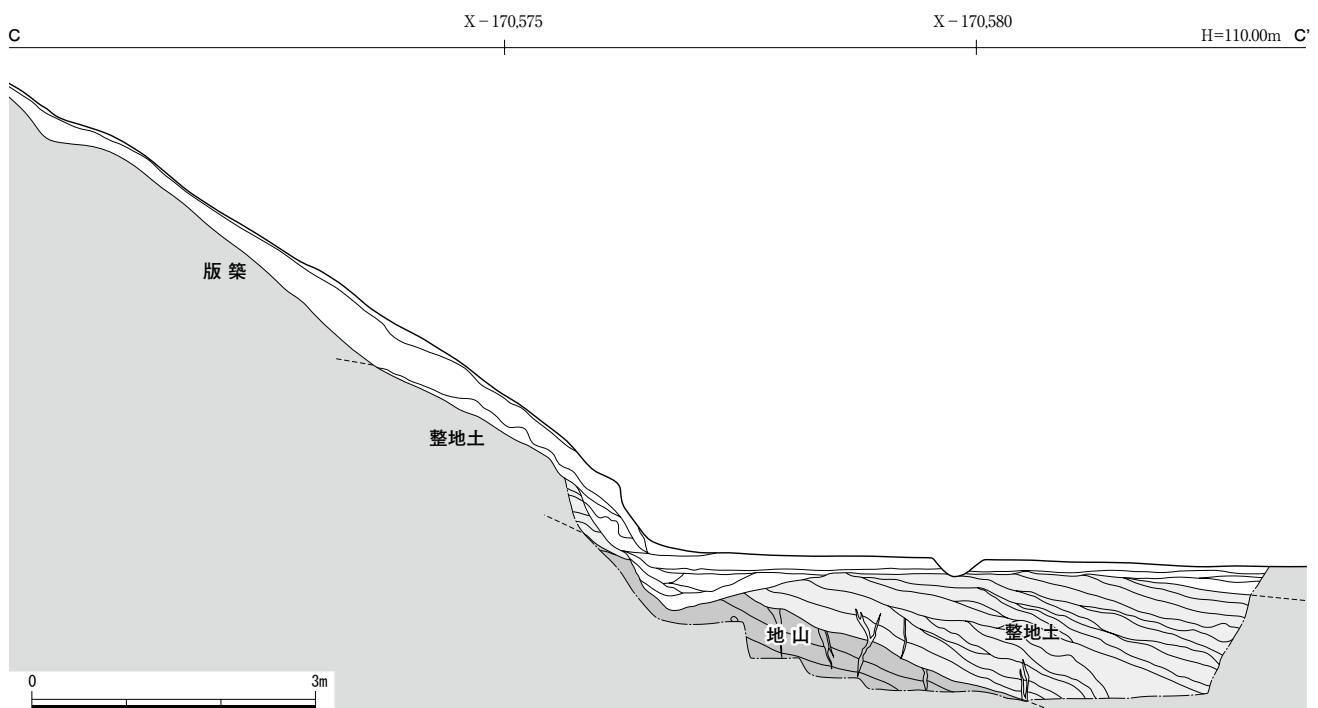


図107 南西側第1調査区東壁断面図 1:80



図108 南西側の暗渠SD251と地滑り（南西から）



図109 南東側の周溝と暗渠SD250（西から）



図110 墓道部西壁（南東から）



図111 墓道部東壁（南西から）

墳丘ごと削平を受けており、本来はさらに南へ延びていたものと推測される。東側のSD250の傾斜角度が5°前後であるのに対し、SD251は15°前後で築かれているが、これは南西側の基盤面の傾斜角度に起因したものと考えられる。墳丘南北軸から西4mの位置にあり、SD250と同様に、版築の施工前に整地土の上面から掘り込まれていることから、2本の暗渠は、東西対称の位置に計画的に配置されたものと判断できる。石室周囲に浸透する水や湿気を墳丘外へ排出する目的で設置されたものである可能性が高い。

4 墓道部の再調査

保存施設は、1974年に発掘調査がなされた墓道部分に収まるように建設され、石室解体作業開始直前まで稼働してきた。仮整備に伴い保存施設（2階部分）が撤去されたことにより、34年ぶりに墓道部が露出した。保存施設は旧発掘区を壊すことなく建設されており、壁面には1974年調査時の分層線がそのまま残っていた。東壁下半には、石室構築後に掘り込まれた墓道の壁面が、西壁に

はその墓道を埋めた際の版築が残る。2006・2007年度調査時に作成した墳丘の南北土層断面図と整合させるため、壁面の再分層と記録作業をおこなった。壁面の精査により、従来知られていた大規模地震による大きな断層風陥没とともに、版築を突き破る亀裂を多数確認した。なお、保存施設1階（機械室）部分の撤去工事とその後の調査は、2009年度に継続して実施する予定である。

5 おわりに

以上のように、今回の発掘調査では、古墳築造時の南面の姿を明らかにすることはできなかったものの、南東側で墳丘裾および周溝を検出し、従来の墳丘復元案を追認することができた。それとともに、旧地形や古墳の築造工程に関する重要な所見を得ることができた。とりわけ、これまで未確認であった墳丘内暗渠の存在が明らかとなり、当初から古墳全体が綿密な計画性のもとに築造されていった状況を裏付けることができた。今後は、これまでの数次にわたる発掘成果を総合して、築造時の高松塚古墳の姿に迫りたいと考える。
(廣瀬 覚)

檜隈寺周辺の調査

—第155次

1 はじめに

飛鳥地域では5カ所目の国営歴史公園の整備が、キトラ古墳周辺に計画された。対象となる地域は、キトラ古墳をはじめ、檜隈寺など多くの文化財を含む広大な地域である。そのため、国土交通省の委託を受けて、奈文研、明日香村教育委員会、樅原考古学研究所が分担して試掘調査を実施することとなり、奈文研は過去の調査の経緯から、檜隈寺周辺について調査を担当することとなった。本調査は、その第1年次として、遺構の状況の確認を目的として実施したものである。調査区は、檜隈寺をはさみ、北側に第1～6区、南側に第7～12区を設けた。調査期間は2008年7月14日から2009年3月25日、調査面積は計1666m²である。

檜隈寺は、高取山から北にのびる尾根から北西に派生した丘陵上に存在し、キトラ古墳の北西約600mに位置する。渡来系の東漢一族の氏寺として、朱鳥元年（686）には既に存在していたことが、『日本書紀』の記述からわかっている。平安時代後期には、倒壊した塔の心礎の上に十三重石塔が建てられ、今もその姿を残す。また、現在、檜隈寺の地は、阿知使主を祀る於美阿志神社境内となっており、講堂の南には社殿が鎮座する。

奈文研では、1979～1988年の間に小規模な調査も含めて計6回の発掘調査をおこなっている。1979～1982年の第1～4次調査では、金堂、講堂、西門、回廊といった主要堂塔を確認し、西を正面とする特異な伽藍配置をとっていることが判明した（『藤原概報10～13・17・19』）。これらの建物は、出土遺物から7世紀後半～末に造営されたことが明らかになっているが、出土瓦の中には7世紀前半に遡るものもあり、その時期の前身堂宇が存在した可能性も考えられている。
（若杉智宏）

2 各調査区の概要

第1区

講堂北方の丘陵西斜面に直交して設定した。長さ23m、幅4m、調査面積は92m²である。本調査区は檜隈寺第4次調査講堂北方の北側トレンチ（『藤原概報13』）と南東隅

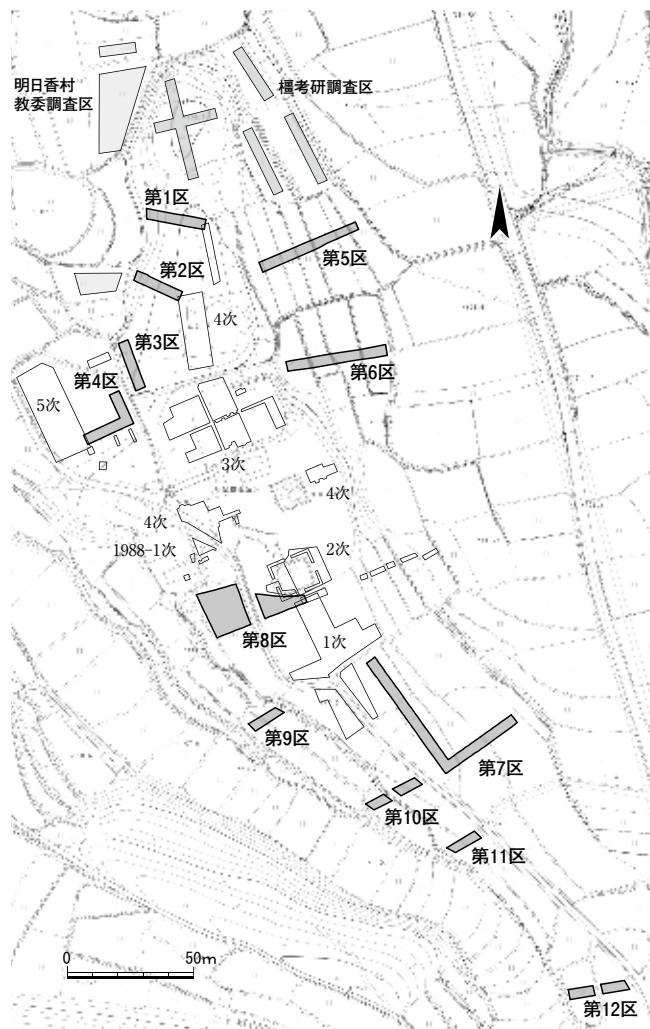


図112 調査区位置図 1:3000

が重複する。

基本層序は、上から表土（5～10cm）、遺物包含層（淡褐色細砂土・淡明褐色細砂土：10～40cm）、地山である。丘陵の斜面部分は淡褐色細砂土の下層に流土（炭混黃褐色粘質土：10～40cm）が堆積する。

遺構は、中世以降の耕作に伴う素掘溝5条を検出した。また、調査区西端の炭混黃褐色粘質土からは重弧文軒平瓦が1点出土した。

第2区

第1区の南、丘陵西斜面に直交して設定した。長さ20m、幅4m、調査面積は80m²である。本調査区は檜隈寺第4次調査講堂北方の南側トレンチ（『藤原概報13』）と南東隅が重複する。

基本層序は、表土（5～80cm）、耕作土（15～40cm）、遺物包含層（灰黃褐色粘質土・明褐色粘質土：25～60cm）、地山

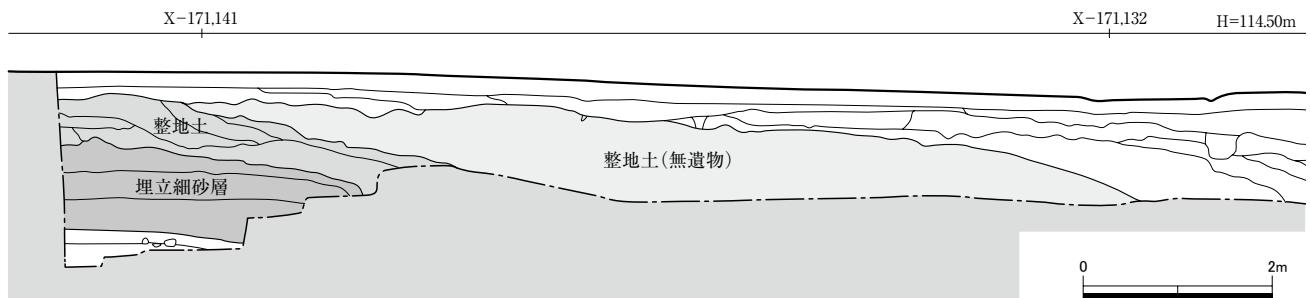


図113 第3区西壁断面図 1:80

である。丘陵の斜面部分は表土直下で流土(暗褐色砂質土・明黄褐色砂質土:10~30cm)の堆積がみられ、遺物包含層(淡褐色粘質土:10~40cm)、地山の順に堆積する。調査区東端で中世以降の耕作に伴う溝を検出した他は、顕著な遺構は確認できなかった。

第3区

講堂の北西に設定した。長さ20m、幅4mで、調査面積は80m²である。

調査区南側の基本層序は、上から表土(15~20cm)、耕作土(10~20cm)、遺物包含層(炭混明灰褐色砂質土:10~20cm)、整地土(暗灰褐色粗砂土・黄斑暗灰黄色砂質土:40~80cm)、埋立細砂層(明茶褐色細砂土・オリーブ灰色シルト・橙灰色シルト:80~100cm)、遺物包含層(暗青灰色粘質土・淡灰褐色砂質土:40cm以上)である。自然地形は、調査区の北西方向に向かって下がっていく状況を示す。埋立層は、地表から深さ0.6~1.8mの厚さで堆積し、粒子の異なる複数の層からなる。北から講堂北西隅に入り込んだ谷を埋め立てた際のものと考えられる。

遺構は整地土である黄斑暗灰黄色砂質土面では確認されず、調査は、断割調査によって7世紀代の土器を含む遺物包含層を確認した段階で、安全のため終了した。遺物は、埋立層下層の遺物包含層から7世紀代の須恵器、瓦が出土し、埋立層上層の整地土である黄斑暗灰黄色砂質土から、奈良時代の土師器が出土した。また調査区北側では、遺物包含層から大量の瓦が出土した。

第4区

第3区の南西に、南北14m、東西20m、幅4mのL字状に設定した。面積は120m²。本調査区の西端は、檜隈寺第5次調査A区(『藤原概報17』)と重複する。基本層序は、上から表土(10~25cm)、耕作土(5~20cm)、地山である。検出した遺構には、石組遺構、素掘溝などがある。

石組遺構SX790 調査区北端で検出。人頭大の石と板状石を人為的に積み上げた石組で、検出範囲は東西1.8m、南北0.7m。検出範囲が狭く、遺構の性格は確定できない。石組付近から平瓦、須恵器が出土した。

南北溝SD789 SX790に取り付く短い南北溝。最大幅30

cm。SX790との取り付け部で、格子叩きをもつ平瓦2点が、両壁面に張り付くようにして出土した。

第5区

講堂の北東、丘陵東斜面に直交して設定した。長さ42m、幅4m、調査面積は168m²である。

基本層序は調査区の東西で若干異なる。丘陵上方にあたる西側では、後世の削平のため地山までが比較的浅く、基本層序は、表土(15~60cm)、耕作土(10~30cm)、遺物包含層(暗黄褐色粘質土:20~80cm)、地山となる。丘陵下方にあたる東側は、西側に比べ残りがよく、耕作土の下層に、遺物包含層(橙褐色粘質土・淡茶灰色砂質土・橙黃灰色砂質土:20~170cm)、各期の整地土(暗褐色粘質土:10~60cm、暗黄茶色砂質土:40cm以上、淡黄褐色微砂土:20~50cm)があり、地山となる。遺構は、調査区東側で掘立柱建物、東西塀、南北塀、西側で耕作溝と中世の小穴群を検出した。

掘立柱建物SB800 調査区中央東寄りで検出。暗黄茶色砂質土から掘り込んでおり、東西3間、南北2間分を検出した。南西の隅柱を欠くことなどから、西廂をもつ南北棟の掘立柱建物である可能性がある。北壁面の壁際では柱穴が2基確認でき、建物が北へ続いていることがわかる。柱間は東西が約2.1m(7尺)、南北は約1.5m(5尺)である。柱掘方は隅丸方形で、一辺60~80cm、柱痕跡の太さは約20cmである。建物方位は真北に対し約24°西偏する。

掘立柱塀SA795 SB800の東、調査区のほぼ中央を東西に延びる。暗褐色粘質土から掘り込んでおり、調査区東端まで6間分が確認できた。柱掘方は隅丸方形を呈し、一辺40~70cm。柱間は1.5~2.1m(5~7尺)で、SB800の東西方向の柱筋とほぼ平行する。

掘立柱塀SA805 調査区東端で1間分を検出した南北塀。SA795検出面の下層、淡黄褐色微砂土から掘り込む。柱掘方は楕円形を呈し、長径50~70cm、短径30~60cmを測る。柱間は約15m(5尺)で、柱筋は真北に対し約9°西偏する。

土坑SK801 調査区東側北壁に設定したサブトレンチ内で検出した。円形を呈し、径75cm。深さ40cm。

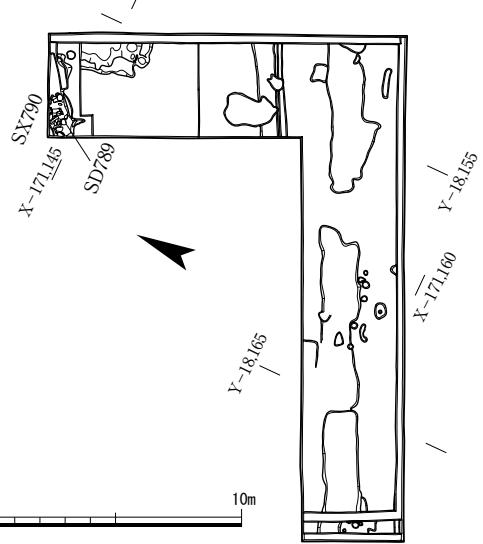


図114 第4区遺構図 1:300



図115 第4区東半部(北から)

小穴群SX802 調査区西側で検出した中世の小穴。平面は円形で、径20~50cm、検出面からの深さ10~45cm。

遺物はSX802周辺で瓦器が多量に出土し、調査区東側北壁サブトレレンチから6世紀代の須恵器が出土した。

第6区

講堂東側の丘陵斜面に直交して設定した。長さ40m、幅4m、調査面積は160m²である。基本層序は上から、表土(10~50cm)、耕作土(10cm)、中世以降の整地土(灰斑黄褐色粗砂土:10~70cm)、古代の整地土(灰斑明黄色粘質土・赤橙色砂質土:10~100cm)、地山である。ただし、第5区と同じく、古代の整地土は丘陵下方にあたる調査区東側にのみ見られる。検出した遺構には、南北塙、土坑、耕作溝がある。

掘立柱塙SA806 調査区東側にある南北塙で、2間分を検出した。ただし、南端の柱穴1基は壁面のみでの検出である。古代の整地土である灰斑明黄色粘質土面から掘り込む。柱掘方は隅丸方形で、一辺50~60cm。柱間は約1.8m(6尺)で、柱筋は真北に対し約1°西偏する。

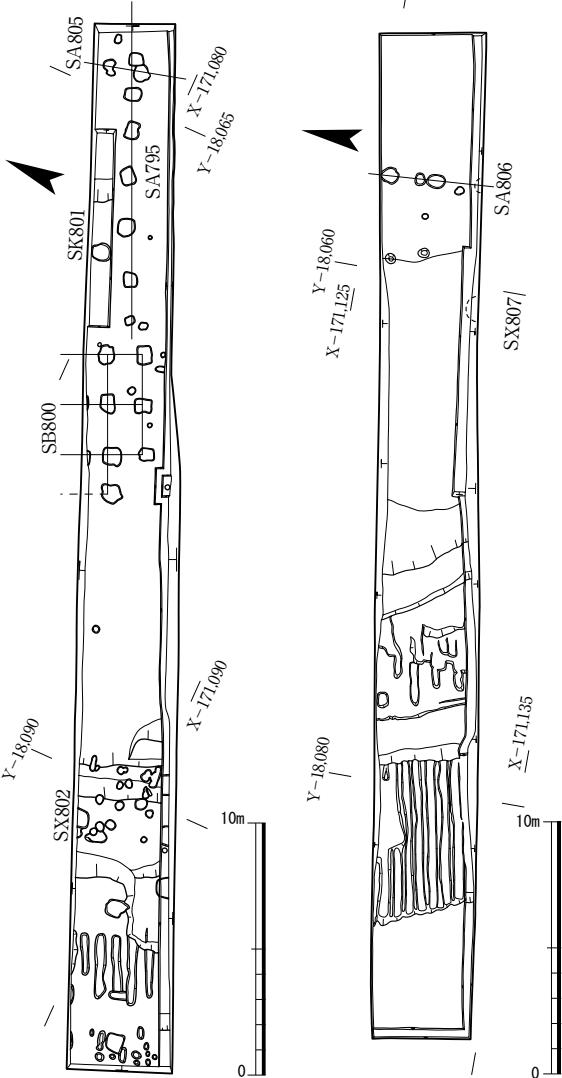


図116 第5区遺構図 1:300

図117 第6区遺構図 1:300



図118 SB800・SA795検出状況(西から)

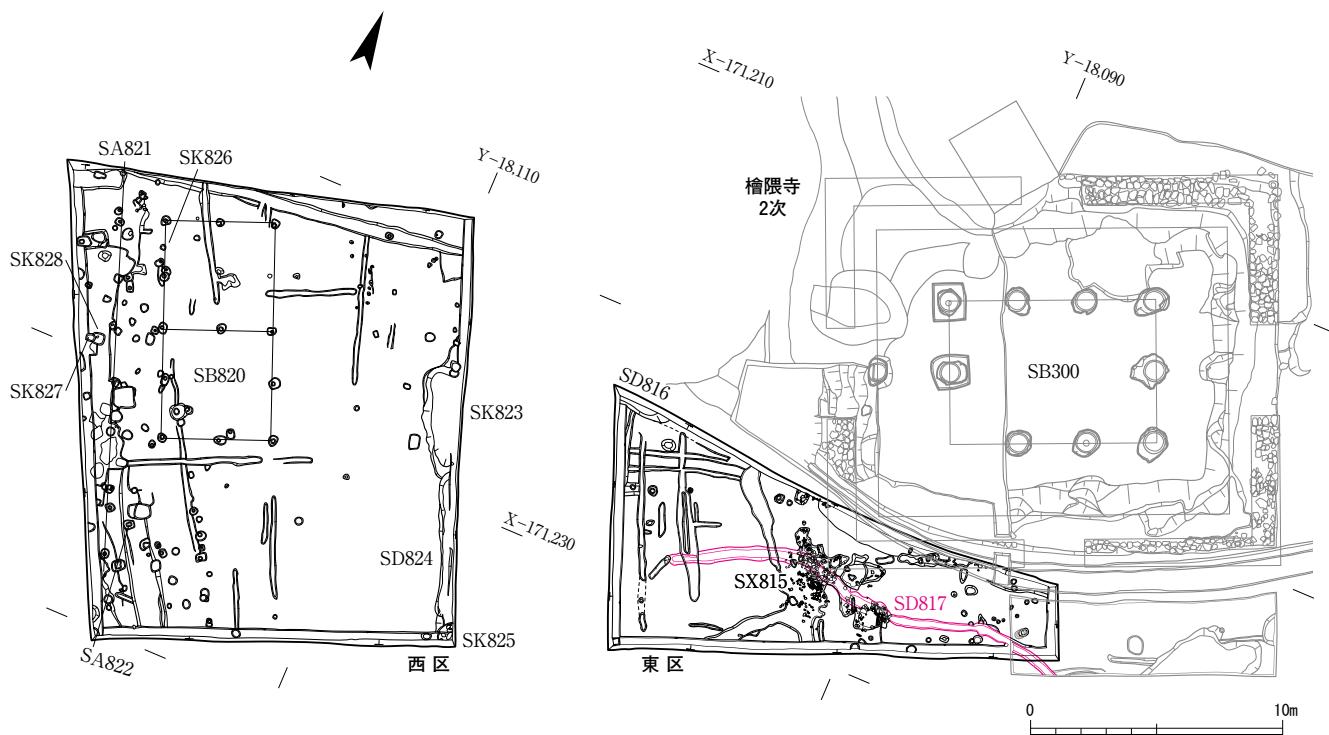


図119 第8区遺構図 1:300

柱穴SX807 SA806の西、調査区の南壁面で、柱穴を1基確認した。古代の整地土である赤橙色砂質土面から掘り込む。柱穴の深さは85cm。
(関広尚世・若杉)

第7区

檜隈寺金堂の南、第1次調査区（『藤原概報10』）の南東に近接する位置に、L字状に設定した。調査面積は340m²。基本層序は、上から表土（10~20cm）、現代の耕作土（茶灰色砂質土：10~15cm）、中世以降の耕作土（灰褐色砂質土：10~30cm）、地山の順である。調査区は、丘陵の斜面を利用して作られた棚田を縦断しており、ほとんどの場所で表土、もしくは耕作土を除去すると地山が露出する。ただし、調査区西北隅部分のみは、斜面を平坦にするための大規模な整地がされており、中世以降の耕作土の下に、厚さ約70cmの整地層（明褐色粘質土）がある。

主な遺構としては、柱穴列、中世の大土坑、素掘溝、耕作溝、小穴などを検出した。

柱穴列SX810 調査区北東端付近の南東壁で検出。地山面で3基確認した。掘立柱建物となるか掘立柱塀となるかは不明である。西端の柱穴以外は壁面で検出できたのみで、平面では確認できていない。柱穴の径は0.7m、深さ0.25m。柱間は1.5m（5尺）。掘方には遺物は含まず、時期は不明である。

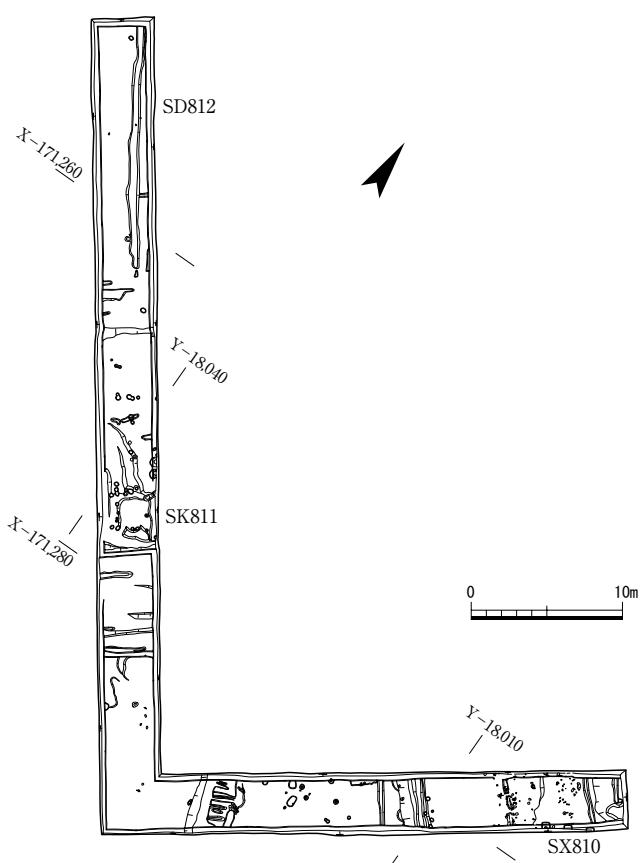


図120 第7区遺構図 1:500

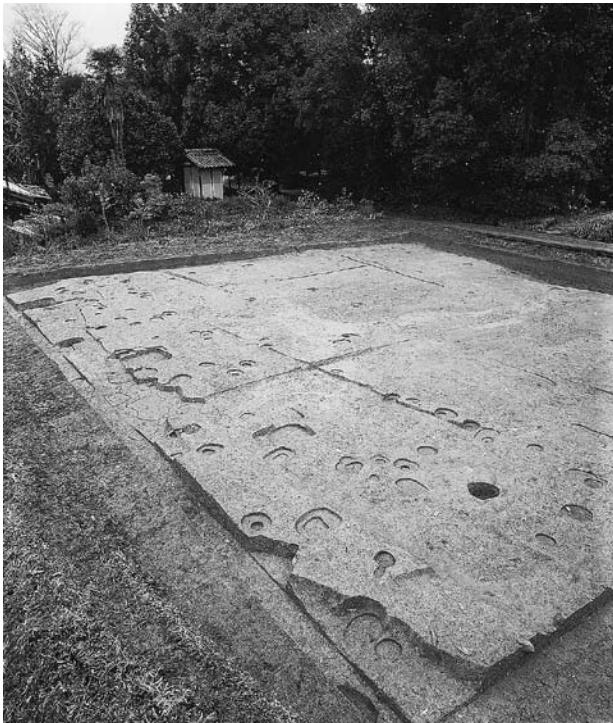


図121 第8区西区全景（南から）

土坑SK811 大量の焼土と炭を含む中世の大土坑。地山面で確認した。形状は不整形で、南北長約4m。土坑の西端は調査区外に延びる。深さは20~60cmを測る。

SK811を検出した付近は、長辺約20m、短辺約15mの土壇状の高まりとなっている。高まりは、金堂からは南東に約70m離れた位置にあり、軸を真北から西に振る檜隈寺の伽藍方向を考えると、この高まりの上に檜隈寺にかかる何らかの建物が存在していた可能性が期待された。しかし調査の結果、現状ではそのような遺構は確認できず、中世の大土坑を検出したのみである。

素掘溝SD812 地山面で検出した。幅約70cm、深さ20cm。溝埋土には遺物は含まず時期は不明である。

第8区

檜隈寺金堂の南に隣接する。金堂西側を走る南北道路をはさんで、東区と西区に分けて設定した。調査面積は東区109m²、西区266m²。

東 区 基本層序は、上から表土（5~15cm）、耕作土（茶褐色砂質土：20cm）、中世の整地土（灰褐色砂質土：10cm）、地山の順である。ただし調査区東端付近は、中世の整地層はみられず、耕作土を除去すると地山が露出する。遺構は、中世の整地面と地山面で検出した。

東区は、金堂下成基壇の南西隅部分にあたるが、後世

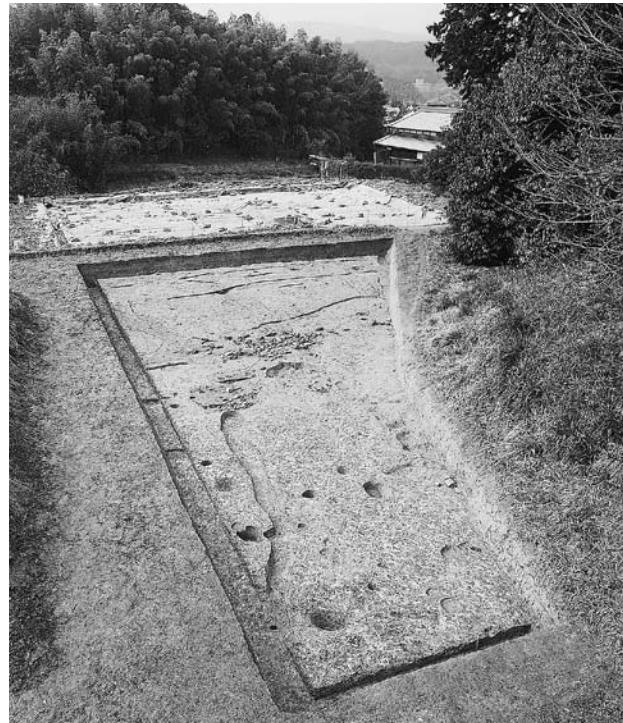


図122 第8区東区全景（東から）

の耕作にともなって、基壇土および地山削り出しの基壇の大部分は削平されており、基壇外装の玉石も抜き取られていた。主な遺構としては、瓦溜、素掘溝、耕作溝、小穴などを検出した。

素掘溝SD817 大きく蛇行する中世の素掘溝。第1次および第2次調査でも検出されている（『藤原概報10・11』）。地山面で検出した。瓦溜SX815より古い。

瓦溜SX815 中央部で、不整形の皿状土坑を中世の整地面で検出した。大きさは40~9.5m、深さ5~15cm。SX815から出土した瓦類には、金堂SB300の所用瓦と考えられている輻線文縁軒丸瓦や、三重弧文軒平瓦、垂木先瓦、方形の尾垂木先瓦などがあり、金堂で使用していた瓦を廃絶時に捨て込んだ土坑と考えられる。

素掘溝SD816 調査区西北隅部分で検出した素掘溝。中世の整地面で検出した。北肩が調査区外になるため、幅は不明。深さは35cm。

西 区 東区とは道路をはさんで、約1m低い位置にある。基本層序は、上から現代の耕作土（10~25cm）、中世以降の耕作土（灰褐色砂質土：5~15cm）、中世の整地土（褐色砂質土：15~25cm）、地山となる。調査区中央部では中世の整地層はみられず、耕作土を除去すると地山が露出する。遺構は、中世の整地面および、地山面で検出した。

なお、調査区北東部は、檜隈寺西門SB500から金堂SB300へととりつく回廊の想定部分にあたるが、後世の削平が著しく、古代の遺構は検出できなかった。主な遺構としては、中世の掘立柱建物、掘立柱塀、土坑、素掘溝、耕作溝、小穴などを検出した。

掘立柱塀SA822 調査区南西部で、中世の整地土を下げた地山面で検出した。3間分を確認し、柱掘方は長方形で長辺45~55cm、短辺30~45cm、柱間は1.5m(5尺)である。西区のなかでは最も古い遺構であるが、掘方には遺物を含まず、時期は不明である。ただし、柱筋が檜隈寺の方位と合わないことからすると、SA822が檜隈寺にかかわる遺構であるとは考え難い。

掘立柱建物SB820 中世の整地面で検出した掘立柱建物。桁行4間、梁行2間、柱間は1.2m(4尺)。柱掘方の径は40~50cmと小型で、深さは15~35cm。建物内中央部には、間仕切柱と思われる柱穴が1基みられる。

掘立柱塀SA821 SB820の西1m、中世の整地面で検出した。7間分を確認。柱間はSB820と等しく、方位もほぼ揃えるので、SB820とともに南北塀と考えられる。柱穴の掘方は径30~50cm。深さ20cm。

小穴SK826 径30cm、深さ15cmの小穴。中世の整地面で検出。埋土からは、中世の完形の土師器皿が2枚、合わせ口になって出土した(図125)。

土坑SK827 中世の整地面で検出した廃棄土坑。大きさ90cm、深さ20cm。炭を大量に含み、瓦器椀、土師器皿などが大量に出土した。

土坑SK828 中世の整地面で検出した廃棄土坑。SK827より古い。方形で、1辺80cm、深さ20cm。

土坑SK823 調査区東端で検出した大土坑。中世の整地面で検出した。東半分は調査区外になる。南北の大きさは2.2m。深さ60cm。底面には、マンガンが沈着しており、水を溜めるための土坑であったと考えられる。

素掘溝SD824 SK823に流れ込む溝。中世の整地面で検出した。溝の東端は調査区外にあたるため、幅は不明。深さ15~40cm。SK823につながる部分は土坑状にふくらみ、深さも深くなっている。

土坑SK825 調査区南東隅、SD824の下で検出した。土坑の大部分は調査区外にあり、大きさは不明。深さ45cm。人頭大の礫と瓦を含み、金堂基壇外装の石を捨て込んだ土坑とみられる。

(石田由紀子)

第9区

檜隈寺金堂の南約60m、丘陵の西斜面に設定した。調査面積は52m²。基本層序は耕作土(15~25cm)、中世以降の整地土(暗赤色砂質土・暗褐色砂質土:20~150cm)、古代の整地土(明褐色砂質土・黄褐色砂質土:15~50cm)、地山である。ただし、調査区東半では、古代の整地層はみられず、中世の整地土を除去すると地山が露出する。地山面は、調査区東半では平坦な面をなすが、中央付近で角度を変え、急斜面となり西へ落ちる。

遺構は、土坑、中世の耕作にかかわる素掘溝、小穴などを検出した。土坑は古代の整地面で7基確認したが、いずれも埋土に遺物を含まず、時期の確定は難しい。

本調査区では、檜隈寺にかかわる顕著な遺構は確認できなかった。

第10区

金堂の南東約95m、丘陵西斜面に設定した。棚田の斜面をはさみ、東区と西区に分かれる。調査面積は、東区38m²、西区32m²。

東区 基本層序は、上から耕作土(20~30cm)、中世以降の整地土(灰褐色砂質土:10~35cm)、地山である。検出した遺構は、中世以降の耕作にともなう素掘溝、小穴のみで、古代の遺構は確認できなかった。

西区 基本層序は耕作土(20~25cm)、中世以降の整地土(灰褐色砂質土・暗褐色砂質土:10~90cm)、古代の整地土(淡赤褐色砂質土:15~20cm)、地山である。ただし、調査区東端では整地層がみられず、耕作土直下が地山となる。検出した遺構には、素掘溝、土坑、耕作溝、小穴がある。

素掘溝SD845 調査区中央西寄りで検出した北西-南東方向の素掘溝。地山面から掘り込む。幅1.0~1.4m、深さ10~20cm。埋土から7世紀代の須恵器が出土した。

土坑SK847 調査区北西端で検出した。地山面から掘り込む土坑で、北半が調査区外となるため大きさは不明。

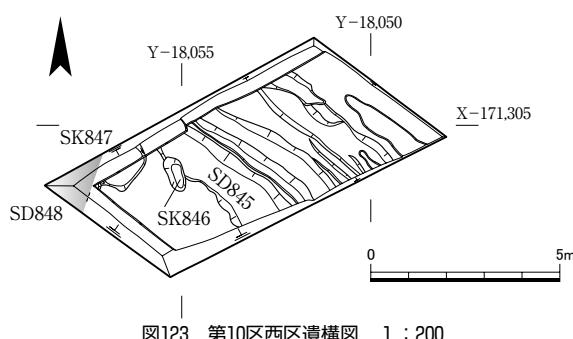


図123 第10区西区遺構図 1:200

検出範囲では東西1.3m、深さ15~35cmを測る。埋土より、7世紀代の須恵器が出土した。

土坑SK846 調査区中央西寄りで検出した。長径1.0m、短径0.4m、深さ30cmの楕円形を呈する。地山面で検出し、SD845より新しい。

素掘溝SD848 調査区北西隅を走る素掘溝。南西壁面および北西壁面のみでの検出のため、幅は不明。深さ15~20cm。地山面から掘り込んでおり、SK847より古い。

第11区

金堂の南東約125m、丘陵の西斜面に設定した。調査面積は49m²。基本層序は、上から耕作土(15~35cm)、中世の整地土(暗灰褐色砂質土・黄灰色砂質土・黒褐色砂質土:20~140cm)、地山である。地山面は、調査区東半ではなだらかな緩傾斜面をなし、中央付近から西では角度が急になり谷へ向け落ち込むことを確認した。

検出した遺構は、中世以降の耕作にともなう素掘溝、小穴である。本調査区では、後世の削平が著しく、檜隈寺にかかる遺構は確認できなかった。

第12区

金堂の南東約200m、丘陵の西斜面に設定した。棚田の斜面をはさみ、東区と西区に分かれる。調査面積は、両区とも40m²。

東区 基本層序は、上層から耕作土(15~20cm)、中世以降の整地土(暗褐色土:10~15cm)、地山である。整地層は調査区北西部にのみみられ、その他では耕作土を除去すると地山が露出する。検出した遺構は、素掘溝、土坑である。いずれも中世以降の耕作にともなうものと考えられる。

西区 基本層序は、上層から耕作土(15~20cm)、中世以降の整地土(灰褐色砂質土・赤褐色砂質土:10~110cm)、地山である。地山は緩やかな傾斜をもち西へ落ちる。検出した遺構は、中世以降の耕作にともなう素掘溝のみで、古代の遺構は確認できなかった。
(若杉)

3 出土遺物

土 器 各調査区から、整理箱14箱分の土器が出土した。古代の土師器、須恵器と、中世の土師器、瓦器、陶磁器がある。そのうち、第3区、第4区、第5区出土の古代の土器(図124-1~6)と第8区出土の中世の土器(図125-7~18)についてその概要を述べる。

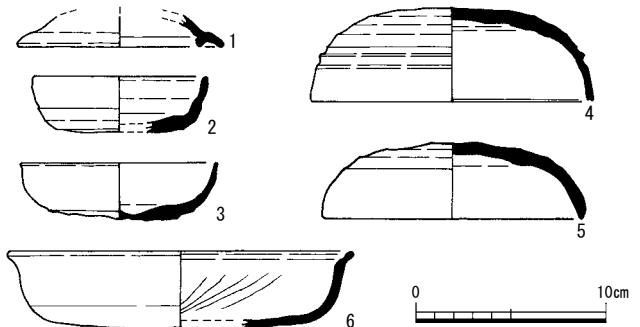


図124 第3~5区出土土器 1:4

第3区 1は暗青灰粘質土出土の須恵器杯G蓋。復元口径10.0cmで、外面には自然釉が附着する。2は明茶粘質土から出土した須恵器杯G。復元口径9.1cm、復元高3.0cmで、底部はヘラ切り不調整。いずれも、飛鳥Iの新しい段階から飛鳥IIにかけての特徴を示す。6は整地土から出土した土師器杯A。b0手法で調整し、磨滅のため器表が荒れているが、一段の粗な放射暗文が確認できる。径高指数は22.6で、平城宮土器III新段階に属する。同様の土器が他にも数点出土しており、大規模な整地の時期を示すものである。

第4区 3はSX790から出土した須恵器杯G。口径10.3cm、器高3.1cmで、底部はヘラ切り不調整。飛鳥Iから飛鳥IIにかけての特徴を示す。

第5区 古代の整地土下の堆積層から、古墳時代の土器が出土した。4は暗黄茶砂質土出土の須恵器杯H蓋。肩部に稜があり、口縁端部には段を有する。6世紀前半のMT15~TK10型式に属する。5は、灰斑橙黄粘質土出土の須恵器杯H蓋。天井部のロクロケズリの範囲は広い。6世紀末頃のTK209型式に属する。

第8区 金堂南西の第8区では、古代の遺構は削平されて全く残存していなかった。出土土器もそれを反映し、中世のものが多い。ここでは、SK828・SK827・SK826出土土器について略述する。

SK828からは、土師器皿(7~9)、瓦器皿(13~15)、瓦器碗(17)が出土した。土師器皿には口径9.1cm、器高1.3cmの小型のもの(7・8)と、口径13.0cm、器高2.5cmの大型のもの(9)がある。9の内面には漆が付着する。瓦器皿は口径8.0~8.5cm、器高1.4~1.8cm。13・15は底部内面にジグザグ状の暗文を施す。瓦器碗の高台は、断面三角形で低い。口縁部外面に粗いミガキ、内面には渦巻き状の粗いミガキを施す。13世紀中葉のもの。

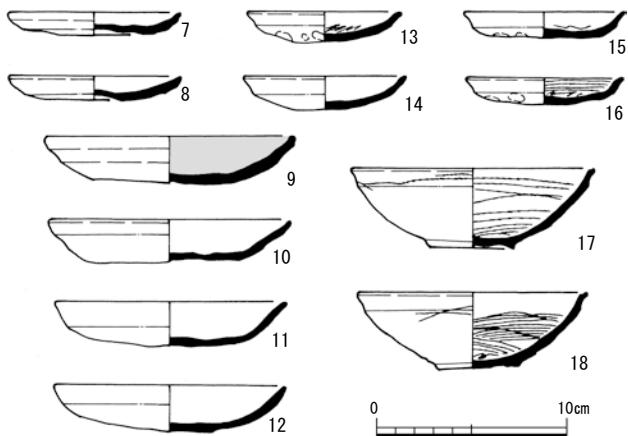


図125 第8区出土土器 1 : 4

SK827からは、土師器皿（10）、瓦器皿（16）、瓦器椀（18）が出土した。土師器皿は、口縁部外面を幅狭くヨコナデする。瓦器皿の底部内面には、ジグザグ状の暗文を施す。瓦器椀は、高台が低く、外面のミガキはほとんど省略している。内面には渦巻き状のミガキを施す。13世紀後半のものと考えられる。

SK826からは、土師器皿（11・12）が出土した。調整は口縁部、底部ともナデ。13世紀後半。

金属・石製品 全調査区を合わせて小コンテナ9箱分の鉄釘、焼土、砥石などが出土した。（関広・若杉）

瓦類 瓦類としては、軒丸瓦7型式20点、軒平瓦6型式32点、垂木先瓦2型式11点、尾垂木先瓦1点、鳴尾3点、熨斗瓦1点、隅切瓦1点、戯画瓦1点、丸瓦1711点（180.9kg）、平瓦11306点（570.3kg）が出土した。各調査区から出土した軒瓦の型式および瓦の量は表10・11の通りである。

瓦類の分布は、第1～12区全体に広がるが、古代の遺構に伴っている可能性のあるものは第4区SD789出土瓦のみで、その他は包含層もしくは第7区SK811や第8区SX815など中世の遺構から出土したものである。瓦の出土傾向としては、檜隈寺の伽藍に近い調査区に瓦の出土量が多く、なかでも金堂基壇に隣接する第8区では、軒

瓦をはじめ、垂木先、尾垂木先瓦などを含む大量の瓦類が出土した。

以下、軒瓦をはじめとした主要な瓦類について報告する（図126）。なお、ローマ数字による型式名は檜隈寺の型式名である（花谷浩「京内廿四寺について」『研究論集 XI』2000、奈良文化財研究所）。1は、軒丸瓦I型式B。蓮弁は八弁で、弁に複子葉と火炎文を加える。焼成は硬質で、胎土に長石、石英を多く含む。色調は茶灰色。第9区出土。2は、山田寺式軒丸瓦のI型式D。山田寺所用軒丸瓦とは異範で、色調と焼成も赤褐色でやや軟質と檜隈寺所用瓦の特徴をもつ。第8区の瓦溜SX815出土。3は、角端点珠の素弁蓮華文軒丸瓦I型式F。焼成は硬質で、暗灰色。SX815出土。4は、金堂所用瓦の輻線文縁軒丸瓦のII型式A。焼成は良好で灰白色。胎土には長石、石英、クサリ礫を少量含む。SX815出土。5は、藤原宮式軒丸瓦のIII型式A。平城京・藤原京の型式では6275Gとなっている。焼成は硬質で、胎土に長石、石英を多く含む。色調は灰色。第5区出土。6は、平城宮6232型式Aと同範のIV型式A。赤褐色の色調で、焼成は良好。第3区出土。

7～9は、三重弧文軒平瓦II型式。7はII型式A。弧線が扁平で幅広い。頸部が剥離しており、剥離部分には指オサエの痕が残る。焼成は軟質で、長石、石英、クサリ礫を含む。色調は黄灰色。8はII型式B。第1・2弧線の突出が第3弧線よりも強く、弧線の断面が蒲鉾形になるのが特徴である。長石、石英を大量に含む粗い胎土で、焼成は硬質。色調は灰色。第8区SK823出土。9はII型式C。II型式Bと同じく弧線の断面は蒲鉾形だが、弧線の突出は第1～3弧線とも同じである。浅い段頸には縊繩タタキの痕が残る。焼成は良好で、胎土には長石、石英、クサリ礫を多く含む。SX815出土。10は、範型施文の四重弧文II型式D。焼成はやや軟質で、精良な胎土に少量のクサリ礫を含む。SX815出土。11は、四重弧文軒平瓦II型式Eである。頸部が剥離している。第4次調

表10 第155次調査出土丸・平瓦集計表

調査区	丸 瓦	平 瓦	調査区	丸 瓦	平 瓦	調査区	丸 瓦	平 瓦
第1区	124 (12.1)	606 (38.1)	第5区	52 (6.7)	281 (27.0)	第9区	726 (70.4)	194 (253.6)
第2区	161 (16.6)	746 (40.3)	第6区	-	-	第10区	188 (15.9)	2012 (88.0)
第3区	335 (50.5)	813 (86.3)	第7区	38 (5.4)	137 (13.8)	第11区	-	26 (0.4)
第4区	13 (0.7)	160 (11.0)	第8区	726 (70.4)	6194 (253.6)	第12区	-	29 (0.5)

* 各調査区の丸・平瓦の数値は点数、() 内は重量 (kg)。

表11 第155次調査出土軒瓦および道具瓦集計表

調査区	種類	型式	点数	調査区	種類	型式	点数	調査区	種類	型式	点数
第1区	軒丸瓦	巴	1	第7区	軒平瓦	II B	1	第8区	垂木先瓦	A	10
	軒平瓦	II C	1		鷲尾		1		B	2	
第2区	軒丸瓦	III A	1	第8区	軒丸瓦	I B	1		不明	1	
	巴		1		軒丸瓦	I D	1		尾垂木先瓦		
第3区	軒棧瓦		1		軒丸瓦	I F	1		隅切瓦		
	軒丸瓦	IV A	1		軒丸瓦	II A	2		戯画瓦		
第4区	軒平瓦	II A	3	第8区	II AかB	3	第9区	軒丸瓦	I B	1	
	III A		1		不明	2		軒丸瓦	III A	1	
	III B		1		軒平瓦	II A	4	不明	1		
第5区	熨斗瓦		1		II B	4	軒平瓦	II A	1		
	軒丸瓦	III A	1		II C	2	軒平瓦	II C	1		
	軒平瓦	III A	1		II E	1	軒丸瓦	III A	2		
第6区	軒丸瓦	III A	1		III A	3	不明	2			
	軒平瓦	III A	1		不明	4	鷲尾		2		
第7区	軒丸瓦	III A	1		軒丸瓦	不明	第11区	軒丸瓦	不明	1	
	軒平瓦	III A	1		軒丸瓦	不明		軒丸瓦	不明		

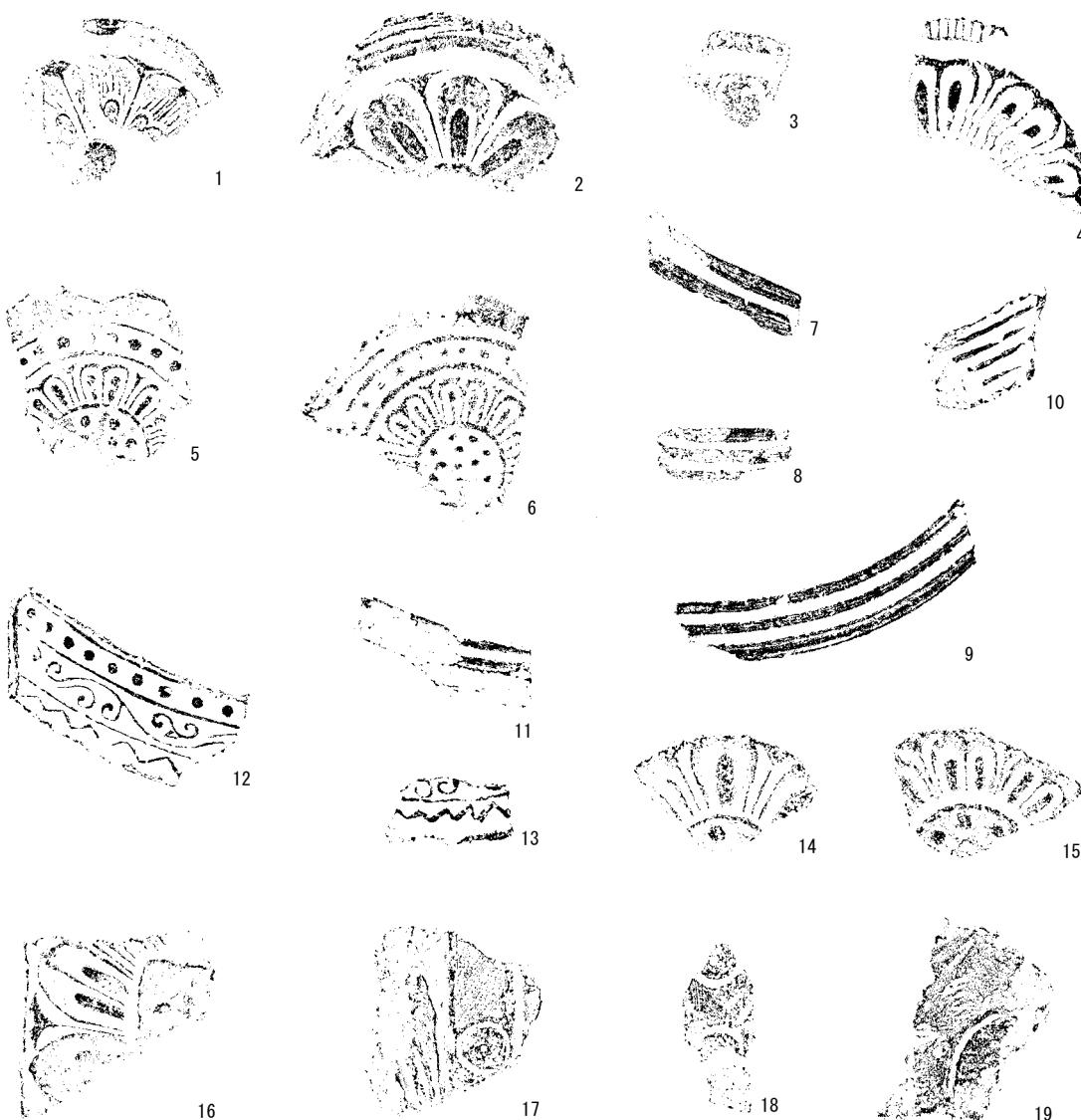


図126 第155次調査出土瓦類 1 : 4



図127 第8区出土戯画瓦 1:2

査で出土例がある(『藤原概報13』)。クサリ礫を多く含み、焼成は軟質。色調は灰白色。SX815出土。12・13は右偏行唐草文軒平瓦。12は軒平瓦Ⅲ型式A。平城京・藤原京の型式では6641L。焼成は良好で、胎土に長石、石英を多く含む。色調は灰色。SX811出土。12は段顎をもつが、曲線顎のものも出土している。曲線顎のものは、脇区を切り落とす。13はⅢ型式B。焼成は軟質で、赤褐色を呈する。第3区出土。

14・15は金堂所用の垂木先瓦。14が単弁八弁蓮華文の垂木先瓦A、15が複弁八弁蓮華文の垂木先瓦Bである。焼成は両者とも良好で、胎土には長石、石英を大量に含み、色調は赤褐色。いずれもSX815出土。16は方形の尾垂木先瓦。焼成はやや軟質で、胎土には長石、石英を大量に含み、色調は灰黄色。17~19は鳴尾の破片。17は、縦帶部分から鰐部が残る。縦帶上にはコンパス施文の連珠文をもち、鰐部には、複弁蓮華文状の文様をもつ。SK811から出土した。18は縦帶部分の破片。コンパス施文の連珠文は17と共通するが、連珠文を施す間隔や珠文の大きさが異なる。19も鳴尾の胴部もしくは腹部の破片の可能性がある。18・19は第9区出土。なお、鳴尾片は第1次調査でも出土している(『藤原概報10』)。胴部に正段型を削り出すもので、今回出土したものとは様相が異なる。

図127は丸瓦広端部の凹面に細いヘラで図柄を描いた戯画瓦。モチーフは動物とも考えられるが、全体像がわからず断定はできない。

軒瓦の出土傾向は、金堂以南の第8・9区では、軒丸瓦Ⅰ・Ⅱ型式や軒平瓦Ⅱ型式、垂木先瓦A・Bなど、7世紀代の軒瓦の出土が多いのに対し、講堂以北の第1~6区では、Ⅲ型式やⅣ型式など、藤原宮期以降の瓦が比較的目立つ(表11)。このことは、金堂所用瓦が軒丸瓦Ⅱ型式と軒平瓦Ⅱ型式であることと、講堂と塔の所用瓦が

軒丸瓦はⅢ型式、軒平瓦はⅢ型式であることが反映されているのであろう。丸・平瓦については、奈良時代以降の資料も含むが、多くは粘土板技法を使用した、創建瓦と思われるものである。平瓦の叩きの種類は、縦縄叩きが多いが、格子や斜格子もみられる。また、瓦の焼成や胎土、色調に関しては、長石や石英を大量に含み、焼成が硬質~やや軟質で色調が赤褐色を呈すものが多いのも檜隈寺所用瓦の特徴といえる。

(石田)

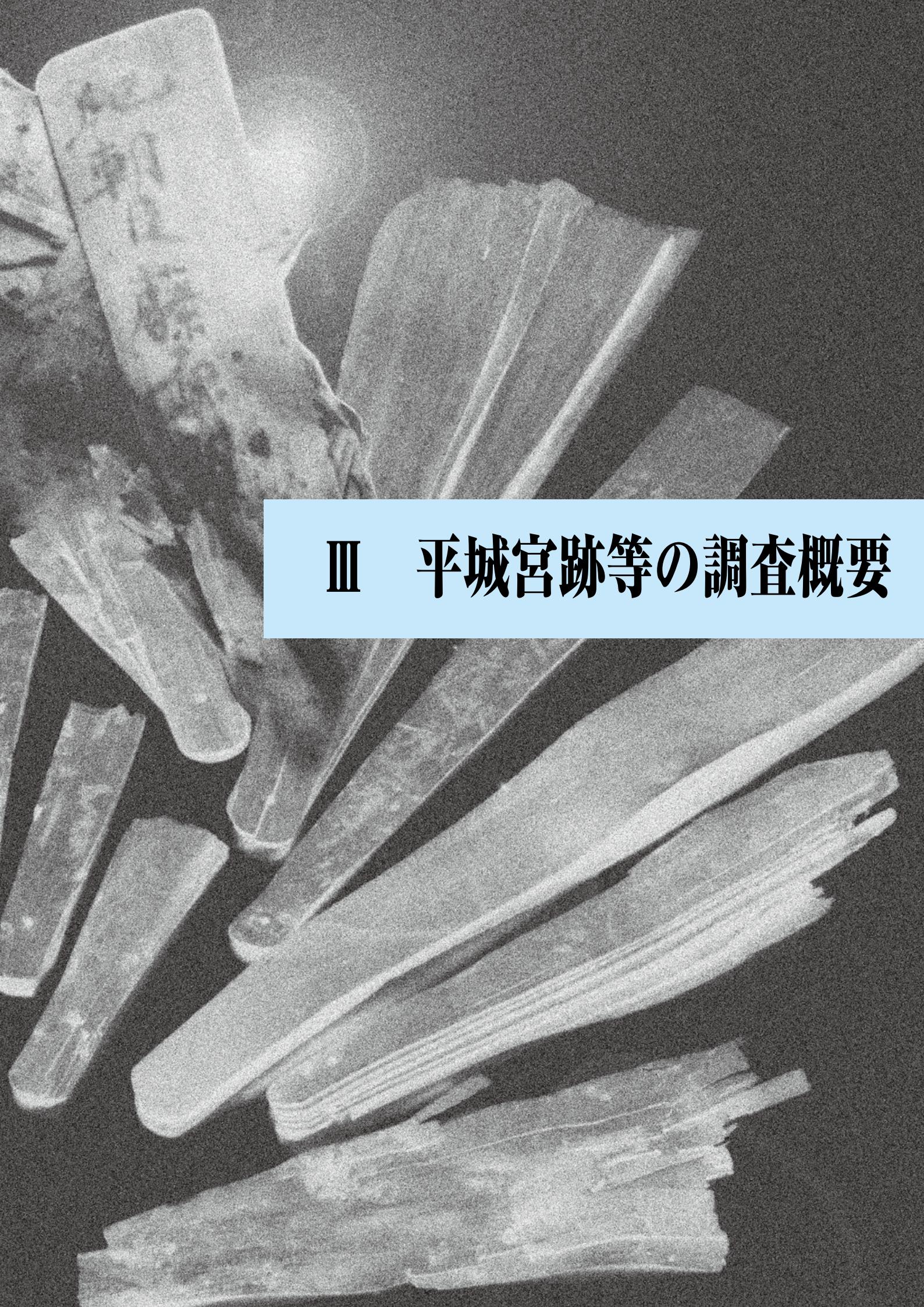
4まとめ

丘陵各所に配した調査区の成果から、檜隈寺の所在する丘陵とその周辺での遺構の状況が明らかとなった。その中で、丘陵北東側の第5・6区において、寺院関連施設と考えられる遺構を確認したことは重要な成果である。第5区で検出した掘立柱建物SB800と東西塀SA795は、真北に対し23°~24°西偏する檜隈寺の伽藍方位と柱方向を同じくしており、7世紀後半に造営された主要堂宇と一連の施設であった可能性が高い。また、第5区の南北塀SA805、第6区の南北塀SA806は、ともに丘陵裾部を取り囲むように配されており、寺域を限る一連の区画施設であった可能性が考えられる。第5区北側の権原考古学研究所の調査区でも、丘陵裾部を巡る塀と考えられる遺構を検出しており(権考研『奈良県遺跡調査概報2008年』2009)、これらも同様の性格を想定できよう。以上の建物や塀は、丘陵から一段低いところに造成された平坦地に造られており、檜隈寺が丘陵全体を利用して寺院地を形成していたと推測できる。

また第4区では、調査区北端で、人為的に板石などを積み上げた石組遺構SX790を確認し、講堂北西の平坦地にも寺院関連遺構が遺存している可能性が生じた。

一方、丘陵南側の第7~12区では寺院に関連する遺構は確認できず、後世の削平が広範囲に及んでいることが判明した。特に金堂に隣接する第8区においても古代の遺構が検出できなかったことは、中世以降の削平が著しいものであったことを示している。

今年度の試掘調査では、遺構の一部を確認したに留まっており、その規模や性格を確定するには至っていない。2009年度に予定している本調査により、丘陵東裾部や講堂北西部における諸施設の様相を明らかにし、檜隈寺の伽藍の全体像を解明していくこととしたい。(若杉)



III 平城宮跡等の調査概要

表12 2007・2008年度 都城発掘調査部(平城地区)発掘調査一覧

調査次数	地 区	遺 跡	調査期間	面 積	調 査 地	担当者	調査要因	掲載頁
(2007年度)								
429次	6AAG-I・6AAF-J・K	平城宮東方官衙地区	2008.1.11~5.7	1314m ²	奈良市佐紀町	今井晃樹	学術調査	128
430次	6BFO-C	法華寺旧境内	2008.1.7~1.25	60m ²	奈良市法華寺町	大林 潤	住宅建設	142
433次	6BKK-N	喜光寺境内	2008.2.18~3.12	204m ²	奈良市菅原町	加藤雅士	復原整備	152
(2008年度)								
431次	6ABR-E・6ABS-D	平城宮第一次大極殿院	2008.4.1~6.26	632.5m ²	奈良市佐紀町	森川 実	学術調査	112
432次	6ABR-E・F	平城宮第一次大極殿院	2008.4.12~10.22	936m ²	奈良市佐紀町	森川 実	学術調査	112
434次	6AFF-J	平城京左京二条二坊五坪	2008.5.7~6.16	112m ²	奈良市法華寺町	山本 崇	建物建設	156
435次	6BFK-I	法華寺旧境内	2008.6.16~6.17	11m ²	奈良市法華寺町	島田敏男	住宅建設	146
436次	6ABQ-G	平城宮第一次大極殿院	2008.6.26~11.18	879.5m ²	奈良市佐紀町	和田一之輔	学術調査	112
437次	6ABQ-H	平城宮第一次大極殿院	2008.7.1~11.26	397m ²	奈良市佐紀町	今井晃樹	学術調査	112
438次	6ABO-H・6ABP-I	平城宮第一次大極殿院	2008.9.24~12.22	547m ²	奈良市佐紀町	大林 潤	学術調査	112
439次	6AED-H	興福寺旧境内	2008.7.1~8.11	19.5m ²	奈良市花芝町	西口壽生	住宅建設	148
440次	6AAF-J	平城宮東方官衙地区	2008.11.19~2009.2.6	255m ²	奈良市佐紀町	今井晃樹	学術調査	128
441次	6AGF-P	平城京右京三条一坊十五坪	2008.8.18~8.29	42m ²	奈良市二条大路南	浅野啓介	住宅建設	110
442次	6BFK-I	法華寺旧境内	2008.9.1~9.25	101m ²	奈良市法華寺町	西口壽生	住宅建設	146
443次	6AFC-F	平城京左京一条二坊十坪	2008.9.24~10.1	12m ²	奈良市法華寺町	浅野啓介	住宅建設	110
444次	6AAN-C	平城宮内裏北外郭北方	2008.10.6~10.20	66m ²	奈良市佐紀町	加藤雅士	住宅建設	110
445次	6ASB-J	平城宮北方遺跡	2008.11.4~11.5	9m ²	奈良市佐紀町	国武貞克	住宅建設	155
447次	6ASB-J	平城宮北方遺跡	2008.10.22~10.29	18m ²	奈良市佐紀町	国武貞克	住宅建設	155
448次	6AGF-H・G	平城京右京三条一坊八坪	2009.1.6~3.23	1100m ²	奈良市二条大路南	林 正憲	建物建設	160
449次	6AFC-H	平城京左京一条二坊九坪	2009.1.13~1.19	28m ²	奈良市法華寺町	馬場 基	住宅建設	110
450次	6AED-B	平城京左京三条六坊十二・十三坪	2008.12.2~12.17	20m ²	奈良市角振町	加藤雅士	建物建設	150
451次	6BYS-I	薬師寺旧境内	2009.3.3~3.9	6m ²	奈良市西ノ京町	馬場 基	防災工事	110
452次	6ABA-E	平城宮大膳職北方	2009.1.26~1.27	9m ²	奈良市佐紀町	馬場 基	建物建設	110
453次	6AGF-Q	平城京右京三条西一坊大路	2009.2.2~2.3	12m ²	奈良市二条大路南	鈴木智大	住宅建設	110
455次	6ASA-L	平城宮北方遺跡	2009.3.16~3.18	58m ²	奈良市山陵町	鈴木智大	住宅建設	110

表13 2008年度 都城発掘調査部(平城地区)小規模調査の概要

調査次数	遺 跡	調査の概要
441次	平城京右京三条一坊十五坪	主な検出遺構は現存地形図掲載の12~13世紀以前の畦、中世の柱穴1基（柱が現存）、鉄滓や12~13世紀初の瓦器を含む土坑、これらよりも古い幅12m以上の流路などがある。
443次	平城京左京一条二坊十坪	検出遺構は柱穴3基、土坑4基、現代の石垣。土坑出土の遺物は古代のものがほとんどだが、いずれも上層からの検出で古代に掘られたと考えられるものは少ない。
444次	平城宮内裏北外郭北方	住宅新築工事に先立つ発掘調査。調査区北半部で整地層および柱穴、土坑、落ち込み状遺構を各1基検出した。いずれも奈良時代前半のものとみられる。なお市庭古墳に関連する遺構・遺物はみつからなかった。
449次	平城京左京一条二坊九坪	現地表面から約90cm下で遺構を検出した。主な検出遺構は掘立柱柱穴3基がある。柱穴の掘方は、一辺1m程の隅丸方形で柱間寸法は約2.7m（9尺）。建物の東北隅部にあたると考えられる。出土遺物は、瓦・土器などが出土した。奈良時代の遺構と考える。
451次	薬師寺旧境内	若宮社付近の調査では、現地表から40cmほど下で近世遺構の整地土、90cm下である時期（中世）の表土、120cmほど下で穴の中に石を確認した。石の掘方からは瓦器が出土した。180cmほど下で古代と考えられる面に達する。出土遺物は瓦（古代~近世）、土器（古代・中世）など。特に瓦は量が多い。
452次	平城宮大膳職北方	現地表面から約70cm下で遺構を検出した。検出面は地山とみられるよくしまった砂礫層（一部粘土が混ざる）。顕著な遺構は確認できなかった。出土遺物は土器・瓦などがある。
453次	平城京右京三条西一坊大路	東西6m、南北2mの調査区を設定した。現地表面から約1.3m下で、秋篠川の氾濫による堆積と考えられる青灰砂質土層を確認。その下、黄褐色灰色粘土層（現地表面から約1.5m下、標高65.85m）まで掘削したが、顕著な遺構・遺物はなかった。
455次	平城宮北方遺跡	東西6m、南北3mの南区、東西10m、南北4mの北区を設定した。南区では、現代耕作土の直下で地山を確認。顕著な遺構・遺物はなかった。近年の削平を受けていると考えられる。北区では、現代耕作土の直下で赤褐色土層を確認。近現代のものと思われる東西溝1条を検出した。東西溝の埋土からは年代不明の土器片が一点出土した。

表14 2008年度 都城発掘調査部(平城地区)現場班編成 ※総担当者

考古第1	考古第2	考古第3	遺 構	史 料
春 国武貞克（研修）	※森川 実	深澤芳樹	島田敏男	山本 崇
夏 ※和田一之輔	西口壽生		高橋知奈津	浅野啓介
秋 国武貞克	加藤雅士	今井晃樹	※大林 潤・鈴木智大（研修）	渡辺晃宏
冬 難波洋三		※林 正憲	鈴木智大・高橋知奈津（研修）	馬場 基
総括：副所長 山崎信二	中国担当：城倉正祥		写真担当：牛嶋茂 中村一郎	

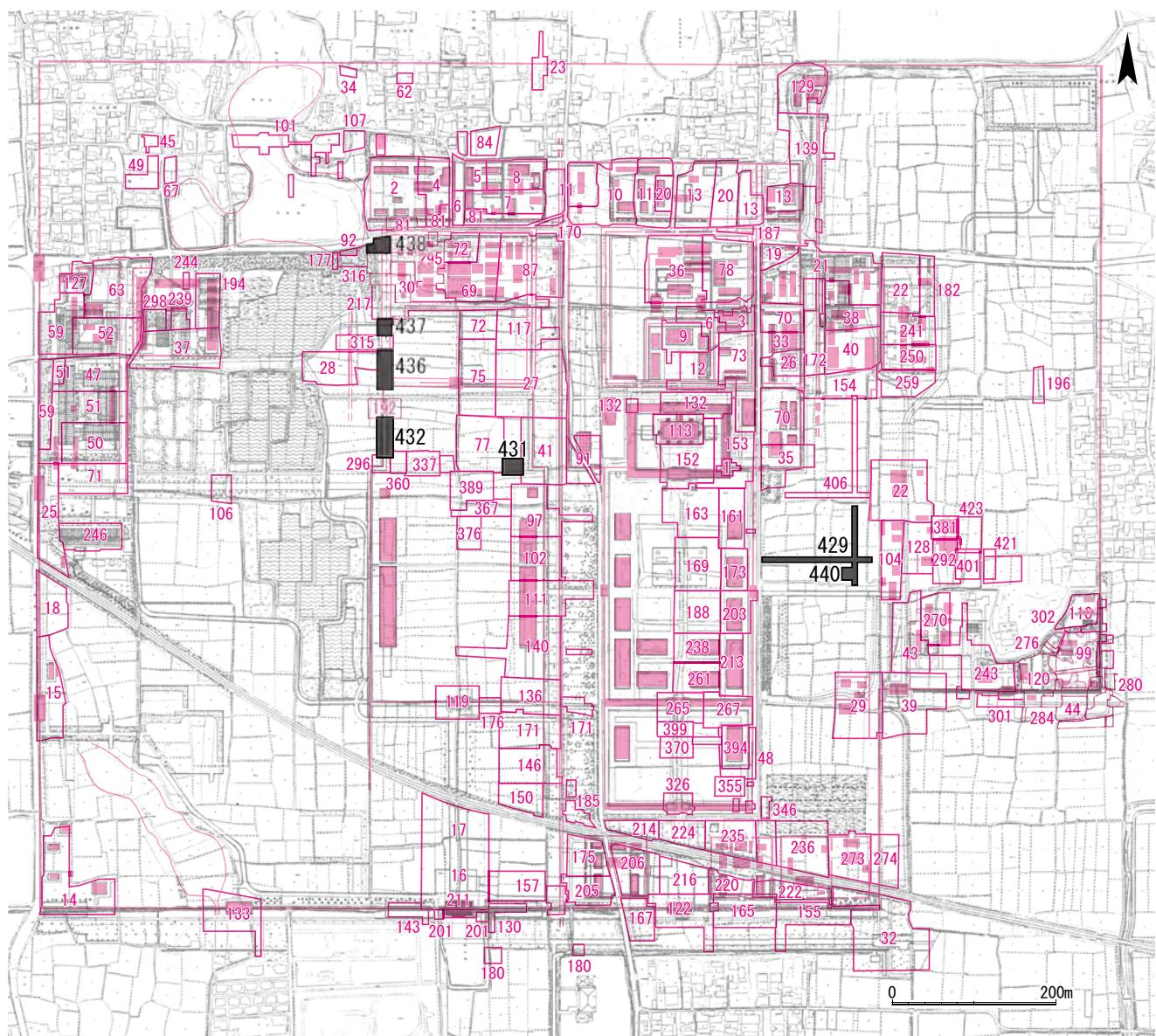


図 128 平城宮発掘調査位置図 1:8000

第一次大極殿院回廊の調査

—第431・432・436・437・438次

1 はじめに

第一次大極殿院の発掘調査は、1959年の第2次調査より開始し、これまで奈良時代前半から平安時代初期にかけて、大きく3時期の遺構変遷を明らかにしている。区画の東半分を中心とした、1979年までの調査成果については、既に『平城報告XI』として報告しているが、その後も西面および南面回廊を中心に継続して調査をおこなっている。

2008年度は、回廊の全貌を明らかとすることを目的に、南面・西面回廊の未発掘部分を中心とした調査を計

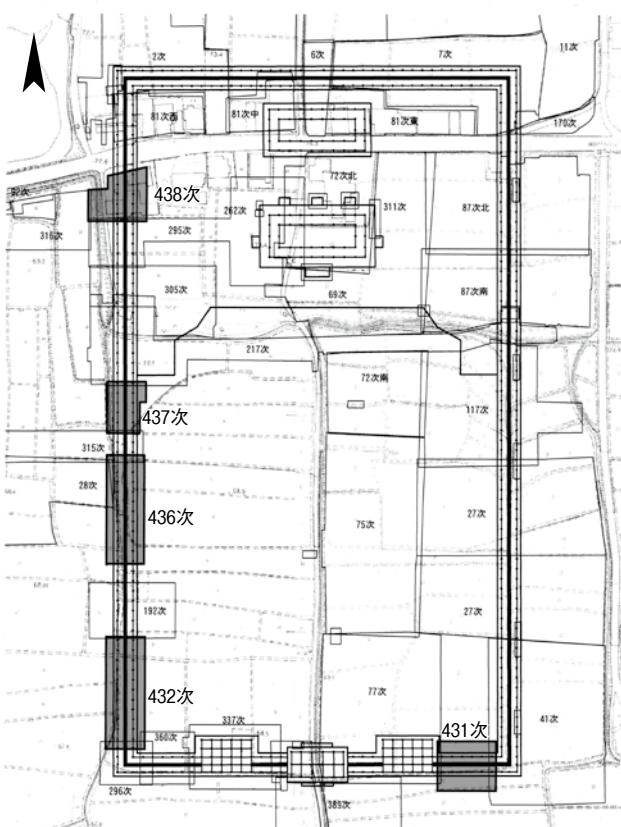


図129 第431・432・436・437・438次調査区位置図

表15 各調査の発掘面積と調査期間

調査次数	発掘面積m ²	東西m	南北m	調査開始日	調査終了日
431	632.5	27.5	26	08.04.01	08.06.26
432	936	18	52	08.04.12	08.10.22
436	879.5	17.5	50.4	08.06.26	08.11.18
437	397	18	24	08.07.01	08.11.26
438	547	27	25	08.09.24	08.12.22

画した。調査区は、南面回廊の東部に第431次調査、西面回廊の南から第432・436・437・438次調査の合計5つを設定した(図129)。それぞれの調査面積と調査期間は表15のとおりである。

2 既往の成果と遺構変遷

これまでの成果により、第一次大極殿院地区の遺構はI～III期の大きく3時期に区分される。I期はさらに4時期に分けられる。以下、各時期について説明する。

I期：平城宮造営当初より、恭仁宮から還都するまで。奈良時代前半。

I-1期…平城宮造営当初。区画の周囲を複廊の築地回廊で囲み、区画の内部は、北約3分の1を高くし、段差部分に磚積擁壁を築く。壇上は区画の中軸上に大極殿と後殿を南北に並べて配置する。

I-2期…南面回廊を改修し、南門の東西に樓閣を増築する。

I-3期…恭仁宮遷都。大極殿と東面・西面回廊を解体し、恭仁宮に移築する。東西両面は掘立柱塀を新たに造る。

I-4期…恭仁宮より還都。掘立柱塀を解体し、東面・西面回廊を再建する。

II期：奈良時代後半。区画の南北幅を狭め、内裏と同規模の区画とし、周囲は複廊の築地回廊で区画する。東西の回廊はI期の回廊の基壇を踏襲する。区画の内部は、中央に段差を設け、壇上には多数の掘立柱建物を建てる。称徳天皇の西宮に比定される。

III期：平安時代初期。II期の区画を踏襲する。区画施設は基壇幅を狭め、築地塀に改める。区画内の壇上部分は、新たに建物群を造営する。平城太上天皇の西宮に比定される。

今回の調査では、I期の南面・西面築地回廊、西面掘立柱塀、II期西面築地回廊、III期西面築地塀の検出が予想された。加えて、第436次調査区は、II・III期の区画施設の西南隅部分にあたり、それにともなう遺構の検出が、また、第437次および第438次調査区は、東対称部分でIII期の区画内部の遺構が確認されており、それらに対応する遺構の検出が期待された。以下、南面回廊部分と西面回廊部分にわけて報告する。

(大林 潤)

3 南面回廊の調査（第431次）

調査地の地形と基本層序

第431次調査地は南面築地回廊の東端付近にあたる。この辺りは第一次大極殿院地区の中でも低所で、第一次大極殿が位置した台地よりは一段低い地形面にあたる。宮の造営以前には、有機物を含んだ黒色粘土が堆積していた。調査地内でベースをなす土層はこの黒色粘土で、その自然層の直上に淡灰色土（造営時の整地層；層厚約5～10cm）を敷いている。回廊基壇の地業はこの上面から掘り込んでおり、この上に版築層を積み上げて基壇を築成している。回廊基壇の北側（大極殿院の広場）では、この淡灰色土の上に淡灰色砂礫（下層礫敷 SH6603A）、灰白色砂質土・橙褐色砂（中層礫敷相当層 SH6603B）、灰色砂礫（上層礫敷 SH6603C）が積み重なり、灰色砂礫は瓦溜まりが覆う。回廊の基壇には削平ののち赤褐色礫層が敷かれる。この礫層は大極殿院の灰色砂礫・瓦溜まりをも部分的に覆うが、その広がりは回廊基壇の範囲にはほぼ限られ、瓦器片および宋錢を含む。これより上層は、下位から順に灰黃褐色土、灰褐色土（床土）、耕作土、整備盛土となる。一方、基壇の南側は水田面が一段低くなるため、床土直下が朝堂院の礫敷（混礫褐色土）となる。遺構検出面は、基壇の北側で灰色砂礫上面、基壇上で赤褐色礫層の直下、基壇の南側で混礫褐色土の上面である。

検出遺構の概要

I - 1期

南面築地回廊 SC5600 南面築地回廊の総長は約180mであるが、このうち未調査地として残っていたのは今次調査の対象地（東西約23.0m）であった。今次調査では築地回廊の礎石痕跡を新たに5間分検出し、南面築地回廊の全体を完掘した。

南面築地回廊の基壇は版築工法で築かれ、西棟（SB17800）以東では掘込地業を施していたことが判明している。今次調査でも掘込地業と版築層とを確認し、従来の知見どおりであることを確認した。掘込地業の深さは約30cmで混礫土を充填し、その上位に灰褐色／橙色の版築層を交互に積み重ねて基壇を築成している。版築層は礫を含む橙色土と灰褐色土との互層からなり、最大で約30cmを残す。なお、この掘込地業は回廊心部分の約1.7m幅を掘り残しており、東面築地回廊 SC5500 と

同じ工法によったことが判明した。

築地回廊の基壇は、後世の水田の造成によって南側が大きく削りとられていた。このため、築地回廊南側の礎石抜取穴のうち2基は完全に失われ、3基は部分的に残るのみであった。一方、北側の礎石抜取穴は根石とともに比較的よく残っており、その間隔から築地回廊の柱間を推定することが可能であった。すなわち、桁行は約4.6m（15.5尺）等間、梁行は約7.1m（24.0尺）と復元され、南面築地回廊におけるこれまでの調査成果と一致する。これに対し、築地そのものはその痕跡をまったくとどめておらず、削平により失われたとみられる。

東西溝 SD7813A 南面築地回廊 SC5600 の下層北雨落溝で、築地回廊創建時のもの。西排水溝の壁面（第77次調査区東壁に同じ）で確認した（図131）が、平面的な検出はおこなっていない。土層観察では拳大の亜角礫を敷き始めたもので、幅は約70cmである。

東西溝 SD5557 雨落溝 SD7813A のすぐ南側に設置された東西溝で、中層礫敷に対比できる暗灰褐色土が覆う。今次調査の西排水溝東壁（第77次調査区の東壁）で再確認した（図131）。溝の深さは約50cmで、下底部は黒色粘土に達している。溝の内部には拳大程度の円礫を詰め込んで排水機能をもたせている。回廊南辺付近の排水にかかる溝とみられる。

東西溝 SD5565 築地回廊基壇の南側に設置された東西溝で、SD5557と同様に拳大程度の礫を詰め込んだもの。朝堂院の礫敷 SX19220 が覆うため検出範囲は一部にとどまるが、東排水溝（第41次調査区西排水溝）および西排水溝（第77次調査区東排水溝）で層位的に確認している。SD5557と同じく、溝の下底は黒色粘土に達している。回廊南縁の排水にかかるものであろう。

大極殿院礫敷 SH6603A 築地回廊の北側に広がるとみられる淡灰色の混礫層で、西排水溝の壁面で層位的に確認したが、平面的には検出していない。層厚は約10～15cmで、拳大未満の礫を含む。回廊創建直前に敷かれた整地層（淡灰色土）を直接覆っている。

I - 2期

大極殿広場礫敷 SH6603B 先にみた SH6603A や東西溝 SD5565 を覆う土層で、灰白色砂質土・橙褐色砂および褐灰色砂礫層（中層礫敷相当層）からなる。層厚は合わせて10cm程度。北壁の土層観察によれば、これらの土層

は調査区の北西隅から東へ約11mで途切れ、これより東には広がらない。褐灰色砂礫層は拳大礫を含む人為層で、第77次調査の中層礫敷に相当する。一方、褐灰色砂礫層の下位にある灰白色砂質土・橙褐色砂は粒の揃った礫を敷き詰めた状況になく、回廊基壇近くに堆積した砂層とみられる。

東西溝 SD7855A 回廊基壇の北縁に位置する東西方向の溝で、西排水溝の壁面でのみ確認（図131）。中層礫敷SH6603Bの敷設に先立ち、基壇外装を抜きとった際の溝とみる。

溝 SD19215 調査区北西隅・SH6603Aの上面で検出した素掘溝で、上にみた礫敷SH6603Bが覆う。検出部分はおおむね北方から流れてきた溝が東へと曲折する部分にあたり、南面築地回廊SC5600に阻まれて東折したようみえる。溝の埋土は白色砂で、水流が運んだものらしい。I-2期における回廊周辺の排水にかかわるものか。この溝の続きは調査地北側の第77次調査拡張区でも検出している。

I-4期

東西溝 SD7813B 南面築地回廊の北雨落溝で、東楼増設（I-2期）以降とされる。回廊の解体まで機能したもので、回廊廃絶時の瓦層が直接この溝を覆う。溝の幅は約50cmで、拳大程度の円礫を詰めて散水状とする。溝の北側は見切石を境とし、大極殿院の礫敷に接している。溝の南側には基壇外装の抜取溝SD7855Bがあり、両者は約50cmを隔てて平行している。

大極殿広場礫敷 SH6603C 築地回廊の基壇北側に広がる灰色砂礫層で、還都後に敷設されたとされる（上層礫敷）。層厚は約5cmで、礫は直径1~3cm程度。先にみたSH6603Bより上位だが、後述する瓦溜まりがこれを覆う。

瓦溜まり SX19221 大極殿院広場の瓦溜まりで、先にみた礫敷SH6603Cの上位に堆積する。層厚は約5cmで、南面回廊の北雨落溝SD7813Bを直接覆う。南面築地回廊の解体時のものであろう。

東西溝 SD7855B 回廊基壇の北縁で検出した東西方向の溝で、これより南側が回廊の基壇である。幅70cm、現存する深さは10cm未満。埋土中に凝灰岩片は含まれないが、その位置から基壇外装の抜取溝であろう。

礫敷 SX19220 回廊基壇の南側（朝堂院広場）に敷いた礫

敷で、拳大礫を多く含む褐色土である。上にみた大極殿院広場の礫敷SH6603Cより約30cm低い。回廊廃絶時の瓦で覆われる部分があり、このことからI-4期以前であるが、敷設の時期は明らかにしがたい。第389次のSX18795や第376次のSX18650に同じか。

東西溝 SD19217 回廊の南縁で検出した東西溝で、これより北側が回廊の基壇となる。幅75cm、現存する深さは約30cm。埋土中に凝灰岩片は含まれないが、その位置から基壇外装の抜取溝とみられる。

土坑 SK19218 調査区西南隅で検出した土坑で、深さは約20cmである。埋土には瓦を多く含み、回廊廃絶時のものとみられる。

II期以降

礫敷 SX19223 I期築地回廊削平後に基壇を覆う赤褐色の礫層で、チャートの亜角礫からなる。層厚は5~10cmで、礫層中には宋銭や瓦器片を含み、上面では耕作溝を検出した。当初、奈良時代後半に敷かれたいわゆる第II期礫敷（『平城報告XI』P.36）の可能性を考えたが、水田の造成以後に敷かれたことが層位的に明らかとなった。すなわち、基壇の南側が削平されて以後に堆積した土層が、この赤褐色礫層に覆われていると判明し、SX19223が奈良時代後半のものである可能性は否定された。

出土遺物

土器 土器の出土量はきわめて少なく、整理箱で5箱を数えるのみである。

瓦磚類 磚敷をおおう瓦溜まりなどから多数出土しており、南面築地回廊に葺かれていた瓦と推測される。瓦は軒丸瓦6284A・Cと軒平瓦6664A、6668Aからなり、第一次大極殿院回廊創建時の瓦である（表16）。（森川実）

表16 第431次調査出土瓦磚類集計表

軒丸瓦		軒平瓦		道具瓦	
型式	種	点数	型式	種	点数
6284	A	3	6641	E	1
	C	3	6664	C	2
	F	1		K	1
	?	2		?	2
型式不明	25		6668	A	2
				型式不明	5
軒丸瓦計		34	軒平瓦計		13
丸瓦			道具瓦計		10
平瓦			凝灰岩		
重量		82.0kg	2.0kg		0.1kg
点数		1377	9845		1

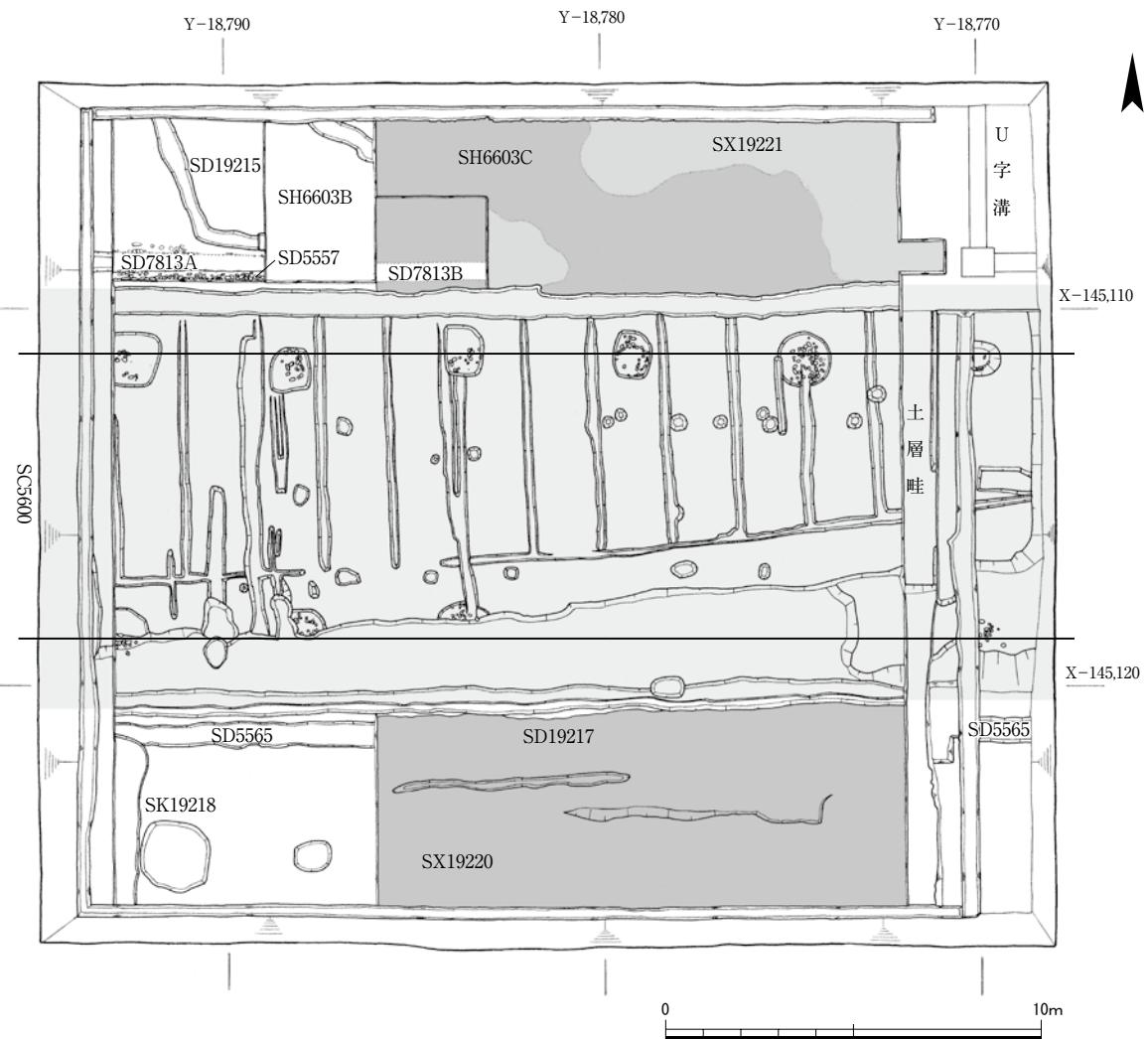


図 130 第 431 次調査遺構平面図 1:200

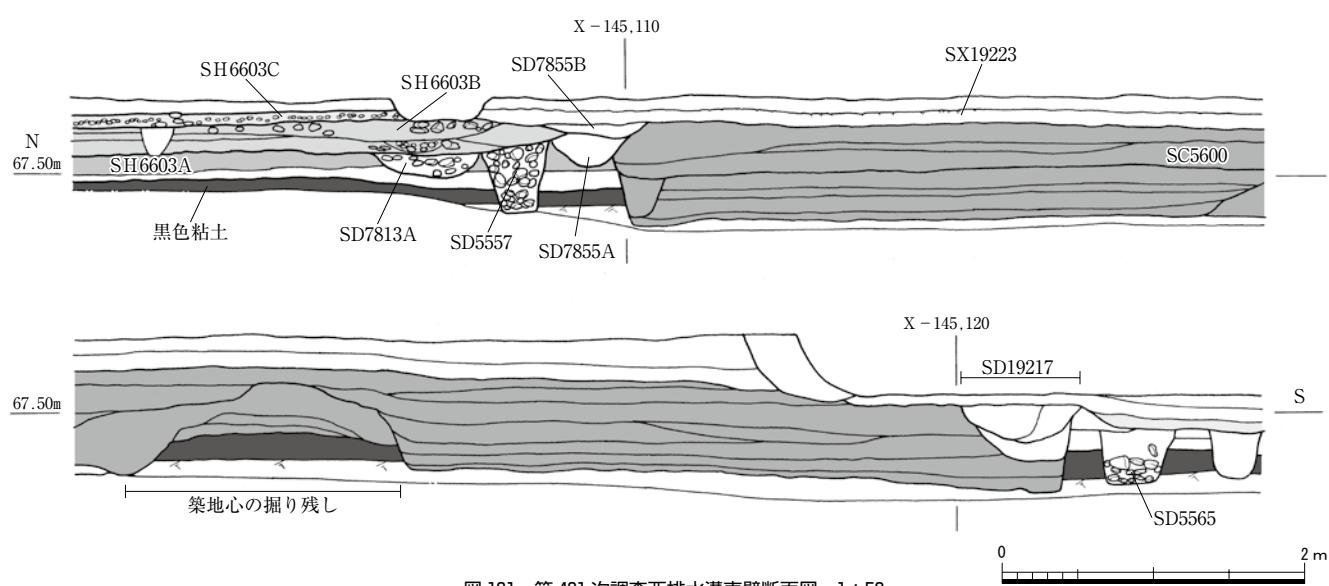


図 131 第 431 次調査西排水溝東壁断面図 1:50

4 西面回廊の調査（第432・436・437・438次）

調査地の地形と基本層序

第一次大極殿院地区は、平城山丘陵より南に延びる尾根筋に位置し、北から南へなだらかに傾斜する。調査前の西面回廊付近の地形は、第432次調査より第437次調査までの南半部分は区画の内外ともほぼ平坦であるが、それより北側では大きな段差が認められる。これは、平城宮造営時に大きく積まれた整地土と、後世にさらに積まれた盛土によるものであることが判明している（『第295次調査』『年報1998-III』など）。

基本層序は、おおむね表土（第432次調査区では宮跡整備事業による整備土、第438次調査区では既存住宅撤去後の造成土を含む）・旧耕作土・旧床土・遺物包含層・整地土・地山となる。回廊基壇部分では、整地土の上面に版築状に積まれた基壇土が認められ、第432次調査区の南半では、さらに赤褐色混礫土（SX19223）が基壇土の上に広がる。回廊東側は整地土上に後述する3層の礫敷舗装面があり、回廊の西辺より西は、後世に大きく削り取られている。遺構は、整地土上面、もしくは基壇土上面で検出した（第438次調査では、遺物包含層である褐色土上面で、中世以降の鋳造遺構として、炉跡2基と東西溝1条を検出している）。各調査における回廊基壇土・整地土・地山の上面の標高を表17に示す。

検出遺構の概要

西面回廊地区で検出した遺構は、回廊、門、塀、溝、広場、礫敷舗装、土坑、井戸などである。以下、検出遺構を順に説明する。

表17 各調査における地山高と整地土上面の標高

X座標	Y座標	地山高m	整地土上面高m	基壇土検出高m	調査次数
1	-145,091.2	-18,943.0	67.3	-	432
2	-145,086.0	-18,942.2	67.3	-	432
3	-145,017.8	-18,943.5	67.4	-	436
4	-145,003.7	-18,936.0	67.4	-	436
5	-144,994.8	-18,942.8	67.9	68.6	436
6	-144,981.7	-18,942.0	68.0	68.7	437
7	-144,959.8	-18,943.3	68.5	69.1	437
8	-144,945.1	-18,942.0	68.6	69.5	437
9	-144,939.6	-18,942.0	-	69.7	437
10	-144,863.0	-18,943.0	-	71.2	438
11	-144,859.0	-18,944.5	-	71.2	438
12	-144,854.6	-18,944.5	-	71.2	438
13	-144,850.0	-18,939.0	-	71.3	438
14	-144,846.4	-18,944.3	-	71.1	438

I-1期

西面築地回廊 SC13400 第一次大極殿院の西を限る築地回廊。今回の調査では、築地塀本体や側柱の礎石痕跡は確認できなかったが、回廊基壇版築土と東雨落溝を部分的に検出した。基壇西辺は後世に大きく削られており、基壇外装の痕跡や西側の雨落溝は完全に失われている。

基壇版築土は、地山上に積まれた整地土に直接造成される。今回の調査範囲では掘込地業は確認できなかった。版築は、粘質土や砂質土を交互に積み上げ、礫や粘土ブロックが混じる。基壇土は、第432次では西半が削平を受けており、第436次では30～35cm、第437次では40～50cm、第438次では約60cm残存する。

後述するSD19225が基壇外装東側の地覆抜取溝とすると、この溝の心と西面築地回廊南端の第296次調査より導かれる築地回廊想定心との距離は約5.6mとなり、基壇の幅は約11.2m（37尺）に復原される。

東雨落溝 SD13401 SC13400の東雨落溝。溝の深さは5～10cm。東肩には径10cm程度の見切り石を据え、その内側にはひとまわり小さな石で、見切り石の下部をおさえる。この見切り石は礫敷 SH6603・SX17865の西端を兼ねる。溝底には礫を敷き込むが、場所により礫の大きさが異なる。432・436次では径2cmの小礫を敷き、437・438次では径2～7cmとなる。

下層礫敷面 SX17865・SH6603A SX17865は、磚積擁壁壇上の礫敷舗装面。整地土の上面で、前述の見切り石より東に径3～5cmの礫を敷く。SH6603Aは磚積擁壁より南面築地回廊までの内庭広場。同じく見切り石より東の整地土上に径1～7cmの礫を敷く。

I-2期

南北溝 SD17940 第432次調査区の南部で検出した南北方向の素掘溝で、第296次では築地回廊の東雨落溝としていたもの。北でやや東へ振れている。この南北溝は現行水路のため北端を確認できなかったが、東面回廊の対称位置で検出した溝SD5588と同様に、内庭広場内の東西溝SD5590Aに接続すると考えられる（『平城報告XI』）。南は、第296次調査で検出した暗渠SD17963に流れ、回廊の外に排水される。溝の埋土には瓦を多く含む。今回の範囲では、削平により内庭礫敷との重複関係が明確ではないが、SD5588およびSD5590Aと同時期とすればI-2期の遺構である。

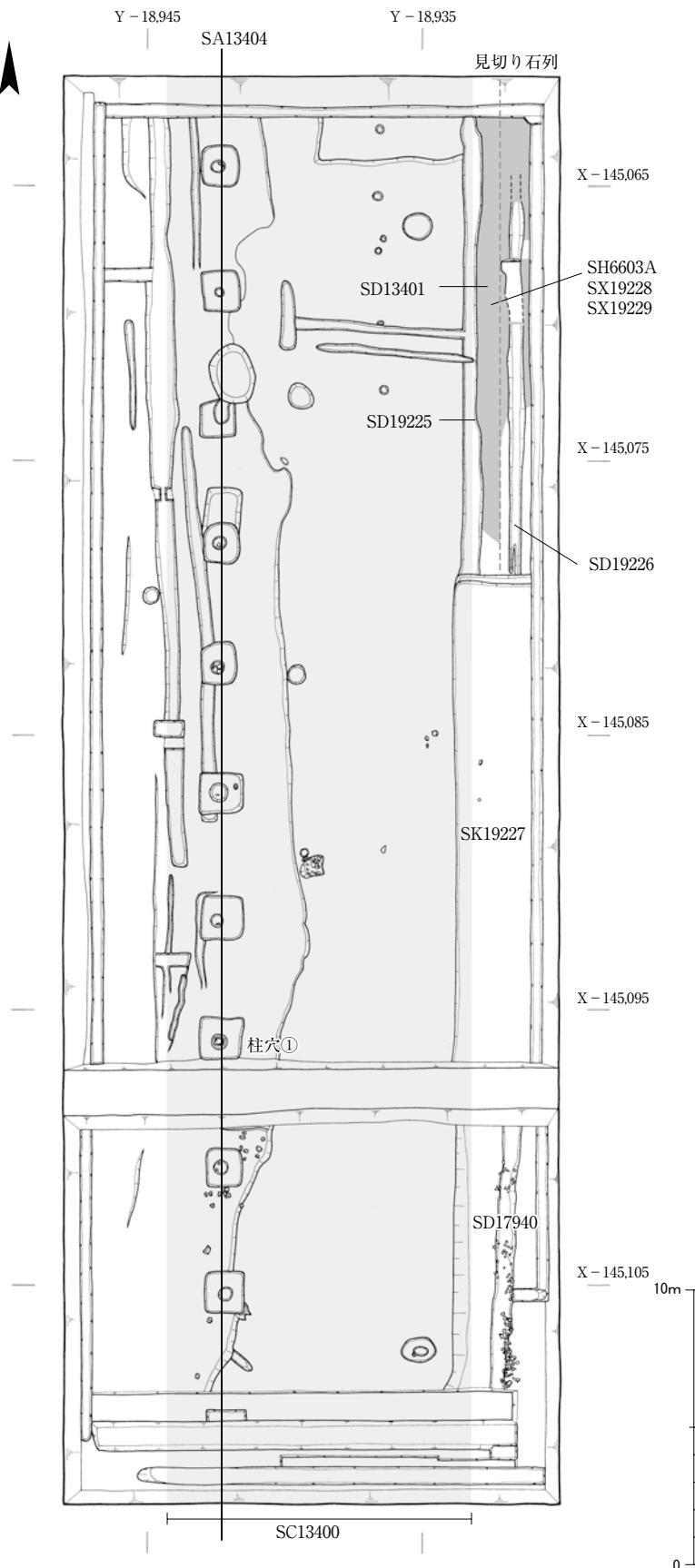


図 132 第 432 次調査遺構平面図 1 : 250



図 133 東雨落溝 SD13401 を覆う瓦溜まり（南東から）



図 134 東雨落溝 SD13401 および SD19225（北西から）



図 135 SA13404（北から）

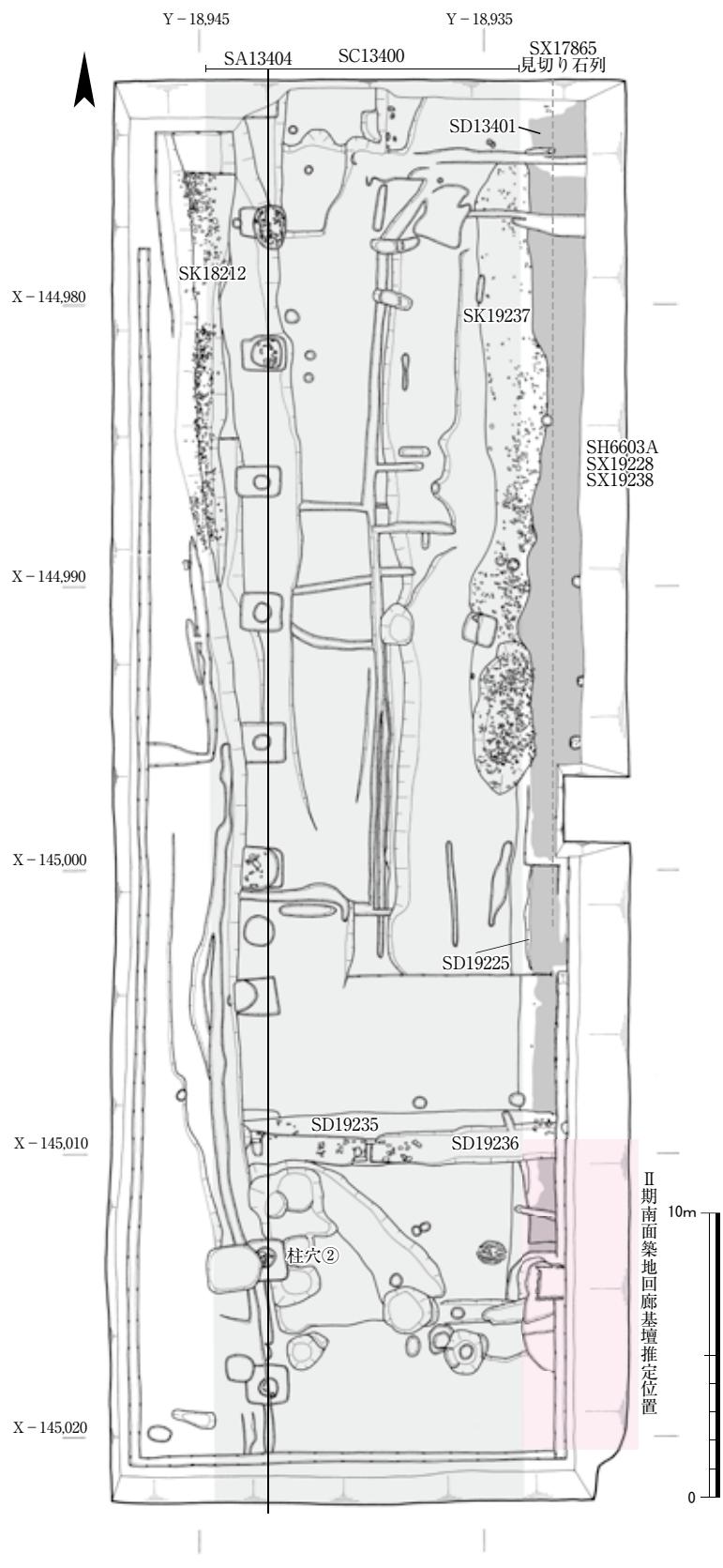


図 136 第 436 次調査遺構平面図 1:250



図 137 SD13401 (南から)



図 138 SD13401 と SK19237 (北西から)



図 139 SD19235 と SD19236 (北西から)

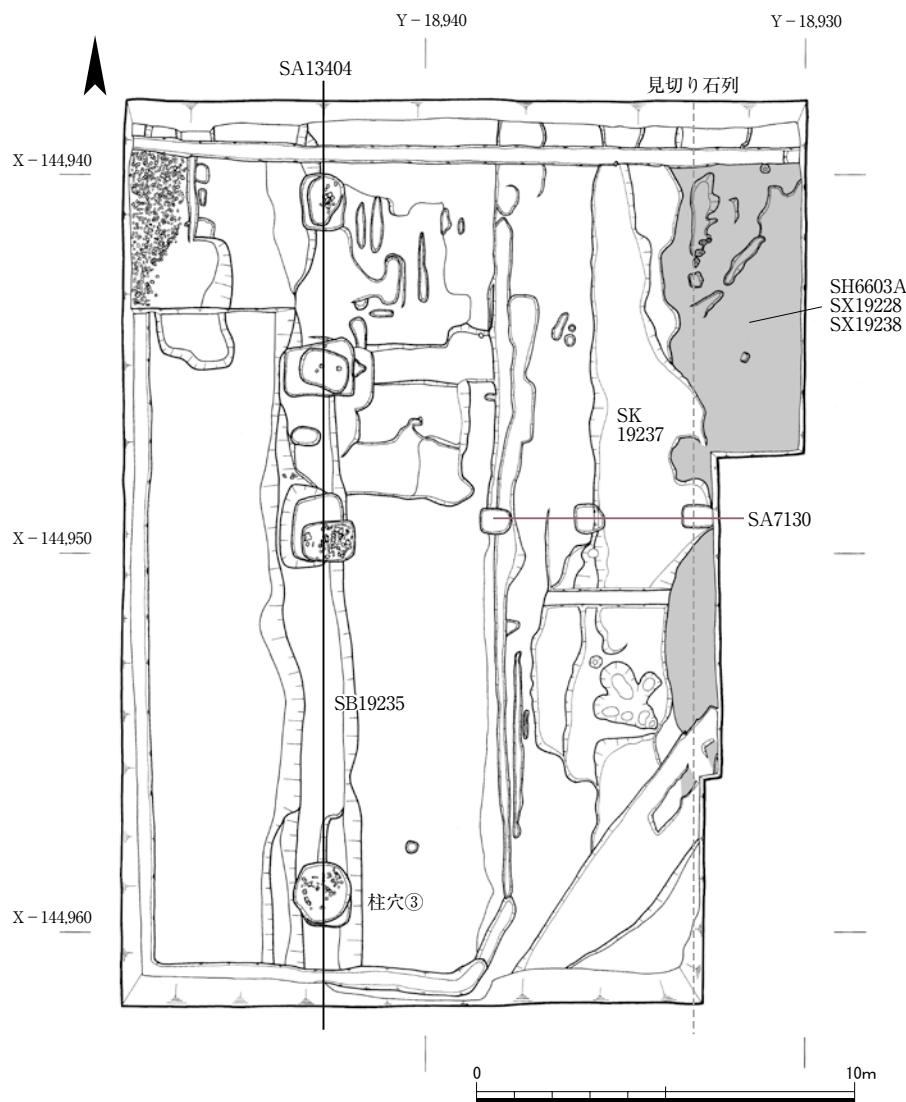


図 140 第 437 次調査遺構平面図 1:200



図 141 SD13401 · SH6603A 平面図 1:20

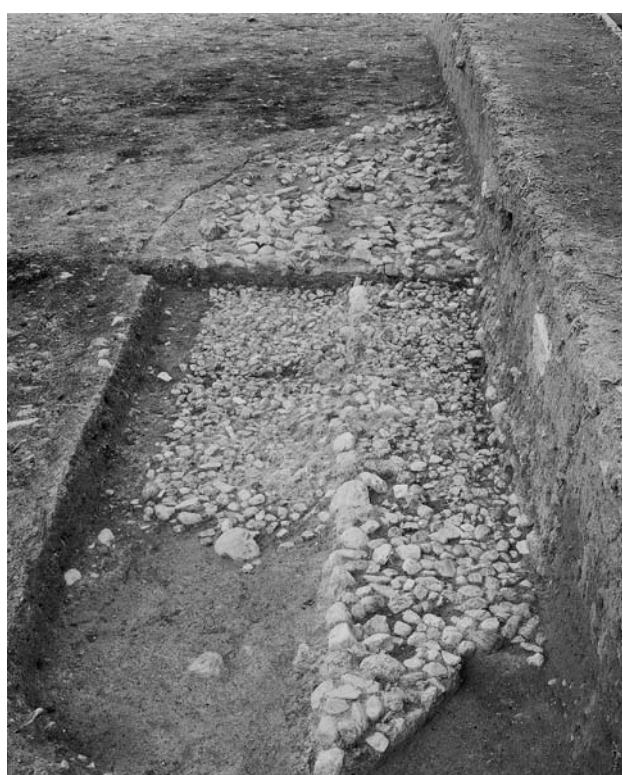


図 142 SD13401 · SH6603A (南から)

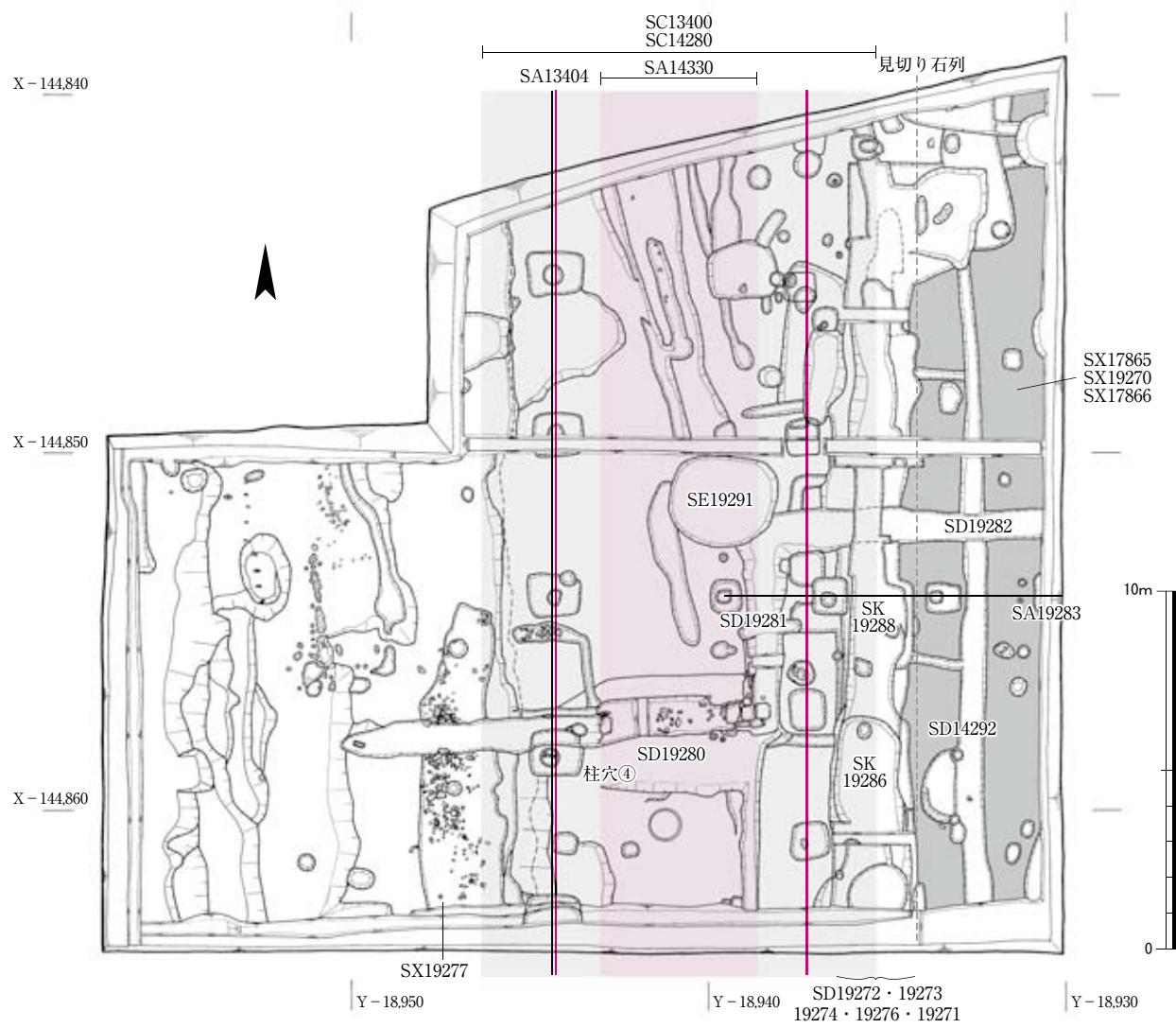


図 143 第 438 次調査遺構平面図 1 : 200

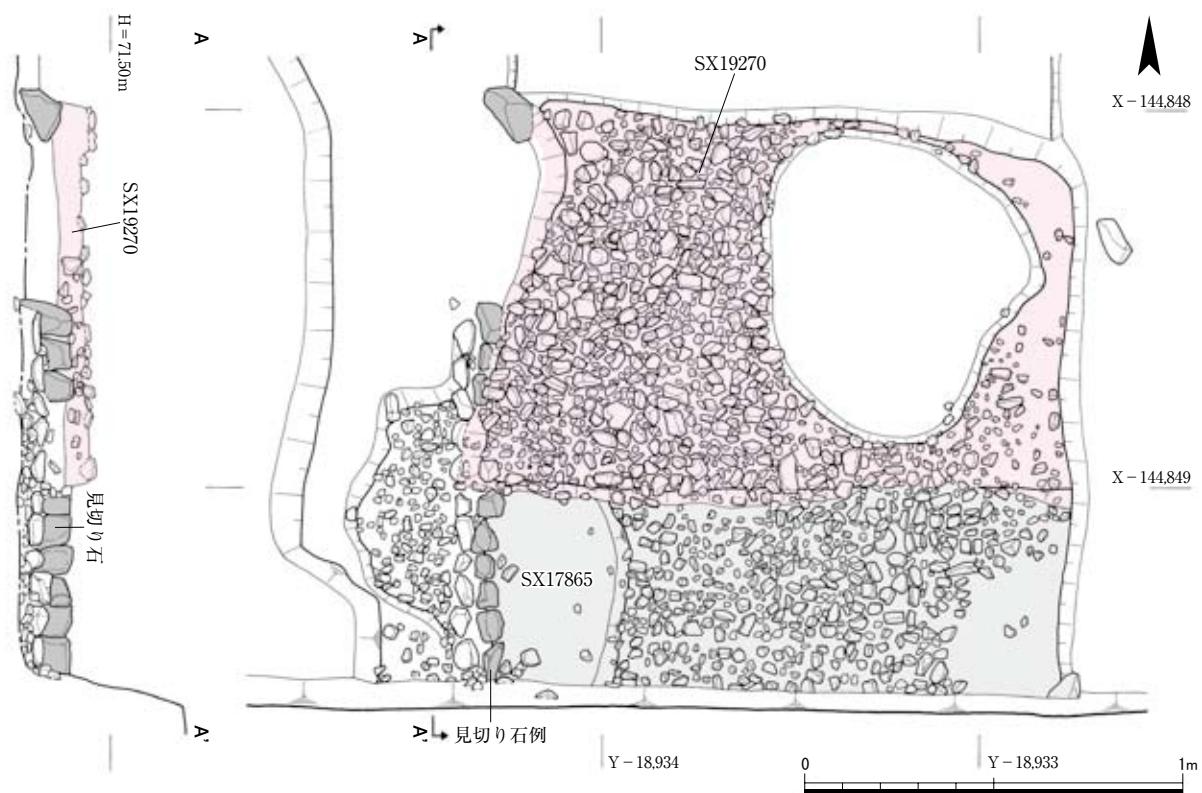
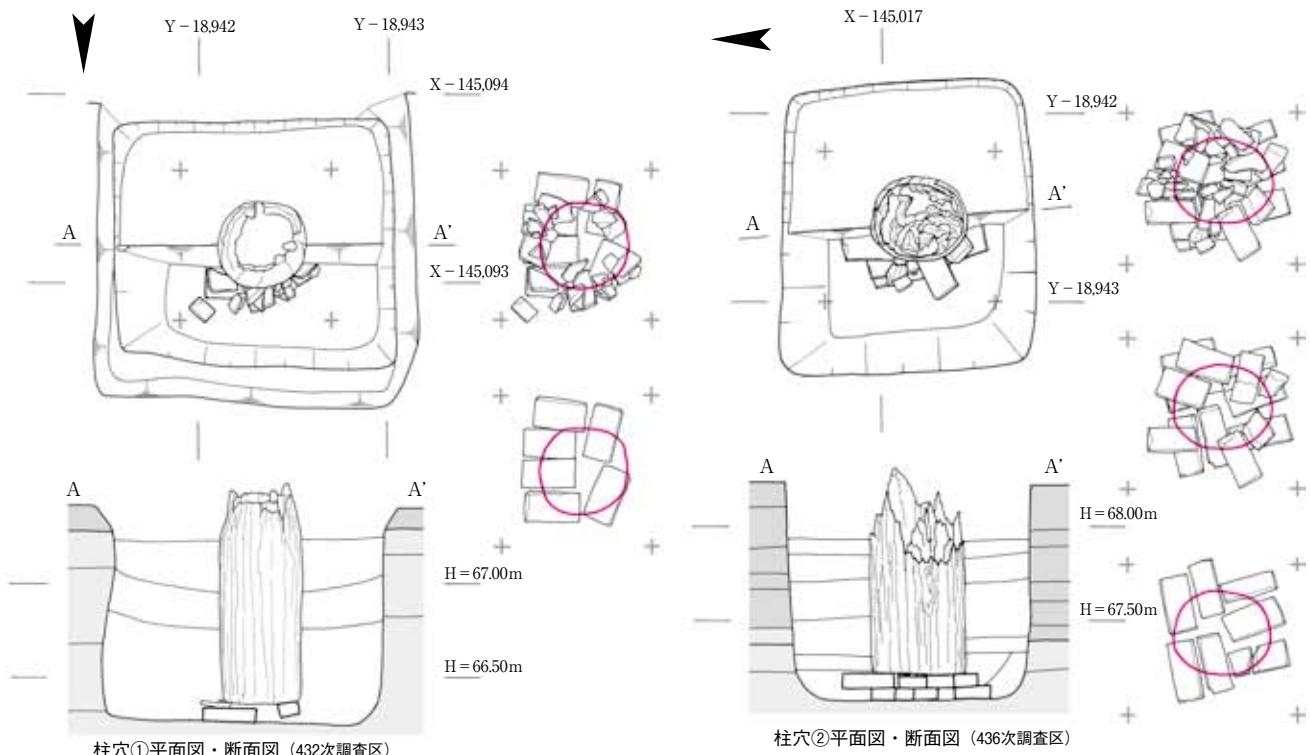
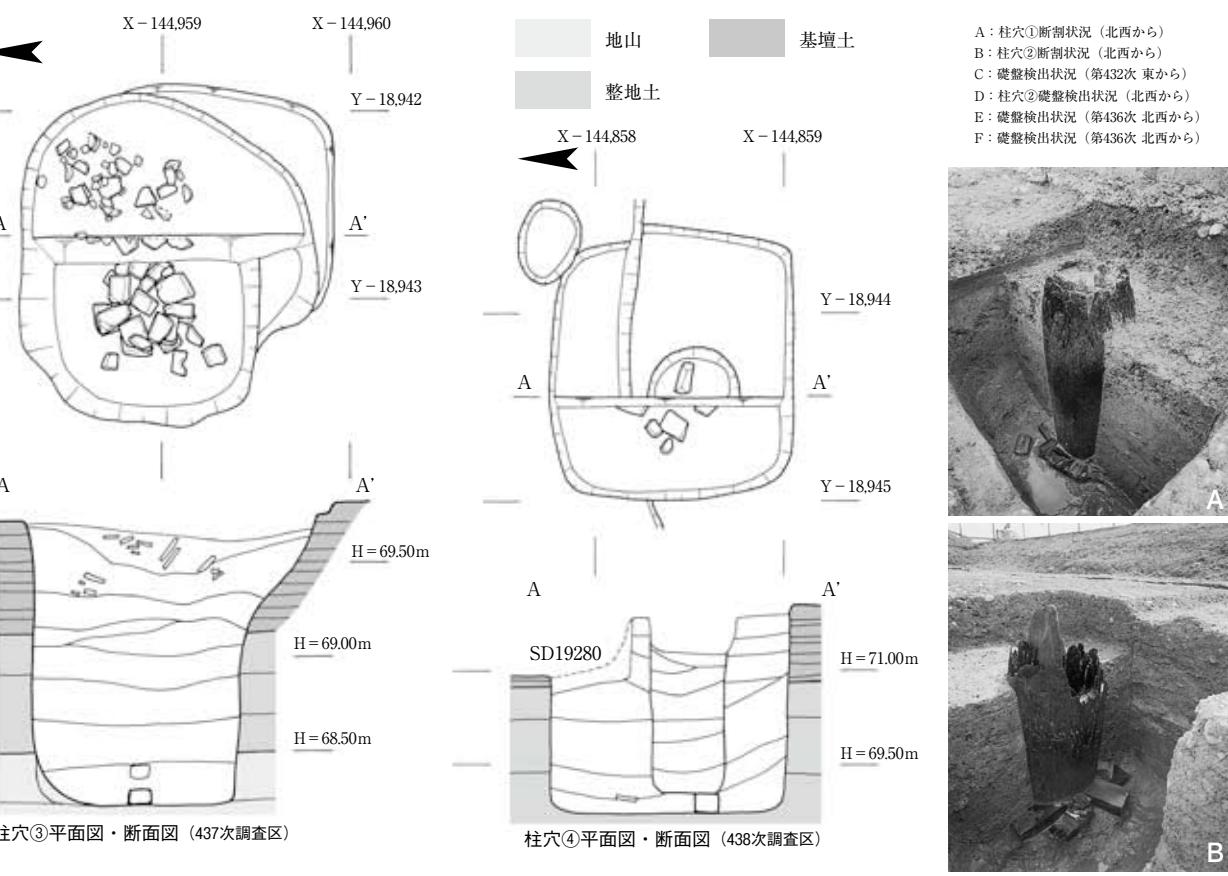


図 144 I 期壇上礫敷 SX17865 · SX19270 平面図および見切り石列立面図 1 : 200



柱穴①平面図・断面図 (432次調査区)



柱穴③平面図・断面図 (437次調査区)

柱穴④平面図・断面図 (438次調査区)

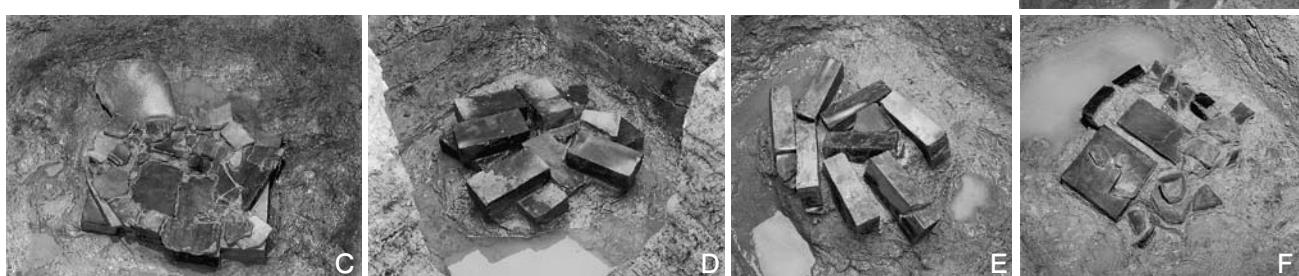


図 145 I - 3期西面掘立柱塀 SA13404 柱穴平面図・断面図と磁盤の諸相 1 : 40

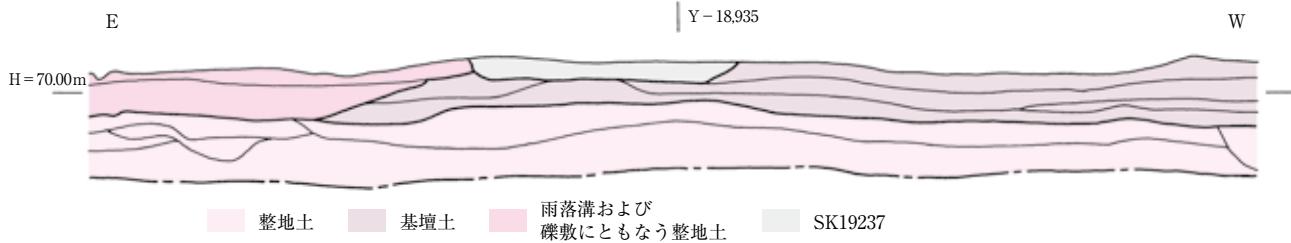


図 146 第 437 次調査区北辺断面図東半 1:50

I-3期

西面掘立柱塀 SA13404 南北方向の掘立柱塀。西面築地回廊 SC13400 の西側柱列の推定位置と柱筋を揃える。今回の調査では合計 31 基の柱穴を確認しており、柱間は 4.6 m (15.5 尺) である。11 基の柱穴で断割調査をおこない、そのすべてで礎盤として磚を据えた状況を確認した。これまでの調査成果を加味すると、東面の掘立柱塀 SA3777 とは対照的に、西側の掘立柱塀ではすべての柱穴に礎盤を用いていると考えられよう。磚の配置に規則性はなく (図 145)、なかには方磚や石材を用いるなど多様性が認められる。また、4 基の柱穴には柱根が遺存していた。樹種はすべてコウヤマキで、柱の直径はもっとも太いもので約 48cm。柱は礎盤の磚の上に立てるが、柱底面と磚との間に調整のため多数の瓦片を楔状に差し込んでいる。なお、礎盤の磚上面の標高は、第 438 次調査区では 70.35 m (図 145 柱穴④)、第 437 次調査区で 68.30 m、第 436 次調査区北では 67.95 m、同南では 67.22 m (図 145 柱穴②)、第 432 次調査区南では 66.36 m (図 145 柱穴①) である。II 期の SD19235・SD19236、III 期の SD19280 と重複し、いずれよりも古い。

門 SB19255 西面掘立柱塀 SA13404 に開く門。第 437 次調査区の南端の柱穴と南からふたつめの柱穴との柱間寸法が 9.2 m (31 尺) となっており、柱をひとつ省略することで門を設けているようである。西面掘立柱塀 SA13404 の門は第 295 次調査でも確認されており、これと同様の構造であろう。なお、東面掘立柱塀 SA3777 でも門が対称の位置に設けられている (『平城報告 XI』)。

礫敷 SX19228・SX19270 SX19228 は SH6603A の、SX19270 は SX17865 の上面に敷かれた礫敷面。SD13401 の溝内と見切り石周辺を厚さ 3 ~ 7 cm の土で埋め立て

た後、径 4 ~ 15cm の礫を敷く。礫は SD13401 周辺に敷いており、東にいくほどまばらになる。SD13401 の埋め立てを主目的として敷かれた可能性が高い。第 432・436 次調査では、SD13401 の内部にのみ礫が残存するが、第 437・438 次調査では、見切り石上面を覆い東に広がる。回廊存続時には雨落溝を埋め立てる必要はなく、後述の SX17866 に覆われているため、I-3 期の遺構とした。

I 期廃絶時

南北溝 SD19225 第 432・436 次調査区で検出した幅約 45cm の南北溝。東雨落溝 SD13401 に西接しその西半部分を破壊している。埋土中に凝灰岩片は含まれていないが、東雨落溝との位置関係から西面築地回廊の基壇外装の抜取溝の可能性がある。土坑 SK19237 より古い。

南北溝 SD19271 第 438 次調査で検出した南北溝。礫敷 SX19270 を掘り込む。幅約 1 m で、南北は調査区の外に続く。回廊基壇外装の抜取痕跡あるいは I-4 期の回廊東雨落溝の可能性がある。

II 期

礫敷 SX19229・SX19238・SX17866 I 期の礫敷面 SX19228・SX19270 の上面を覆う礫敷面。最大 7cm の土を積み、その上に径 1 ~ 4 cm の小礫を敷く。SX19229 は II 期南面回廊より南 (第 432 次)、SX19238 は南面回廊より北で石積擁壁より南 (第 436・437 次)、SX17866 は石積擁壁上段の殿舎地区内の舗装であり、一連の遺構ではないが、同時期のものである。第 295 次調査では、この礫敷面で II 期の建物遺構を検出しており、II 期の造営時にはすでに敷かれていたと考えられる。

西面築地回廊 SC14280 I 期築地回廊基壇を踏襲して造られた築地回廊。基壇外装や築地本体、雨落溝は残存しないが、第 438 次調査区で東西の側柱の礎石据付痕跡を、東柱列で 6 基、西柱列で 1 基検出した。礎石据付穴は最大で深さ約 30cm が残存するが、礎石は既に抜き取られている。柱間寸法は、梁行方向は東西側柱間で約 7.2m (24 尺)、桁行方向は約 3.9m (13 尺)。

暗渠 SD19235 第 436 次調査区で検出した東西溝。SD19236 に南半を破壊されているため、溝の幅は不明である。II 期南面築地回廊の北雨落溝 SD3778 の延長部分に位置し、回廊基壇を貫き区画外へ排水していたので

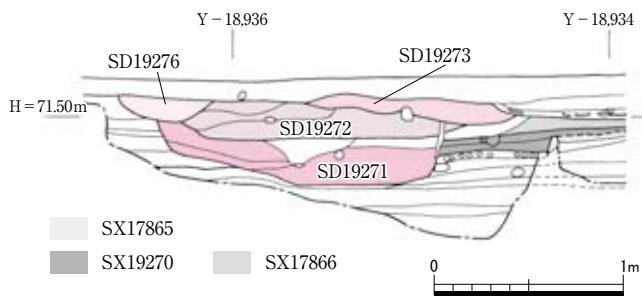


図 147 第 438 次調査区南北溝断面図 1:40

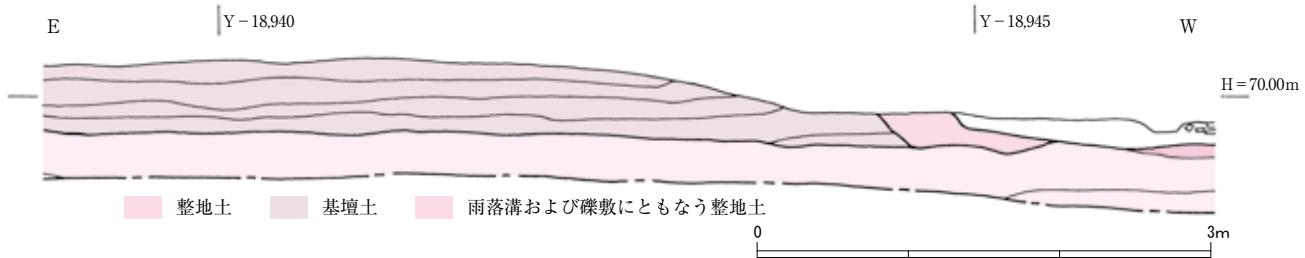


図 148 第 437 次調査区北辺断面図西半 1:50

あろう。溝の埋土中には凝灰岩片が含まれている。

暗渠 SD19236 第 436 次調査区南で確認した石組暗渠。

凝灰岩の底石と側石が一部遺存する。底石の外側に側石が接する構造で、内法で溝の幅は 41cm となる。西面築地回廊 SC13400 を横断して東から西へ排水していたと考えられ、東面築地回廊で検出した東西溝 SD3775 に対応するだろう。SD19235 より新しい。

南北溝 SD19272・19273・19274・19276 SX17866 より掘り込み、SD19271 に重複する南北溝。SD19272・19274・19276 が併存し、SD19272 より新しいが、SD19276・SD19273 より古い（図 147）。いずれも II 期の廃絶から III 期造営までの間に区画内の排水のため掘られたものと思われる。

南北溝 SD14292 第 438 次調査区の東部で検出した南北溝。第 295・305 次調査で検出した SD17863 と同遺構で、その北側の延長部分である。第 295 次調査では I 期の遺構としたが、今回礫敷 SX17866 を掘り込んでいることを確認したため、II 期の遺構とした。溝幅は約 50cm で、南北 18m 分を新たに検出し、全体では 62m 分を確認したこととなる。第 438 次では、この溝と西面築地回廊雨落溝をつなぐ東西方向の短い溝 2 条を確認しており、II 期以降の壇上部分の排水に関わる遺構と考えられる。

SD19226 西面築地回廊東雨落溝の東で検出した南北

溝。上層礫敷を掘込む。幅 60cm の素掘り溝で、南北 13.7m 分を確認した。第 432 次検出。

瓦溜まり SX19277 第 438 次調査で検出した回廊西側に広がる瓦溜まり。奈良時代後半の土器や瓦を含み、III 期の遺構 SD19280 に掘り込まれる。II 期築地回廊の解体にともなうものだろう。

III 期

西面築地塀 SA14330・SD19281・暗渠 SD19280 II 期回廊の築地部分のみを踏襲した築地塀。築地本体は残存しないが、第 438 次調査で、基壇東辺を流れる南北溝 SD19281 と、基壇下を貫く暗渠 SD19280 を確認した。

SD19281 は、後述の SD19282 からの排水を南に流す排水溝。南端で西に折れ、SD19280 となる。区画東半の SD8226 に対応するが、SD8226 が長さ約 10.5m であるのに対し、SD19281 は約 6m と短い。西肩に凝灰岩の側石が残存しており、この側石が築地塀基壇の東側外装を兼ねていた場合、I・II 期の築地心で折り返すと、基壇の幅は約 3.9m (13 尺) となる。

SD19280 は殿舎地区内の排水を区画外へ流すための溝で、基壇部分は凝灰岩切石の暗渠とし、基壇より外側は素掘りである（図 149・150）。暗渠部分は底石 4 石

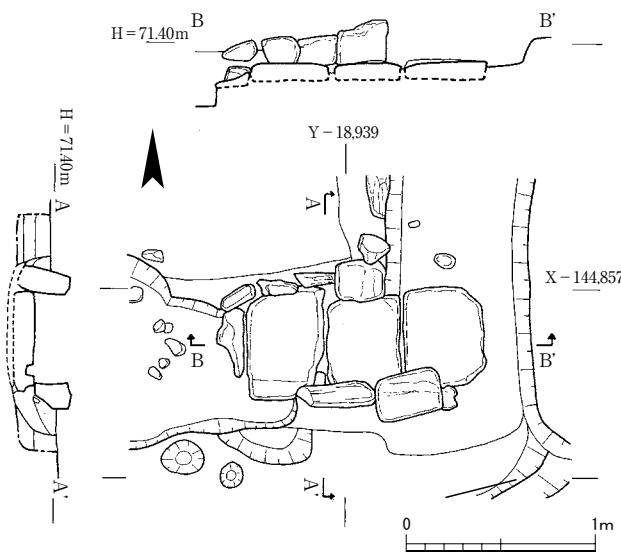


図 149 石組暗渠 SD19280 平面図・断面図・立面図 1:40

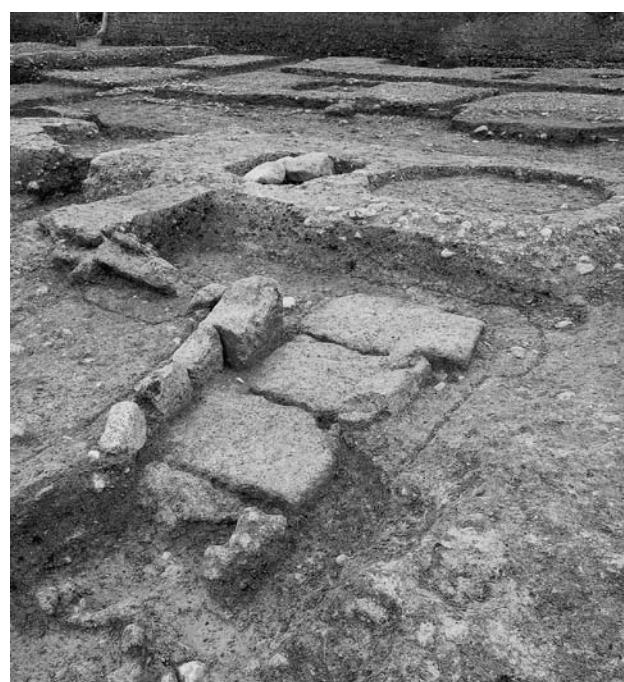


図 150 石組暗渠 SD19280 (南西から)

と側石が一部残存し、溝幅は内法で約40cm。I - 3期SA13404の柱穴、II期SX19277を掘り込む。

SA19283 III期殿舎地区を南北に区切る東西塀。掘立柱の柱穴4基を検出した。柱間寸法は約3m(10尺)。掘方は一辺約1mの隅丸方形で、径約30cmの柱痕跡がある。東対称位置のSA8217に対応する。SD19281がもともと西の1間を通ることから、塀の西端は築地塀に取りつくことがわかる。

SD19282 SA19283の北2mの位置に並行する東西溝。幅約1.2m、深さ約0.2m。東は調査区の外に続き、西はSA14330の手前で南折しSD19281となる。東対称位置のSD6631に対応する。

SA7130 III期広場を南北に区切る東西塀。掘立柱の柱穴3基を検出し、柱間寸法は東が約3m(10尺)、西が約2.4m(8尺)。区画東半で検出した同遺構の西延長部分で、西面築地塀SA14330に取りつく。

SK19237 SC14280の基壇東側に位置し南北方向にのびる土坑。北端は第437次調査区で収束し、南端は第436次調査区まで続いている。最大幅は約3m、深さは10cm~40cmである。土坑埋土からは瓦片、土器片のほか、凝灰岩切石の破片などが多く出土している。この遺構はSC13400の基壇東辺とその東雨落溝SX13401、III期の東西柱列SA7130を壊している。

SK19286・19288 SX17866上面で検出した土坑。埋土より平安時代の縁釉皿が出土した。第438次検出。



図151 SA19283・SD19282(東から)

中世の遺構

井戸SE19291 第438次調査で検出した直径約3mの素掘り井戸。検出面からの深さは約2.7m。埋土より瓦器が出土した。

時期不明の遺構

瓦廃棄土坑SK18212 第436次調査で検出した南北に長い土坑。第315次調査で検出した同遺構の延長部分で、北は第217次調査のSK14260へと続き、全体は南北80mにも及ぶ。幅は約4m。多量の瓦や磚を廃棄した土坑で、軒丸瓦6664Cが出土した。遺構の重複関係からSA13404よりも新しい。II期あるいはIII期の遺構と考えられる。

SX19227 第432次調査で検出した矩形の段差で、西辺は築地回廊の基壇東端にほぼ接している。段差の高さは検出面より約20cm。同様の段差は東半の対称位置でも確認されている。大極殿院広場を横断する南落ちの段差とみられるが、性格は不明である。

(森川・和田一之輔／文化庁・今井晃樹・大林)

出土遺物

土器 第432・436・437・438次で出土した土器は整理箱で45箱である。第432・436次では土器の出土量がきわめて少なく、また細片化が著しい。一方、第438次ではII期およびIII期の溝から奈良～平安時代初頭の土器が出土している。土師器の保存状態は概して悪いが、8世紀後半～9世紀初頭のものが多い(図152)。

1・2は、SD19274から出土した土師器。1は杯Aで、外面および底部をヘラケズリしたのち、ヘラミガキを施したもので、口縁端部の巻き込みは小さい。内面には煤が付着し、灯火器として用いられたことがわかる。2は皿Aで、端部を丸くおさめるもの。器表面の大半は剥落し、調整痕をとどめないが、おそらくc手法による。1・2ともに平城宮Vで、II期建物群・溝などの廃絶に関連するとみられる。

3は、土師器椀Cの完形品。口縁部付近にヨコナデ痕を、丸い底部には指頭圧痕をとどめる。器高は小さく皿状を呈する。

SD19280・19282出土土器(4～8)はおもに土師器細片からなり、須恵器は比較的少ない。4はSD19282の土師器皿Aで、器表面の剥落が著しい。5～8はSD19280で出土した土師器で、外面のヘラケズリが特

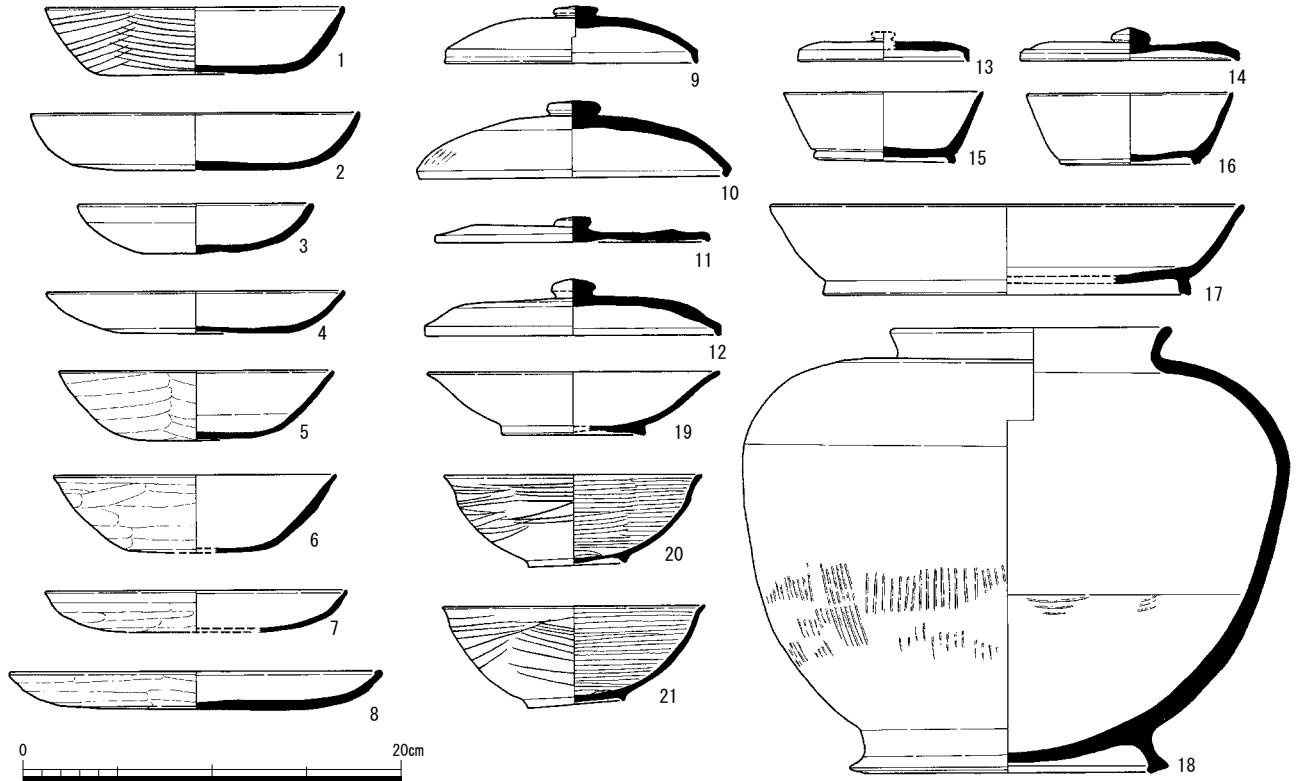


図 152 第 437・438 次調査出土土器 1:4

徴的である。5・6は杯Aで、前者は完形に復した。ヘラケズリは5単位に分かれており、狭い底部には一方向ケズリを施す。7・8は皿Aで、ヘラケズリで仕上げたもの。8の口縁部にはヨコナデ時のくぼみが削りきれずに残る。平城宮Ⅴ。

9・10は、SA13404の柱抜取穴（第437次）から出土した須恵器杯B蓋。ともに同じ抜取穴から出土したもので、西面掘立柱塀の廃絶時期を示す。いずれも雨傘形をなし、10は頂面にロクロケズリ時の工具痕を残している。平城宮Ⅲ。

11は、SK19287から出土した須恵器杯B蓋。全体に扁平で、特徴ある色調などから猿投窯の產品とみられる。奈良時代後半。

12～17は、SD19276出土の須恵器。12は杯B蓋で、頂面には粘土紐接合痕が消えずに残る。13・14は杯B蓋。14は頂部が扁平で宝珠形のつまみをもつ。15・16は杯B。高台を底部外縁近くに貼りつけるもので、16は灯火器としての使用痕を残す。17は皿B。底部をロクロケズリで整え、高台は底部外縁近くに貼りつける。なお、SD19276の土師器は細片が多いが、外面にヘラミガキを施した杯A片や椀A・皿A片などがある。須恵器と併せ、すべて平城宮土器Vに属すると考えられる。

18は須恵器壺A。胴部径29.0cm、器高23.6cmで、SX19277およびその周辺から分かれて出土。イチジク形をなす胴部と短い頸部とからなり、肩部には降灰と蓋の重ね焼き痕をとどめる。胴部外面はナデて整えるが、下半には並行タタキ目を残す。一方、内面にはナデ痕が残り、火ぶくれを起こしている。

19は緑釉皿で、SK19288とSD19294とに分かれて出土したもの。素地は淡黄白色で、淡緑色の釉薬が一部に残る。削り出し高台をもつ。京都産とみられる。

20・21はSE19291から出土した瓦器椀。内面見込みには螺旋状のヘラミガキを施すが、外面のヘラミガキは粗く、高台は小形で逆三角形をなす。21の底部には「×」印の線刻がある。12世紀後半。

このほか、第432次では築地回廊の基壇を覆うSX19223（赤褐色混礫土）中から磚仏の破片が出土した（図版7）。磚仏片は十二尊連坐磚仏の一部で、釘孔の位置や残存する端部から考えて、三段四列に配した如来坐像のうち左列の下から2段目の像にあたる。如来の像高は34mmで、蓮華座の上に結跏趺坐し左足を前面に見せる。火焔で縁取った二重円の光背を背負い、頭上には垂飾を下ろした天蓋をもつ。像容や像高からみて山田寺出土の十二尊連坐磚仏と同原型品と考えられる。
(森川)

表18 第432次調査出土瓦類集計表

軒丸瓦			軒平瓦			道具瓦		
型式	種	点数	型式	種	点数	種類		点数
6282		1	6646	A	1	熨斗瓦	2	
	C	1	6664	C	10	面戸瓦	17	
	?	2		K	1	隅切	2	
6304		2		?	1			
6316	F	1	6667	C	1			
巴(中世)		1	6668	A	1			
型式不明		7	6721	G	1			
			奈良軒平		1			
			中世軒平		1			
			近世軒平		1			
			型式不明		12			
軒丸瓦計		15	軒平瓦計		31	道具瓦計	21	
	丸瓦		平瓦		磚	凝灰岩		
重量		122.2kg		672.8kg		105.2kg	4.0kg	
点数		2015		16325		145	16	

表19 第436次調査出土瓦類集計表

軒丸瓦			軒平瓦			道具瓦		
型式	種	点数	型式	種	点数	種類		点数
6133	A	4	6647	B	1	面戸瓦	7	
6134	A	1		Ca	1	切熨斗	2	
6281	Bb	1	6664	Ca	39	熨斗	9	
6284	A	4		?	6	隅切瓦	2	
	?	4	6665	A	2	その他	2	
型式不明		12	6721	G	1			
			6732	C	2			
			型式不明		27			
軒丸瓦計		26	軒平瓦計		79	道具瓦計	22	
	丸瓦		平瓦		磚	凝灰岩		
重量		363.2kg		1974.0kg		95.1kg	57.0kg	
点数		4571		31649		123	302	

瓦 各次数とも第一次大極殿院Ⅰ期の築地回廊の創建瓦 6284C と 6664C の組合せが最も多く出土している(図153)。そのほか、6133A・B と 6732C の組合せはⅡ期殿舎地区の東面回廊の瓦であり、6282B・C と 6721C の組合せは、Ⅱ期の殿舎地区における所用瓦である。

磚 磚は SA13404 の柱穴から大量に出土している。いずれも掘立柱の礎盤として使用しており、完形品が多い。色調は全体に黒色を呈している。

長方形磚が最も多く出土している。第432次調査から第438次調査までの4調査区で出土した完形品は計43点ある。磚の長さは 27.0cm ~ 30.3cm、幅は 1 点だけ 13.3cm の例があるほかは 14.5 ~ 16.9cm、厚さ 7.8 ~ 9.0cm の範囲におさまる。この数値は第一次大極殿院地区で出土している C タイプの磚と一致する。方形磚が 1 点出土しており、長さ 27.0cm、幅 26.8cm である。これは平城宮 A タイプの第一次大極殿院出土の磚と寸法が一致する(渡辺丈彦「平城宮出土磚について」『紀要2004』)。いずれの磚も第一次大極殿の造営時に規格品として製作されたものであろう。(今井)

銭貨 第436次では SC13400 上面の包含層より和同開珎が2点出土している。(国武貞克)

表20 第437次調査出土瓦類集計表

軒丸瓦			軒平瓦			道具瓦		
型式	種	点数	型式	種	点数	種類		点数
6133	B	2	6664	C	10	熨斗瓦	11	
6284	A	2		D	1	面戸瓦	16	
	C	1		F	1	その他	2	
6314	A	1		?	3	平瓦(刻印)	1	
型式不明		8	6685	D	1			
			6691	A	1			
			型式不明		2			
軒丸瓦計		14	軒平瓦計		19	道具瓦計	30	
	丸瓦		平瓦		磚	凝灰岩		
重量		237.5kg		930.0kg		222.8kg	5.7kg	
点数		2988		16152		281	72	

表21 第438次調査出土瓦類集計表

軒丸瓦			軒平瓦			道具瓦		
型式	種	点数	型式	種	点数	種類		点数
6133	Aa	1	6664	C	11	面戸瓦	11	
	?	2	6682	A	1	隅切瓦	1	
6273	C	1	6721	C	2	ヘラ書き平瓦	1	
6282	Ba	1		?	1			
	B	3	6725	B	1			
	C	2	6732	C	7			
	?	2		?	2			
6284	A	3	型式不明		2			
	C	1						
	Eb	1						
	?	2						
6308	B	1						
6311	?	1						
6313	C	1						
6314	A	1						
型式不明		12						
軒丸瓦計		35	軒平瓦計		27	道具瓦計	13	
	丸瓦		平瓦		磚	凝灰岩	レンガ	
重量		182.3kg		684.9kg		52.5kg	64.6kg	0.2kg
点数		2205		13269		80	109	1

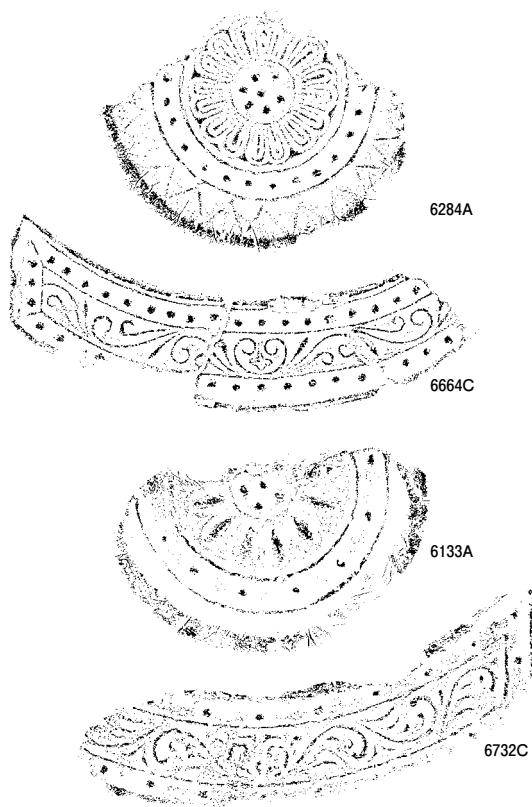


図153 第432・436・437・438次調査出土軒瓦 1:4

5 おわりに

南面築地回廊 南面築地回廊の調査は、第431次調査をもって完了した。以下、この調査の成果を簡単にまとめよう。

南面築地回廊SC5600は、隣接地を含めこれまでに数度にわたる調査を経ており、その構造がおおむね明らかになっていたが、今次調査でも既往の調査とほぼ同じ成果を得た。すなわち、西端を除く大部分で南面築地回廊の基壇は掘込地業をともなう版築工法によること、建物の柱間は桁行4.6m(15.5尺)等間、梁行約7.1m(24.0尺)であることを再確認した。一方、南面回廊の掘込地業は回廊心の約1.7m幅を掘り残しており、この点で東面築地回廊に似ることが新たに判明した。

SC5600の北側には第一次大極殿院の広場が広がっているが、今次調査ではその一部を調査した。大極殿院広場の下層礫敷SH6603Aと中層礫敷相当層SH6603Bは主として土層観察で認識したもので、後者は東方へと連続しないことが判明した。『平城報告XI』で示したように、中層礫敷は東楼SB7802の増築にかかわるもので、その分布は東西楼の周辺に限られるのであろう。一方、最上層の礫敷SH6603Cは回廊廃絶時の瓦層が直接覆う礫敷面で、瓦層を除去した範囲でその広がりを確認した。これらの層位認識は既往の調査に準じるものである。なお、削平後の基壇を覆う赤褐色礫層SX19223は層位的に水田の造成後に敷設されたもので、今次調査ではいわゆるⅡ期礫敷には比定しないことが明らかとなった。

SC5600の基壇南縁は、後世の削平が著しいものの、基壇縁の推定位置にて基壇外装の抜取溝SD19217を検出した。また、朝堂院広場の礫敷の下位では、回廊周辺の排水にかかわる東西溝SD19220を確認した。(森川)

西面築地回廊 西面築地回廊は、現行道路以外のすべての部分の調査が終了したこととなる。第432・436次調査では、回廊東側の基壇外装抜取溝と思われる南北溝SD19225を確認し、これまで南面回廊より想定されていた西面築地回廊の基壇幅について、新たな知見を得た。

西面築地回廊の東雨落溝SD13401も改めて確認し、西面回廊全体で、東肩に拳大の石を並べ、回廊内側の礫敷の見切りとしていることが確認された。

区画内部の舗装の変遷についても新たな成果を得た。

これまで第一次大極殿院の壇上部分については、第295次調査で2時期の礫敷面を確認していたが、今回は合計3時期の礫敷面を確認した。下層のSX17865は造営当初と考えられる。上層のSX17866はⅡ期の遺構に掘り込まれていることから、Ⅱ期の造営段階にはすでに敷かれていたことが判明している。問題となるのは、中層のSX19270の時期であるが、SX19270が回廊雨落溝を埋め立てていることから、築地回廊を壊し掘立柱塀を造ったI-3期の遺構と考えられる。またSX17866は、SX17865・SX19270と比較し、径1~4cmという細かな礫を敷く。Ⅱ期は称徳天皇の西宮に比定されており、I期の大極殿があった儀式的な空間から生活空間へと変化する。礫敷舗装の変化は、この空間の機能の変化にもなるものと解釈できるだろう。

I-3期の掘立柱塀SA13404も4つの調査区すべてで確認した。第437次では門SB19235を東面掘立柱塀に開く門と対称の位置で検出し、区画が東西対称に計画されていることを再確認した。一方、断割調査をおこなった柱穴では、そのすべてで礎盤として磚を据えており、東面掘立柱塀SA3777とは異なる構造で施工されていることが明らかになった。これは、東面回廊の大半が地山を削って整地しているのに対し、西面回廊は低い地山上に大きく盛土をしているためであろう。

Ⅱ期の遺構は、第436次調査で南面築地回廊北雨落溝の西延長部分とみられる暗渠SD19235と、第438次調査で築地回廊SC14280の礎石痕跡を確認した。

Ⅲ期は、第438次調査で殿舎地区を南北に区画する塀SA19283とその北側を流れる溝SD19282を確認した。SD19282は南に折れSD19281となるが、これがⅢ期築地SA14330の東雨落溝とすると、SA14330の基壇幅は13尺となる。SD19281はさらに西に折れ、SA14330の基壇を貫く暗渠SD19280となる。SD19281とそれに対応するSD19226の長さは異なるが、Ⅲ期もほぼ東西対称に計画されていることを再確認した。

今後の課題 第432次調査で確認した段差SX19227は、東側の対称位置でも同様の遺構を確認している。いずれもその性格は不明であるが、東西対称に計画的に造られた可能性があるため、今後も引き続き調査を継続する必要がある。

(大林)

東方官衙地区の調査

—第429・440次

1 はじめに

第二次大極殿院、東区朝堂院、東区朝集殿院の東側に位置する東方官衙地区について、2006年度から4回にわたる発掘調査の計画を立てた。第429次調査は本計画の第2回目となる。調査区南部で遺物を多量に含む土坑を検出したが、土坑の西半が調査区外に広がるため、土坑の全容を明らかにする目的で第440次調査を実施した。

第429次調査は幅6mの調査区を南北96m、東西129m設定し（以下南北調査区、東西調査区と略記する）、発掘面積は1314m²、2008年1月11日より開始し、同年5月7日に終了した。第440次調査は第429次調査との重複部分をふくめて南北15m、東西17mの調査区を設定し、発掘面積は255m²である（図154）。2008年11月19日に開始し、2009年2月6日に終了した。

2 既往の調査成果

本調査の北側では第406次調査が実施されている。この調査では、官衙区画を2つ確認した。東側の官衙区画Aでは区画の東西を限る築地塀を検出し、東西幅は約51

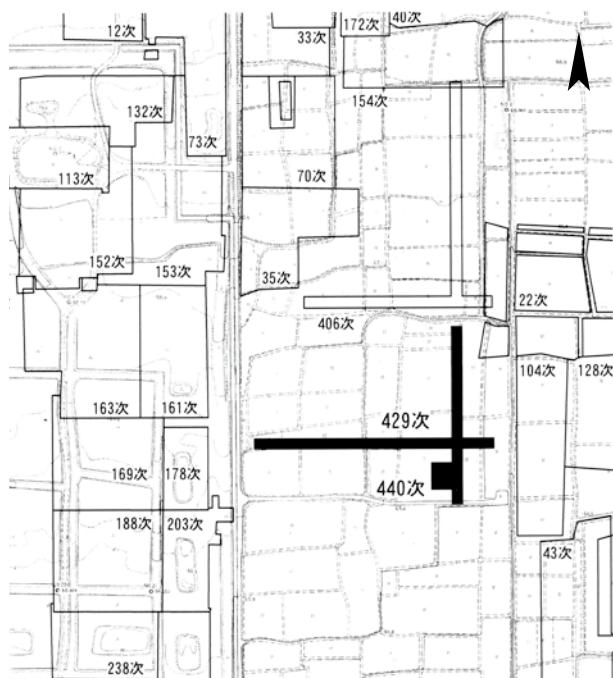


図154 第429・440次調査区位置図 1:4000

m（170尺）とした。区画内には礎石建ち建物を3基検出している。西側の官衙区画Bでは区画の築地塀は確認できなかったものの、官衙区画Aと同様、礎石建ち建物を検出している。また、北から流れる基幹排水路SD3410とSD2700はさらに南流することが明らかになった（「東方官衙地区の調査－第406・429次』『紀要2008』）。

本調査では、第406次調査と同様に官衙区画が展開するのかどうか、さらに、2本の基幹排水路の構造や南方への延長部分の有無を確認することが課題となった。

3 地形と基本層序

本調査区は東区朝堂院が位置する尾根筋と東院地区の尾根筋に挟まれた谷間にあたる。北と西が高く、東と南に向かって低くなる。南北調査区の北端と南端の遺構面の比高は約1m、東西調査区の比高は約1.7mある。

南北調査区の基本層序は表土、耕作土、床土、遺物包含層、整地層、地山の順である。遺物包含層は礫を多く含む粗砂土で土器や瓦の細片が多い。調査区北半の整地層は礫を含む黄褐色の粗砂土で瓦片などがみられるが、南半は粘性のある明黄褐色の細砂土にかわる。整地層の下は地山で、北から順に黄褐色砂礫土、明黄褐色のシルト、黒色の細砂土に変化する。東西調査区は表土から床土までは非常に薄い。西半の整地層は礫を含む黄褐色粗砂土、東半は粘性のある明黄褐色細砂土となる。西半の地山は灰褐色のシルトで、東半は黒色の細砂土である。

4 検出遺構

東西調査区の東端では基幹排水路SD3410、同区中央では基幹排水路SD2700を確認した。この2条の排水路にはさまれた場所には掘立柱建物がまとまって検出された。この範囲を東区画とする。SD2700の西側には礎石建物が2棟検出され、区画施設の存在を示唆する雨落溝も検出されている。この範囲を西区画とする。以下では区画外の遺構と東西2つの区画とにわけて叙述する。

区画外の遺構

SD3410 南北方向の宮内基幹排水路で、東西調査区東端で西岸を検出した（図157・161）。岸沿いには径5cmほどの木杭を打ち込んだ護岸施設があった。木杭列から東へ約3m分を検出しているが、溝の東岸は調査区外にあるため溝幅は不明である。

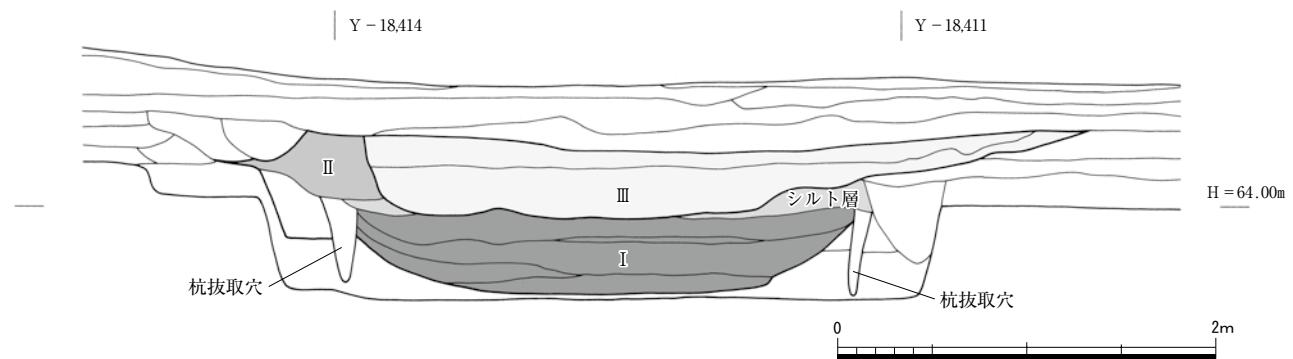


図 155 SD2700 北壁断面図 1:40

SD2700 東西調査区の中央に位置する。南北方向の基幹排水路である。3度の改修があった(図155・159)。当初の溝Iは両岸に径10cm前後の木杭の護岸を設け、東岸の底部近くにはさらに、30cm前後の間隔で木杭を打ち込んでいる。西岸底部には木杭列はみとめられなかつた。東岸の2つの杭列の距離は約50cm、杭の打ち込み面の比高は約30cmである。堆積層の下半は砂層で土器片は少なく、少量の木簡と木質遺物が含まれていた。溝幅は護岸杭の心心距離で約2.8m、深さは50cm以上ある。その後、木杭の頂部が壊され、その上に滯水を示すシルトが堆積していた。このシルト層からは大きな瓦の破片が多数出土した。この上に、褐色の砂礫層が堆積するIIの時期がある。褐色の砂礫層には土器や瓦などの遺物が多く含まれていた。この時期の溝幅は3.5m以上、深さは40cmある。IIIの時期はIIの堆積層を掘り込み、東側に溝幅を拡張している。この時期の溝幅は最大3.8mで、深さは40cm、護岸施設はみとめられない。礫を主体とする堆積層からは多量の土器や瓦が出土した。

SD19193 南北調査区の南端に位置する(図156)。東西方向の溝で、幅は約4m、深さは40cmである。堆積層は最下層が薄いシルト層、中間には細砂層があり、この下半には木質遺物が多く、上半では土器片が目立つ。上層は土器片や炭が多い。東西の勾配はほとんどなく、埋土の堆積状況からみても水が流れた痕跡は明瞭ではない。また、この溝の底部には柱穴らしき4基の穴と木簡をともなう土坑を1基検出した。

SD19194 東西方向の溝でSD19193の南岸を壊している。幅は約1m、深さは20cm、粘性の強い細砂とシルトの混合土の堆積層からは瓦片が出土した(図156)。

SB19187 東西調査区の西端に位置する。4基の柱穴からなる掘立柱建物で、調査区外に展開すると思われる。柱穴は西区画のSD19186に壊されている。柱穴は1辺1.3m前後の方形で、深さは70cmほどである。柱間寸法は約3m(10尺)である。

東区画

区画施設そのものの遺構は検出されていないが、東西を2つの基幹排水路に挟まれた範囲には掘立柱建物がまとまって検出された。SD2700の東側には南北方向の溝が検出され、これが区画施設にともなう雨落溝の可能性が高い。したがって、この範囲に区画を想定した(図157)。

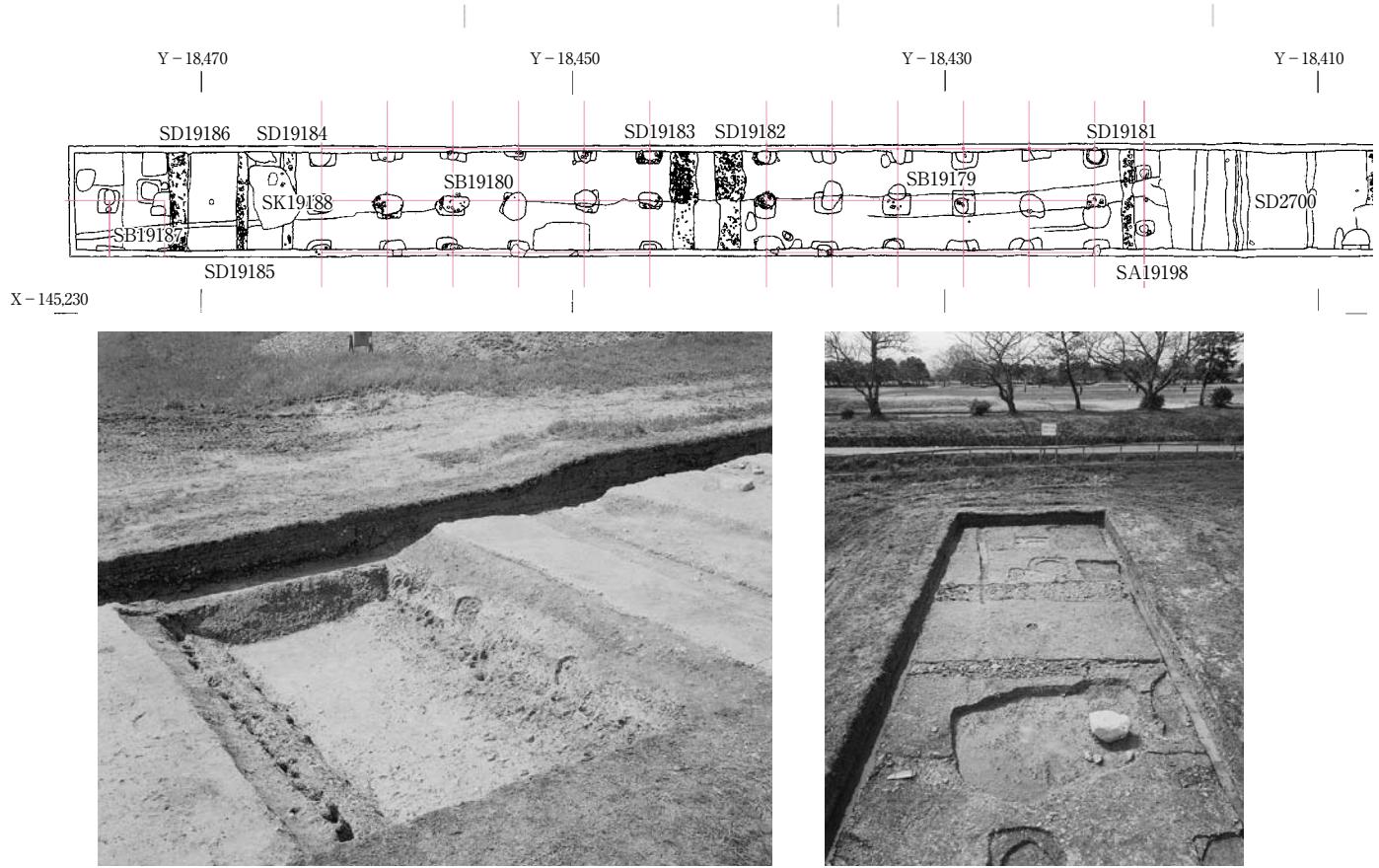
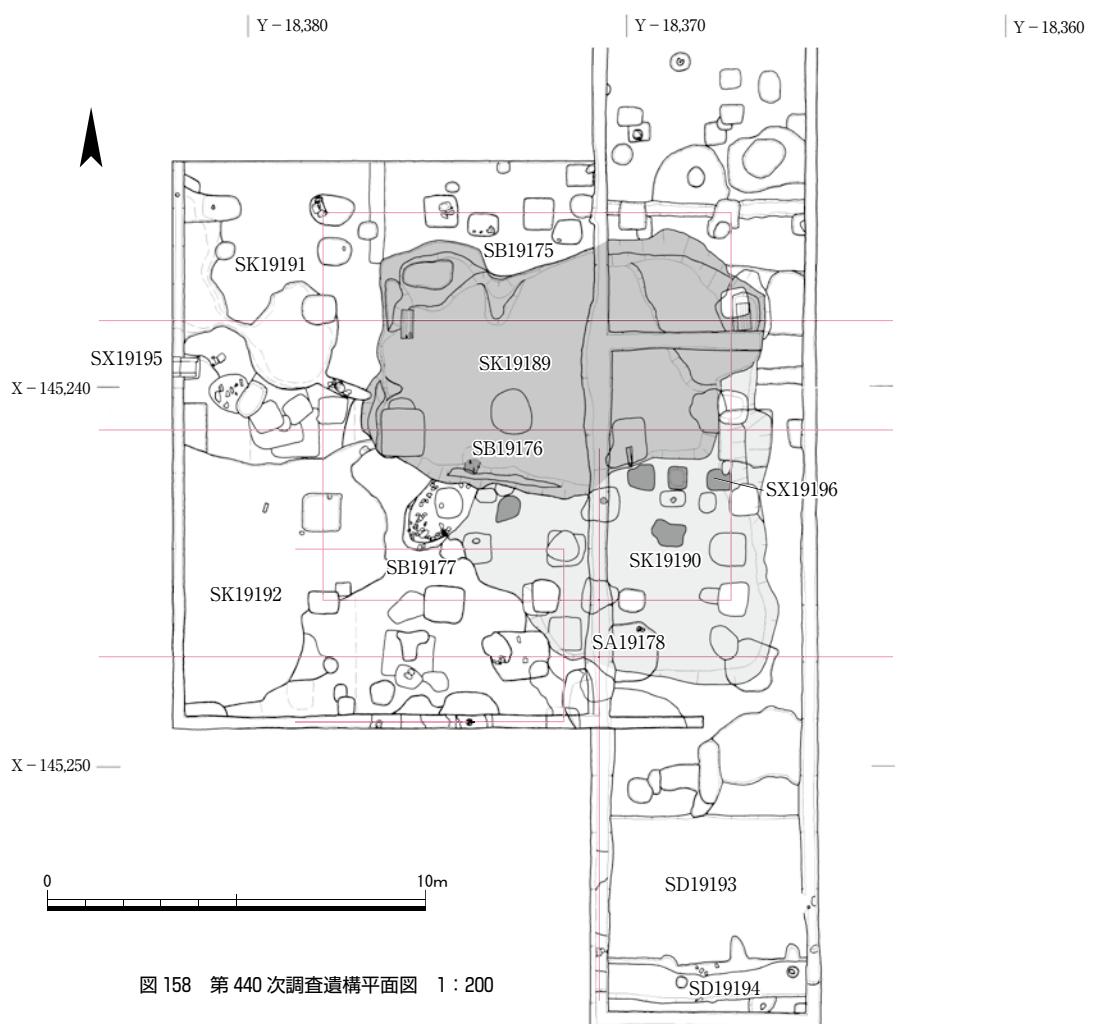
SB19177 後述するSK19190の底部で検出し、柱穴は整地面の下から掘り込んでいる(図158)。東西棟の建物で桁行は2間以上、梁行は2間で西に展開する。柱間寸法は2.4m(8尺)である。柱根が残存していた。

SA19178 南北方向の柱列で4間以上。柱穴は整地面の下から掘り込まれ、柱間寸法は2.4m(8尺)である。

SB19165 南北調査区の北端に位置する。東西棟の掘立柱建物で柱穴を4基検出した。調査区の東西に展開する。柱穴掘方は1辺1.5m前後の方形で抜取穴がある。西北



図 156 SD19193・19194 完掘状況(東から)



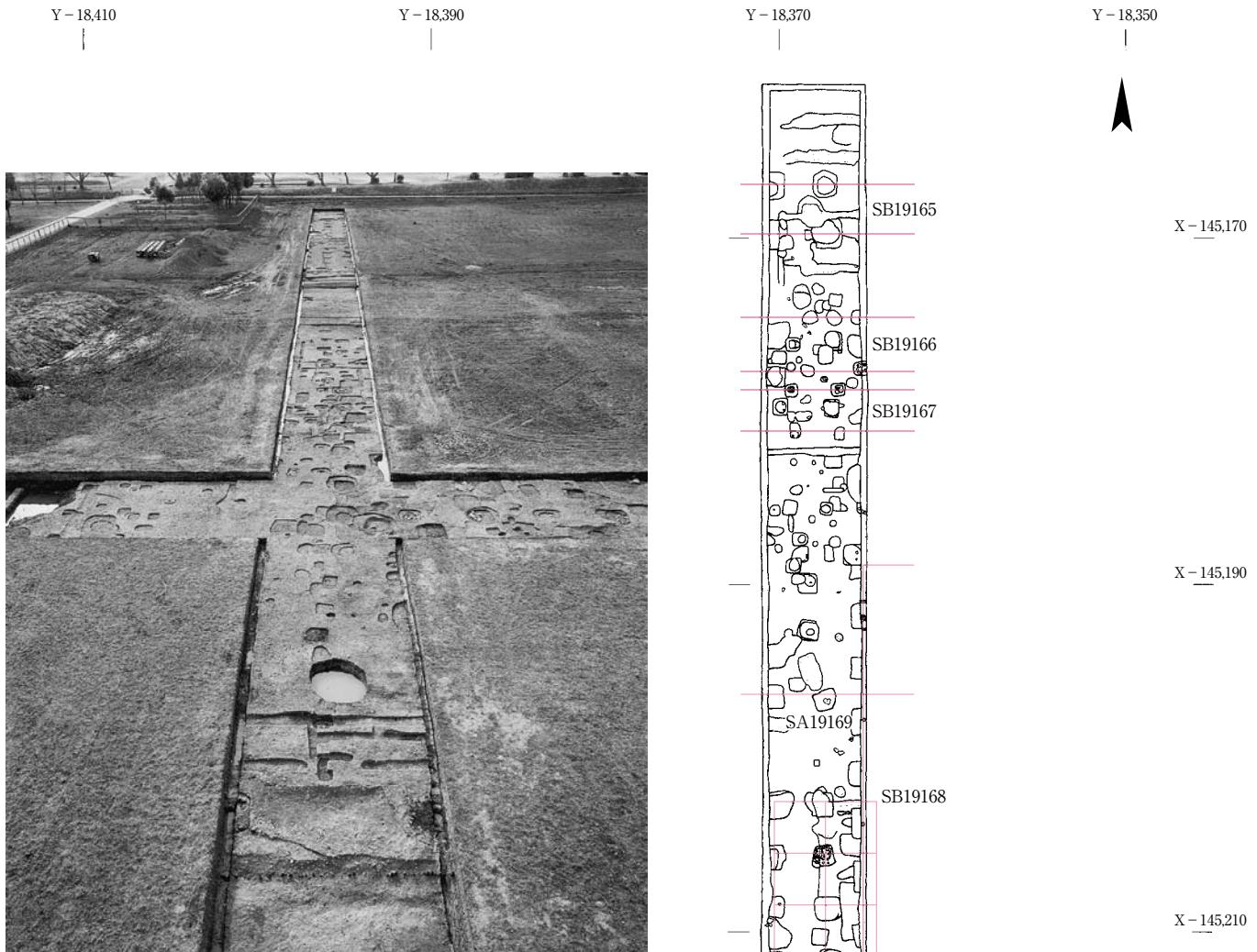


図 161 第 429 次東西調査区全景 (東から)

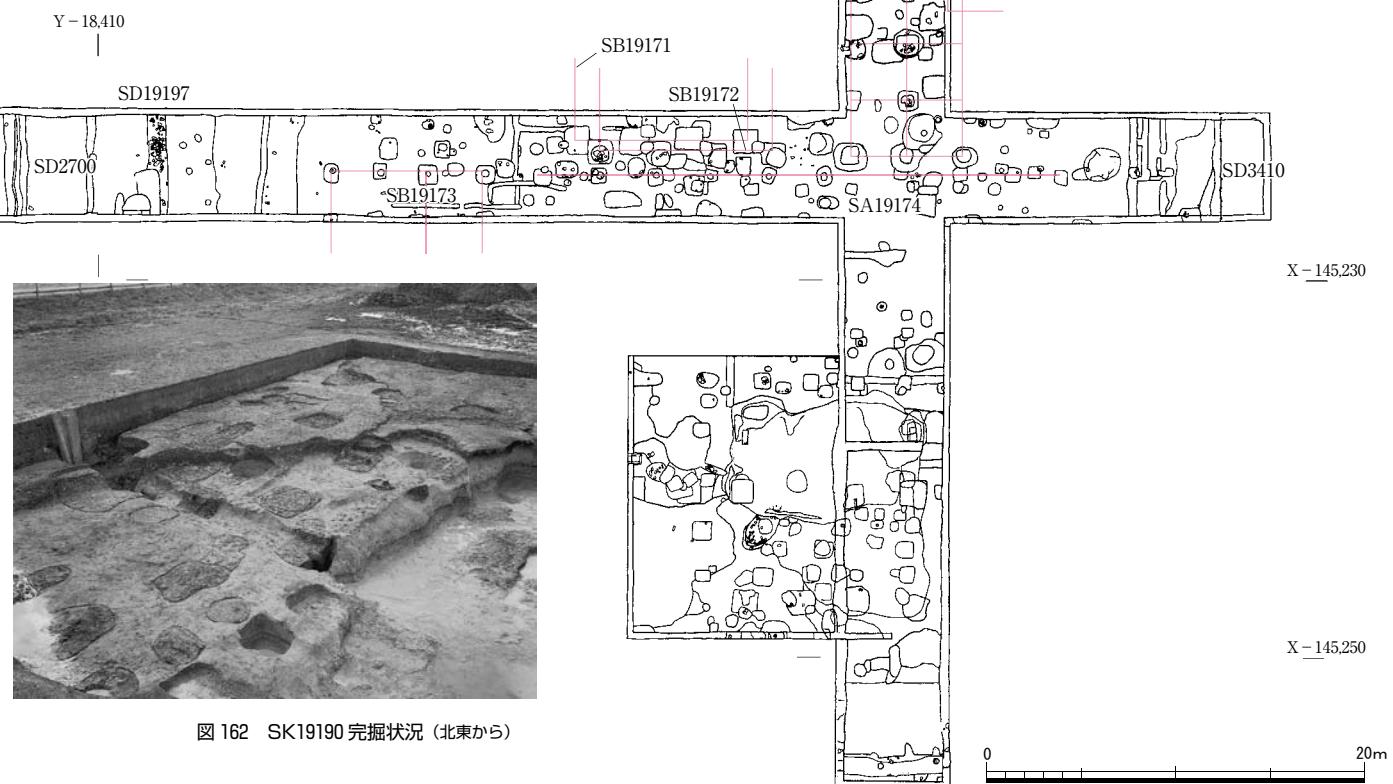


図 162 SK19190 完掘状況 (北東から)

図 157 第 429・440 次調査遺構平面図 1:400

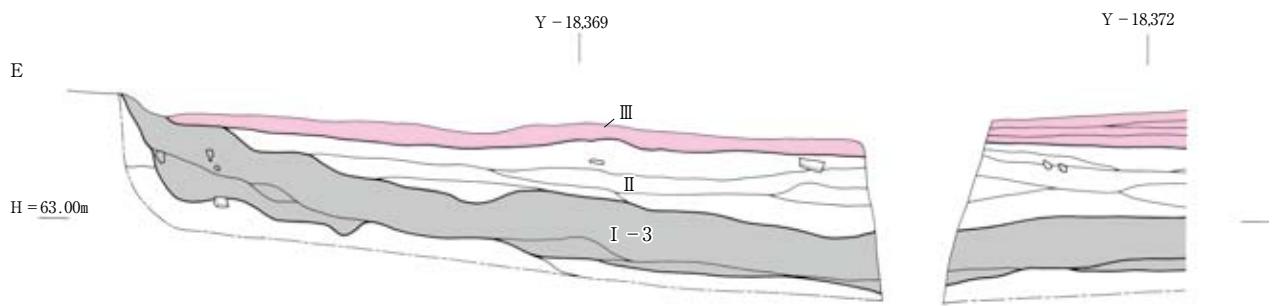


図 163 SK19189 東西方向の断面図北壁面 1:40

の柱穴の深さは検出面から 90cm、柱間寸法は桁行、梁行とも約 3 m (10 尺) である。

SB19166 掘立柱建物で、調査区の東に展開するとおもわれる。柱穴は径 80cm 前後の不整形で、南東の柱穴では径 20cm ほどの川原石が多数出土した。柱間寸法は桁行、梁行ともに約 3 m (10 尺) である。

SB19167 4 基の柱穴からなる掘立柱建物である。うち 3 基の柱穴には柱根がのこり、柱間寸法は桁行、梁行とも約 2.7 m (9 尺) である。

SB19168 南北に並ぶ柱穴を 9 間分検出した。北から南に向かってやや東に振れている。柱穴掘方は 1 辺 1.5 m ほどの方形で、深さは 90cm であった。検出した 10 基の柱穴のうち 5 基で柱根が残存していた。柱間寸法は約 3 m (10 尺) である。この配列から、南北棟の掘立柱建物で調査区の東側に展開すると考える。

SA19169 東西方向の掘立柱列で 2 基の柱穴を検出した。

SB19170 南北 7 間、東西 2 間の南北棟で総柱の掘立柱建物。柱間寸法は桁行、梁行ともに約 3 m (10 尺) である。

SB19171 東西にならぶ 4 基の柱穴を検出した。柱穴は 1 辺 1.4 m 前後の方形で、柱間寸法は約 3 m (10 尺) である。調査区の北に展開する掘立柱建物であろう。

SB19172 東西にならぶ 4 基の柱穴からなる。柱穴は 1 辺 1.3 m 前後の方形で、柱間寸法は約 3 m (10 尺)。

SB19171 を壊しており、北に展開する掘立柱建物になる。

SB19173 7 基の柱穴を検出した。梁行 2 間に東廂がつく南北棟の掘立柱建物で、調査区の南へ展開する。一部の柱穴には柱根がのこる。桁行の柱間寸法は約 2.5 m、梁行の柱間寸法は身舎が約 2.5 m、廂は約 2.9 m である。

SA19174 東西方向の柱列で 9 間分を検出した。柱間寸法は西から 5 間目までは約 3 m、6 間目は約 4 m、7 間目は約 3 m、8 間目、9 間目は約 2.7 m と東半が揃わない。

SB19176 身舎 2 間に北廂がつく東西棟の建物である(図 158)。桁行は 5 間以上で柱間寸法は約 3 m (10 尺)、梁行の柱間寸法は約 3 m (10 尺) ある。柱穴掘方は 1 辺 1.5 m 前後の方形で、深さは 1.1 m。廂の柱穴底部より礎板が出土した(図 170・171)。この建物の柱穴は SK19189、SK19190 によって破壊されている。

SX19195 第 440 次調査区の西辺にあり、凝灰岩切石組みの溝である。溝は東西方向で、東端に切石の据付掘方を確認したため、これより西に展開する。東西長 67cm を検出し、溝幅は 52cm で、側石の間に底石を嵌め込む構造である。側石の東西長は 47.9cm、厚さ 13.2cm、縦方向の長さは 30cm 以上ある。底石は長さ 45.0cm、幅 29.0cm、厚さは 10cm 以上ある。溝内には砂が堆積していた。

SX19196 SK19190 の底部で確認された穴で、中からは大量の籌木が出土した(図 164・169)。穴は長径 60cm、短径 50cm ほど、深さは約 20cm ある。埋土は黒褐色の細砂か粗砂で、埋土内には粘質の小さな固まりがいくつかみられた。籌木は穴の輪郭に近いところに集中していた。5 本から 15 本ほどの籌木がまとまって 1 つの単位を構成しており、こうした単位が 5 つある。また、ウリの種もいくつか集中して出土している。こうした状況から人糞が溜まっていた穴であり、糞溜めか便所の遺構と考えられる。同様の穴を SK19190 の底部にさらに 4 基、SK19189 の南壁に 1 基検出している。穴の配列に規則性はないが、比較的まとまっている。これらの穴の掘り込み面は SK19189 や SK19190 によって壊されており、本来はかなり深い穴であったと考える。

SD19197 SD2700 の東側に位置し、幅約 1 m、深さは

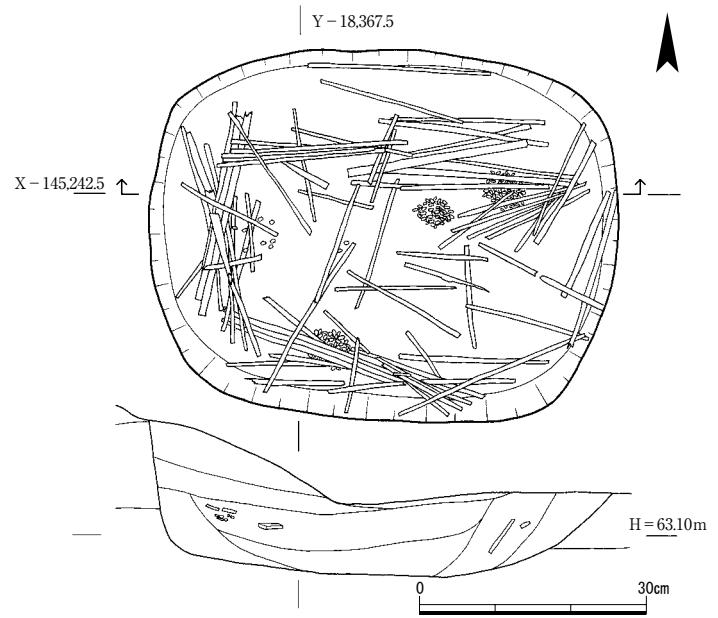
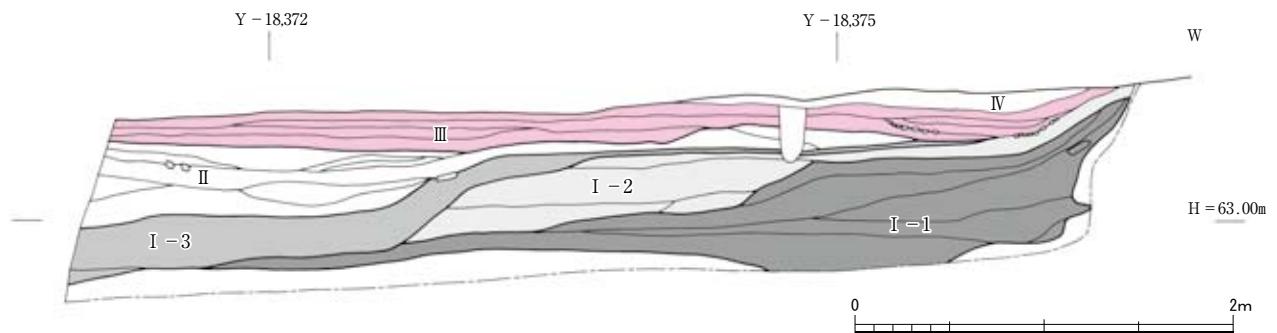


図 164 SX19196 の平面図・断面図 1:10



20cm前後である。溝内には細砂土が堆積し、瓦が散布していた。東区画の区画施設とともに雨落溝と考える。
SK19190 廃棄土坑 SK19189によって北半が壊されている(図158)。残存する土坑の規模は東西約9m、南北約6mの不整形、深さは20~45cmほどである。埋土からは多量の須恵器、土師器、瓦と少量の木片などが出土した。SK19189と同様、廃棄土坑であろう。

SK19189 南北調査区南部で東半部を検出し、第440次で西側に調査区を拡張して土坑全体を検出した。木屑を主体とする廃棄物の土坑である。東西約11m、南北約7mの不整形で、深さは約1mである。土坑検出時には土坑輪郭の内側にそって炭を多く含む土がみえた。

土坑の堆積状況をみると、下からⅠ木屑層、Ⅱ粘性の強いシルトと細砂の混合層、Ⅲ礫と粗砂の混合層、Ⅳ粗砂の順に堆積していることがわかる(図163)。

Iは大きく3つの単位に分けることができる。もっとも古い第1単位は土坑の西半にひろがり、上方には炭を多量に含んだ層がひろがる。第2単位は第1単位の東側に堆積している。第1単位との間にはシルトの間層があり、その上に木屑層が堆積している。もっとも新しい第3単位は第2単位の東側に堆積し、土坑の東端までひろがる。第2単位との間にもシルトの間層がみとめられた。上方には炭を多く含む層がひろがっていた。

以上の堆積状況から、Iの木屑層は2度の拡張を経ていると考えられる。木屑層は当初、土坑の西寄りの穴に投棄されたが、新しい木屑を投棄するたびに穴を東へ拡張したと考えられる。炭を主体とする層は、木屑の廃棄後に火をつけて燃やした痕であろう。

IIには自然木の堆積がみられ、木質遺物も少量出土している。IIIの堆積層には土器片や瓦片が多く、木質遺物は極少ない。IIとIIIは土坑内のくぼみに形成された堆積で、出土遺物は段階的に投棄されたものであろう。最上層のIVは非常に締まりのある褐色土で土坑上面全体にひろがっており、整地層と考えられる。これは掘立柱建物SB19175の建設にともなう整地の可能性がある。

SK19191・SK19192 SK19189、SK19190の西側に位置し、調査区の西側に展開する。いずれの土坑も幅30cm前後の

溝状部分が東にひび、SK19189を壊している。溝状部分からは土師器や須恵器が出土した。2つの土坑は平面検出時に穴の輪郭にそって土器の細片や木質をふくむ炭層が確認された。土坑内には多量の土器や瓦のほかに木質遺物を包含していると予想し、検出状態でとどめた。

SB19175 4間四方の掘立柱建物で柱間寸法は2.4m~3m。柱穴の深さは60~80cm。SK19189・19190・19191・19192の埋土を掘り込んで建てられている。

西区画

SB19179 東西5間、南北2間以上の総柱礎石建ち建物である(図157)。礎石はほとんど抜き取られているが、現存する礎石はすべて花崗岩の自然石である。柱間寸法は桁行約3.6m(12尺)、梁行は約3m(10尺)である。柱の配列からおそらく桁行5間、梁行4間の東西棟建物になるだろう。この建物にともなう基壇はない。この建物の東西には素掘りの雨落溝が検出された。東雨落溝SD19181は最大幅80cm、深さ約10cmで、細砂が堆積し、多くの瓦片が出土した。西雨落溝SD19182の最大幅は約1.6m、深さは20cm以上ある。細砂が堆積し多量の瓦が散布している。

SB19180 SB19179と同じ構造をもつ総柱の礎石建ち建物で、柱間寸法も一致する。この建物の東雨落溝SD19183は最大幅1.6m、深さ20cm以上、西雨落溝SD19184は最大幅70cmで深さ13cmである。溝には瓦が散布していた。

SA19198 級石建ち建物SB19179の東側に位置する南北方向の礎石列である。礎石は安山岩の自然石で、原位置を保っている。礎石間の柱間寸法は約3m(10尺)である。この礎石列はSB19179の柱筋とは一致しない。

SD19185・SD19186 SD19185はSB19180の西側に位置し、幅60cm、深さ20cm以上。SD19186はSD19185の西側にあり、最大幅1.1m、深さは20cm(図160)。2条の溝は細砂が堆積し、瓦片が多く含まれていた。この間に西区画の西限を画する築地塀があったと推測する。

SK19188 長径3.3m、短径2.5mの不整形で、深さは20cmある。SB19180の西雨落溝SD19184を壊している。完形の壺Gのほか、瓦磚類が多く出土した。(今井晃樹)

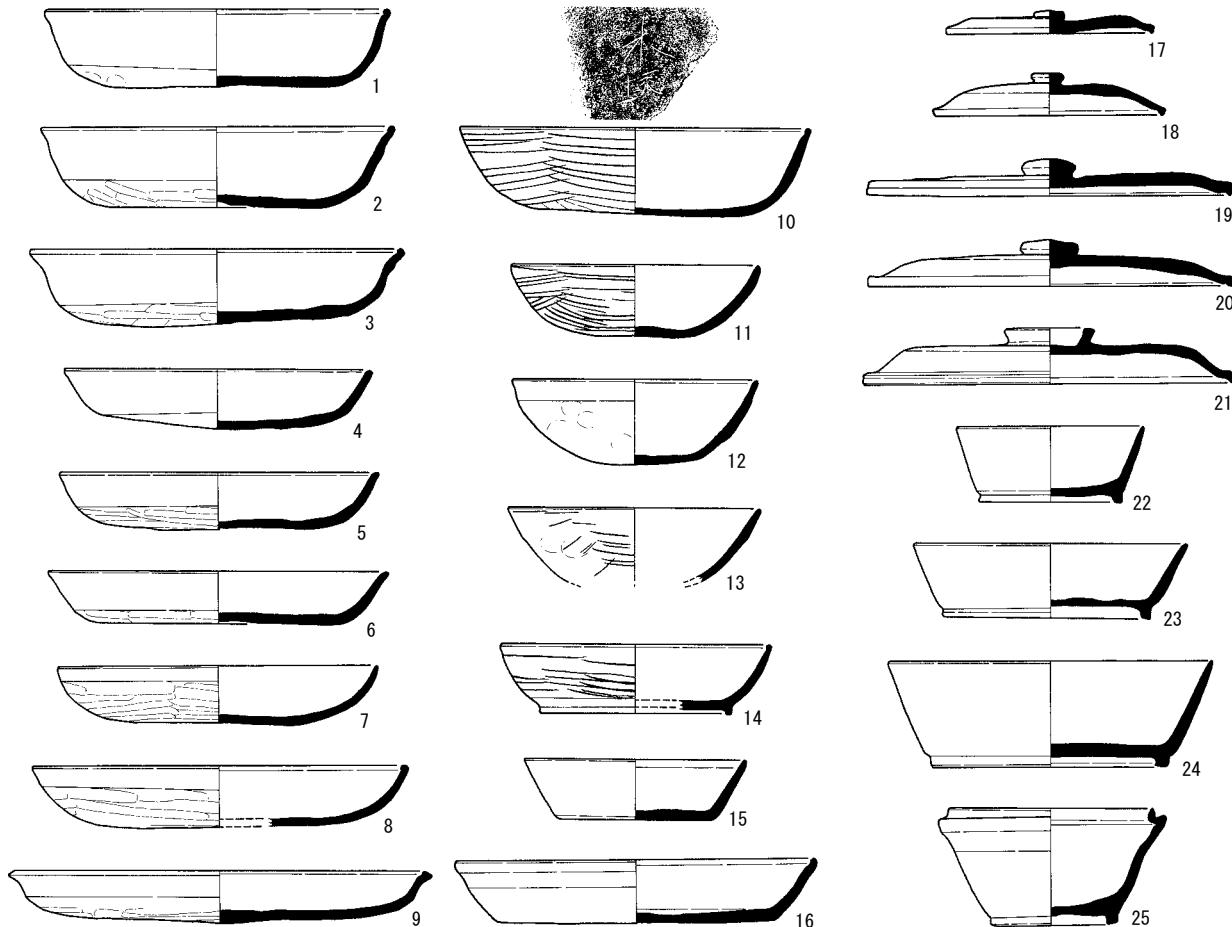


図 165 SK19189・19190 出土土器 (2~6: SK19190 その他: SK19189) 1:4 (10の拓本のみ1:3)

5 出土遺物

土器・土製品 SD2700、SD19193 および SK19189・SK19190 からまとめて出土した。これらは東方官衙地区の一画を占めた官衙で用いられた土器群と考えられ、平城宮内における土器使用の実態を考えるうえでも重要な資料である。これらの遺構から出土した土器群は、土師器の杯皿椀類が多い反面、須恵器が少なく、転用硯が目立つ傾向は共通している。その他、SD 2700 からは奈良二彩の盤B、土錘などが出土した。

SK19189・SK19190 は重複関係にあるが、現在の整理段階で内容に大きな差異は認められないため、まとめて報告する。おもに土師器供膳具の調整手法と法量から奈良時代後半前葉の様相を呈し、共伴する木簡の年代からも平城宮土器Ⅳの指標となりうる資料である（図 165）。

土師器には杯A・C、皿A、椀A、高杯、盤、甕がある。杯皿類に対して、高杯や盤など大型の供膳具および煮炊具が非常に少ない。供膳具には精良な胎土のI群と砂粒を多く含むII群がある。I群の杯Aはb手法（2・3）が主体的で、a手法（1）も存在する。II群の杯A（10）は器高が高く、c手法で成形し、外面全体にミガキを施す。10は底部内面に「水境」と針書きがあり、口縁端部に漆が付着する。杯Cは杯Aより個体数が多く、I群はa

手法（4）よりもb手法（5・6）が多い。c手法で成形するII群の杯C（7）も一定量存在する。I群の皿Aはいずれもb手法。底部から口縁部の中位まで削るもの（8）と、底部のみを削るもの（9）がある。II群はc手法で成形する。杯Bは少ない。（10）は小型で口縁部外面に丁寧にミガキ調整を施す。口縁端部の内外面に油煙の痕跡を残す。椀Aはいずれも口径13cm前後が中心である。I群もII群もc手法（11）が主体的である。ケズリを施さず、指頭圧痕を残すもの（12）やケズリを施さず、粗いミガキを施すもの（13）が少数存在するが、胎土はI・II群の範疇では捉えがたい。なお、この遺構からは椀Cの出土は確認していない。

須恵器の器種は杯A（15）、杯B（22-24）、杯B蓋（17-21）、杯C（16）、鉢A、壺E（25）、壺G、壺蓋、甕A・Cがある。杯B、杯B蓋の多くに墨痕（19・21）や灯芯（23）の痕跡が残る。壺E（25）は完形だが、底部内面の下方に墨痕が残り、墨壺として利用していたことがわかる。甕の体部片は平城宮出土状況に比べると少なく、転用硯の比率が高い。

墨書土器も出土した。須恵器杯B蓋の外面に放射状に8行にわたって「相知」と記したものや、「千瘡万病膏」、「春宮水」、「盛十月三日」、「侍」を記したもの、このほか、蹄脚円面硯、圈足円面硯や漆器を模した黒色土器に類する高杯の脚部も出土した。

（神野 恵）

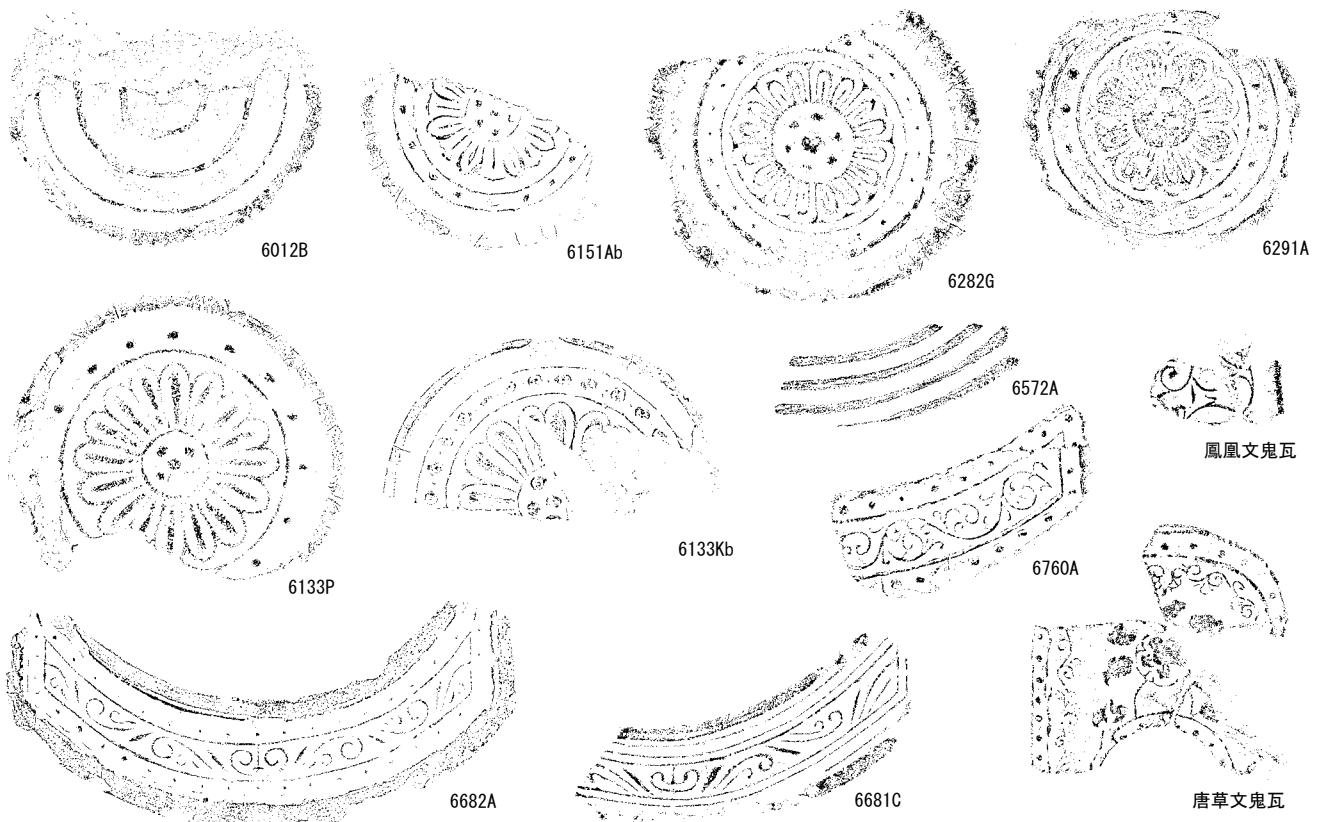


図 166 第 429・440 次調査出土瓦 1:4 (鬼瓦は 1:8)

表 22 第 429 次調査出土瓦磚類集計表

軒丸瓦			軒平瓦			道具瓦		
型式	種	点数	型式	種	点数	種類		点数
6012	B	1	6572	A	2	鬼瓦(唐草)	5	
6075	A	1	6628	A	1	鬼瓦(鳳凰)	14	
6133	Ka	1	6641	E	1	鬼瓦(VB)	1	
	K	2		F	1	面戸瓦	3	
6135	A	4	6663	A	1	熨斗瓦	3	
	Ba	1		C	5	その他	6	
	?	4	6664	D	1			
6140	A	1	6671	B	1			
6143	A	1	6681	B	1			
6144	A	6		C	5			
6225	A	3		E	1			
	C	2		?	4			
	?	2	6682	A	2			
6282	G	5		?	2			
	?	3	6685	A	4			
6284	C	2		B	1			
	Eb	2		?	2			
	E	1	6688	Ab	2			
6291	Aa	1		A	2			
	A	4	6691	A	1			
	?	2	6694	A	5			
6301	B	2	6721	C	2			
6304	A	1		D	1			
	B	3		G	2			
	?	1		?	7			
6311	Ba	1	6760	A	1			
	B	1	中世		1			
	E?	1	型式不明		20			
6313	?	1						
型式不明		45						
軒丸瓦計		105	軒平瓦計		79	道具瓦計		32
丸瓦			平瓦			磚		
重量		727.2kg		2953.7kg		76.7kg		48.4kg
点数		8023		38113		125		0.4kg

瓦磚類 SK19189 から出土した軒瓦を図 166 にしめした。奈良時代前半期の軒瓦では 6012B と 6572A、6291A と 6681C の組合せが目立つ。後半期の瓦では 6282G と 6721、6133K と 6682A、6151A と 6760A などの組合せがある。6133P は宝龜年間の製作でこの土坑ではもっと新しい瓦である。SK19190 では 6133K と 6682A の組

表 23 第 440 次調査出土瓦磚類集計表

軒丸瓦		軒平瓦		道具瓦	
型式	種	点数	型式	種	点数
6012	B	2	6572	A	3
6075	A	1		D	1
6131	A	1	6664	F	2
6133	Ka	7	6667	A	1
	Kb	1		C	1
	K	3	6681	C	3
	P	1		E	1
	?	1	6682	A	8
6135	A	1	6685	A	2
6144	A	2	6691	A	1
6151	Ab	1	6721	Gb	1
6225	L	1	6760	A	3
6282	G	3	型式不明		4
6284	?	1			
6285	Ba	1			
6291	Aa	1			
	A	3			
6304	A	2			
	B	1			
6308	N	1			
6311	Ba	2			
型式不明		5			
軒丸瓦計		42	軒平瓦計		31
丸瓦			平瓦		
重量		484.4kg		1166.8kg	
点数		4868		15148	
道具瓦計		0	道具瓦計		0
磚			凝灰岩		
重量			点数		
点数			40		79

合せが多い。また、この土坑からは唐草文鬼瓦が出土している。この鬼瓦は第 406 次調査区や、第 22 次南調査区からも出土している。この一帯の官衙に特有の鬼瓦の可能性がある。SK19188 からは唐草を飾った鬼瓦片が出土している。複数の鳳凰文鬼瓦の細片が共伴していることから、この破片も鳳凰文鬼瓦の一部と考えられる。

第 429 次調査区の範囲からは上記の組合せ以外に、6135A と 6688A、6225A と 6663C のセットがある。第 406 次調査と似た組み合わせである。
(今井)

木製品 木製品の大部分はSK19189の木屑層から出土した(図169)。主な木製品は檜扇、杓子、容器、部材、網代、籌木、用途不明品である。

檜扇は束の状態で12個体出土し、このうち7個体を図示した(図167・168)。すべて木屑層からの出土で、30cm程度の大型品と20cm以下の小型品がある。1は長さ29.6cm、幅3.5cm、厚さ0.32cm。3枚の骨が重なり、各骨には上端近くの縁辺につがり穴が2ヶ所開けられている。表面には池、許曾部、家、庭、年の墨書きが、裏面には池、庭の墨書きがみられる。2は長さ30.4cm、幅5.5cm、厚さ1.9cm。7枚の骨が重なる。要の紐も一部残存する。各骨には上端近くにつがり穴が2ヶ所開けられ、折り畳んだ状態で綴紐も僅かに残存する。3は長さ24.2cm、幅3.5cm、厚さ1cm。7枚の骨が重なる。表面に麻呂、廣などの墨書きがみられる。上端部の焦げ跡より、閉じた状態で焼却されたことが分かる。4は長さ12.1cm、幅3.1cm、厚さ0.3cm。7枚の骨が重なる。要には紐が通り表面にのみ結び目が残る。上半部は折損している。5は長さ11.6cm、幅3.5cm、厚さ0.6cm。要には紐が通り、6枚の骨が残存する。上半部は折損している。6は長さ17.8cm、幅4.4cm、厚さ0.8cm。6枚の骨が重なるが4枚目が要から外れている。要には木釘が通る。各骨には上端の中央近くにつがり穴が2ヶ所開きその上の両側縁に刻みが入る。7は長さ14.4cm、幅3.4cm、厚さ1.5cm。7枚の骨が重なる。上半部は折損している。要には紐が



図167 SK19189出土の檜扇1

通り、表裏ともに結び目が残るため骨の脱落はない。

杓子は11点出土した。8は長さ38cm、幅5.9cm、厚さ0.7cm。周縁は面取りされ、尖端付近の稜線は摩滅している。9は雲形定規。長さ34.9cm、幅7.5cm、厚さ0.8cm。右側縁と先端の裏面側の面取り加工からもとは杓子とみられ、それを縦割したもの素材とし上部の縁辺に曲線が削り出されている。表面には円弧や直線の毛引き線がみられるが、これは曲線の屈曲点を割り出すためと考えられる。10は用途不明品。長さ22.3cm、幅14.9cm、厚さ0.6cm。縦軸の中央よりやや上方に切り込みを入れて、横軸が挿し込まれ十字形に組み合う。さらに縦軸は尖端方向から刃物で削られ二股に割かれる。11はサイコロ。長さ4.9cm、幅4.9cm、厚さ5.5cm。一辺4.9cmの角材の端を切り落としたもので各面に1~6の目が彫り込まれる。対向する面の目の和が7にならない。12はほど穴のある部材。長さ10.2cm、幅6.9cm、厚さ2.2cm。下部は厚みがある。13は網代。長さ20.9cm、幅14.1cm。小型の籠の一部。下部に籠の底部が、上部に口縁がみられる。14~16は籌木。SX19196から97点の籌木が出土したが墨痕のあるものは1点で割合は小さい。14は長さ21.3cm、幅0.5cm、厚さ0.4cm。15は長さ21.3cm、幅0.7cm、厚さ0.5cm。16は長さ22.9cm、幅0.7cm、厚さ0.6cm。いずれも完形で断面は長方形。この土坑の籌木は完形品の長さが21~23cmにまとまる。(国武貞克)

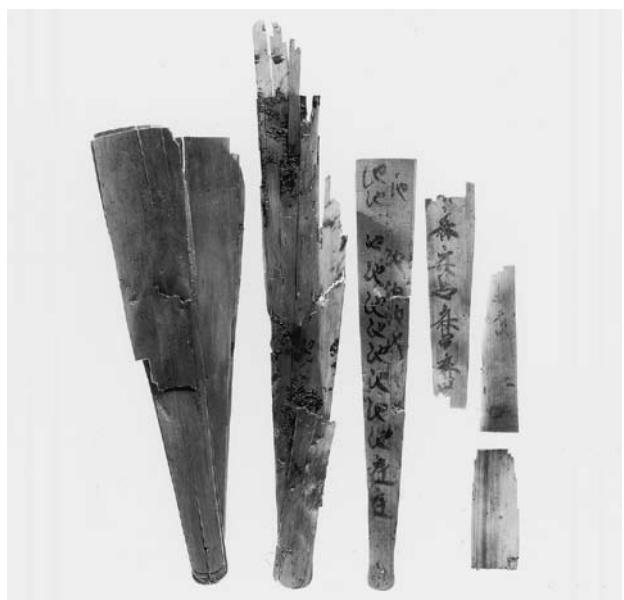


図168 SK19189出土の檜扇2

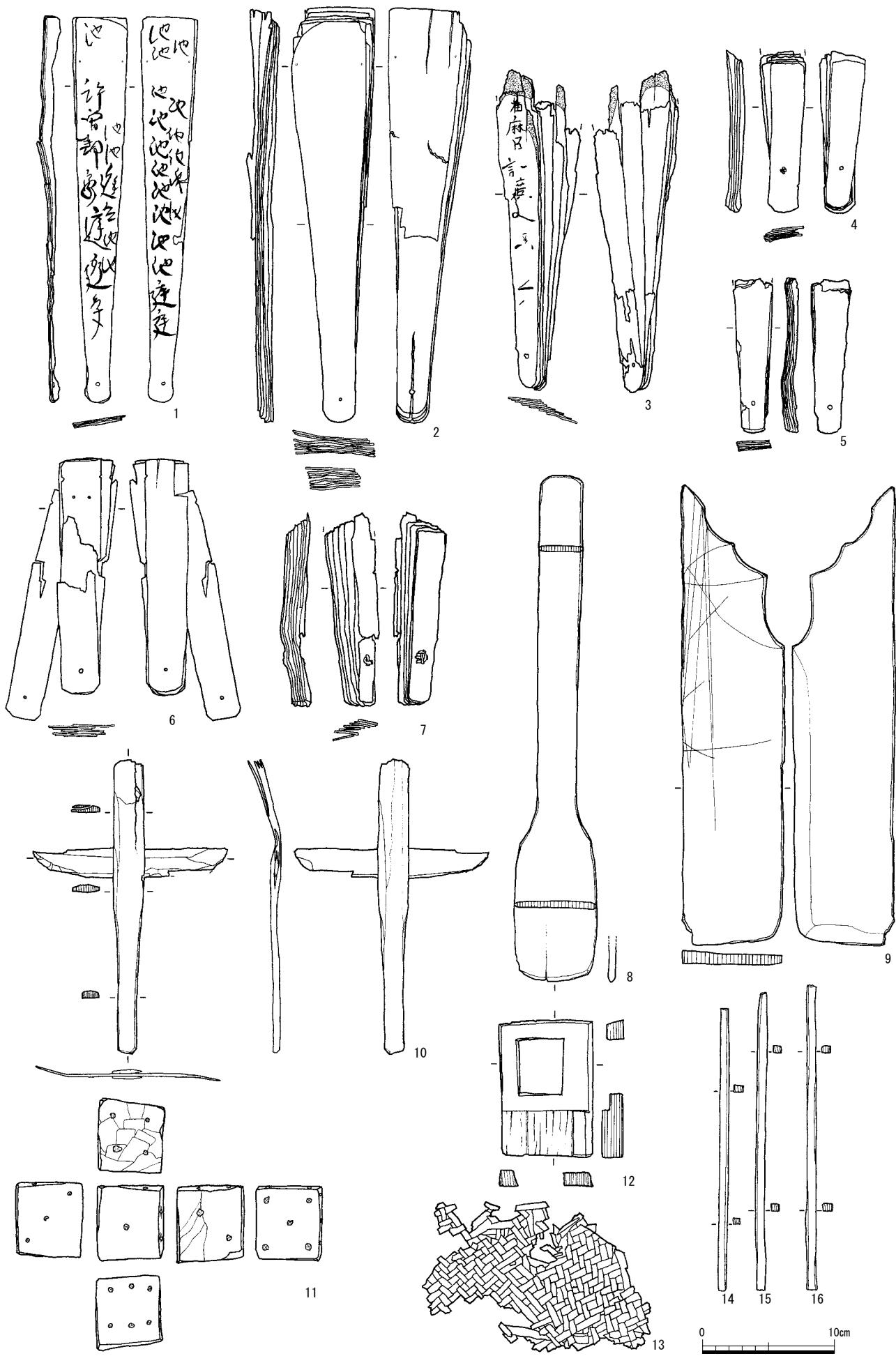


図 169 SK19189 出土木製品 1:4

木簡 SK19189 からは多量の木簡が出土した。現場で取り上げた木簡は約 200 点だが、削屑を多数含むコンテナ約 2800 箱分の土（木屑）の洗浄を進めており、最終的には数万点を超え、宮内最大規模の木簡群になる見込みである。保存状況も良好で、事例が少ない紐の残る付札が数点確認されている（14・27・28 など）。

年紀のあるものは770年代初頭に集中する。子年の宝亀3年とみられる「子十二月」と見える木簡もあり、宝亀2、3年(771、772)が木簡群の時期の目安になろう。6は木屑層ではなく、最終的に土坑を埋めた整地土の遺物で、「宝亀」8年とすれば、土坑の跡地にも建物が建てられた時期を示すとみられる。

内容は広く衛府に関わるものが多い。少尉、大志、少志、将監、府生、番長、兵衛、中衛、近衛、衛士などが確認され、衛府の兵士の管理に関わるものと、警備や舗設など多岐にわたるその業務に関わるもののが含まれている。削削には人名由来のものが多く、特に下級官人氏族名が目立つ。租税の荷札が極端に少ない一方、簡略な書

式の物品付札が多数あり、また習書木簡の多さも顯著である。

1・2は本来一体の端正な筆致の太政官奏の断片である。二次的に切断されている。5の内厩寮は近衛府と関係が深い。10の東宮は、9の西宮（中央区Ⅱ期（称徳の内裏））との対比からみると、東区内裏の可能性もある。丈部人根は二条大路木簡に見える藤原麻呂の資人の後身か。11は駅鈴の警備担当簿か。時刻ごとに交替している。12の南東門は初見である。13は宝亀2年7月まで使用した題籤であろう。19・20は産地+品目の事例。24の単位「切」は木簡では初見、26の葦魚も初見である。イワシの仲間エツか。

宝亀3年2月16日、内豎省と外衛府が廃され、その舎人が近衛・中衛・左右兵衛府に分配されている（『続日本紀』同月丁卯条）。今回の木簡群は、この衛府の改編に伴う建て替えの際に、造営のゴミとともに廃棄された遺物の可能性が考えられる。1・2の太政官奏はまさにこの兵士の所属替えに関わる可能性があろう。（渡辺晃宏）



図 170 SB19176 北廂柱穴出土の基礎板

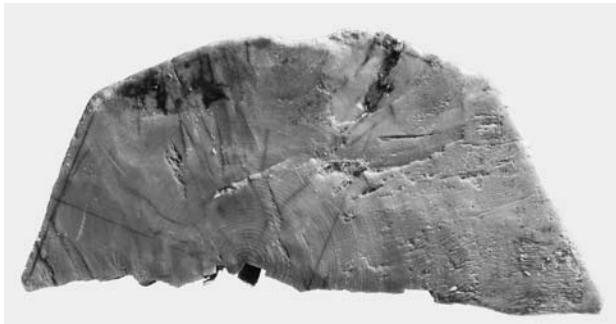


図 171 基礎板木口面の墨線

出土部材 SB19176 北廂柱より基礎板が出土した（図 170）。柱状材を半裁したもので、剖面を下にして据えられていた。長さ 735mm、幅 230mm、厚さ 150mm、樹種はヒノキである。部材中に残存する最も新しい年輪の年代は 588 年であった。表面および木口面に工具による加工痕を残す。表面はチョウナはつり。上木口面はノミとチョウナの刃痕があり、木取りの墨線が残る（図 171）。墨線は、樹芯付近で直交する 2 本の直線、その交点を中心とした円、円に接して書かれた八角形の直線である。円の直径は 142mm。下木口面はノコで切断する。裏面の割肌の状況より、この木材は枝の多い立木の上方の部分で、墨線のある上木口面側が木末であることがわかる。

以上より、この木材が基礎板に使用された過程を推測する。まず、伐採した木を丸太の状態にし、径の細い木末の木口に木取りの墨線を描き、チョウナで表面をはつり断面八角形の柱材を作る。その後、必要な長さを木元より取りノコで切断し丸柱に加工する。基礎板として使われたのは、その際に生じた端材の部分と考えられる。

なお、部材の表面には掘立柱のアタリ痕跡などは確認できなかった。

（大林 潤）

6 官衙区画について

区画の規模 本調査では築地塀や掘立柱塀などの明確な区画施設は確認できなかったものの、建物のまとまりや区画施設にともなうと考えられる遺構の存在から、東西にならぶ 2 つの官衙区画を想定した。

西区画の西辺には並行する 2 つの溝、SD19185 と SD19186 があり、これらを築地塀にともなう雨落溝と仮定して西区画の規模を推測してみたい。西区画には東西にならぶ総柱の礎石建ち建物があり、規模や構造はまったく同一である。この建物の東には SD2700 がとおるため、さらに建物を建てる余地はない。したがって、西区画の東限は SB19179 と SD2700 の間にあるはずである。そこで、西区画西辺の 2 本の雨落溝の中央に築地塀の芯を想定し、2 棟の礎石建ち建物 SB19179 と SB19180 のの心心間の距離の 2 分の 1 を西区画の中軸の位置すると、西面築地塀と中軸の心心間の距離は 26.6 m で、これを倍した 53.2 m (180 尺) が西区画の東西幅となる。

東区画については区画の東西を示す遺構に恵まれず詳細は不明だが、西区画と同様、東西 180 尺の区画としても、SD3410 と SD2700 の間に十分におさまる。東西 2 つの区画は同規模で設計されたと考えたいが、この想定だと東区画の北に位置する第 406 次調査の官衙区画 A の東西幅約 51 m とは一致しない。今後の発掘調査に期待したい。

2 つの区画の性格 上述のように、東西にならぶ 2 つの区画の東西幅はほぼ同規模と考えられるが、区画内の建物の様相は大きく異なっている。東区画は複数の掘立柱建物が建てられ、建て替えもおこなわれていた。一方、西区画は同一構造、同規模の総柱礎石建ち建物が区画のなかに左右対称に配置されている。この違いは 2 つの区画の性格の差異に由来すると考える。東区画については、SK19189 から出土した木簡に「近衛」、「衛府」、「衛士」といった役所および役職名が記されており、これらに関係した場所であった可能性が考えられる。西区画で検出された総柱礎石建ち建物は高床式の倉庫と考えられ、その規模は東大寺正倉院宝庫にも匹敵するものである。倉庫は西区画の東西幅にあわせて建てられていることから、倉庫は西区画のかなり広い範囲に整然と配置されていた可能性が高い。このように倉庫が集中する場所は、

宮内では大蔵省や内蔵寮なども考えられるが、平安宮の建物配置を描いた絵図によれば、朝堂院（八省院）の東側に「廩院」という区画あり、これは民部省が管轄する施設で米を貯蔵する倉庫群である（図172）。西区画と朝堂院との位置関係からも、ここが「廩院」である可能性が考えられる。今後、西区画の南北に同様の倉庫が展開するかどうかの確認が必要となろう。

遺構の変遷 東区画の南北調査区、東西調査区には明確な整地層が確認できる。今回検出した遺構のほとんどはこの整地層上の遺構だが、南北調査区の南部に位置するSB19177とSA19178は整地層以前の遺構である。

整地後に建てられた掘立柱建物のうち柱筋が一致するのは、SB19171とSB19176の2棟、SB19173とSA19174の2遺構、SB19165、SA19169、SB19170、SB19172の4棟である。3組の建物群でSB19171とSB19172、SB19170とSA19174の間で重複関係がある。SB19165を含む4棟の組がもっとも新しく、それ以前に2組の建物群を位置づけることができるが、後の2組の前後関係は不明である。

SB19176 を壊している SK19189、SK19190 から出土する土器はいずれも平城宮土器Ⅳに属し、SK19189 では

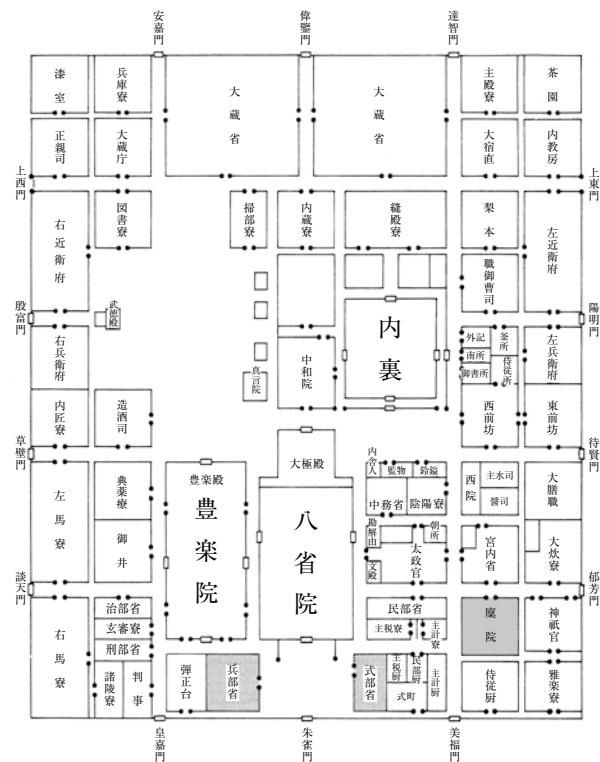


図 172 宮城図（「平城概報 1986」第 8 図を転載）

Iの層から宝亀2年、IIIの層から宝亀8年の木簡が出土していることから、SK19189は宝亀年間以後の遺構で、SB19176はそれ以前の建物である。SB19175はSK19189からSK19192の4基の土坑を埋立て整地したのちに建てられたもので、奈良時代末以降の建物と考えられる。

本調査の発掘面積は非常に限られており、遺構間の関係を把握するには未だ不十分な状態である。したって、ここでは現在確認しうる遺構の前後関係を記述するにとどめ、時期の設定は今後の調査にゆだねたい。

7 おわりに

本調査では東西にならぶ2つの官衙区画を確認した。建物の構造から2つの区画は性格のことなる場所であることが明らかになった。西区画は倉庫が建ち並ぶ「廩院」の可能性を指摘したい。今後は南北に調査地をひろげて倉庫群という想定の当否を確認する必要があろう。

東区画は数棟の掘立柱建物を確認したが、区画内における建物配置は未だ不明といわざるを得ない。まずは、この点の究明が必要であろう。つぎに、この官衙の比定で鍵を握るのは同区画内で検出したSK19189である。ここから出土した木簡は、東区画の官衙でやりとりされたものが多数含まれていると予想される。木簡からこの役所の比定が可能になることを期待したい。

SK19189 では木屑を焼却したと考えられる炭層を確認している。廃棄物の明確な焼却を示す土坑は宮内では初の発見となる。これまで木簡は焼却処分されることはないと考えられてきたが、その発想を覆す事例である。木簡だけでなく宮内の廃棄物処理のあり方を考える上で今回の発見は重要なものとなるであろう。

SK19189 や SK19190 の底部では、籌木をともなう遺構 SX19196 を検出した。同様の遺構が周辺にまとまって出土している。現在、埋土のサンプルを分析中であり断定はできないが、ウリの種なども出土しているので、この遺構に糞が溜まっていたことはおそらく間違いないであろう。糞溜めか便所かは断定できないが、平城宮内において糞便を処理した遺構の検出例はこれまでになかった。宮内の官衙には當時、多くの役人たちが勤務していたはずで、当然、糞尿の処理場所も存在したはずである。今後、官衙構造を考えるさいにはこうした糞尿処理場の存在も考慮すべきであろう。

(今井)

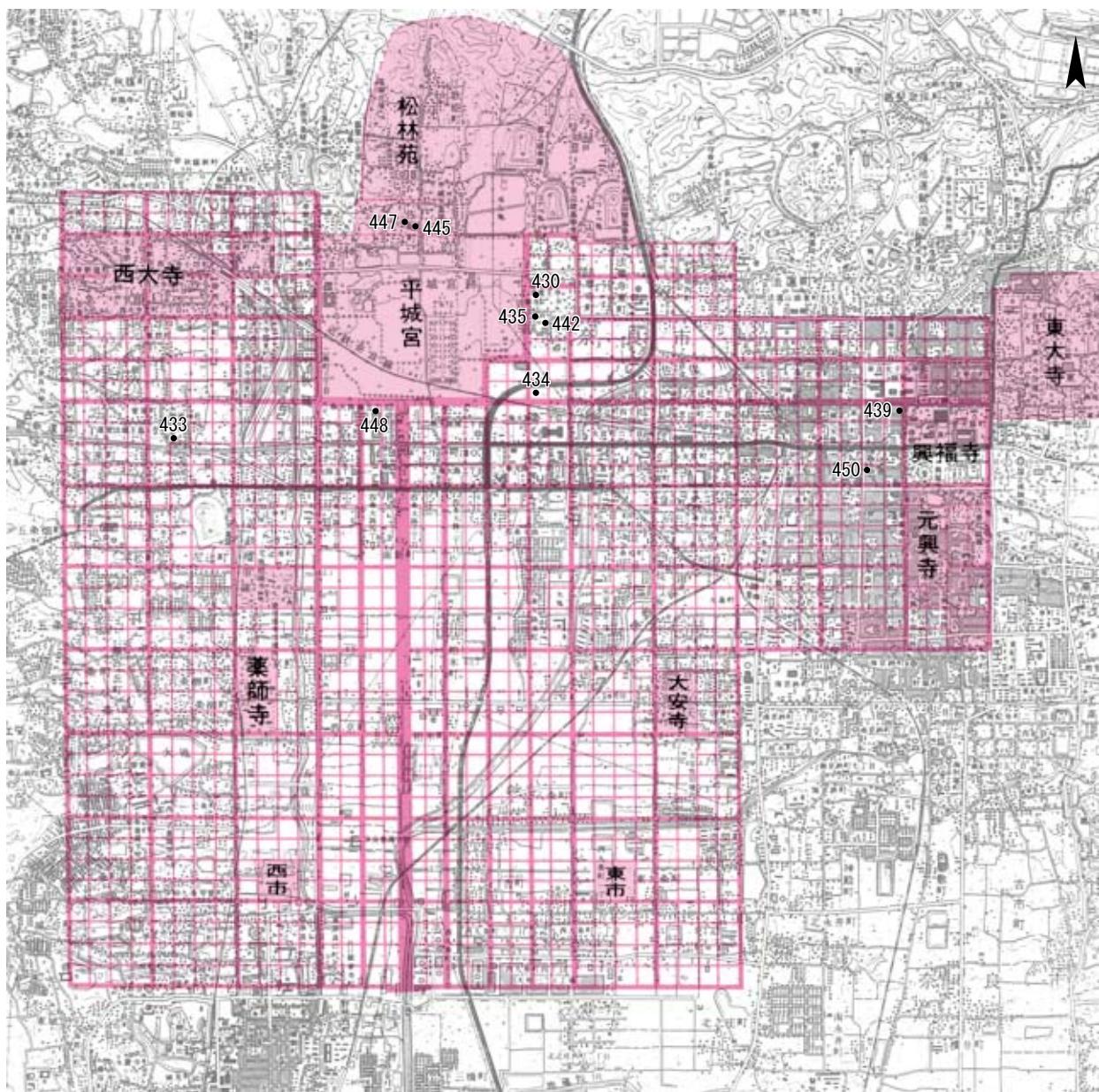


図 173 平城京発掘調査位置図 1:40000

法華寺旧境内の調査

—第430・435・442次

1 第430次調査

はじめに

本調査は、集合住宅建設にともなう事前調査である。調査地は、現法華寺の北側に隣接する（図175）。これまで調査地の周辺の法華寺域では、法華寺内で第128-20・363次調査、西側の隣接地で第79-15次調査、北側で第141-3次調査がおこなわれており、掘立柱の柱穴などが検出されている。

調査は、当初南北6m、東西11mのL字型の調査区を設定して開始した。調査中、調査区中央で仏具などの遺物を多量に含む土坑（SK9240）を検出し、その広がりの確認と遺物の採集のため、SK9240部分を南北に拡張した。調査面積は約60m²、調査期間は2008年1月7日～25日である。

基本層序と検出遺構

基本層序は、地表面より耕作土、暗褐色土（床土）、暗茶褐色土（近代包含層）、黄褐色土（遺構検出面・地山）となる。地表面から地山直上までは、深さ約35cm。

SB9245 調査区東半に位置する掘立柱建物。柱穴3基を検出した。建物の北西隅部分で、桁行2間以上、梁行2間以上。柱間は約3m(10尺)等間。柱穴掘方の平面は隅丸方形で、一辺1.0～1.3m。北東の1基は直径約30cmの柱根が残存する。

SK9240 調査区の中央西寄りで検出した土坑。東西約



図174 第430次調査全景（北西から）

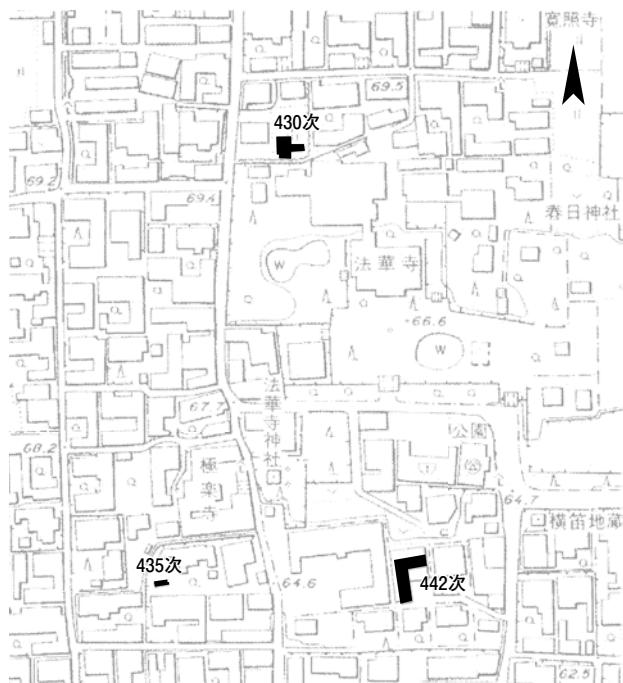


図175 第430・435・442次調査区位置図 1:3000

4.2m、南北7.3mを検出。南は近代の土坑SK9247で破壊されており、当初の平面形状は不明。深さ約30cm。土坑は2段掘りで、上段は北にいくほど浅くなり、調査区の北端では削平されほとんど残存しない。下段は南北に細長い楕円形で、底は凹凸があり平坦ではない。埋土は暗茶褐色粘質土で、土器・瓦などの遺物と炭片を多量に含む。特に土器は状態の良いものが多く含まれていることから、不要品を一括で投棄したごみ捨て穴のようなものと考えられる。

SB9241 SK9240の埋土を除去した底で検出した掘立柱建物。柱穴2基を検出した。柱間は約3m(10尺)。西側の柱穴は長辺0.75mの楕円形で、人頭大の礎盤石2石を残す。東側の柱穴は一辺1.0mの隅丸方形で、柱や礎盤石は抜き取られていた。

SX9242・9243 SX9242はSB9245の西で検出した掘立柱の柱穴。掘方は隅丸方形で一辺1.0m。直径0.3mの明瞭な抜取痕跡が残る。SX9243は、SK9240の底で検出した柱穴。掘方は隅丸方形で一辺0.85m。SX9242と並ぶ位置にあるが、柱穴の様相が異なり、柱間も約4.4mと広く、一連の遺構である可能性は低い。

SA9244 調査区西辺で検出した掘立柱の柱穴列。柱穴2基を確認した。柱間は約3.3m(11尺)。掘方の平面はいずれも隅丸方形である。

(大林 潤)

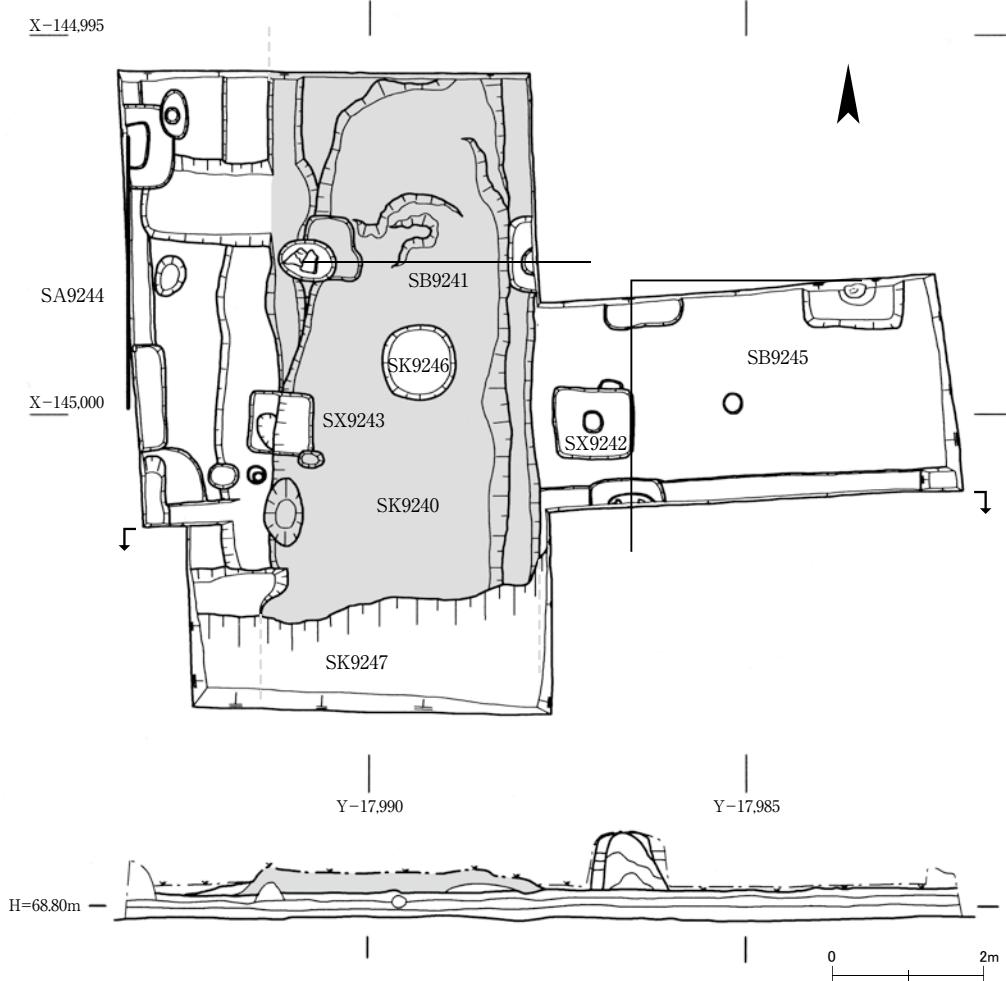


図 176 第 430 次調査遺構平面図・断面図 1:100

出土遺物

土器・土製品 出土した土器類の総量は、整理箱で 96 箱分ある。少量の円筒埴輪などもあるが、古代の土師器・須恵器を中心である。そのうち SK9240 出土のものが 91 箱を占めている（図 177）。

SK9240 出土土器の内訳は土師器 66 箱、須恵器 25 箱で、平城宮 V のまとめをもつ土器群である。土師器・須恵器のほか、破片資料ではあるが少量の緑釉陶器を含んでいる。以下 SK9240 出土品を中心に概要を紹介する。

土師器の器種には杯 A・B・C、椀 A、皿 A・B、鉢、高杯、甕、カマドなどがある。

杯 A には A II (1・2)・A III (3) がある。1・2 は b0 手法。口径 17.2cm、器高 4.4cm と口径 17.0cm、器高 3.3cm。3 は b3 手法で口径 15.2cm、器高 4.0cm。2・3 は内面にハケ目をのこす。杯 B は蓋で B I (4) と B III

(5) を確認している。杯 B II (6・7) は b1 手法。口径 18.4cm、器高 4.9cm と口径 18.0cm、器高 5.2cm。8・9 は底部から口縁にかけて丸味をもつ器形で、皿 A II ないし杯 C。a0 手法と b0 手法である。椀 A は土師器供膳具のうち出土量が最も多く、主体となる器種。椀 A I (10~14) は外面を削った後、ミガキ調整をおこなう。口径 12.8cm~11.5cm で器高は 3.3cm~4.0cm。13 は底部にジグザグ状のミガキを施す。口縁部に灯明器として使用された痕跡を残すもの (12・13) も存在する。椀 A II の 15 は磨耗により調整が不明。口径 9.3cm、器高 3.2cm。

皿 A I (16) は口縁端部に凹線をもち、内側に肥厚する。b0 手法で底部外面は周縁部を 6 回に分けて削り、中央部は一方削りで調整する。口径 19.5cm、器高 2.8cm。皿 B I (17) は外反する口縁の内面に弱い凹線をもつもの。

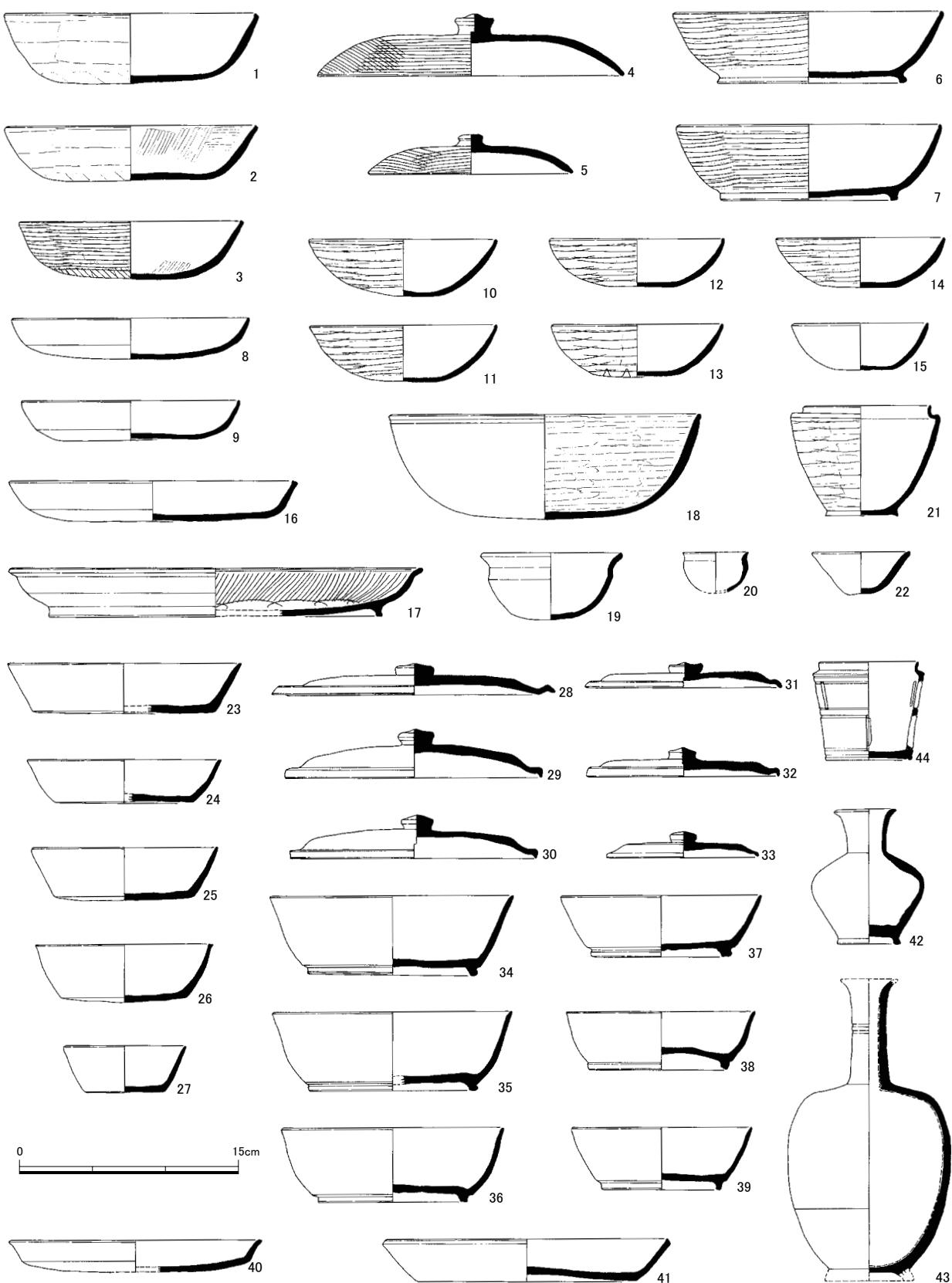


図 177 第 430 次調査出土土器 1:40

内面には放射1段暗文と連弧暗文を施しており、この土器群のなかでは古い要素をもっている。外面は口縁部の下半と底部を削る。口径28.2cm、器高3.3cm。鉢A(18)の口縁外面に1条沈線が横走するもの。内面は黒色で密なミガキ調整をする。口径21.1cm、器高7.2cm。壺Eは少量ながら一定量存在する。肩部の屈曲度や高台の形状にバリエーションがあり、技法や胎土にも違いが存在する。21は磨耗により不明瞭であるが、外面は削った後、ミガキ調整するものとみられる。

その他の器種では壺B(26)のほか、ミニチュア土器(20・21)も比較的目立つ。ここでは図示しなかったが、土師器では供膳具が主体であるものの、甕等の煮炊具も一定量を占めている。

須恵器には杯A・B、皿A・C、壺、水瓶、甕などがある。杯AはA II・A III・A IV・A Vがある。A II(23)は口径16.0cm、器高3.8cm。A III(24・25)は口径13.2cm、器高3.0cmと口径12.8cm、器高3.7cm。A IV(26)は口径12.2cm、器高4.0cm。A V(27)は口径8.4cm、器高3.2cmである。底部はいずれもヘラ切り後ナデ調整。暗灰色で外面に火櫻のある26はⅢ群、白色で軟質の25はⅣ群とみられる。

杯Bは須恵器供膳具のなかでは圧倒的に数が多い。蓋ではB I(28)・B II(29・30)・B III(31・32)・B IV(33)を確認しているがB IIIが多く、B Iは量が少ない。杯身ではB II・B III・B IVを確認している。B II(34~36)は口径16.7~15.1cm、器高5.4~5.1cm。B III(37・38)は口径13.7cm、器高4.2cmと口径13.0cm、器高4.0cm。B IV(39)は口径12.3cm、器高4.3cm。杯身でもB III・IVの量が多いようである。底部外面の調整は、いずれもヘラ切り後ナデ。黒色粒が流れる28はⅡ群とみられる。皿A II(40)は外反する口縁をもつもの。底部外面はヘラ切り後ナデ調整。灰白色で軟質な胎土でⅣ群土器とみられる。口径17.0cm、器高2.2cm。皿C I(42)は直線的な口径をもつもの。口縁端部の面が外傾する。底部外面はヘラ切り後のナデ調整。灰白色で軟質な胎土でⅣ群土器とみられる。重ね焼きにより口縁部外面の端部付近のみ黒色を呈する。口径19.2cm、器高2.9cm。壺M(42)は水挽による成形とみられるもの。水瓶(43)は鉄釉を塗るもので暗赤褐色を呈する。頸部および肩部外面には緑色の自然釉がかかる。胴部下半はロクロ削り調整。色調等から東海地方の產品とみられる。

表24 第430次調査出土瓦磚類集計表

軒丸瓦			軒平瓦			軒桟瓦	
型式	種	点数	型式	種	点数	型式	点数
6138	Ca	1	6664	H	1	江戸	1
6276	G	1	6702	D	1		
6284	?	1	6713	A	2	軒桟瓦計	1
巴(鎌倉)	1	6714	A	2			
巴(江戸)	2	6716	A	1			
型式不明	7	6721	E	1			
		7734	A	1		その他	
			江戸		2	釉付き平瓦	3
軒丸瓦計		13	軒平瓦計		11	その他計	
丸瓦		平瓦	磚		凝灰岩		
重量	81.3kg		305.2kg		1.6kg	1.1kg	
点数	718		3753		9	5	

44は近代土坑SK9247出土のもの。2条の細沈線が3単位で横走し、その間に4単位のスリットが上下2段で互い違いに穿たれる。底部直上に接合痕が認められ、円筒状の体部と円盤状につくった底部を接合したとみられる。色調は黒味がかった燻し銀で、東海地方の產品とみられる。形態からして、有蓋の香炉であろうか。

須恵器では、供膳具が主体を占め、甕等の貯蔵に関する器種は僅少であった。緑釉陶器では、仏具との関わりがある淨瓶・華瓶等の破片資料を確認しているが、やはり僧との関わりのある鉄鉢形の須恵器鉢Aは確認できなかった。

(加藤雅士)

木製品・金属製品 木製品は主に近代土坑SK9246より出土した。子供用と思われる、長さ14cm、幅5.5cmの下駄、漆塗りの椀などが出土した。また、SK9240下層からは、木製匙の破片も出土している。

金属製品は、すべてSK9240から出土した。方頭の鉄釘、鉄鎌、鉄片などが確認されている。また、破片ながら佐波理の椀や、用途不明の佐波理金具などが出土した。

(城倉正祥)

おわりに

今回の調査では、多量の遺物を含む土坑SK9240のほか、掘立柱の柱穴を多数検出した。このうちSB9245は、建物の西北隅部分と考えられる。法華寺境内の建物については、これまでの調査で現本堂周辺に東西3棟、南北2列の、合計6棟の尼房とみられる東西棟建物が並立していたことが判明しているが、SB9245の西側柱列は、この建物群の西側建物の西妻柱筋を北に延長した位置にある。柱径はこれらの建物群と比較して小振りであるが、法華寺旧境内の北側の建物配置を推測する手がかりとなるだろう。

(大林)

2 第435次調査

個人住宅の建設にともなう調査で、2008年6月16日に調査を開始し、6月17日に終了した。調査区は東西5m、南北2mで、一部拡張をおこない、調査面積は11m²であった。

現地表下約20cmで旧耕作土上面に達した。耕作土は厚さ約20cmで、その下厚さ約5cmの床土直下が地山の遺構面となる。地山は礫混黄褐色土の層が約20cmあり、その下は灰白砂質土となる。

発掘区の東端で、東に落ちる落ち込みSX9310を検出した(図178)。落ち込みは2段からなり、西肩から東西幅30cm程度が、遺構面からの深さ30cm程度のテラス状となり、その東はさらに落ち込み、遺構面から約50cmの深さとなっている。南北溝である可能性のもと、発掘区の南東部で溝東肩の検出を目的とした拡張をおこなったが、拡張部分においては落ち込みの底がほぼ水平となっていた。この落ち込みが南北溝の西肩で、拡張部分が溝底であれば、溝幅は3m程度であったと推測される。落ち込み内からは、主として奈良時代の丸瓦・平瓦が出土し、最上層の埋土からは鎌倉期の平瓦が出土した。

この落ち込みが南北溝の西肩であれば、その位置から、東二坊坊間大路東側溝の可能性も考えられる。ただし、既往の調査では、法華寺旧境内の北の坪(左京一条二坊十坪:194-12次調査)で、東二坊坊間大路東側溝(幅約5m、深さ約1m)が検出されているが、法華寺旧境内と平城宮の間においては、東二坊坊間大路東側溝推定位置が何度か調査されているにもかかわらず、明確な遺構は確認されていない。今回検出した落ち込みが条坊に関わる遺構である可能性もあるが、現状ではその判断は難しい。

(島田敏男)

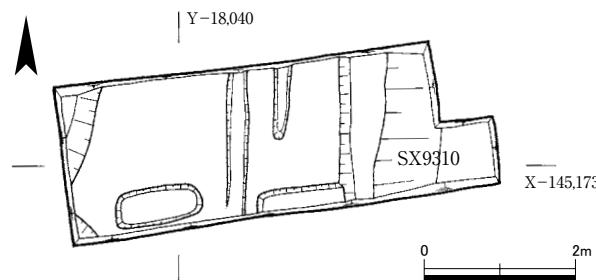


図178 第435次調査遺構平面図 1:100

3 第442次調査

はじめに この調査は法華寺町内における家屋新築工事に伴う事前調査である。調査地は現法華寺本堂の真南約110mにあり、第82-6次、第98-21次、第234-3・15次調査等で検出した推定金堂跡の南約30mに位置する。東隣の第242-6次および本敷地内の旧宅建設時の第98-4次で数時期の柱穴を検出している。調査地は金堂跡と同じ平坦面上にあり、調査はそれらと関連する遺構の確認を目的として、一部が第98-4次調査区と重複する幅4m、南北17m、東西12mの逆L字形の調査区を設定し、調査の進展に併せて一部拡張した。調査面積は101m²、期間は2008年9月1日～9月25日である。

層序 調査区内は表土下10～15cmで黄褐色粘土、黄褐色細砂質土の互層からなる地山が広がる。地山は西南端近くで暗灰褐色礫混り砂土と交替し、部分的に地山の上に茶灰色微砂質土の古墳時代遺物を含む厚さ数cmの薄層が残る部分がある。遺構はいずれも地山面で検出した。検出遺構 検出した遺構の主なものには、掘立柱建物2棟、掘立柱塀1条、铸造土坑1基、池状土坑、土坑などがある(図179)。

建物SB9205 大型柱穴2基を検出。東西2間以上、南北2間以上の東西棟建物の北側柱列と推定される。東の柱穴は一辺1.4m、深さ1.5mの方形掘方で、下部0.4m程は幅狭い段掘りとなる。掘方埋土は黄褐色粘土、暗灰色砂質土などの細かな互層をなす。上端径0.5mの柱抜取穴が伴う。西の柱穴は一辺1.2m、深さ1.5mの掘方で、東南隅の柱抜取穴は浅い楕円形で、底までの約1mについて柱痕跡状の円形を呈する。桁行柱間11尺(3.3m)。SA9215の南12尺(3.6m)に位置する。

建物SB9210 東西4間以上、南北2間の東西棟建物。第98-4次調査で検出した柱穴を東妻柱とする。桁行梁行とも10尺(3.0m)等間。一辺0.7～0.8m、深さ0.9mの柱掘方は柱筋方向に長く、埋土最上層に0.2m大的石塊を用いるものがある。柱痕跡は直径0.2m。

掘立柱塀SA9215 SB9210の南側柱の南10尺で検出した2基の柱穴で、西の柱穴は後の池状土坑SK9124に壊されているが、東の柱穴は一辺0.8m、深さ0.8mの掘方埋土最上層に瓦片を用いている。柱筋に揃うことからSB9210の廂柱列の可能性がある。

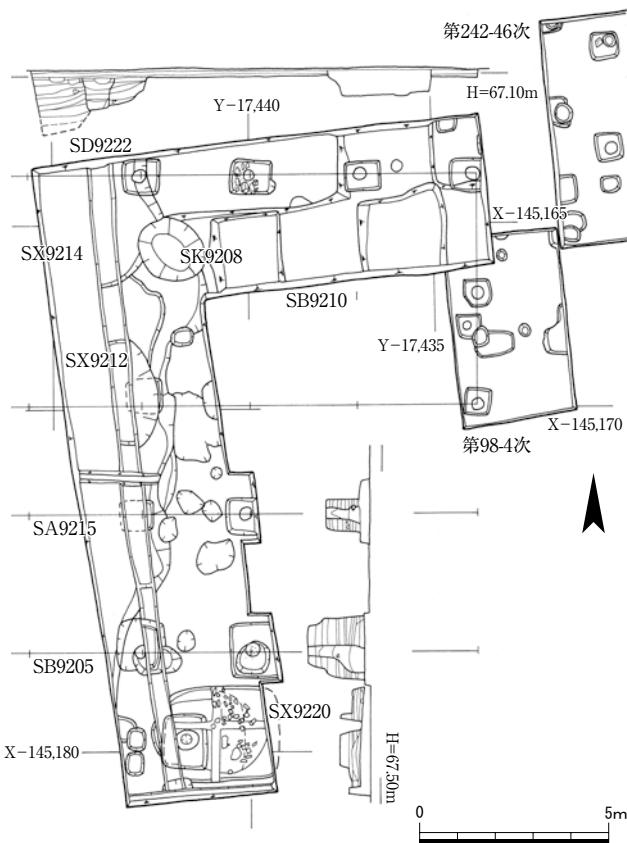


図 179 第 442 次調査遺構平面図 1:200

铸造土坑SX9220 調査区南端の方形土坑で、上下2段からなる（図180・182）。下段は南北1.5m、東西1.3m、深さ0.4m。薄い炭層がはり付く底面の中央に、直径52cm、深さ3cmの黄褐色粘土が詰まった円形凹みがあり、さらにその底面中央に直径25cmの円形凹みがある。上段は南北2.5m、東西3.3mで、西半は深さ0.3m、東に向かって浅くなる。土坑上段の北壁沿いに幅0.2mの深い溝状の赤変面があり、東半埋土下層に鋳型片、東北部の上層に炉壁塊や鉄片が大量に散乱し、南壁際からは銅釘片1点が出土地した。土坑はその構造から鉄製品の铸造に関わるとみられる。下段中央の52cmの円形が鋳型最下段のジョウにあたり、内外の炭層は中子、外型の乾燥時のものと理解され、出土した鋳型には円弧に対して鈍角に開く外型や丸みを帯びた平底の中子があることから、製品は口径50cm弱の鉄釜であろう。下段に据えた鋳型へ上段の上に

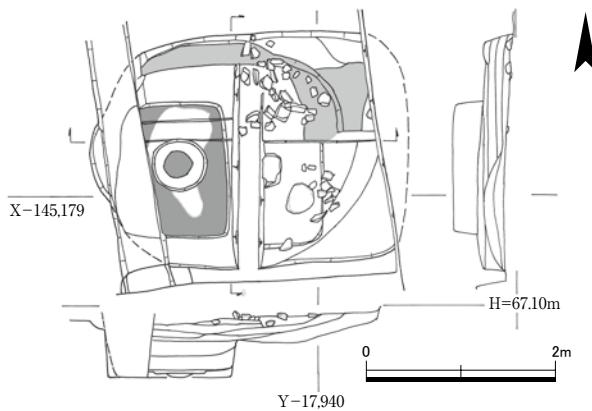


図 180 鋳造土坑 SX9220 平面図・断面図 1:80



図 181 第 442 次調査区全景（北西から）

据えた炉で溶解した鉄を流しこみ、東へ転がして鋳型をはずし、傾斜面を利用して運び出した後、甑炉を解体投棄したとみられる。下段埋土に瓦や土器の小片が含まれるが時期の特定は難しい。

池状土坑SX9214は茶褐色粘質土と砂質土の互層で埋まる。深さ0.6mで底は平坦。瓦片と少量の近世陶器が出土した。土坑SK9208はSX9214の縁辺に掘られた円形擂鉢状の土坑。南北小溝SD9222は直立する壁を持つ深い溝で近現代に掘られたもの。緑釉磚などが出土した。おわりに 調査の結果、推定金堂跡の南30mで掘立柱建物、掘立柱塀を検出した。法華寺旧境内は奈良時代初期の藤原不比等邸と伝領としての光明皇后宮、皇后宮を寺にした天平17年以降の法華寺の遺構が重複して存在するとみられ、今回確認した建物等の帰属が課題の1つとなる。今回、東西棟建物と判明したSB9210は推定金堂跡の南側柱の南90尺に北側柱があり、金堂の中軸線は建物の5間目中央を通るなど、法華寺の配置規格と合致する。しかし、皇后宮を寺に改めた経緯からみて、同一規格にあることだけでは所属時期を確定できない。掘立柱塀SA9215はSB9210の南廂柱列の可能性があり、その柱掘方に瓦片が含まれる点では法華寺以降ともみられるが、特異な配置になる難点がある。建物SB9205については桁行11尺で大型の掘方をもち、金堂前面の平坦地の南端近くに位置する点を考慮すれば、南面回廊の一部とみることも可能である。铸造土坑を含めて、時期・性格の確定は周辺地での調査を待って検討したい。（西口壽生）



図 182 鋳造土坑 SX9220（西から）

興福寺旧境内の調査

—第439・450次

1 第439次調査

この調査は、奈良市花芝町内における個人住宅新築工事に伴う事前調査である。調査地は興福寺中金堂の北西約70mで、平城京東六坊大路西側溝とその西の左京三条六坊十六坪東南隅の検出が想定された。『興福寺流記』によれば、三条六坊十三～十六坪の4町は、天平宝字年間に興福寺へ施入され、菓園・園地であったとされている。しかし、第418次調査（『紀要2008』）をはじめ、これまでの調査では近世の「奈良町」関連の遺構・遺物が多数発見されたが、古代の様相は明らかではない。

調査は、東六坊大路西側溝の検出を主目的に、狭長な敷地にあわせた幅2m、長13mの調査区を設けて実施し、面積26m²、期間は2008年7月1日～8月11日である。

層序 調査地の現地表面は西へ緩やかに下降する。層序は興福寺寺地に近い東半部と近世の造替が著しい西半部とで大きく異なり、東は上から近現代の黒灰色土－灰褐色土－茶褐色砂土－礫混じり灰黄色粘土（地山）、西半は上から暗灰色土－焼土①－暗褐色土－焼土②－暗青褐色土－暗褐色土③－暗青灰色土－青褐色砂礫土（地山）に大別される。東と西との層序の違いは南北溝の掘削と茶褐色砂土の造成に起因しており、東が約30cm高い奈良平安時代の検出面は、東六条大路の路面と側溝・街区との関係を示している。

遺構 遺構は層序と重複関係から3期に大別される。

①期の遺構（図184-①） 近世末の遺構で、西半に東西石列SX9280とそれを壊す南北石列SX9275や小穴があり、東半には4基の埋甕と礎石、土坑SK9285などがある。東西石列SX9280は20～30cm大の石塊を、南に面を揃えて2段以上積み上げる。石列の南は碎石状の砂や焼土の互層で固く埋められ、北側は粘質土で軟らかい。近現代の建物基礎と同方向で重なり、前身建物等の基礎に関わる遺構と考えられる。東西7m分検出。南北石列SX9275は20～30cm大の石塊を幅広い帯状に東に面を揃えて積み上げる。SX9280を壊して造られるが性格は不明。SX9280と重複する小穴SX9287～9289の側壁には木質物が認められ、桶などを据えたとみられる。

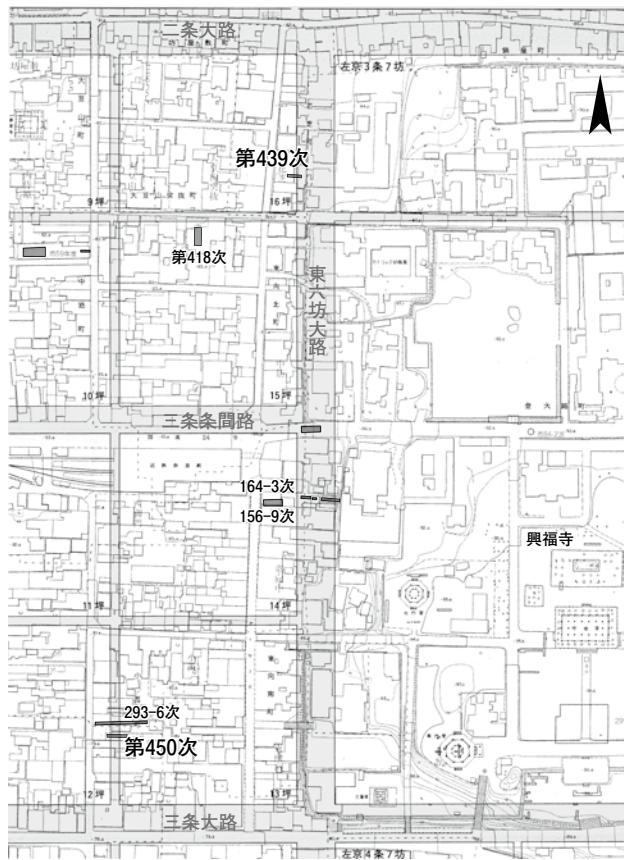


図183 第439・450次調査区位置図 1:5000

土坑SK9285は石列SX9280の延長線上にあり、石列の抜取穴とみられる。埋土から石塊とともに近世末～近代初頭の土器、陶器などが出土した。埋甕SX9281～9284と礎石SX9286は南を土坑SK9285に壊される。埋甕SX9281・9282は胴径40cm、高さ30cm以上の平底の瓦質土器で、SX9282を壊すSX9281がより浅く埋められている。SX9283・9284も重複関係にあり、SX9283を抜いた後にSX9284が据えられる。SX9284の底には直径3cmの円孔が開く。礎石SX9286は、表面に梵字が刻まれた花崗岩製板碑の上半部を伏せて据えたもので、上面は埋甕の口縁よりも低い。埋甕と一体で敷地奥に設けられた便所やつくばいの可能性がある。なお、SX9282底から銅錢（元豊通宝・皇宋通宝）3枚が出土した。

SX9294は土師器羽釜を埋めたものでB期よりも古い。周囲に小石を詰めて正立することから、骨蔵器の可能性があるが、器内に遺物などはなかった。

②期の遺構（図184-②） 中世後期～近世初の遺構である。西半に瓦敷SX9295、中央に土器溜SX9290、東に石組SX9292、瓦敷と土器溜の間にそれらを壊す石組SX9291がある。瓦敷SX9295は石塊と丸・平瓦片を乱雑に敷いたもので、その上下層と共に軟弱な低湿地の整地とみられる。土器溜SX9290は東に薄く西に厚い傾斜を持ち、大量

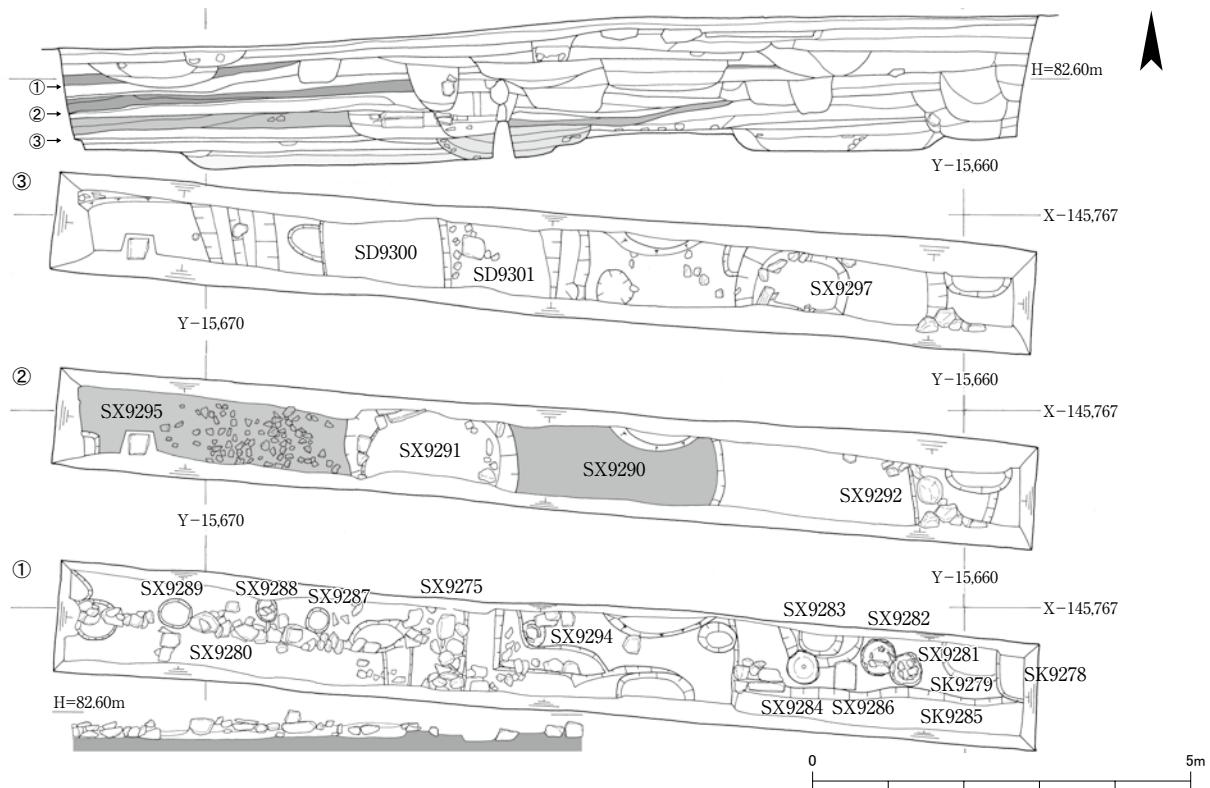


図 184 第439次調査遺構平面図・断面図 1:100

の土器片と僅かな焼壁が蜜に詰まり、硬く締まっている。土器溜の東は緩傾斜で高まる固い粘土面が広がり、土器溜は興福寺寺域に沿う路面の地盤強化が目的と考えられる。土器は整理箱30箱に及ぶ土師器皿類で灯明痕跡をもつものがある。東端の石組SX9292は幅約1m、深さ0.7mの穴に大型石塊を詰めたもの。北と南になお続き性格不詳。中央の石組SX9291は径2.2mの掘方内に、50cm大の石を積み上げた水溜と考えられる。東壁を含む東半は後に穴を掘って壊され、弧を描く西～北壁が残る。西壁際に投棄された大型石塊の隙間から美濃瀬戸産の天目碗、鉄製包丁、金銅製針金、漆器碗残片などが出土した。東壁を壊す穴からは近世初めの土師器皿とともに、中国明代の染付盤（漳州窯）が出土した。染付盤には段を持って開く口縁部と底部内面に花や竹林を描く。

③期の遺構（図184-③） 奈良・平安時代の遺構で、南北溝SD9300、南北溝SD9301、土坑SK9297がある。南北溝SD9300は幅5.1m、深さ0.3mの素掘り。埋土は暗青灰色の微砂と粘土の互層で9～10世紀代の土師器杯などが出土した。東六坊大路西側溝に相当する。溝の上には10世紀後半の黒色土器碗などを含む砂質土が調査区西端まで広がり、上面に南北小溝や動物の足跡がみられた。沼状の低湿地と化していたのである。南北溝SD9301は砂質土の上面から掘られた溝で、西岸を小石で護岸する。溝幅約1.8m、深さ0.4m。東岸はSD9300を踏襲し、西岸を造りかえることで幅を狭めたものである。埋土には11～13世紀の土器が含まれる。SD9300の東は東六坊大路の路面にあたり、礫や砂が混じる茶褐色砂土が緩やかな

傾斜で高まっており、奈良時代の須恵器平瓶などが出土した。土坑SK9297は茶褐色砂土上面から掘り込まれた底の平坦な土坑で、東西幅2.8m、深さ0.4m。穴の西寄りに偏って完形品を含む大型瓦片が出土し、東壁を13世紀前半の瓦器碗を含むC期の石組土坑SK9293に壊されている。土坑SK9297の西の小穴SX9298は径0.3m、深さ0.2m。暗茶褐色粘土を埋土とし、奈良時代の土器片が少量出土したが性格不明。

遺物 前述の遺構に伴うもののほかに、平安時代から江戸時代の軒瓦22点を含む瓦類、近世陶磁を含む土器類、近世以降の人形・塔形土製品、銅錢17枚（寛永通宝2、中国錢15）の銭貨、石製五輪塔などがある。

まとめ 調査の結果、南北溝SD9300は奈良時代に東六坊大路西側溝として掘られたことを確認した。遷都後に溝は徐々に埋まり、広い低湿地と化していくが、菜園・菜園と関わる遺構は確認されなかった。11世紀には溝東岸際に幅を狭めて掘り直され（SD9301）、13世紀以降、室町時代頃にも埋め立てなどがなされたが、建物等が建つのは近世以後のことである。土層にみえる2枚の焼土・炭層は江戸時代に数度の大火灾を示し、近世末の建物はそれら焼土・炭層の上に、東向通りに直交する方向で建てられ、近現代に踏襲される。東向通りの名称について、通りに面した建物がすべて興福寺側を向いていたからとの説明がある。古絵図には東向通りの東側は林や湿地として描かれており、通りに面した建物が建つのは元和年間以降の事とされている。調査結果は通説と矛盾しないことを確認したにとどまる。

（西口壽生）

2 第450次調査

はじめに

奈良市角振町内での商業施設建設とともに発掘調査。調査地の位置は左京三条六坊十二・十三坪。興福寺旧境内の果園・園地と近世以降の「奈良町」にあたる。1980年代の町屋調査によると、調査地には「年代不明」で「空き家」状態の「町屋」が確認されており、「A」の景観評価を受けている(奈良市教育委員会1987『奈良町V

昭和61年度伝統的建造物群保全構想報告書』)。この「町屋」は発掘調査直前まで存在しており、直近の地図・航空写真等でも平面形態がある程度分かること。これらによると、まず、小西通りに面する主屋は入り口を西に向ける。主屋の西南部には坪庭があり、類型ではⅡ～Ⅳ型のいずれかにあたるだろう(奈良市町並建造物群専門調査会1982『奈良町 都市計画道路杉ヶ町高畠線の工事にともなう町並調査』)。主屋には、北に中庭をもつ便益棟が接続し、離れ座敷ないし蔵がこれに続く。さらにその東には、裏庭と蔵が存在するようである。調査地は東西に狭長であり、隣地の構造物と排土置き場の関係から、東六坊坊間東小路想定位置に東西約10m、南北約2mの調査区を設定した。面積は約20m²。これは「町屋」の便益棟と、一部主屋に該当するところである。調査は平成20年12月2日に着手し、12月17日に完全に終了した。

基本層序

調査区内の基本的な層序は上から次のとおり。①表土。厚さ約5～15cm。②近世の上層包含層。調査区の西半では灰黄褐色、東半では褐色で土器・瓦、炭を多く含む。この層は調査地内の所々で地表面に露出している。厚さ約30～40cm。③近世の下層包含層。黄灰色で土器・瓦を少量含む。厚さ約15cm。④地山。灰白色の粗砂混じりの粘質シルト質土。調査区西部で地山を検出した標高は、

約79.50～79.60mである。遺構検出は上層包含層中、下層包含層の上面、地山の上面でおこない、それぞれの面で図面・写真等の記録を作成した。

検出遺構

調査区内は、北東の一部で現代の攪乱をうけていた事を除いて、近世の包含層が良好に残存していた。遺構は一部中世を含むが、ほとんどが近世以降とみられるもので、土坑・溝等を多数検出した。多くは性格不明である。以下、主な遺構について述べる(図185)。

土坑SK9226 調査区西端にある不整形土坑。地山上で検出した。規模は南北1.5m、深さ0.25cm。鎌倉時代の土師器が出土している。性格は不明。

廃棄土坑SK9225 地山上で検出した東西0.8m、深さ0.85mの隅丸方形の土坑。埋土上層では瓦器、瓦等が出土した。埋土下層では黒色土器A、木片、鹿角、獸骨等が廃棄されたように埋まっていた。

柱穴SK9227 地山上で検出した東西0.5mの円形の土坑。深さ0.75mと一定の深さがあることから、柱穴の可能性がある。時期は不明。

廃棄土坑SK9228 下層包含層上面で検出した土坑、ないし溝。東西幅は最大2.05mで深さは0.3m。土坑内は大量の炭と赤色の焼土が充満しており、近世の土器が含まれる。焼土等の処理のため掘られた遺構とみられる。

排水施設遺構SX9230 底部に穿孔のある甕を倒立させて埋設した遺構(図186)。上層包含層中で検出した。甕は口径約25cm、高さ約27cm。掘方の上面は厚さ5cmの漆喰ないしモルタルで覆い、甕の底部穿孔に対応する部分に径3cmの穴がある。こうした構造から、水琴窟などの排水施設とみられる。掘方の底には白色粘土が敷かれており、甕の口縁から液体が漏れない構造になっている。この粘土は東に高く、西に低い。甕の肩部には、径1.5cmの穿孔がある。穿孔は甕の西北部分にあり、ここから内

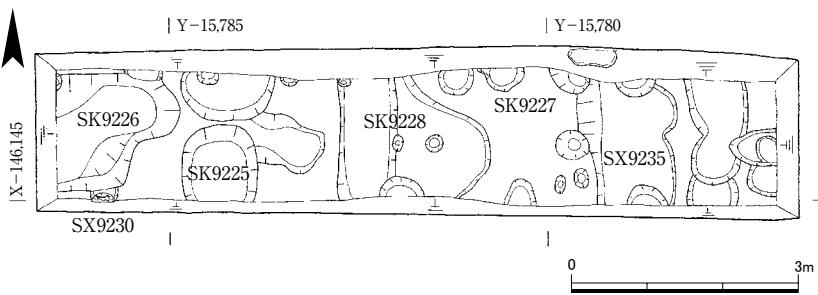


図 185 第450次調査遺構平面図 1:100

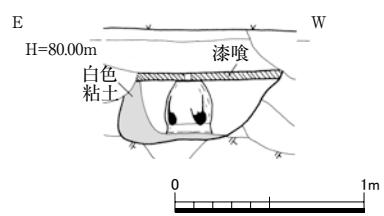


図 186 SX9230 断面図 1:40

部の液体が排出されたのだろう。なお甕の内部は空洞となっていたが、漆喰よりも上部は瓦がつまる新しい土坑で壊されていた。この遺構が水琴窟であるとすれば、「幻の水琴窟」となっていただろう。

落ち込み状遺構SX9235 上層包含層中で検出した遺構で、地山を0.4m程度掘り込む。上層包含層からの深さは最大0.7m。この落ち込みよりも東では地山を掘り込む溝や土坑が多数重複しており、調査区の西半よりも一段低くなっている。土坑には瓦が多くつまるものなどもあった。

平面で確認した遺構のほかに、南壁において上層包含層の上面に厚さ2cm程度の黒色の粘土質層を一部確認している。これは土間等の床面であった可能性がある。また、西壁において下層包含層の上面で、焼土層を一部確認している。なお東六坊坊間東小路の側溝は後世に削平されたとみられ、確認できなかった。

出土遺物

土器類 近世の包含層からは18世紀を中心とする土器・陶磁器が出土した(図187)。1はSK9225出土の黒色土器A。底部外面に「市宅」の墨書がある。10世紀前半のものだろう。2はSX9235出土の犬形土製品。手捏ねによる整形で、脚をすべて欠いている。類例には織豊時代のものとされる大阪城址出土品がある。3はSX9230の信楽焼の甕。内外面の全体は茶褐色の鉄釉だが、底部外面のみ露胎。肩部から黒色釉のかけ流しが5単位ある。底部と肩部の穿孔は焼成後外面から施したもの。18世紀以降のものとみられる。
(加藤雅士)

金属類 銅製煙管の吸口1点、鉄刀1点、水滴2点、鉄釘2点、鉄不明製品1点が出土した(図188)。銅製煙管の吸口は長さ6.2cm、直径は吸口端部で0.3cm、軸側で1.1cm。軸の木質が残存する。鉄刀は長さ32.5cm、幅4.6cm、厚さ

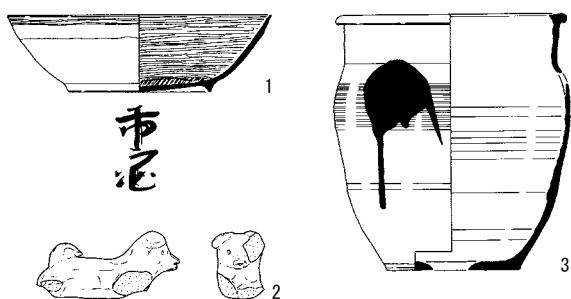


図187 第450次調査出土土器類 1:4 (3のみ1:8)



図188 第450次調査出土近世遺物

2.8cm。下半部が折損している。写真手前の水滴は銅鑄造製。底面直径4.4cm、高さ2.4cm。注口部と把手がつく。阿古陀形。時期は近世と考えられる。写真奥の水滴は銅鑄造製鍍金。底面直径4.9cm、高さ2.8cm。頸部に連珠文。丸くて平らな胴部に直線的に立ち上がる頸部をもつ。

(国武貞克)

おわりに

調査地は昭和初期には「獣医者」宅（奈良市教育委員会1998「奈良市歴史資料調査報告書」14）になっている。近世包含層の良好な残存状況から、これが発掘直前まであった「町屋」とみてよいだろう。調査区は便益棟や主屋の土間の部分にあたるため、建築に直接関係する柱穴等は確認できなかった。しかし、断片的に分かることがある。例えば、排水施設遺構X9230は「町屋」の主屋の土間部分にあたり、この近くに手水等があったと考えてよい。またSX9235は便益棟の中庭よりの位置にあり、瓦等の不用品を始末するための土坑が繰り返し掘られた状況が考えられる。この「町屋」は建物内部を調査されることなく失われたが、今回の調査はその構造とそこでの生活の一端を知ることができた。
(加藤)

喜光寺の調査

—第433次

1 はじめに

喜光寺は養老5年（721）年に行基によって創建されたとされ、行基が入寂した寺としても知られている。現本堂は室町初期に再建された金堂で、国の重要文化財に指定されている。1969年には発掘調査がおこなわれ、現本堂の前進建物の基壇や、南門とされる痕跡が確認されている（奈良県教育委員会1969『喜光寺旧境内緊急発掘調査報告書』奈良県文化財調査報告第12集）。

今回の調査は喜光寺南門復原工事に先立つものである。復原南門の位置は、南門跡とされるところのすぐ北に予定されており、調査区はこれに対応した東西約15m、南北約14mである（図189）。面積は約204m²。これは現境内と、その南の旧公園地にまたがる。調査は2008年2月18日に開始し、3月12日に終了した。

2 基本層序

調査区の層序は現境内と旧公園地で異なる。調査地の北1/3の部分を占める現境内地下の層位は次のとおり。地表下は現在の盛土（厚さ約40cm）、旧盛土（厚さ約30cm）、整地土（厚さ約30cm）、地山の順である。

後述の達磨窯や廃棄土坑付近では、窯壁や瓦を含む層（厚さ約30cm）が旧盛土と整地土の間にに入る。また、達磨

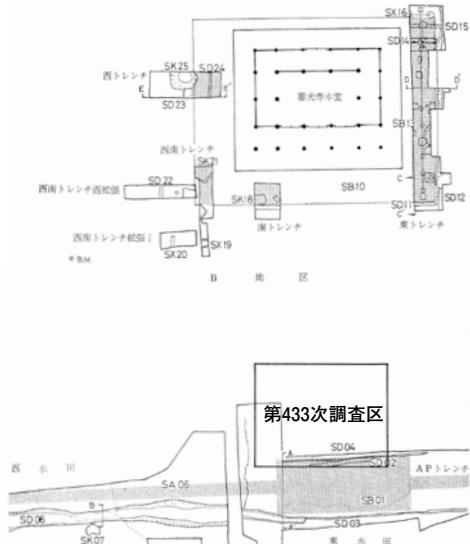


図 189 第433次調査区位置図

窓の峠部分を作るために、厚さ40cm程度の整地をした可能性がある。

調査地の南2/3の部分を占める、旧公園地下での層位は次のとおり。現地表下は礫が多く混じる造成土（厚さ約90~130cm）、旧水田の耕土・床土（厚さ約50cm）、遺物包含層（厚さ約10cm）、地山の順である。

地山の検出高は現境内地では約74.4m、旧公園地下では約74.2mである。なお、旧公園地下においては地山である青灰色砂質土と、やはり地山であるオリーブ灰色シルト質土の違いが明瞭であり、自然流路が存在した可能性がある。

3 出土遺構

旧公園地下では、旧水田による削平をうけており、土坑1基と耕作溝等を検出したにとどまる（図190）。

土坑SK2895 調査区南東隅の壁面で確認した土坑。地山を掘り込む。掘方は南北で1.1m。深さは1.0m。

現境内地下では、古代および近世以降とみられる遺構を複数検出した。

土坑SK2896・2897、2902~2907 達磨窯SY2900や廃棄土坑SK2901以前の土坑。性格は不明。SK2896・2897はともに埋土が褐色系。古代とみられる土器が少量出土している。SK2902~SK2907の埋土はいずれも黄色系。

達磨窯SY2900 調査区北東部の壁面と、一部平面で検出した東西方向に主軸をもつ瓦窯（図191）。半地下部の床・畦が残存しており、地上部の構造物は壊されて床の上に

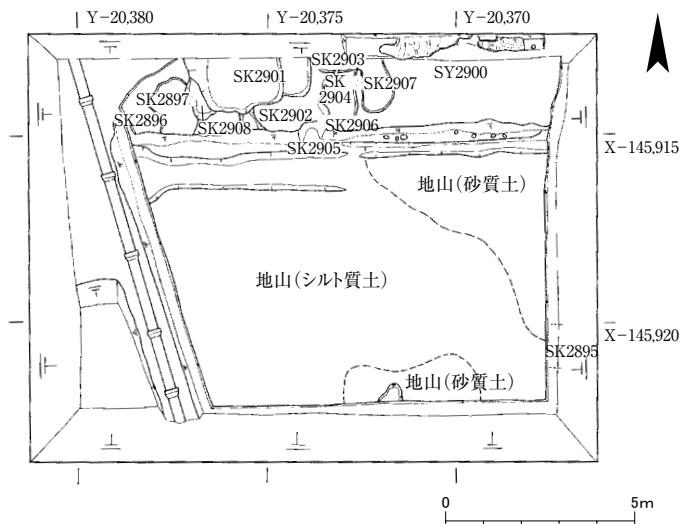


図 190 第433次調査遺構平面図 1:200

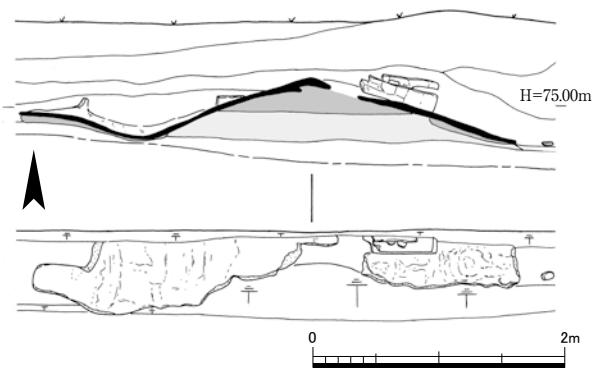


図 191 達磨窯 SY2900 の平面図・断面図 1:60

堆積していた。西端では窯壁の立ち上がりと、焚口を確認しており、焚口から峠までを折り返すと、全長約4.4mに復原できる。焼成部と峠の比高差は最大で0.45mである。立ち上がり部の窯壁は厚さ約10cm。外面が橙色、内面は暗青灰色を呈する。

床は約5cmの厚さで、径1mm程度の長石粒を含んでおり、褐灰色で非常に堅い。表面は粗いものの、峠や焚口付近は平らに仕上げられている。これに対し、焼成室付近では床の表面は皺状を呈する。床の下層の整地土は赤変しており、とくに峠や焼成室の下で赤変が著しい。

畦には直方体の磚を使用しており、これを窯の主軸方向にあわせて置く。残存していたのはごく一部で、最下段と2段目の破片を確認している。比較的残存状況が良好な、峠の東にある最下段の磚は西端を欠失しており、残存長は60cm。厚さは東端が14cm、西端が10cmで峠の傾斜にあわせた作りになっている。したがって、この磚は畦の専用品だろう。磚の胎土は床と同じとみられる。

廃棄土坑SK2901 達磨窯の西で長さ3.35mの土坑を検出した。一部は調査区外に延びており検出できた幅1.4m。深さは0.5mである。土坑の底面には厚さ2cmの炭層が2枚あり、その上層には瓦や磚、達磨窯の上部構造物が堆積する。達磨窯SY2900の灰原として数回利用された後、窯の廃絶にともない窯の構造物が廃棄されたのだろう。

土坑SK2908 達磨窯SY2900や廃棄土坑SK2901以降の土坑。SK2901を壊している。

4 出土遺物

土 器 今回の調査で出土した土器類の総量は、プラスチックコンテナで2箱分。土師器、須恵器が出土しているが、ほとんどは小破片である。
(加藤雅士)

瓦 本調査区で出土した瓦類の種類と点数は表25と図192に示した。1は軒丸瓦で「菅原寺」銘の外区部分が出土している。1969年の喜光寺境内の調査で出土した同銘の瓦と同範である。時期は鎌倉時代から室町時代初期であろう。2と3は唐草文の軒平瓦である。文様のほか脇区に幅があること、瓦当裏面や平瓦部凸面の調整、全体の色調などから江戸時代前半には収まるであろう。4は唐草文の軒棧瓦で左脇区に丸瓦当を接合するための加工の痕が残っている。江戸時代後半に属する。

SY2900上層からはスサ入り粘土が付着した瓦が出土している。この付着粘土は焼けていない。瓦は平瓦が多く丸瓦は極くない。瓦は全体に淡橙色を呈し一部灰色の部分がある。これらは窯壁の構築材として使用された。

磚 SK2901からは大量の磚が出土している。出土総重量は110.6kgで多くは破片である。完形が2点出土しており、それぞれの大きさは長さ30.7cm、幅17.5cm、厚み10.5cm、重量11.96kg、長さ32.5cm、幅17.2cm、厚み10.5cm、重量10.80kgである(図193)。このほか、破片だが幅18.5cm、厚み11.0cm、長さ35.2cm、幅18.5cmの2例もある。計測値を比較すると、完形品と破片の資料から少なくとも大小2つの規格があったといえよう。

これらの磚は胎土に5mm以下の砂粒とスサを多く含み、焼成は良好で全体に灰色を呈する。型づくりで、長辺の角はすべて丸みを帯びており、短辺の角は直角である。磚の表面にはスサ入りの粘土が焼き付いている。ただし、完形品をみると、小口面2面、長手面2面と平手面1面にはほぼ全面に粘土がみとめられるが、別の平手面は粘土がほとんどみられず磚の面が露出している。また、小口面1面の粘土は生焼けの状態である。こうした状況から、この完形の磚は窯内の通焰道を形成する畦の小口頂部に据えられたと考える。このため、下面と後方

表 25 第433次調査出土瓦磚類集計表

軒丸瓦		軒平瓦		道具瓦	
型 式	点数	型 式	点数	種 類	点数
中世	1	中世	1	面戸瓦	2
巴(中世)	3	近世	7	熨斗瓦	2
巴(近世)	1			獅子口	1
型式不明	1			その他	1
軒丸瓦計		軒平瓦計		道具瓦計	
丸瓦		平瓦		6	
重量		147.7kg			
点数		1101			

の磚に接する部分にはスサ入り粘土が少ないか、生焼けの状態がみられたのである。この磚の規格や色調は幕末以降の赤煉瓦や耐火煉瓦とはことなるため、時期も江戸時代後半から幕末にかけてのものであろう。(今井晃樹)

窯壁 達磨窯の窯壁部材が、窯本体と西南のSK2901から多量に出土した(図193)。取り上げただけでも総量176.0kgになる。繊維質のスサを多量に混ぜ込んだ粘土で、丸瓦・平瓦も比較的多く窯壁内に混ぜ込まれている。なお、窯壁はほとんどがSK2901に捨てられた状態で出土しており、窯の構造に関しては不明である。(城倉正祥)

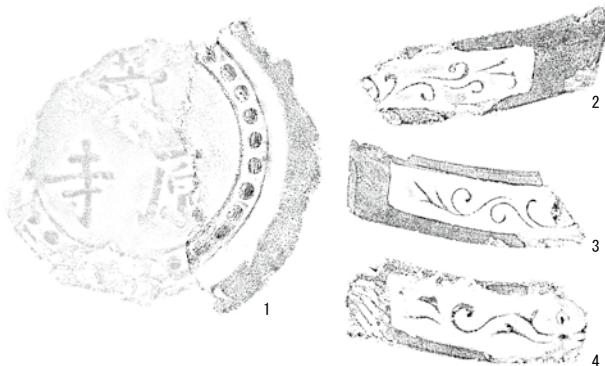


図 192 第 433 次調査出土軒瓦 1:4



図 193 第 433 次調査出土の磚と窯壁



図 194 第 433 次調査区北辺部 (南東から)

5 おわりに

調査区のうち旧公園地下では、水田による削平で明瞭な遺構を検出することができなかった。これに対して現境内地下は遺構が良好に残存していた。達磨窯の峠の頂部は地表下45cmにあり、境内の未調査地においても他の遺構が良好に残存している可能性がある。

達磨窯SY2900は畦に使用された磚から、江戸時代後半から幕末のものとみられる。窯の長さは復原で約4.4m。幅は不明であったが、発掘調査後の立会い調査で窯壁の立ち上がり部の北端を確認したので、復原が可能となった。焚口の幅が0.3~0.4m程度と仮定して窯の中軸線を設定すると、幅は復原で約2mとなる。この規模は磚から導かれた窯の年代観と矛盾しない。(藤原学2001『達磨窯の研究』学生社)。達磨窯の畦には近代以降は耐火煉瓦を用いるようになるが、磚の使用はそれを先取った可能性もあり、今後類例の増加が待たれる。

SY2900や廃棄土坑SK2901から出土した瓦は、境内に現存する建物である本堂や寺務所、堀に葺かれているものとは異なる。よってSY2900が築かれる具体的なきっかけについては不明である。しかし中・近世では寺院での部分的な瓦の需要に対し、瓦の製作者が直接現地に赴いて瓦を焼く場合があると考えられており、金堂の近くなどで達磨窯が検出される例がある。よって本例も喜光寺や周辺での瓦の需要を満たすため達磨窯が築かれたものと考えられる。

喜光寺は奈良時代創建の古い寺だが、創建当時の伽藍配置など不明な点も多い。今回の調査はその歴史のなかでも新しい部分を垣間みたといえるだろう。 (加藤)

平城宮北方遺跡の調査

—第445・447次

1 第445次調査

本調査は奈良市佐紀町内での住宅建て建設に伴う発掘調査である。調査地は第一次大極殿の北方約290mに位置し、平城宮北方遺跡に含まれる（図195）。調査区は南北3m、東西3mの範囲に設定した。層位は地表から盛土約15cm、旧耕作土約10cm、赤茶褐色粘質土（地山）で、地山面で遺構を検出した。検出された遺構は柱穴1基、土坑3基、溝1条である。遺構覆土には一様に焼土と炭化物片が含まれる。柱穴は深さ約50cmの隅丸方形の土坑で柱抜取痕跡が観察された。柱穴の柱抜取痕跡からは瓦器が出土しているため、中世と考えられる。遺物は瓦器椀、瓦器皿、土師器、瓦、炉壁が出土した。遺構覆土からは一様に焼土、炭化物、炉壁が含まれるため、中世の鋳造関連遺構の可能性が考えられる。

2 第447次調査

本調査は奈良市佐紀町内での住宅建て替えに先立つ発掘調査である。調査地は第一次大極殿の北方約330mに位置し、平城宮北方遺跡に含まれる（図195）。調査区は建替住宅の建物敷地内において、基礎設置位置を避けて南北3m、東西6mの範囲を設定した。面積は18m²。調査は2008年10月22日に着手し、10月29日に埋め戻しを完了した。基本層序は地表から造成盛土（1）約60cm、水田耕土（2）約20cm、水田床土（3）約15cm、黄褐色粘質土（地山）（4）である。検出された遺構は土坑5基、性格不明遺構4基である（図197）。遺構検出面は黄褐色粘質土



図195 第445・447次調査区位置図 1:5000

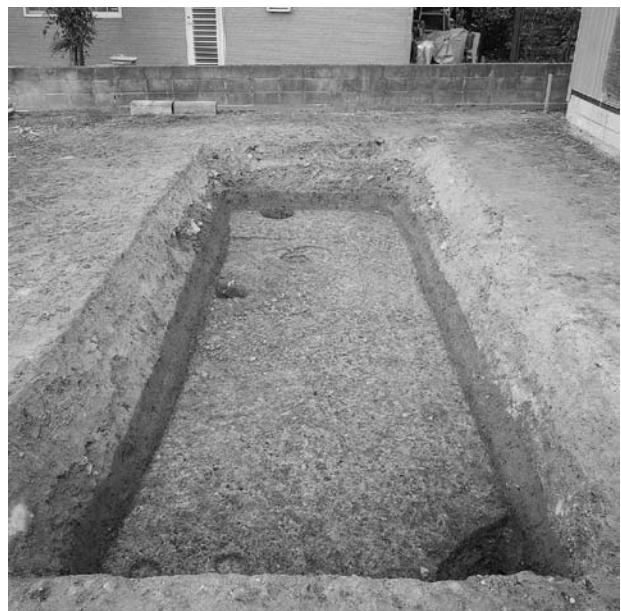


図196 第447次調査区全景（東から）

（地山）である。

全ての遺構覆土には焼土・灰・炭化物・炉壁片が多量に含まれていたため鋳造関係遺構と考えられ、瓦質土器が含まれていたため時期は中世と考えられる。とくにSK296とSK297は楕円形の土坑底面の一部が深くなっている段になっており、同じ構造である。その上をSX298が覆っている。SX298は一辺1.5mの方形の範囲に、焼土が薄く溜まっているSX299を切って、白色粘土を敷き詰めた遺構である。SX301は深さ170cm以上の軟質な覆土が確認されたため井戸の可能性があり、瓦質土器・磁器が含まれていたため時期は中世である。

出土遺物は瓦質土器の摺鉢片、青磁片、磁器片、土師皿、瓦片（古代・中世）、炉壁である。遺構出土の遺物は中世に限られる。遺構覆土には焼土、炭化物とともに炉壁片が一様に含まれるため、具体的な性格は特定しづらいが中世の鋳造関係遺構と考えられる。先行する周辺の調査では同様に中世の鋳造関係遺構や同時期の井戸が検出されており、中世には一帯で広く鋳造関係の作業がおこなわれていたと考えられる。

（国武貞克）

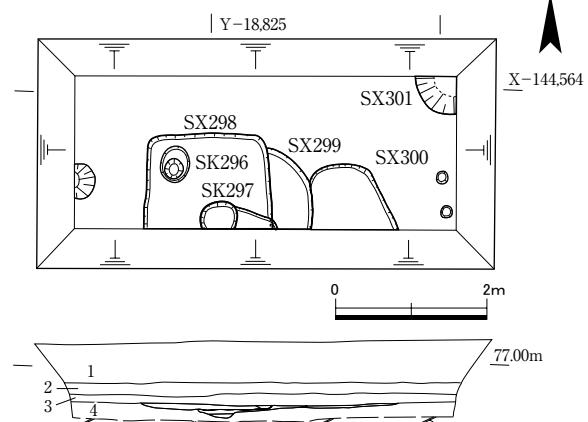


図197 第447次調査遺構平面図・断面図 1:100

東院南方遺跡の調査

—第434次

1 調査の概要

調査地 調査地は、平城京左京二条二坊五坪の西南部にあたり(図198)、およそ12m東を、1988年に奈良市教育委員会が調査している(奈良市第156次調査)。平城第193次B区・第198次・第200次・第204次調査で出土したいわゆる二条大路木簡の内容から、左京二条二坊五坪には藤原麻呂邸が存在した可能性が指摘されており(奈文研『平城京左京二条二坊・三条二坊発掘調査報告』1995年)、周辺で行われた調査成果からも、奈良時代に属する遺構が濃密に存在すると推測された。

地形と基本層序 調査地の東には菰川が南流し、周辺は現在耕作地ないし商業地として利用されている。調査地の基本層序は、現地表面から、駐車場のクラッシャー(約40cm)、駐車場に伴う造成盛土(約50cm)があり、旧耕土(約15cm)、黄灰色土(いわゆる床土2層、約25cm)、奈良時代の遺物を大量に含む暗褐色砂質土(約10cm)、灰色砂質土(いわゆる地山)と続き、その下には黄灰色・灰褐色ないし灰色の粘土が堆積する。遺構検出は、暗褐色砂質土で試みた後、灰色砂質土の地山面で再度行った。

2 遺構

検出した遺構は、掘立柱建物6棟、塀1条、溝2条、土坑1基、足場穴列3組などで、少なくとも6時期以上におよぶ遺構変遷を確認した(図199)。以下、時期の古いものから略述する。

奈良時代前半

A期 SB9183・SB9184 梁行2間の掘立柱の南北棟建物。柱間約2.7m(9尺)。梁行は、それぞれ調査区外北側、調査区外南側へ続き不詳。柱筋を揃えるため、同時期の建物と判断した。

B期 SB9185 東西方向に柱穴4基を検出した掘立柱建物。いずれも柱痕跡が残る。柱間約2.4m(8尺)。調査区外北側へ続くが、南北棟か東西棟か不詳。南北溝SD9182とは併存しない。また、A期の建物と同時に併存することはないが、その前後関係は不明で、時期が逆転する可能性は残る。

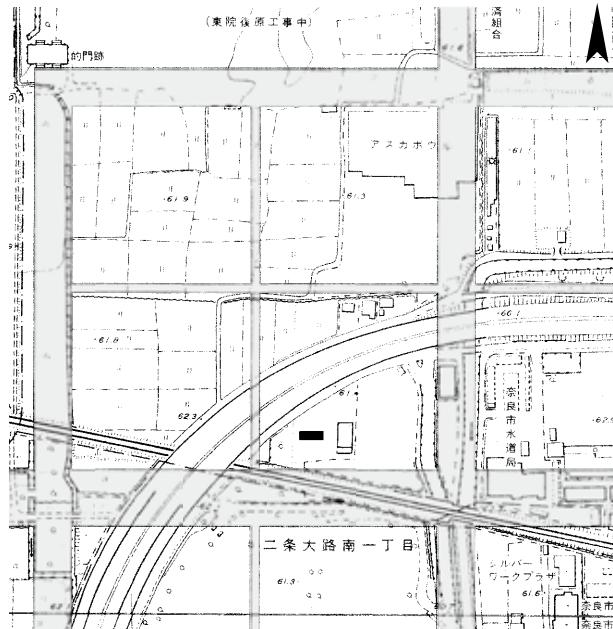


図 198 第434次調査区位置図 1:5000

奈良時代半ば

C期 SB9187 奈良市第156次調査で検出した東西棟建物SB5346の北柱列と筋を揃える柱列。掘立柱の東西棟建物となる柱穴であろう。柱間約3m(10尺)。今回の調査で検出した最も西端の柱穴は、既調査で検出した柱穴から約30m(100尺)西に位置する。SB5346は、上記報告書で奈良時代半ばのd期に属すると指摘されており、今回の調査の時期変遷を考える基点となった。

SS9188 SB9187の造営ないし解体に際して造られた足場穴列。2列で計7基の小柱穴を検出した。

奈良時代半ばから後半まで

D期 SA9180 柱間約3m(10尺)の掘立柱の南北塀。柱穴2基を検出し、さらに調査区外南北へ続く。

SD9181・SD9182 SA9180の東西で検出した素堀りの南北溝。SD9181は、幅約90cm、約2.7m分検出。残存する深さは最大で5cm程度。SD9182は、幅約80cm、深約10cmで調査区外南北へ続くと推測される。SA9180・SD9181・SD9182は、五坪の西半を2分する区画施設である可能性が高い。

SX9189・SX9190 1辺約1.4m、残存する深さ約90cmの柱穴。SX9189の柱穴から、礎板が出土した。大規模な南北棟建物の西廂の一部となる可能性もあるが不詳。

奈良時代後半から末まで

E期 SB9191 柱穴6基を検出し、うち3基の柱穴で礎板を検出した。検出面から5cm程度で穴の底になる浅い

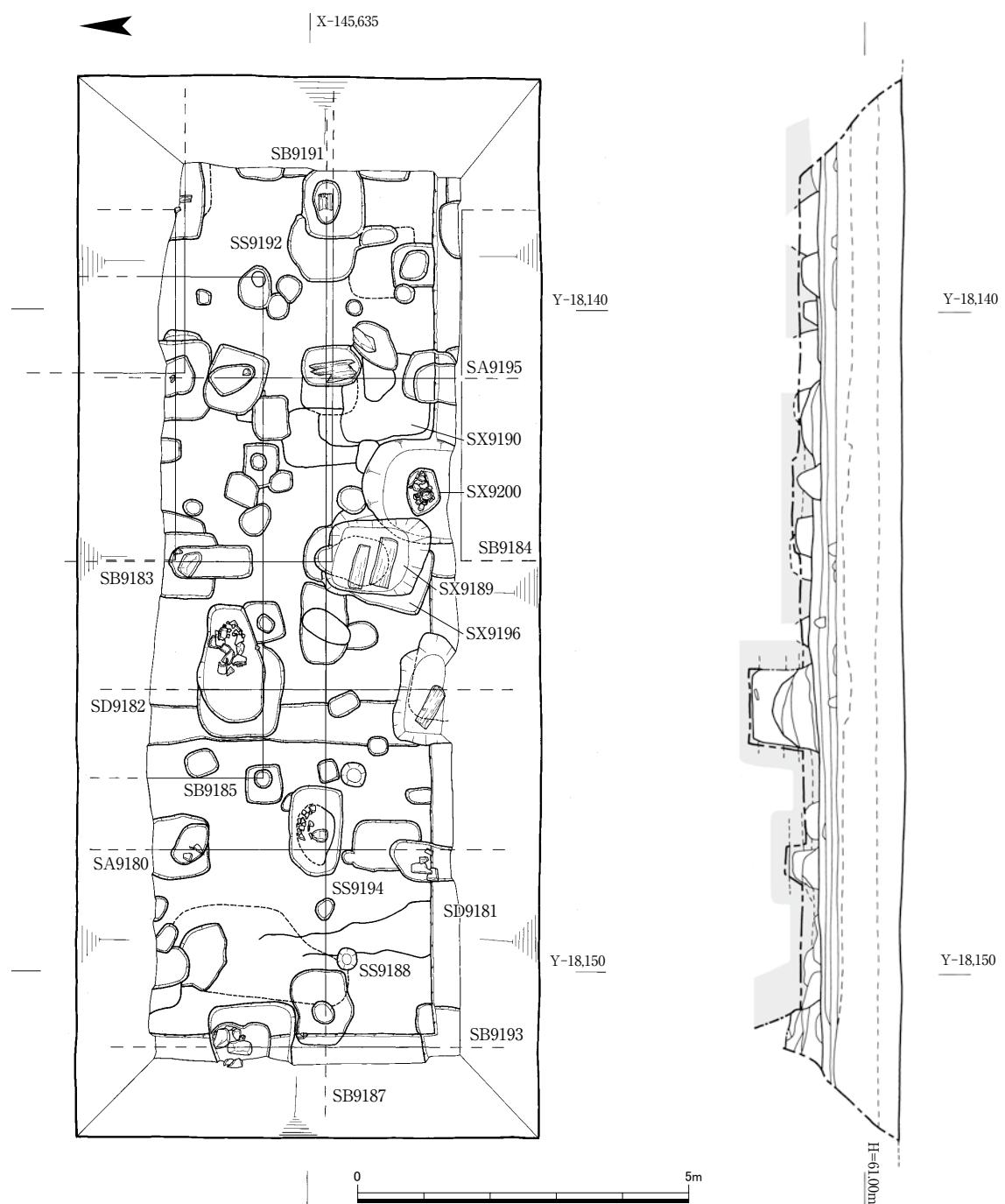


図 199 第 434 次調査遺構平面図・断面図 1:100

柱穴からなる建物。柱間約2.7m（9尺）。南・西に廂をもつ東西棟建物の西南隅もしくは、9尺等間の総柱建物となる可能性がある。重複関係から、SB9183・SB9187より新しく、SA9195に先行する。

SS9192 SB9191の造営ないし解体に際して造られた足場穴列。2列で計3基の小柱穴を検出した。
F期 SB9193 梁行2間、桁行不詳の掘立柱の南北棟建物。柱間は、桁行約3m（10尺）、梁行約2.7m（9尺）。



図200 第434次調査区全景(東から)

1 迂約1.2m、残存する深さ約1mの柱穴をもち、抜取穴に大量の瓦・土器を含む。検出した4基の柱穴のうち、北西・南東の柱穴に礎板が残存していた(後述)。SA9195と同時期である可能性が高い。

SS9194 SB9193の造営ないし解体に際して造られた足場穴列。2列で計3基の小柱穴を検出した。

SA9195 SB9193の東約4.5m(15尺)に位置する南北堀。柱間約3m(10尺)。調査区外南北へ続くと推測される。

時期不詳の遺構

SK9196 長径約2m、短径約1.5m、残存する深さ約30cmの不整形の土坑。

SX9200 土器埋納遺構。須恵器蓋・土師器皿・須恵器杯で少なくとも三重に覆った土師器甕が埋められた穴。他の遺構との明確な重複関係はないものの、SK9196およびSX9200は、SB9187を覆う暗褐色砂質土の面で検出したため、奈良時代後半以降の遺構と推測できる。(山本 崇)

3 遺 物

出土遺物は、土器、瓦磚類、建築部材・礎板等である。

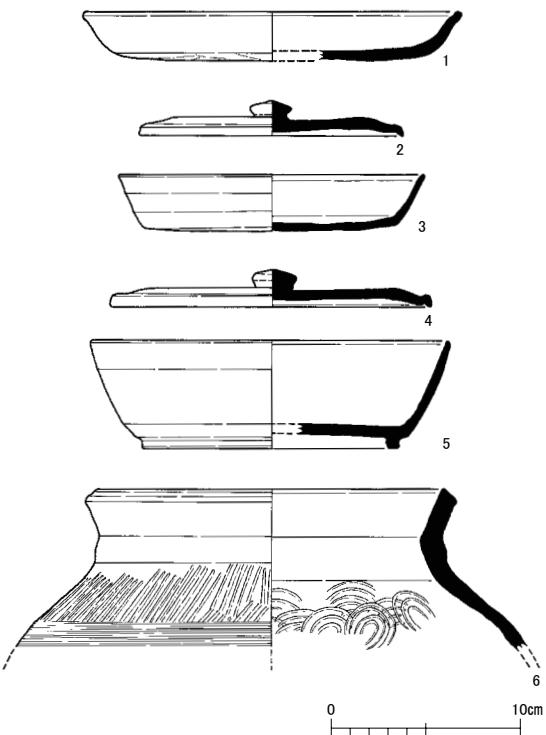


図201 第434次調査出土土器 1:4

以下、遺物ごとに報告する。

土器 第434次調査で出土した土器は、整理箱で6箱である。全体に細片が多く、図示できるものは少ない(図201)。

SX9200の土器は須恵器杯A 2個体、同杯B蓋 2個体、土師器皿A 2個体、土師器甕1個体、土師器碗A 1個体からなる。これらはSX9200内に折り重なっていた土器で、おそらく一括廃棄されたものであろう。このうち、須恵器杯A 1個体と土師器碗Aは倒立した土師器甕の内側におさまっていたもので、どちらも伏せた状態で出土。残余はこれらより上位で出土している。土師器および須恵器杯Aは保存状態がわるい。

1は土師器皿A。底部外面をヘラケズリで整える(b0)が、中央付近に指頭圧痕のくぼみが消えずに残る。底部外面には「×」印の線刻が、内面には交差する3条の線刻が認められる。同形の皿A片がほかに1個体あるが、本例と同一個体の可能性もある。2は須恵器杯B蓋で、完形に復したもの。扁平で頂部中央がややくぼんでいる。3は須恵器皿Aで、底部外面をヘラケズリで整え、口縁部には重ね焼き痕を残す。このほか、図示は困難だが、土師器碗Aは器表面にヘラミガキを施したもの。土師器甕Aは細片化しているが、球胴形の体部をもつ。これら8個体の土器は、いずれも平城宮土器IV～Vに属する。



図202 SB9193柱抜取穴出土軒瓦 1:4

図201-4~6はSB9193の柱抜取穴から出土した須恵器で、奈良時代後半に属するとみられる。4は杯B蓋で、ほぼ平坦な頂部につまみを貼りつけている。5は杯B。底部外面および口縁部の底部付近にロクロケズリの痕跡を残し、底部外縁近くに高台を貼りつける。6は甕。胎土に径1~2mm大の砂粒・黒色粒子を含み、灰白色に焼きあがる。胴部外面には平行タタキ目および横方向のカキ目が、内面には当具痕が残る。短い頸部の内面には、胴部との接合痕が消えずに残っている。特徴ある器形であるが、産地は不明である。

第434次では、このほかにもSA9180・SX9189・SB9191の柱穴で土器片が出土しているが、いずれも細片で時期を明らかにしがたい。
(森川 実)

瓦磚類 本調査区から出土した瓦磚類は表26と図202に示した。全体に平城還都後の瓦が多い。出土数が少なく各建物の所用瓦を推測することはできない。

SB9193の柱穴から出土した瓦の種類は豊富である。柱穴掘方からは軒丸瓦6282E、抜取穴からは軒丸瓦6235B・6304、軒平瓦6663H・6682A・6702Aが出土した。SA9180の柱穴からは軒丸瓦6134A・6313A、柱穴掘方から6235B、柱抜取穴からは軒平瓦6763Aが出土した。

出土した瓦のうちもっとも新しい年代の瓦から各遺構の上限を示すと、SB9193の柱穴掘方は平城還都後の天平末年頃、柱抜取穴は天平宝字年間から天平神護年間頃まで(757~767)となる。SA9180の柱穴堀形は天平宝字年間から天平神護年間頃まで、抜取穴は神護景雲年間頃(767~770)となる。
(今井晃樹)

部材 柱穴の礎板のうち、SB9193の北西の柱穴から出土した礎板は、その形状から斗を転用したものと推定される(図203)。材は4個あり、底面、斗縁、木口、敷面、底面太柄穴が確認できる。部材より確実に得られる寸法は、斗尻幅(底面の幅)326mm、全幅(最も広い部分)482mm、斗縁上面から敷面まで89mmである。その大きさから判断

表26 第434次調査出土瓦磚類集計表

型式	軒丸瓦			軒平瓦			道具瓦	
	種	点数	型式	種	点数	種類	点数	
6134	A	1	6663	A	1	鬼瓦	1	
6235	B	7		B	1			
	?	2		F	1			
6282	E	1		H	1			
6304	?	1	6664	D	1			
6313	A	1	6682	A	1			
軒丸瓦		2	6702	A	3			
			6763	A	1			
			新型式		1			
			軒平瓦		4			
軒丸瓦計		15	軒平瓦計		15	道具瓦計	1	
	丸瓦		平瓦		磚	凝灰岩		
重量		81.4kg		147.2kg		13.8kg	0.2kg	
点数		452		1479		17	1	

して、大斗であったと考えられる。
(島田敏男)

年輪年代調査 調査の対象としたのは、SB9193北西の柱穴から出土した礎板に転用した大斗4点、同建物南東の柱穴から出土した礎板1点、SX9189から出土した礎板2点の7点である。



図203 出土礎板(下)

光学顕微鏡で木材組織の解剖学的な特徴を観察したところ、樹種はいずれもヒノキであった。高解像度のデジタルカメラで撮影した調査対象の年輪画像をコンピュータで画像計測する方法で年輪年代調査を実施したが、調査対象の年輪幅データとヒノキの曆年標準パターンとの間で統計的に有意な照合成立を認めることができなかつた。したがって年輪年代については、いずれも不明である。
(大河内隆之)

4 まとめ

左京二条二坊五坪におけるこれまでの調査成果によると、遺構の変遷は7時期に区分され、奈良時代を通じて基本的に少なくとも1坪全体を一つの敷地として利用していたと指摘されている。本調査では、前述の如く少なくとも6時期の遺構を検出し、奈良時代半ばから後半にかけての頃、五坪内を計画的に区画する塀および溝が造られたことを明らかにした。この区画施設は、坪の中心部分に内郭を形成するものと推測され、五坪における敷地利用の変遷が窺われるものとして重要である。

今回の調査により、いわゆる東院南方遺跡が、重要な遺構および遺物の包蔵地であることをあらためて確認できたといえ、今後とも、継続的な調査と調査成果の蓄積・整理に努める必要がある。
(山本)

右京三条一坊八坪の調査

—第448次

1 はじめに

本調査地は、(株)積水化学奈良工場内に付設されているグラウンド内にあたり、当該地に平城京遷都1300年祭にともなう平城京歴史館(仮称)が建設されることになったため、その事前調査としておこなわれたものである。調査面積は1100m²で、調査期間は平成21年1月6日から3月23日である。

2 調査成果

まず、グラウンドの盛土と旧耕作土を除去したところ、調査区中央において護岸杭列をともなう池の痕跡を検出した。また、池の中からは大量の建築廃材とともに、看板や葉莢などの米軍に関連する遺物が出土した。

この池は、1929年に当該地に設けられた奈良地方競馬場に関連する施設である可能性が高い。奈良地方競馬場は1940年に秋篠町(現在の奈良競輪場)に移設され、その後、太平洋戦争中には興亜機械工業なる軍需工場が建設される。そして終戦後、軍需工場を米軍が接収し、当該地にグラウンドを敷設する。したがって、この池から出土した廃材は興亜機械工業の建築廃材と考えられ、基地施設を造営した米軍によって投棄されたのであろう。

なお、この池はさらに西側に広がっていた昭和以降の

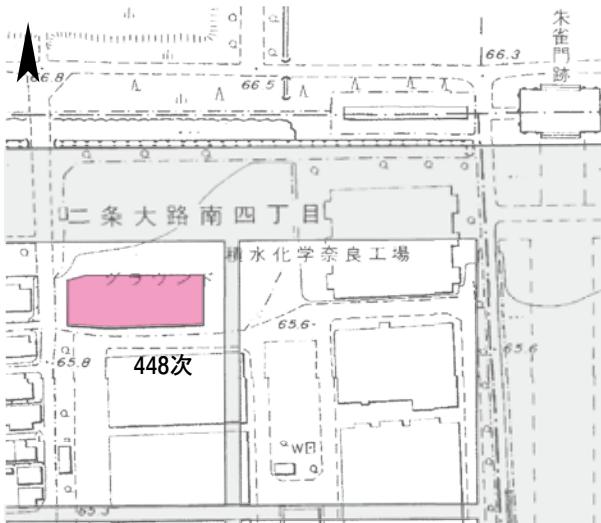


図204 第448次調査区位置図 1:3000

大きな池を一部埋め立てて造られている。

したがって、調査区内で検出された奈良時代の遺構面は、調査区東側と北側にわずかに残されている状況であった。

調査区東側では、南北15m、東西5mにわたるL字状の溝とその周囲に広がる瓦溜まりを検出した。L字状の溝の内外では整地の状況が異なり、内側では瓦を含む整地土が確認された。また、溝の内側では柱穴などの遺構は検出されなかった。さらに、当初はこの溝が建物にともなう雨落溝ではないかと想定していたが、溝の形状が比較的不整形で、底の形状も凹凸が激しいことから、雨落溝とみなすことは適当でないことが明らかとなった。以上のことから、溝は基壇外装の抜取痕であり、溝の内側の整地土が建物基壇の積土に相当すると考えられる。現状では基壇も大きく削平されているため、柱穴などの痕跡は存在しないのであろう。

調査区北側においても、東西20m以上にわたって瓦溜まりが検出された。調査区東側の瓦溜まりに比べると土器の出土量が多く、両者に差異が認められる。瓦溜まりの下層からは何ら遺構は検出されなかつたが、瓦溜まりの範囲から想定すると、調査区北側に何らかの建物の存在が想定される。

以上の箇所で出土した瓦の年代から、今回検出した遺構面は奈良時代後半のものと考えられる。そこで、その下層に存在するであろう奈良時代前半の遺構面について調査したが、下層からは地山となる砂層が検出されるにとどまり、顯著な遺構面は確認できなかつた。したがつて、当該地における奈良時代前半の状況については不明と言わざるを得ない。

なお、池の底からは弥生～古墳時代の流路が確認されている。

3 出土遺物

主要な遺物としては瓦と土器がある。そのうち、軒丸瓦に6136B・S型式が認められ、6136S型式は奈良山丘陵の瀬後谷瓦窯産である。

また、土器には奈良三彩の碗などもある。時期は概ね奈良時代末～平安時代初頭にあたる。おそらくは平城京の廢絶時のものと考えられる。この他、奈良時代後半の長胴甕がほぼ完形で出土している。

(林 正憲)



図 205 第 448 次調査区全景（西から）



図 206 調査区東側で検出した L 字状の溝（北から）

BULLETIN
Nara National Research Institute
for Cultural Properties
2009

C O N T E N T S

I Research reports	1
· Recording structural remains with digital photogrammetry	3
· Reconstruction of the Former Imperial Audience Hall, Nara Palace: Research on the framed signboard	4
· A study on the coloration of <i>shijin</i> (four directional deities) in wall paintings:	5
· Research for the reconstruction of the Former Imperial Audience Hall, Nara Palace	6
· Architectural succession and revival in modern Kyoto: Investigation of modern Japanese architecture in Kyoto prefecture	8
· A study of an <i>osaranma</i> transom excavated from the Ibaraki castle site	10
· Imitation stone and tree utilization in a modern Japanese garden: From the investigation of the Kotonoura Onzansō garden, Kainan city, Wakayama prefecture	12
· Outline and diversity of cultural landscapes	14
· History as seen in the postscripts of Kōfukuji temple's <i>Rongisō</i> : Famines, revolts and generals of Nara in the Warring States period	16
· Archaeological investigation of Western Prasat Top, Cambodia (no. 9)	18
· Architectural investigation of Western Prasat Top, Cambodia, 2008	20
· Excavation of the Second Palace Gate, Northern Wei dynasty capital of Luoyang, China	22
· Excavation in the Jjoksaem district of Gyeongju: Japan-Korea Excavation Interchange 2008	24
· Two stone objects in the Xi'an Beilin Museum	26
· An examination of the basic pottery classification for the Nara palace site (2): Focusing on Early Nara period pottery found at SD3035	28
· A preliminary analysis of microlith industries in North China	30
· Jōmon pottery from the lower strata of Daikandaiji temple (I)	32
· A reexamination of artifacts related to metallurgy excavated at the southeastern corner of Nara palace in 1966	36
· Strung bronze coins from the Eastern Palace sector, Nara palace site	38
· Use of x-ray CT scans in the conservation of knives with lacquered hilts	40
· Dendrochronological study of the seated Yakushi Nyorai wooden sculpture of Chōtokuji temple	42
· Current issues regarding <i>in situ</i> exhibition of archaeological features	44
· A record of the Asuka Historical Museum special exhibition, "The New Archaeological Discovery of Huangye Kiln"	46

II Excavations at the Asuka and Fujiwara palaces and other sites	47
1 Excavations at the Fujiwara palace site	49
• Excavation at the central garden in the State Halls Compound sector (no. 153)	50
• Excavation of the eastern area in the State Halls Compound sector and southern Great Wall (no. 152–7)	62
• Excavation of the government offices sector east of the Imperial Domicile (no. 152–6)	66
2 Excavations in and around the Asuka area	67
• Excavations at the Amakashi-no-oka Tōroku site (nos. 151, 157)	68
• Excavation at the Ishigami site (no. 156)	76
• Excavation at the Ikazuchi-giwoyama castle site (no. 152–4)	86
• Excavations at Asukadera temple (nos. 152–2, 152–3)	88
• Excavation at the area south of Asukadera temple (no. 152–5)	90
• Excavation of the Takamatsuzuka tomb (no. 154)	94
• Excavations around Hinokuma temple (no. 155)	99
III Excavations at the Nara palace and other sites	109
1 Excavations at the Nara palace site	111
• Excavations of the Former Imperial Audience Hall Compound (nos. 431, 432, 436, 437, 438)	112
• Excavations of the eastern Administrative Office area (nos. 429, 440)	128
2 Excavations at the Nara capital site and at Nara temples	141
• Excavations at the former precinct of Hokkeji temple (nos. 430, 435, 442)	142
• Excavations at the former precinct of Kōfukuji temple (no. 439, 450)	148
• Excavation Kikōji temple (no. 433)	152
• Excavations at the northern outer area of the Nara Palace site (nos. 445, 447)	155
• Excavation to the south of East Palace (no. 434)	156
• Excavation in Block 8, West Third Ward on First Street (no. 448)	160

奈良文化財研究所紀要 2009

発 行 日 2009年7月10日
編 集 発 行 独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所
奈良市二条町2丁目9-1
〒630-8577 TEL 0742-30-6752
e-mail jimu@nabunken.go.jp
URL <http://www.nabunken.jp>
印刷・製本 株式会社 近畿印刷センター

BULLETIN

**Nara National Research Institute
for Cultural Properties**

2009

Independent Administrative Institution
National Institutes for Cultural Heritage
Nara National Research Institute for Cultural Properties
2-9-1, Nijō-chō, Nara-shi, 630-8577, JAPAN
<http://www.nabunken.jp/>